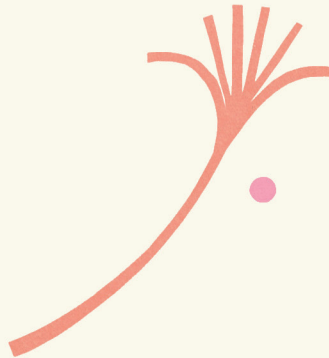
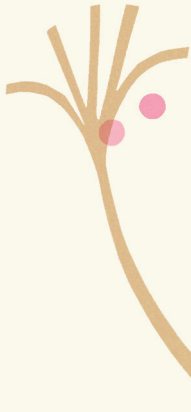
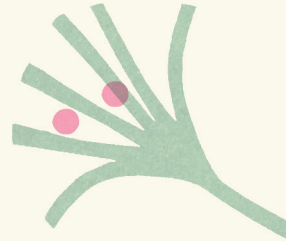
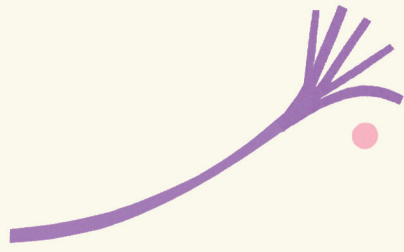


平安時代書写和漢朗詠集諸伝本の研究

山本  
まり子





平安時代書写和漢朗詠集諸伝本の研究

山本  
まり子



目次

はじめに ..... 2

第一章 ..... 8

    第一節 雲紙本と関戸本との関係(一) ..... 8

    第二節 雲紙本と関戸本との関係(二) ..... 23

    第三節 雲紙本に見られる別筆 ..... 47

第二章 ..... 62

    第一節 伊予切の書に関する一考察 ..... 62

    第二節 伊予切の書―粘葉本との関係―(一) ..... 81

    第三節 伊予切の書―粘葉本との関係―(二) ..... 106

    第四節 近衛本の性格―粘葉本・伊予切との関係を中心に― ..... 125

    第五節 伊予切の性格―粘葉本との関係を中心に― ..... 147

    第六節 雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との関係―形態面を中心に― ..... 169

第三章 ..... 198

    第一節 安宅切の位置 ..... 198

    第二節 卷子本の位置 ..... 218

    第三節 葦手本の位置 ..... 238

    第四節 戊辰切の位置 ..... 259

    第五節 葦手本と戊辰切巻上の書 ..... 275

    第六節 山城切の位置 ..... 298

    第七節 久松切の位置 ..... 320

    第八節 伝藤原行成筆大字切の位置 ..... 343

結びにかえて ..... 354

既発表論文一覧 ..... 359

あとがき ..... 361

## はじめに

『和漢朗詠集』は藤原公任（九六六一—一〇四一）により撰集されたアンソロジーである。巻上、巻下から成る。百余りに部類分けされ、その中でそれぞれに立てられた題のもと、漢詩文・和歌等が採録されている。それらは中国、日本の詩文、和歌等の順に収められている。漢詩文・和歌の同列化はそれまでのアンソロジーには見られないことであった。漢字・仮名表記の併存によって本作品の諸伝本は書の内容・手本としても重んじられ、成立直後から頻りに書写されたことと推察される。また、他の文学作品への本作品の引用状況から『和漢朗詠集』所収の作品は当時、人口に膾炙するものが少なくなかったであろうことが推測される。

現存する平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本の数は、いわゆる完本に古筆切（断簡）を合わせると三〇余種に上る。十一世紀中葉の書写とされる伝本も現存している。それらは『和漢朗詠集』の成立以降、数十年程後に書写されたと推され、いずれも公任原撰本を探る上で貴重な資料であることは言うまでもない。そこには当代随一の能書家の手になるものもある。

『和漢朗詠集』の出典たるもののうち、中国にも日本にも散逸している作品があるということは既に先学のご指摘の通りである。その点においても学術的に活用し得る側面を有し、文学・書を研究する上でその資料的価値は極めて高い（山田孝雄氏著『倭漢朗詠集』〔昭和7年 岩波書店、佐藤道生・柳澤良一両氏著『和歌文学大系』47〔平成23年 明治書院〕他。鎌倉時代以降、諸伝本はさらに夥しい数に上る。需要の高さが窺われ、『和漢朗詠集』は当代、及び後代、多大な影響を与えた重要な作品であるといえる。

平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本の関係について、かつて、堀部正二氏は主に本文の面から三種に分類され、<sup>(注1)</sup>また、久曾神昇氏は、主に形態的な面から二大別された。<sup>(注2)</sup>

その後、小松茂美氏著『古筆学大成』等の刊行による古筆切の資料公開がなされ、当時に比してより踏み込んだ調査・研究が可能な環境となった。しかしながら、同作品の諸伝本について、その資料の網羅的集成が成されたのは昭和一四年刊行の『傳藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』<sup>(注3)</sup>の一冊に止まる。三木雅博氏も『和漢朗詠集』の本文の問題は、従来の研究ではほとんど取り上げられず、わずかに堀部正二氏の『和漢朗詠集山城切』の〈解説及釈文〉で基礎的な調査に着手されたまま、その後再び手つかずになっている感がある」(同氏著『和漢朗詠集とその享受』[平成7年 勉誠社])と述べられた通り、本作品の諸伝本について、系統論はまだ確立されていない(『日本古典文学大辞典簡約版』昭和61年 岩波書店)の「和漢朗詠集」の項。「和漢朗詠集の伝本についての研究は従来ほとんど行われていないといつてよい」(『新編国歌大観』「和漢朗詠集」の解題)ともされ、その後も諸伝本の性格を明らかにし、系統立てる試みは殆ど行われていないといえよう。

本作品の成り立ちを考える上でも、また、撰者である公任原撰本の実相を辿り、諸伝本の本文変遷の諸相を掴むためにも現存する資料を基に分類する試みは基礎研究として不可欠のことである。

本書では、如上の堀部・久曾神両氏のご論に扱われなかった若干の資料をも調査し得たことから改めて平安時代の書写とされる諸伝本に関する先学の研究について検討を行った。それに基づき形態・本文、及び書の面から諸伝本の相互関係について考察を行い、諸伝本の系統立てを試みるものである。

\* \* \*

以下、凡例を示す。

一、書写年代を平安時代に限定して調査した諸伝本・断簡の概要は次の通りである。特に断りのない限り、掲載順・引用の  
 出典等(略号・略称は除く)は『古筆学大成』第一三・一四・一五巻[平成2年 講談社]に拠った。

二、『和漢朗詠集』の当該詩歌句を番号で示すことがある。その番号は『新編国歌大観』に拠った。





三、異同調査の際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、ここでは後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。翻字の際はその殆どを通行の字体に改めた。

四、注記等の文字が虫損等により不明な場合は翻字の際、その部分を□で示した。

五、本書中、指摘する本作品『和漢朗詠集』の各部の呼称、及びその概要については以下の通りである。

諸伝本のうち、巻上・下の冒頭に「目錄」を有するものがある。「目錄」とは「題」の一覧を仮称するものである。

巻上の部類名は「春」・「夏」・「秋」・「冬」により構成されており、巻下では巻頭に「雜」とのみ書されている。

本書における「題」とは部類分けされた各詩歌句群それぞれの項目名を指す。「題」には、たとえば「子日付若菜」における「若菜」のごとく、小字にて付加事項が書されていることもある。それらを便宜上、「付項目」と呼称する。

当該詩歌句に関する題詞・作者名等がその末尾（行末）に小書きされている場合がある。それらを「注記」と仮称する。

六、前述した堀部・久曾神両氏の分類(1)・(2)・(3)、**甲類**・**乙類**のうちの(1)・**乙類**(粘葉本・伊予切)を粘葉本類、(2)・**甲類**(雲紙本・関戸本)を雲紙本類と以下、呼称する。

## 注

(1) 伊藤壽一・鹿嶋(堀部)正二両氏編『傳藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釋文』〔昭和14年 里見忠三郎氏〕P 38・39

(2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P 197

(3) 前掲(注1)に同。片桐洋一氏により同書は、堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕として復刻された。本書中、同書を引用する際は、その『校異和漢朗詠集』の方に拠った。



# 第一章

## 第一節 雲紙本と関戸本との関係 (一)

### 一

雲紙本・関戸本の書写者は古来、藤原行成(九七二—一〇二七)と伝えられているが現今では源兼行(万寿元年「一〇二四」少内記となり、承保元年「二〇七四」白河天皇大嘗会御屏風を書写したこと等が知られる)が定説となつている。<sup>①</sup>しかし、両本の書写時期については諸氏の見解が分かれている。

飯島春敬氏は、雲紙本の方が「若書きで関戸本は熟達した後年の作と思われる」という見解を示され、堀江知彦氏も、雲紙本は「年代的には早く」、関戸本は「晩年に到達した円熟境を示し」、「最も円熟老成の境地を示し」としているとされた。<sup>②③</sup>

両本の書写時期にはどの程度の間隔があるのかという点については飯島・堀部両氏は明確にされなかったが、久曾神昇氏は「素案」として雲紙本は「長元八年一〇三五頃(三十五歳)」、関戸本は「長久四年一〇四三頃(四十三歳)」と書写時期を推定され、関戸本は雲紙本より「更に強い力量を発揮している」と説かれた。<sup>④⑤</sup>

それに対して、小松茂美氏は雲紙本と関戸本は「その書風や書体において、ほとんど差異を認めるところがない」、「両者とともに、ほぼ同時期の筆と考えるのが妥当のように思われ」、「源兼行の六十歳前後の筆跡と推定」された。<sup>⑥</sup>しかし、諸氏がそのように結論付けられた論拠が不明である。また、その他の源兼行の筆と推定されている作品の書写時期に関する御論も一致していない。<sup>⑦</sup>

源兼行は当代随一の能書家であり、日本の書の歴史に大きな足跡を残した人物である。

以下、用字・書風等に焦点を当てて雲紙本と関戸本との関係について再検討を行った結果について論じる。事例を挙げる際、両伝本名の下の括弧内に詩歌番号を記す。

用字面から雲紙本と関戸本とを比較検討した結果、類似の特徴的な結体・字形が認められた。<sup>⑤</sup> また、両本では、「同行の  
 中のあい近い位置や、隣接する行のほぼ同じ段に同じ音節」・同一語が配されている場合、それぞれ漢字は同一字形を、仮  
 名は「同じ字形の字母の使用をさけ」<sup>⑩</sup>る傾向にあり、その際、両本の当該箇所字形が類似し、字母においても両本は一致  
 している場合があるということが知られた。その事例を両本から挙げると以下の通りである。

## ◆雲紙本(463)

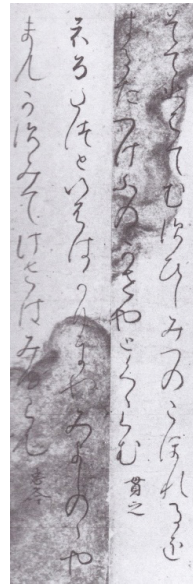
第一第二弦索く秋風拂松疎韻落書三第  
 四弦吟く夜鶴憶子籠中鳴  
 第五弦吟く尤掩作游水海後後不得<sup>⑪</sup>

## ◆関戸本(463)

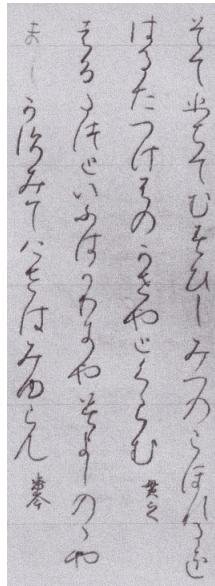
第一第二弦索く秋風拂松疎韻落書三  
 第四弦吟く夜鶴憶子籠中鳴  
 第五弦吟く尤掩作游水海後後不得<sup>⑫</sup>

両本に見られる「第(五か所)」について、三行書きの両本にあつては雲紙本では一行目に四か所、(二行をおいて)三行目の  
 行頭に近接する所に一か所が存する。一方、関戸本では、一行目の行頭、三字目、下方に存し、また、二行目・三行目の行  
 頭にも隣接して位置している。この「第」の字形は様々であり、雲紙本と関戸本の五種の「第」の字形を対比すると、「第一」・  
 「第二」・「第三」の「第」の字形は各々類似していると言える。

## ◆雲紙本(7・8)



## ◆関戸本(7・8)



和歌一首二行書きの両本にあっては、7「はるたつ」は四句目、8「はるたつ」は初句で、行頭に隣接して書写されている。7「は」・「た」・「つ」の次行の行頭にはいわゆる変体仮名「者」・「多」・「徒」が使用されており、用字を異にしていると言えらる。その点において当該箇所における両本の用字は一致している。両本では同一語・同音節が近接、あるいは隣接して位置している場合、漢字は同一字形、仮名は同字母の重複が回避されている。

雲紙本と関戸本の両本間において、その対応する箇所の字形の類似、字母の一致が認められる例を目録・詩歌句から挙げると次の通りである。

〈目録〉

- ①部類名「夏」・題「首夏」の二字目「夏」・題「夏夜」の一字目「夏」  
②題「立秋」の二字目「秋」・題「早秋」の二字目「秋」  
〔詩歌句等〕
- ③ 22「天」・23「天」  
④ 22「遊」・23「遊」  
⑤ 29「倚」・30「倚」  
⑥ 29「摩」・30「摩」  
⑦ 29「腰」・30「腰」  
⑧ 31「ね」（「ねのひする」の一字目）・33「ね」（「ねのひして」の一字目）  
⑨ 35「あすからは」・36「あすからは」  
⑩ 題「鶯」・63「鶯」・64「鶯」・65「鶯」・67「鶯」  
⑪ 題「紅梅」の二字目「梅」・96「梅」  
⑫ 116「瑩」（一字目）・116「瑩」（三字目）  
⑬ 題「落花」・126「落花」・129「落花」  
⑭ 128「之」（九字目）・128「之」（二九字目）  
⑮ 題「藤」・133「藤」  
⑯ 部類名「夏」・題「首夏」の二字目「夏」・題「夏夜」の一字目「夏」  
⑰ 150「照」・151「照」

- ⑬ 150 「夜」・151 「夜」・152 「夜」
- ⑭ 題「納涼」・163 「納涼」
- ⑮ 題「晩夏」の二字目「夏」・168 「夏」
- ⑯ 171 「雨」・172 「雨」
- ⑰ 183 「す」(「ほととぎす」の五字目)・184 「す」(「ほととぎす」の五字目)・185 「す」(「ほととぎす」の五字目)
- ⑱ 192 「秋」・193 「秋」・194 「秋」
- ⑲ 199 「風」・200 「風」
- ⑳ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉑ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉒ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉓ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉔ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉕ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉖ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉗ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉘ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉙ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉚ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉛ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉜ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉝ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉞ 230 「聲」・231 「聲」
- ㉟ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊱ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊲ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊳ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊴ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊵ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊶ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊷ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊸ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊹ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊺ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊻ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊼ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊽ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊾ 230 「聲」・231 「聲」
- ㊿ 230 「聲」・231 「聲」



- ③7 題「氷」・384「氷」・385「氷」・387「氷」・388「氷」  
 ③8 「雲」・413「雲」・414「雲」  
 ③9 「鶴」・414「鶴」  
 ④0 「之」(五字目)・417「之」(一字目)  
 ④1 「雪」・423「雪」  
 ④2 「之」(九字目)・423「之」(九字目)・424「之」(五字目)・424「之」(五字目)  
 ④3 「風」・436「風」  
 ④4 「漸」・439「漸」  
 ④5 「叫」・457「叫」・458「叫」  
 ④6 「聲」・458「聲」・460「聲」  
 ④7 「管」・466「管」  
 ④8 題「文詞」の二字目「詞」・470「詞」  
 ④9 「遣」・475「遣」  
 ⑤0 題「酒」・479「酒」・480「酒」(二〇字目)  
 ⑤1 題「山水」の一字目「山」・499「山」  
 ⑤2 「之」(一〇字目)・504「之」(二一字目)  
 ⑤3 「山」(二字目)・506「山」(三字目)  
 ⑤4 「秋」(七字目)・530「秋」(九字目)  
 ⑤5 「之」(雲紙本は二一字目、関戸本は一〇字目)・532「之」(雲紙本は二四字目、関戸本は三字目)

- ⑤6 591「之」・592「之」(五字目)・592「之」(雲紙本は三字目、関戸本は二字目)
- ⑤7 題「僧」・605「僧」・608「僧」
- ⑤8 題「閑居」の一字目「閑」・613「閑」
- ⑤9 647「ふね」・648「ふね」
- ⑥0 題「庚申」・650「庚申」
- ⑥1 670「片」・672「片」
- ⑥2 671「花」(二字目)・672「花」
- ⑥3 671「是」・672「是」
- ⑥4 685「之」(八字目)・685「之」(二八字目)
- ⑥5 題「遊女」の一字目「遊」・719「遊」

殆どが漢詩であることが知られるが、両本には用字の一致が認められた。同一字形・同字母の重複の回避は書写者が視覚的変化を与えたことに因ると考えられる。その一致は偶然とは思えず、両本の制作過程には用字を示す型が存在していたと推測される。書写者が長編の用字を全て記憶していたとは考えられない。用字を書き留めた草稿を所持して書写に臨んだものと想像される。

## 三

次に書風について述べる。書風は流動的であって、明確に区別し得ない。しかし、ここで注目されるのは両本では複数の書風が使い分けられていることであり、両本間には共通要素が看取されるということである。用字についても楷書体・行書体・草書体を交え、仮名では一音につき複数の字母が使用され、女手の他、草仮名、万葉仮名も用いられ、視覚的美への追

求が窺われる。二本に共通して見られる複数の書風のうち、漢詩・和歌より一種ずつ事例を挙げ、書風の特徴についても述べらる。

◆雲紙本(511)

洲着松若抽心長沙暖鴛鴦教翅眠春に

◆関戸本(645)

洲崖夜雨他郷後岸柳秋風逐塞情五科

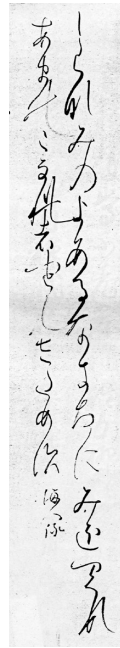
春名好重氏が他の箇所と比べて「別筆のようである」と述べられたようにこの書風のみ、一見、別人の手になるようだが、「線質には変りはない」と言える。春名氏はこの書風を「奇癖偏習」と評され、同じく源兼行の筆と推定されている「梅尾切」(「桂本万葉集」の断簡)にも同様な書風があるとされた。<sup>12)</sup>

一方、飯島春敬氏は「いわゆる和様体から離れた幅の狭い長身の書き方をしているのは異様で」、「和様体から離れて、中国風をその箇所、わざと発揮した」とされた。<sup>13)</sup> 両氏のご指摘は首肯される。同様な事例を挙げると以下の通りである。雲紙本・307〜313・506・508・510〜517。関戸本・題(本文中)二か所(「庚申」・「帝王」)・387〜389・641〜646・650・651・653〜663。

◆雲紙本(722)

あまのこをたれそむるるあまのこ  
あまのこをたれそむるるあまのこ

## ◆関戸本(722)



和歌一首二行書きである。二行目の行頭が一行目の行頭よりわずかに下がる傾向にあり、字間・行間が狭い。右の用例の一行目行末「数(す)」のように、左下方から右上方へ強く上がる部分を有する書もある。上から下へ、下から上へと筆の動きが大きい箇所が目立つ。上と下(雲紙本の二行目八字目「や」と九字目「と」)・一行目と二行目の文字(関戸本の一行目六字目「よ」と二行目六字目「禮(れ)」)が接触したり、上下二文字のうち、下の文字の一部が上の文字の高さに位置する(二行目六字目「れ」)等、上下、左右へとのびやかに流れる。同様な事例を挙げると以下の通りである。雲紙本・100・101・135・136・185・191・198・201・203・278・280・281・283・285・569・571・600・602・610・612・665・722・733、関戸本・258・260・272・273・305・306・314・316・333・336・337・386・689・693・705・722・739・740。

## 四

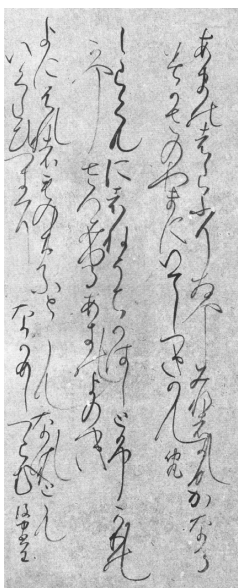
用字・書風上、両本には共通性が認められたが、書においては関戸本の方が雲紙本より充実感があると考えられる。

たとえば、前項「三」に掲出した関戸本(645)の一字目「洲」の最終画(縦画)の始筆<sup>14</sup>の打ち込みが鋭く、二字目「蘆」の左払いも穂先のきいた強い線質<sup>15</sup>であり、また、本稿中、掲出していない箇所となるが、関戸本に見られる、題(本文中)「庚申」の二字目「申」・650「申」・653「制」・655「中」・658「測」・661「到」の最終画(縦画)のような緊張感のある強靱な線質も雲紙本には見当たらない。

和歌の書風についても関戸本では表現の一環として上下に位置する文字の接触、重なりが確認される。細部にまで行き届

いた表現が注目される。次に例示する関戸本(260)の二行目「む」には筆勢がある<sup>16</sup>。気魄が感じられ、漢詩との融和を図っているかのようである。そのような表現は雲紙本からは看取されなかった。

◆関戸本(258・259・260)



以下、雲紙本と関戸本との間に見られる相違点を探るべく、比較検討を行った結果について述べる。それは仮名よりも漢字の方に顕著に見られる。偏旁冠脚等の文字成分に分けて観察すると「ㄱ」(マダレ)・「リ」(リットウ)・「へ」(右払い)の部分に相違が認められる。その部分を有する文字を全て抽出すると以下の通りである。

(1)「ㄱ」(マダレ)

「ㄱ」(マダレ)には、二画目(横画)の送筆<sup>17</sup>後、一旦、筆の穂先<sup>18</sup>を紙面から離し、あらたに三画目の左払いを書き場合と二画目(横画)と三画目(斜画)とを続けて一筆で書す場合とがある。前者の三画目(左払い)について、雲紙本には関戸本に比して弱々しい線質や平板な線質が随所に存するのに対して、関戸本では、(筆の)穂先をきかせた張りのある線質が目立つ。次に例示するように、雲紙本の二画目の始筆・折り返しの部分(矢印部)の運筆からはぎこちなさが感じられるが、関戸本の二画目は安定した筆の運びで、二画目から三画目に移る斜画には一息の美しい流れが感じられる。

なお、その他、「月」の二画目の「折れ」や偏「シ」(サンズイ)の点画も雲紙本では、幾らかぎこちなく感じられるが、関

戸本からはそのような堅さは感受されなかった。

◆雲紙本（30摩）



◆関戸本（30摩）



(2) 「可」（リットウ）

次の「劉」の最終画（縦画）、及び最終の「撥ね」の部分（矢印部）に注目すると、雲紙本の方にはさほど太細の変化がなく、単調な筆遣いであると思われる。それに対して、関戸本の最終画の縦画はなめらかなカーブを描き、中程（矢印部）で筆を一瞬引き上げ、その後、終筆<sup>19</sup>に向けて筆の弾力を活かしながら筆圧<sup>20</sup>が加えられている。「可」（リットウ）を有する全ての文字について調査した結果、雲紙本の運筆は、関戸本に比して、遅速緩急<sup>21</sup>の変化に乏しく、雲紙本より関戸本の方が洗練されているという印象を受けるものであった。

◆雲紙本（480劉）



## ◆関戸本（48劉）



## (3) 「へ」（右払い）

右払いを有する文字の大きさを揃えてみると、関戸本の右払いの方が張りのある線質であり、なおかつ、雲紙本に比して均整がとれていることが確認された。また、関戸本には、たとえば、

## ◆関戸本（335更）



のごとく、紙面に深く食い込むような線質（矢印部）も存する。雲紙本の運筆は一樣であり、右掲のごとき線質は関戸本独自のものと言える。

なお、関戸本では、ある文字と日偏を有する文字（「時」・「晴」・「暗」等）とが上下に位置し、続け字である場合の日偏の一面目（縦画）、及びその直前の連綿線や、「玉」・「飛」・「瑩」・「花」・「老」等のごとく行草体の最終が点であるとき、その点を打つ直前の筆脈等も抑揚に富んだ線質である。右に掲出した関戸本の「更（335）」の右払いに通ずる。

以上、関戸本では多様な線質を駆使し、空間を支配しているといった感があり、雲紙本の書よりも完成度が高いと考えられる。

雲紙本と関戸本の書と比較検討した結果、用字・書風に共通性が認められ、同筆とされている両本の書写者の志向する表現が近いという事実が明らかとなった。また、両本には用字を示す型が存在していたと推考される。依頼主から書写者への書作上の要望等という可能性があったことも否定し得ないものの、能書家である両本の書写者がその草稿を長年に亘って保存し、時を隔て、再び同様の手法を用いて表現したとは考えにくい。両本の書写年時の間隔はさほど離れていないと解する方が自然ではなからうか。雲紙本より関戸本の方が完成度が高いものと思われ、関戸本の方が後の書写と考えられる。ただし、二本のみの調査では即断できない点もある。本考察結果を踏まえ、その他の源兼行の筆とされている書も合わせ、再検討を行う必要がある。

## 注

(1) まず、源豊宗氏によって、伝源俊房筆「宇治の平等院鳳凰堂色紙形」の書写者は「源兼行」であると提言され（『鳳凰堂扉絵色紙形の題字の筆者に就いて』、『佛教美術』第十八冊「昭和6年12月仏教美術社」）、飯島春敬氏が「源兼行説は卓見」とされた（『論章7 桂宮万葉集筆者考』、『飯島春敬全集』第四卷「昭和60年 書藝文化新社」所収）。それを踏まえて小松茂美氏は、平等院鳳凰堂の色紙形と源兼行の自筆の書状（東京国立博物館所蔵「旧九条家本延喜式」卷第三十九の紙背文書として伝存）の筆跡を比較された結果、「源兼行の真跡と断定」され（『平等院鳳凰堂色紙形の研究』「昭和48年 中央公論美術出版」）、雲紙本と関戸本も同じく源兼行の真筆と推定されるに至った。

- (2) 飯島春敬氏「論章11 伝藤原行成筆 御物 和漢朗詠集雲紙本の研究」、『飯島春敬全集』第五卷「昭和61年 書藝文化新社」所収
- (3) 堀江知彦氏「和漢朗詠集の成立と古寫本」、『書道全集』第一三卷（昭和48年 平凡社）所収
- (4) 久曾神昇氏「仮名古筆の基礎調査」、『講座平安文学論究』第五輯「昭和63年 風間書房」所収



- (5) 久曾神昇氏「仮名古筆(一一)原形和漢朗詠集」(『汲古』第一八号「平成2年1月 汲古書院」)
- (6) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷「平成2年 講談社」P 400
- (7) 源兼行の筆とする説が有力である作品には、雲紙本と関戸本の他、「桂本万葉集」、「高野切第二種」(『古今集』高野切は三人の手に分かれており「尾上八郎氏著『平安時代の草假名の研究』「昭和18年 雄山閣」)、便宜上、「高野切第一種」、「高野切第二種」、「高野切第三種」と呼称されている)等がある。久曾神昇氏は「桂本万葉集」の書写時期は「長久元年一〇四〇頃(四十歳)」として雲紙本より後の書写、「高野切第二種」は「永承三年一〇四八頃(四十八歳)」の書写と推定された(前掲〔注4〕に同)。一方、堀江知彦氏は「桂本万葉集」が「最も若く」、雲紙本を経て「最も圓熟した境地を示すのが関戸本・高野切と考えるのが妥当ではあるまいか」とされ(平安書道研究会編『日本名著全集』第六卷「出版年不明 書藝文化院」、関戸本と「高野切第二種」とは「ほとんど同時の作品とまで推測される」と述べられたが(前掲〔注3〕に同)、春名好重氏は「今のところ、〈高野切〉の第二種の筆者は兼行とはいいかねる」という異見を示された(春名好重氏ほか編『書の基本資料①かなの書の美』「平成8年 中教出版」P 8)。
- (8) 字形が形成される時、点画の長短・方向・交わり方・接し方が考慮されて書される。結体とはそれらの組み合わせの結果のものを指す(藤原宏ほか編『書写書道用語辞典』「平成2年 第一法規」「結体」の項)。
- (9) 68「魚」・96「兼」・16「源」・163「図」・672「霞」・698「図」・774「歎」等。
- (10) 五十嵐三郎氏ほか著『国語概説』「平成2年 学芸図書」P 50
- (11) 春名好重氏編著『古筆大辞典』「昭和54年 淡交社」『雲紙本和漢朗詠集』の項。
- (12) 春名好重氏「日本の名筆」(『書道研究』49「平成4年1月 菅原書房」所収)
- (13) 飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第五卷「昭和61年 書藝文化新社」P 290
- (14) 「起筆」ともいう。書写・書道においては、始筆は文字通り「書き始め」の部分であるから、特に大切な筆づかいの要素となる(藤原宏氏ほか編『書写書道用語辞典』「平成2年 第一法規」P 133)。

- (15) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(前掲〔注14〕に同。P 189)。
- (16) たとえば260の「む」の最終画等は右の行(二行目)の「け」とその下に位置する「れ」の両字を貫いているかのごとく感じられる。
- (17) 一つの点画のうち、始筆と終筆の間、つまり、筆の送りの部分をいう(前掲〔注14〕に同。P 202)。
- (18) 毛筆の穂の先の部分を穂先と呼び、毛筆の最も大切な部分である(前掲〔注14〕に同。P 313)。
- (19) 一つ一つの点画の終りの部分、つまり、筆をぬいて収める部分のこと。また「収筆」ともいう(前掲〔注14〕に同。P 140)。
- (20) 筆記具にかかる圧力を筆圧といい、別に圧度ともいう。筆圧は毛筆のように、弾力性のあるものでは、その強弱は点画の上に直接太細となつて現れる(前掲〔注14〕に同。P 276)。
- (21) 運筆の速度を表す言葉。遅く、速く、ゆっくり、急にとつたように、運筆の遅速緩急は、書に筆意筆勢を表すため欠くことのできないものである(前掲〔注14〕に同。P 220)。
- (22) 脈絡ともいわれ、文字を構成している点画の一つ一つが気分的にも、形の上においてもつながりをもつことである(前掲〔注14〕に同。P 278)。
- (23) 線美を構成する要素の一つである。運筆のときのあるいは抑え、あるいは揚げることの相互関係のこと(前掲〔注14〕に同。P 343)。

## 第二節 雲紙本と関戸本との関係 (二)

## 一

雲紙本と関戸本との関係について久曾神昇氏は次のように述べられた。<sup>(1)</sup>

関戸本のみに見えないものが五首あり、雲紙本のみに見えないものは三八首の多きに及んでいるが、それらはすべてなる誤脱と推測せられる。雲紙本は誤脱というよりも、実際には意識的に省いた為であろう。

また、堀部正二氏も「全く同系のものである」とされた上で「両本相互間に歌首の出入が存するのは、その書写の際の脱漏に基くものであらう」と述べられた。<sup>(2)</sup>

しかし、その根拠について不明瞭であることから形態・本文等の面を中心に再検討を行った。その結果、久曾神氏が指摘された四三首（五首・「三八首」）の全てが「単なる誤脱」、「脱漏」に基づくものとは考えにくいという結論に至った。以下、その考察結果、及び雲紙本と関戸本との関係に関する私見を述べる。

## 二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

535	337	17
542	344	42
547	の次	82
549	347	90
551	348	91
556	354	92
561	363	の次 <sup>(3)</sup>
564	369	107
584	376	109
596	の次	115
598	380	120
601	407	178
603	422	194
615	の次	215
617	434	225
618	434	237
621	の次	246
629	449	249
636	459	257
652	468	268
652	の次	271
657	476	313
663	482	321
677	489	322
678	507	の次
684	518	330
699	534	330

701・703・712・714・729・735の次・736の次・738・739・740・741・742・743・744・745・756・757・760・784・785・796の次・797・803の次・804  
 右の九八首のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除くと次のごとく  
 二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」・「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に示し、有無の区別を明記する。

① 17有(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦)

無(卷・戊)

② 42有(粘・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

③ 215有(粘・伊・久・山・多・戊)

無(雲・関・卷・葦)

④ 268有(粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

⑤ 313有(雲・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(関・卷・和1)

⑥ 321有(行大・粘・伊・久・唐2・卷・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑦ 322有(行大・雲・関・久・卷・和1・山・多・戊・葦)

無(粘・伊)

⑧ 354有(粘・伊・久・山・戊)

無(雲・関・卷・葦)

⑨ 380 有(粘・伊・久・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

⑩ 407 有(雲・関・粘・法・伊・久・益・山・戌・葦)

無(卷・太)

⑪ 422 の次 有(益・山)

無(雲・関・粘・伊・久・卷・下・戌・葦)

⑫ 434 有(雲・関・粘・久・卷・山・戌・葦)

無(伊・太・大内)

⑬ 434 の次 有(伊・久・太・大内・山)

無(雲・関・粘・卷・戌・葦)

⑭ 449 有(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戌・葦)

無(雲・関)

⑮ 534 有(粘・近・伊・卷・久・太・下・山)

無(雲・関・戌・葦)

⑯ 535 有(関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戌・葦)

無(雲・卷)

⑰ 564 有(粘・近・伊・久・卷・山・多・戌・葦)

無(雲・関)

⑱ 603 有(粘・近・伊・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戌・葦)

①9 617有(雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戌・葦)

無(安・卷)

②0 621有(雲・関・粘・伊・久・山・戌・葦)

無(安・卷)

②1 652の次有(安・卷・定大)

無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戌・葦)

②2 712有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

②3 714有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戌・葦)

無(雲・関)

②4 729有(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戌・葦)

無(雲・関)

②5 784有(粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・戌・葦)

無(雲・関)

②6 797有(粘・近・伊・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戌・葦)

右のうち、雲紙本と関戸本とが相違するのは⑤・⑩のみである。他本に対して二本のみが一致している事象数については、雲紙本・関戸本の一〇首(②・④・⑥・⑨・⑭・⑰・⑳・㉓・㉔・㉕)が諸伝本中、最多であり、また、それらはいずれも

両本に無いことが確認される。

前述した通り、両本間に見られる相違箇所については雲紙本に存しないケースが三八首（うち、三六首は雲紙本にのみ無い）、関戸本に存しないケースが五首（うち、三首は関戸本にのみ無い）であるが、それらは右掲⑤・⑩を除くと両本それぞれの独自事象である。

その四三首（三八首、五首）について検討を行った結果、両本間には共通的要素が看取された。

その番号等を、A・雲紙本に無い（関戸本に有）句（A）と略称する、B・関戸本に無い（雲紙本に有）句（B）と略称するに分けて全て挙げる。

事例の各番号の下には『日本古典文学大系』<sup>4</sup>73（以下、『大系』と略称）・『新潮日本古典集成』<sup>5</sup>・『角川ソフィア文庫 和漢朗詠集』<sup>6</sup>を参照し、当該作品の作者名も記す。その下の括弧内には『大系』から一部記述を引用する。その記述の通り、出典では一連の作品でありながら、『和漢朗詠集』中、分けて（詩歌番号を異にして）配されている佳句も存する。それに該当する場合は各項目の冒頭（各番号の上）に\*印を付す。

A・雲紙本、無（関戸本、有）

（1） 82 紀長谷雄

\*（2） 91 菅原文時「91は92と「同題同韻同作者」

（3） 107 島田忠臣

\*（4） 120 源英明「120は121の下句と合わせて一絶となる」

（5） 178 紀在昌

\*（6） 225 島田忠臣「225は226と「合わせて一絶をなす」

（7） 237 紀齊名

- \* (8) 246 菅原淳茂 [246は245・247・248と「合して一律を成す」]
- \* (9) 330 橘直幹 [331は「330と同じ詩合の左」]
- (10) 347 藤原篤茂
- (11) 459 大江朝綱
- (12) 468 惟喬親王
- (13) 472 元積
- (14) 476 橘在列
- \* (15) 482 白居易 [482は254・455等と合わせて二作品]
- (16) 489 慶滋保胤
- (17) 507 橘直幹
- (18) 518 平佐幹
- (19) 535 源英明
- (20) 542 (作者不明)
- \* (21) 547 菅原文時 [547は546・548・549と合わせて二首の七言律詩]
- (22) 551 紀長谷雄
- (23) 556 杜荀鶴
- \* (24) 561 都良香 [566は「561の後聯」]
- (25) 584 高丘相如
- (26) 596 紀齊名



(27) 598 慶滋保胤

(28) 615 (作者不明)

(29) 618 白居易「554と一連の詩からの摘句」<sup>8)</sup>

(30) 629 藤原篤茂

(31) 636 菅原庶幾

(32) 657 楊衡

(33) 663 藤原国風

(34) 677 大江朝綱

(35) 684 許渾

\* (36) 703 大江朝綱「703は700・701・702と合わせて「七言律詩一篇」

(37) 756 白居易

(38) 760 惟良春道

B・関戸本、無(雲紙本、有)

① 313 源順

\* ② 363 菅原文時「363は364と「連続して一首の七絶」。

③ 369 紀長谷雄

\* ④ 549 菅原文時「549は546・547・548と合わせて「一首の七言律詩」。

\* ⑤ 701 大江朝綱「701は700・702・703と合わせて「七言律詩一篇」。

右に挙げた事例について、明白なことは和歌が一首も無いということである。また、右の作者名に拠ると、「A」では三〇首、

「B」ではその全半（五首）が邦人であり、相対的に見て「A」・「B」における邦人数の占める割合は大きい。

また、「A」に二首以上が見られる作者が「B」にも存する。菅原文時（「A」(2)・(21)、「B」②・④）・大江朝綱（「A」(11)・(34)・(36)、「B」⑤）・紀長谷雄（「A」(1)・(22)、「B」③）であるが、その三名は『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度の高い作者である。

唐人についても頻出度の高い作者である白居易（「A」(15)・(29)・(37)）・元稹（「A」(13)）・杜荀鶴（「A」(23)）・許渾（「A」(35)）が見られる。<sup>10)</sup>

また、\*印を付した作品は「A」では九首、「B」では三首が存する。そのことに加え、そのうちの547（「A」〈雲紙本〉(21)）と549（「B」〈関戸本〉④）、及び703（「A」〈雲紙本〉(36)）と701（「B」〈関戸本〉⑤）とは出典においてそれぞれ一連のものであることも確認された。

次に、排列について述べる。

調査し得た諸伝本間に見られる排列上の異同箇所（全て）の詩歌番号を挙げる（諸伝本の略号を括弧内に示す）と次の通りである。当該詩歌句が無い場合（①・⑪・⑮・⑱・⑳・㉓・㉔・㉕）を除くと両本は全てにおいて一致しており、また、他本に対して雲紙本・関戸本の二本のみが一致する事象（⑥）も確認される。

① 90・91無・92（雲）

90・91・92（関）・粘・伊・久・卷・山・戊

91・92・90（多）

90無・91・92（葦）

② 110・111（雲・関）・粘・伊・久・卷・山・戊

111・110（唐2・葦）

- ③ 137 ∨ 143 ∨ 133 ∨ 136 [卷上・春部] [躑躅]・[款冬]・[藤] [雲・閔]・卷・山・戊・葦
- 133 ∨ 143 [卷上・春部] [藤]・[躑躅]・[款冬] (粘・伊)
- ④ 188・189 [雲・閔]・粘・伊・久・卷・下・山・戊・葦
- 189・188 (大内)
- ⑤ 195・196 [雲・閔]・粘・久・卷・下・山・多・戊・葦
- 196・195 (伊)
- ⑥ 202・201 [雲・閔]
- 201・202 (粘・伊・久・卷・山・戊・葦)
- ⑦ 226・227 [雲・閔]・粘・伊・卷・山・戊・葦
- 227・226 (久)
- ⑧ 268 無・269・270・271 [雲・閔]
- 268・269・270 (粘・伊・戊・葦)
- 268・269・270・271 無 (卷)
- 268・270・271・269 (久)
- 269・270・271・268 (山)
- ⑨ 273・272 [雲・閔]・久・卷・唐?・山・戊・葦
- 272・273 (粘・伊・多)
- ⑩ 309・308 [雲・閔]・久・山・戊・葦
- 308・309 (粘・伊)

- 308 無 · 309 (卷)
- ⑪ 313 · 312 (雲 · 葦)
- 312 · 313 無 (閔 · 卷 · 和 1)
- 312 · 313 (粘 · 伊 · 久 · 山 · 戊)
- ⑫ 368 · 367 (雲 · 閔 · 伊 · 久 · 卷 · 山 · 戊 · 葦)
- 367 · 368 (粘)
- ⑬ 405 · 406 (雲 · 閔 · 粘 · 法 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 山 · 戊 · 葦)
- 406 · 405 (益)
- ⑭ 465 · 466 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 戊 · 葦)
- 466 · 465 (山)
- ⑮ 472 無 · 473 (雲)
- 472 · 473 (閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 · 太 · 下 · 戊 · 葦)
- 473 · 472 (山)
- ⑯ 483 · 484 · 485 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 太 · 益 · 山 · 戊 · 葦)
- 484 · 485 · 483 (卷)
- ⑰ 511 · 512 · 513 (雲 · 閔 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 山 · 戊 · 葦)
- 512 · 513 · 511 (卷)
- ⑱ 546 · 547 無 · 548 · 549 · 550 (雲)
- 546 · 547 · 548 · 549 無 · 550 (閔)

- 656  
655 (久)
- ②4 655・656 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 625・628  
625・626  
625・627  
628・629 (久)
- ②3 625・626  
627・628  
629 無 (雲)
- 616・617  
618 と 619 後部の合成  
620・621  
622 619 前部 (山)
- 618・619  
620・621  
622 (久)
- 616・617 無  
618・619  
620・621 無  
622 (安・卷)
- 616・617  
618・619  
620・621  
622 (関・粘・伊・戊・葦)
- ②2 616・617  
618 無  
619・620  
621・622 (雲)
- 603・602 (大内)
- 602・603 (粘・近・伊・久・山)
- ②1 602・603 無 (雲・関・卷・戊・葦)
- 573・576  
574・575 (久)
- ②0 573・574  
575・576 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 560・557  
558・559 (久)
- ①9 557・558  
559・560 (雲・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)
- 550・546  
547・548  
549 (卷)
- 546・547  
548・549  
550 (雲切・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

②5 671・672 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・山・多・戊・葦  
672・671 (久)

②6 686・687 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・太・多・戊・葦

687・686 (久)

②7 702・701 (雲)

701無・702 (関)

701・702 (粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

②8 726・727・728 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・山・戊・葦

728・726・727 (久)

②9 729無・730 (雲・関)

729・730 (粘・近・伊・久・安・卷・太・戊・葦)

730・729 (山)

③0 741・742・743・744 (雲・関) 粘・近・伊・久・安・卷・太・戊

741・742・744 (山)

741・743・742・744 (多)

741無・742無・743無・744無 (葦)

③1 746・747 (雲・関) 粘・近・伊・安・卷・太・山・俊和・戊・葦

747・746 (久)

③2 754・755・756無・757 (雲)

754・755・756・757(園・粘・近・伊・安・太・山・戊・葦)

754・755・756・767無(巻)

755・756・754・757(久)

右のうち、雲紙本に無いのは六か所(①・⑮・⑱・⑳・㉓・㉔)、関戸本に無いのは三か所(⑪・⑱・㉔)である。⑪では、313が関戸本に無く、諸伝本の排列が312・313であるのに対して、雲紙本・葦手本では313・312の順である。また、㉔では、関戸本には701が無く、諸伝本の排列が701・702であるのに対して、雲紙本のみが702・701の順である。関戸本に無い二首(313・701)と、その前後の句(312・702)において、雲紙本の排列は他本の排列と相違している(雲紙本の排列は313・312、702・701である)。

また、⑱からは547が雲紙本に無く、549が関戸本に無いことが確認された(547と549とが出典では一連の作品であるという点は前項において指摘した通りである)。

以上、諸伝本間における詩歌句の有無に関する異同箇所について調査した結果、雲紙本と関戸本のみが無いのは一〇首もあり、他の諸伝本間に見られる一致数(粘葉本と伊予切(一首)、卷子本と太田切(一首)、雲紙本と卷子本(二首)、安宅切と卷子本(二首))に比して著しく多いものであった。

しかし、両本は句数においては相違していた。雲紙本に無いのは三八首、関戸本に無いのは五首であり、それらを検討してみると両本間には以下挙げるいくつかの共通要素が看取された。

- ・和歌は一首も見当たらない。
- ・邦人によると思われる作品が多い。
- ・雲紙本の三八首の中に二首以上が見られる作者(三名)の作品が関戸本の五首のうちの四首を占める。
- ・『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度が高いとされる作者による作品が目立つ。
- ・『和漢朗詠集』中、他の箇所に配されている詩句と出典において一連のものであった可能性のある詩句が在する(雲紙本で

は七首、関戸本では一首。さらに、当該詩句間にも同様なケースが認められる(547〔雲紙本〕と549〔関戸本〕、703〔雲紙本〕と701〔関戸本〕とは出典を同じくする)。

一方、排列においても両本では全てが一致していた。また、諸伝本中、雲紙本の排列が他本と相違している詩句(313・701)が関戸本に存しないことも注目された。

### 三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、雲紙本と関戸本との同文箇所数について、和歌は二六五か所(九三・三%)、漢詩は七〇五か所(九二・九%)であり、零本・断簡等を除くと、雲紙本と関戸本との関係は、粘葉本と伊予切との関係に次いで近いことが知られる。ただし、二本間においてのみ同文である箇所数は漢詩においては諸伝本中、雲紙本と関戸本とが最多といえる。

以下、その事例をいくつか挙げる。

まず、雲紙本の本文を載せ、関戸本との同文箇所を傍線を付す。括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げ、諸伝本間における異同も示す。各項目の末尾には他文献の本文も載せる。



葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩	
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本	
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265			
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%	
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本	
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705		
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%	
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本	
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559		
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%	
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本	
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313		
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%	
36	36	35	36	36	36			131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33			121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7			92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切	
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559		
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%	
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切	
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556		
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%	
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本	
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430		
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%	
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切	
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565		
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%	
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切	
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583		
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%	
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本	
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534		
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%	

【諸伝本間の本文異同調査表】

(1) 186 螢火乱飛秋近辰星早没夜始長(雲)

(同) 始(関)

(異) 初(粘・伊・久・卷・大内・山・多・戊・葦)

『全唐詩』元稹二下「夜座」。当該箇所、「初」。『和漢朗詠集』諸伝本では出典と同じく「初」であり、雲紙本・関戸本の「始」は同訓に因り生じたと思われる。

(2) 217 詞託微波且雖遣心期片月欲為媒(雲)

(同) 且雖(関)

(異) 雖且(粘・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

『和漢朗詠集私注』(以下、『私注』と略称)、当該箇所、「雖且」。本来、「雖且」とあるべきであり雲紙本・関戸本では文字が転倒している。

(3) 263 先三遲兮吹其花如曉星之転河漢引十分 | 蕩其彩疑秋雪之廻洛川(雲)

(同) ナシ(関)

(異) 兮(粘・伊・久・卷・大内・山・葦)

而(戊)

『本朝文粹』巻十一「九日侍宴觀賜群臣菊花應製 紀納言」。当該箇所、「兮」。雲紙本・関戸本では「兮」を脱している。

(4) 457 胡雁一声秋破商客之夢巴猿三叫曉濕行人之裳(雲)

(同) 濕(関)

(異) 霑(粘・近・伊・久・卷・太・大内・山・多・戊・葦)

『本朝文粹』巻三「辨山水 文章得業生正六位上大江朝臣澄明対」。当該箇所、「霑」。「濕」は「霑」と類義であることから、

雲紙本・関戸本は転化したと見られる。

(5) 481 臨風杪秋樹对酒長年醉貌如紅葉雖紅不是春(雲)

(同) 紅(関)

(異) 霜(行大・粘・近・伊・久・卷・太・益・定大・山・戊・葦)

『白氏文集』卷十七「醉中对紅葉」。異同箇所、「霜」。「霜葉」は霜で赤くなつた葉のことであり、雲紙本・関戸本では「紅葉」と書されている。

(6) 668 江都之好勁捷「七尺屏風其徒高淮南之求神仙也一旦乘雲而何益(雲)

(異) ナシ(関)

(同) 也(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

『本朝文粹』卷十「初冬於栖霞寺同賦霜葉滿林紅応李部大王教 源順」。当該箇所、「也」。異同箇所は粘葉本以下の諸伝本のごとく雲紙本・関戸本では脱字といえる。

(7) 780 行宮見月傷心色「雨夜聞猿断腸声(雲)

(同) 雨夜(関)

(異) 夜雨(粘・近・法・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

『白氏文集』卷十二「長恨歌」。当該箇所、「夜雨」。雲紙本・関戸本の本文「雨夜」は転倒に因ると考えられる。

他本に対して雲紙本と関戸本の二本のみが同文である場合、二本と諸伝本との間に見られる異同の主な要因には、音・訓・字義が類していること、及び文字の転倒・脱漏等が挙げられる。

次に、雲紙本と関戸本との間に見られる異同に関する事例を挙げる。

詩句等については、対照箇所(七五九か所)のうち、雲紙本と関戸本には五四か所の異同がみられ、そのうち、誤脱等と

思しき事例には四五か所が確認された(うち、雲紙本、関戸本のうちのいずれかが独自本文であるのは一八か所である)。

当該事例(四五か所)は次の①・②・③・④に大別される。事例を一例ずつ挙げる。

①脱字と思しきもの(二三か所)。

■ 87 白片落梅浮澗水黄梢新柳出城墻(雲)

(同) 柳(粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

(異) ナシ(関)

『白氏文集』卷十八「春至」。当該箇所、「柳」。関戸本では一文字「柳」を脱している。

②衍字と思しきもの(二か所)。

■ 464 随分管絃還自足等閑篇詠被人知(雲)

(同) 閑(粘・近・伊・久・卷・太・山・戊・葦)

(異) 閑閑(関)

『白氏文集』卷二十四「重答劉和州」。当該箇所、「閑」。関戸本「閑閑」は衍字である。

③文字の転倒かと思しきもの(六か所)。

■ 774 嘉辰令月歆無極万歳千秋楽未央(雲)

(同) 秋楽(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(異) 楽秋(関)

『私注』、当該箇所、「秋楽」。関戸本の当該箇所「楽秋」は「秋楽」が転倒したものである。

④字形の類似に因る誤写かと思しきもの(一四か所)。

■ 318 尋陽江色潮添滿彭蠡秋声雁引来(雲)

(同)潮(粘・伊・下・散・戊・葦)

(異)湖(行大・関・久・唐・卷・山)

『全唐詩』劉禹錫十二。当該箇所、「湖」。関戸本等には「湖」とあるが、行書等では「潮」と字形が類似しており、それに因る誤写かと思われる。

和歌については、雲紙本と関戸本には対照箇所(二八四か所)のうち、異同は一九か所(うち、雲紙本、関戸本のいずれかが独自本文であるのは一四か所)が存し、その殆どが誤脱・衍字等であると思われる。

たとえば、以下のごとくである。雲紙本の本文を挙げ、以下、異同を示す。

◆789 いまこむといひてわかれしはかりになかつきのありあけのつきをまちいてつるかな(雲)

(異) いひしはかりに(関・粘・近・法・伊・久・卷・太・益・山・戊・葦)

いひしはかり(安)

両本間における異同の要因が如上のことに該当しないとされるものは九か所のみであり、そのうちの七か所については雲紙本、または関戸本が諸伝本と同文であった。

以上、本文の面においても雲紙本と関戸本とは近い関係にあることが改めて確認された。殊に、漢詩においては二本間においてのみ同文である箇所数が諸伝本中、最多といえる。しかし、その一方、両本間には誤脱等が少なからず存していた。

#### 四

次に、注記について述べる。本書(第一章第三節)中、指摘する通り、雲紙本には別筆が随所に確認されるが、それらについては考察の対象外とする。

まず、雲紙本と関戸本との間に異同がある場合について検討した結果について述べる。雲紙本の注記を挙げ、以下、異同

を示す。

両本のうちのいずれか一方が誤りであると見做し得るのは次の二か所のみである。

◇63後漢書(雲・粘・近・伊・久・安・下・山・多・戊・葦)

漢書(関)

ナシ(定大)

◇789いせ(雲)

素性(関・粘・法・伊・久・安・益・山・戊・葦)

ナシ(近・太)

その他については、両本間には一〇二か所もの異同が存していることが認められ、それらは以下のごとく大別される。事例についてはそれぞれ一例ずつ挙げる。

◆表記等による相違(三〇か所)。

92菅三品(雲・粘・伊・久・山・葦)

菅三(関)

菅三 大庾嶺(多)

ナシ(戊)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方に記載が無い(三五か所)。

40ナシ(雲・伊)

菅(関・粘・戊・葦)

花時天似□ 菅(山)

花時天似醉 菅丞相(久)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方には題詞等・作者名が書されており、もう一方には作者名のみが書されている(三五か所)。

122相規 花少鳥亦稀(雲)

相規(関)・粘・伊・戊・葦

花少鳥亦稀 相規(久)

花口亦稀 保胤(山)

◆雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方には題詞・作者名が書されており、もう一方には題詞のみが書されている(三か所)。

465夜笛(雲)

夜笛章孝標(関)・伊・久・太・山

章孝標(粘)

ナシ(近・戊・葦)

注記について、雲紙本と関戸本との間に見られる異同のうち、実質的と見做し得るのは僅か二か所のみであった。それと同時に両本間における異同箇所が一〇二か所に上るといっても確認された。

## 五

雲紙本と関戸本との関係について、形態・本文等の面から再検討を行った。その結果、他の諸伝本に対して雲紙本と関戸本の二本にのみ無い箇所数がいずれの二本間における場合よりも多いということが確認された。排列にも両本間の相違は見られず、本文・注記(題詞・作者名等)の面においても両本の一致率は高く、また、両本が特異な事例を共有していること

も改めて確認された。

その一方、両本間には相違も認められた。最も顕著であるのは句数のことである。「雲紙本に無い（関戸本にはある）句」は三八首、「関戸本に無い（雲紙本にはある）句」は五首であるが、それらについて検討してみると、両本間には以下述べる通り、いくつかの共通要素が看取された。

ここでは和歌は見当たらず、邦人による作品が多く、また、その関戸本の当該句（五首）のうちの四首それぞれの作者とされる三名は雲紙本の当該句（三八首）の作者の中に存する。

『和漢朗詠集』全般に亘って頻出度が高い作者による作品が当該句では目立ち、また、当該句と、『和漢朗詠集』中、他の箇所<sup>①</sup>に配されている詩句とが出典において一連のものであった可能性のあるものが確認された（雲紙本では七首、関戸本では一首）。さらに、当該詩句間にも、出典において一連のものであった可能性のある詩句の共有が認められた（547〈雲紙本〉と549〈関戸本〉、703〈雲紙本〉と701〈関戸本〉が挙げられる）。

関戸本に無い二首（313・701）について、雲紙本では当該句の前後（312・702）の排列が諸伝本とそれぞれ相違していた。想像の域を出ないものの、詩歌句の有無と排列の揺れとは相関関係を持つ側面があるように感じられる。その重なりがわずか二首であるとはいえ、関戸本では対象となる詩句が五首のみであることから、二首という数は重視されるべきではなからうか。両本が極めて近い関係にあり、かつ、同筆であるという事実を前提とするならば以上のことは雲紙本と関戸本との間に親本レベルにおいて何らかの接触がなければ生じ得ないと考えられる。

本文・注記において、両本は極めて近い関係にある。しかし、両本間には少なからず異同も存していた。両本では詩歌句数が一致しておらず、関戸本に無いものを雲紙本が有しており、その一方、雲紙本に無いものを関戸本が有している場合もある。そのようなことから雲紙本と関戸本との関係は、いずれかを基としてそのまま写し取られたのではなく、両本の親本、あるいは両本に極めて近い関係にある伝本に（出典等も考慮の上）、意図的削除、付加等がなされた結果、生成されたと見



てよいのではなからうか。

雲紙本、関戸本ともに調度品としての性格が強い。外的な要因（例えば料紙の分量のことや調度品としての用途等）により詩歌句数の調整が図られたことも考えられる。

以上述べた推測が事実であるならば、両本の書写年代のことも考え合わせると、当該詩句の出典等、その詳細を当時知り得ていた『和漢朗詠集』の撰者である公任、または、公任に近い関係にある人物がそこに関わっていた可能性が高いと考えられる。

注

- (1) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評」(『仮名古筆の内容的研究』「昭和55年 ひとく書房」P 195・196)
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』「昭和56年 大学堂書店」P 21
- (3) 記述中「の次」とは、『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号を有する詩歌句の次(ここでは92の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (4) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』73「昭和40年 岩波書店」P 202
- (5) 大曾根章介・堀内秀晃両氏校注『新潮日本古典集成 和漢朗詠集』「平成5年 新潮社」
- (6) 三木雅博氏訳注『和漢朗詠集』「平成25年 角川学芸出版」
- (7) 『大系』(前掲(注4)に同) P 104では「白」と注するのは誤り」とされ、『私注』にも「田達音」と注されている。
- (8) 前掲(注6)に同。P 307
- (9) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』「昭和48年 芸林舎」P 18・20に拠ると、『和漢朗詠集』中、作品の入集数は唐人…二三三首、邦人…三六二首である。

(10) 柿村重松氏に拠ると、『和漢朗詠集』中、作品が多く入集されている邦人には「菅原文時」・「菅原道真」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」等が挙げられる。また、唐人では「白居易」が圧倒的に多く（一三七首）、その他、「元稹」（二一首）・「許渾」（二〇首）等も挙げられる（前掲〔注9〕に同）。上述した三名の邦人「菅原文時」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」、及び「白居易」・「元稹」・「許渾」が当該詩句中に存することになるが、そのことも偶然とは思えない。

(11) なお、「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」との相関性については本書中（第三章）においても指摘する。

## 第三節 雲紙本に見られる別筆

一

雲紙本には「鎌倉時代の筆とらしい」<sup>①</sup>別筆が随所に見られる。本文中、刃物による削消、及び補筆・傍書等が存する。目録・注記に書き足された所もある。

前節中、雲紙本と関戸本との関係<sup>②</sup>について考察を行った際、それらの箇所は考察の対象外とした。よって、本節ではその雲紙本に見られる別筆を取り上げ、考察を行った結果について述べる。本文における削消・補筆がなされたと思われる箇所（以下、略号を「雲別」とする）、及び傍書（以下、略号を「雲傍」とする）について明らかにし、雲紙本本来の書写者による文字の姿を探り、検討を加える。

二

以下、当該箇所について指摘する。その際、雲紙本の本文（全文）を挙げ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間の異同を示す。括弧（ ）内には、『校異和漢朗詠集』<sup>③</sup>から以下取り上げる別筆に関する同書著者（堀部氏）の記述を引用した。

以下指摘する事例の中には堀部氏が雲紙本本来の書写者の筆と判断されている箇所もある。その場合、「（堀部氏、「」を別筆とせず）」と付記した。削消・補筆が施されたと思われる箇所のうち、雲紙本の書写者が書いたと思われる文字（以下、原姿と仮称する）の痕跡が認められる場合は\*を印し、その形状を模写した。一文字内の部分的な削消・補筆かと思われる箇所も存する。その場合は※を印し、削消が行なわれていないと思われる部分を明記した。

■ 22 着野展敷紅錦繡當天遊織碧羅綾

① 織（雲別・粘・伊・久・唐・2・卷・益・山・戊・葦）

## 絲(関)

〔堀部氏、「織」を別筆とせず〕 ※偏「糸」削消ナシカ。

■ 29 倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期氣味之克調也

②啜(雲別・粘・伊・久・卷・益模<sup>4</sup>・定金・山・戊・葦)

## 噉(関)

〔雲本一本削りし上に「啜」と別筆〕

■ 60 歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路辞林舞蝶還翩翻於一月之花

③更(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

## 處(関)

〔雲、不明。(雲別訂「更」)〕 \* 痕跡、「ハ」アリ。痕跡、「處」の行草体の一部か。

■ 66 臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池

④塵(雲別・粘・伊・久・卷・益・山・戊・葦)

## 絃(関)

〔雲、不明(別訂「塵」)〕 \* 痕跡、一画目「ノ」(糸偏の一画目らしき画)・終画「ノ」アリ。

■ 83 花新開日初陽潤鳥老歸時薄暮陰

⑤潤(雲別・粘・伊・久・行金・卷・大内・山・多・戊・葦)

## 洞(関)

〔堀部氏、「潤」を別筆とせず〕 ※「冂」削消ナシ。

■ 93 誰言春色從東到露暖南枝花始開

⑥露(雲別・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

霞(関)

〔雲不明(上を別「露」)〕 ※冠「雨」削消ナシ。

■160 露簾清瑩|迎夜滑風襟蕭灑先秋涼

⑦瑩(雲別)

熒(関・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

〔雲別「瑩」〕 ※「熒」削消ナシ。

■179 緑何更覓吳山曲便是君吾座下花

⑧緑(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

緑(関)

〔雲不明(別訂「緑」)〕 ※「緑」の部分削消ナシ。

■266 霜蓬舊鬢三分白露菊新花一半黃

⑨舊(雲別)

老(関・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

〔雲別「舊」と訂す〕 \*別筆「舊」の「𠄎」(草冠)の下の部分(「佳」にあたる位置)に痕跡「𠄎」(「𠄎」の一部か)アリ。

■275 頭目縦随禪客|乞以秋施与太應難

⑩客(雲別・粘・伊・久・唐2・卷・下・山・多・戊・葦)

僧(関)

〔雲不明(別訂「客」)〕 \*痕跡、「僧」か。原姿、「僧」か。

⑪ 應(雲別・粘・伊・久・唐<sup>2</sup>・卷・下・山・多・戊・葦)以(関)

(雲不明(別訂「應」))

■ 276 文峰案轡白駒影詞海艤舟紅葉聲

⑫ 艤(雲別・粘・伊・久・卷・下・多・戊・葦)

装(関・山)

(雲不明(別訂「艤」)) \*別筆「艤」の旁「義」の下の部分(「我」にあたる位置)に痕跡「**心**」アリ。痕跡(「衣」の行草体の一部か。)アリ。

■ 329 床嫌短脚蜚聲鬧壁猷空心鼠孔穿

⑬ 嫌(雲別・粘・伊・久・卷・和<sup>1</sup>・山・戊・葦)

頭(関)

(雲不明(別訂「嫌」)) \*痕跡、偏の一画目、短く「**二**」アリ。旁、「**頁**」か。原姿、「**頭**」か。

■ 339 露滴蘭叢寒玉白風衙松葉雅琴清

⑭ 衙(雲別・粘・伊)

衙(関・久・卷・山・戊・葦)

(雲別「衙」) ※「行」(行がまえ)削消ナシか。

■ 372 晨積瓦溝鴛変色夜霽華表鶴吞聲

⑮ 零(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

雲(関)

〔雲不明(別訂「零」)〕 ※冠「雨」削消ナシ。

■454 瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天巴峽秋深五夜之哀猿叫月

⑯滿(雲別・粘・近・伊・久・卷・大内・山・戊・葦)

盈(関)

〔雲不明(但、別訂「滿」)〕 \*痕跡、「盈」か。原姿、「盈」か。

■485 醉郷氏之国四時獨誇温和之天酒泉郡之民一頃未知呀陰之地

⑰郡(雲別・粘・近・伊・久・卷・太・益・下・山・戊・葦)

郎(関)

〔雲、不明(別訂「郡」)〕 ※旁「下」(おおざと)削消ナシ。

■514 菰蘆杓酌春濃酒舩舳舟流夜漲灘

⑱濃(雲別・関・粘・近・伊・久・卷・和3・山・戊・葦)

〔堀部氏、「濃」を別筆とせず〕 ※偏「シ」(さんずい)削消ナシ。

■530 陰森古柳踈槐春無春色獲落危墉壞宇秋有秋風

⑲壞(雲別・関・粘・法・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

〔堀部氏、「壞」を別筆とせず〕 ※偏「王」削消ナシ。

■531 臺傾滑石猶殘砌簾斷真珠不滿鈎

⑳傾(雲別・粘・法・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

頭(関・太)

〔雲不明(別訂「傾」)〕 ※旁「頁」削消ナシか。

■ 559 山路日落滿耳者樵歌牧笛之聲潤戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色

⑲ 樵(雲別・粘・近・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

榛(関)

(雲不明(別訂「樵」))

■ 588 願以此生世俗文字狂言奇語之咎翻為當來世々讚佛乘之因轉法輪之縁

⑳ 咎(雲別)

因(関)

誤(粘・近・伊・久・山・戊・葦)

過(卷)

(雲不明(別訂「咎」)) \* 痕跡「心」(「因」の一部か)アリ。

㉑ 翻(雲別・粘・近・伊・久・卷・戊・葦)

轉(関・山)

(雲不明(別訂「翻」))

■ 621 晦跡未抛蒼径月避喧猶臥竹窓風

㉒ 避(雲別・粘・伊・久・山・戊・葦)

壁(関)

(雲不明(別訂「避」)) \* 「辟」の下の位置、痕跡、「土」アリ。 ※「辟」、削消ナシか。原姿、「壁」か。

■ 679 傳氏巖之嵐雖風雲於殷夢之後巖陵瀨之水猶涇渭漢聘之初

㉓ 聘(雲別・関・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦)



携(卷)

(堀部氏、「聘」を別筆とせず)

■ 692 雖三百盃莫強辭邊土不是醉郷此一兩句可重詠北陸豈亦詩国

②6 詠(雲別・粘・近・伊・久・安・卷・太・多・戊・葦)

ナシ(関)

(雲「重」の下一字不明。別訂「詠」)

■ 695 寶雁繫書秋葉落牡羊期乳歲華空

②7 牡(雲別・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦)

杜(関・卷)

(但、雲別訂「牡」) \*原姿の一画目、短い横画か。その短い横画の書き始めの位置に、右上から左下へ向けて払う短

い斜画を補筆したか。 ※旁「土」、削消ナシ。原姿、「杜」か。

②8 乳(雲別・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

孔(関)

(雲不明(別訂「乳」)) \*原姿かと思われる「孔」の偏「子」一画目(横画)に「乳」の二、三、四画目「」を重ねて修正し、

さらに、斜画「」も加筆し、「孚」としたか。 ※旁「」削消ナシ。原姿、「孔」か。

■ 698 愁苦辛勤顛頓盡如今却似畫圖中

②9 却(雲別・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(堀部氏、「却」を別筆とせず) \*痕跡、旁は「」か。

■ 702 胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸



健(関)

〔堀部氏、「健」を別筆とせず〕 ※「達」の部分、削消ナシ。原姿、「健」かとも思われる。

■785 寒窓獨臥無夫聲不妨蕭郎枉馬蹄

③5 郎(雲別・粘・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

娘(関)

〔雲不明(別訂「郎」)〕

右に挙げた事例のうち、削消・補筆されたかと思われる箇所について分析すると次の六項目のことを指摘し得る。

- (a) 該当する部分は、和歌は一首もなく、全てが漢詩である。
- (b) 削消・補筆されたと思われる文字の痕跡、及び痕跡から推測される元の文字が、関戸本の本文(部分)と同一であると思われるのは、三五か所のうち一六か所あり、約四六%を占める(③④⑨⑩⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)。
- (c) 一文字内で部分的に削消・補筆されたと思われるのは、三五か所のうち一七か所であり、約四九%を占める(①⑤⑥⑦⑧⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)。
- (d) 右記(c)の全て(一七か所)において、削消・補筆が施されていないと思われる部分が関戸本の本文と一致する(①⑤⑥⑦⑧⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)。
- (e) 別筆(削消・補筆)と思われる箇所と諸伝本が同文で、その部分について、関戸本のみが対応するのは、二三か所であり、約六六%を占める(①②③④⑤⑥⑧⑩⑪⑫⑬⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)。
- (f) 右記(e)の二三か所のうち、関戸本と諸伝本との間で偏旁冠脚など文字成分が同様である例、及び行草体が類似していると思われる例は<sup>5)</sup>一四か所であり、約六一%を占める(①②③⑤⑥⑧⑯⑰⑱⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)。
- さて、別の観点から、雲紙本と関戸本との関係について、次のように考えることができる。

(1) 諸伝本中、ある二本にのみ揃って存在しない場合を検討した結果、そのような二本にあたるものとしては「雲紙本・関戸本」が最も多い(一〇首)。

(2) 雲紙本に無く関戸本にある句↓三八句、関戸本に無く雲紙本にある句↓五句である。その無い句の全てが「脱漏」<sup>(6)</sup>とは言えないのではないか。意図的削除、もしくは付加がなされた可能性もある。

(3) 排列においては、諸伝本に対して一本のみが異なる場合を除外すると、雲紙本と関戸本とは全てが一致している。

(4) 諸伝本間の本文異同を調査し、同文箇所数について集計した結果、雲紙本と関戸本との関係は、和歌…当該箇所二八四か所のうち、二六五か所(約九三%)、漢詩…当該箇所七五九か所のうち、七〇五か所(約九三%)であり、極めて近いことが確認された。両本は単に本文が同文であるというのみならず、同文である諸伝本に対して雲紙本と関戸本との二本のみが一致する、いわゆる共通異文をも有し、その中には、特徴的な本文の共有が認められる。

(5) 雲紙本・関戸本の共通異文の中には、行草体を介した字形の誤認により異同が生じたことが推測される事例も存する。<sup>(7)</sup>

(6) 同筆とされる両本の書風・字形・用字には共通性が確認される。

以上の六点を踏まえた上で改めてさきの(a)~(f)の考察結果を検討すると、特に、(b)(d)(e)から、削消・補筆されたと思われる箇所(三五か所)では関戸本の本文と一致する文字が多く存するということが想像される。

### 三

次に、傍書について述べる。傍書は和歌二か所、漢詩四二か所が確認された。雲紙本・関戸本の二本のみが同文である本文に付した場合が二〇か所、雲紙本類の本文に付した場合が五か所、雲紙本の独自本文に付した場合が七か所、その他一二か所が存する。

傍書によって誤りが正されたと思われるのは五例(A)、脱字が補われたと思われるのは一〇例(B)、異本との照合によ

る注記は二四例(C)である。また、傍書独自の本文は五例(D)である。

以下、雲紙本から事例を挙げ、傍書が見られる本文に傍線を引き、本文の下の括弧内には当該箇所本文を有する伝本の略号を、次行以降には、傍書、及び諸伝本間の異同を記す。各項目の末尾には適宜、他の文献名と当該箇所を挙げる。

A 誤りを正したと思われる例(274・376・388・770・772)

■ 376 雪似鵝毛飛散乱人排鶴籠立徘徊(雲・関)

籠(雲傍・粘・伊・久・山・戊・葦)

籠(卷)

\* 『白氏文集』卷三十三「酬令公雪中見贈訝不與夢得同相訪」。当該箇所、「籠」。「鶴籠」とは、鶴の羽の装のこと。雲紙本・

関戸本の「籠」は、かわかめ、またはうみがめのことであり(『類聚名義抄』(観智院本)、「カハカメ ウミカメ」とある)、「鶴

籠」は詩内容からも誤写といえる。傍書「籠」は雲紙本の誤写「籠」を訂したのであろう。

B 誤脱を補ったと思われる例(7・192・480・533・588・591・592・745(二箇所)・786)

■ 192 遅々兮春日玉髻暖兮温泉溢嫋々兮秋風山蝉鳴宮樹紅(雲・関)

兮(雲傍・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

\* 『白氏文集』卷四「驪宮高」。当該箇所「兮」。雲紙本・関戸本では「兮」を脱したものである。それに対して雲紙本では傍書「兮」が書き加えられたと見られる。

C 異本との照合を注した例(16・196・227・299・302・341・375・416・433・437・457・481・495・503・505・588・646・662・670・667・757・770・785・793)。

■ 757 范蠡収責棹扁舟而逃名謝安辞功臥孤雲而養志(雲・関)

鞭(雲傍・久・安・太・山・戊・葦)

伏(粘・近・法・伊)

\*『本朝文粹』巻四「為貞信公辞撰政第三表 後江相公」。当該箇所、「鞭」。雲紙本・関戸本に「臥」、粘葉本の類に「伏」とある。傍書では『本朝文粹』と同じ本文「鞭」が注された。なお、「鞭」を有するのは十二世紀書写本群である。

D 傍書独自の本文例(30・376・399・405・771)

■399 漢主|手中吹不駐徐君塚上|扇猶懸(雲・関・粘・伊・久・卷・太・散模<sup>9</sup>・山・戊・葦)

祖(雲傍)

王(益)

「漢主」は漢の高祖のことである。<sup>10</sup> 傍書「祖」はそれによるかと思われるが、平安時代書写本には「祖」をもつ伝本は見当たらない。

以上、(a)本文に傍書が施されているのは雲紙本・関戸本の二本のみが同文である場合が最も多く、また、(b)傍書により、誤りが正されたと思われるのは五か所であり、その他については脱字を補ったと思われる例、異本との照合を注した例が殆どであることが確認された。

前項「三」における考察結果を踏まえると、本文を残しておきたいという場合、削り取るだけの確信が持てないという場合には傍書とし、訂正の必要があると判断した場合は削消したのではないかと考えられる。

#### 四

以上の考察結果を纏めるならば次の二点となる。

(a) 雲紙本にみられる削消・補筆されたと思われる箇所(三五か所)の元の文字について、その多くが関戸本と一致すると考えられる。その論拠には以下の三項目が挙げられる。ただし、それは雲紙本と関戸本とが極めて近い関係にあると

いう前提に立つものである。

(1) 削消・補筆されたと思われる文字の痕跡、及び痕跡から推測されるものと文字が関戸本の本文(部分)と同一であると思われる箇所が一六か所も存する。(2) 一文字内に部分的削消・補筆がなされたかと思しき痕跡を有するのは一七か所である。その一七か所の全てにおいて削消・補筆が施されていないと思われる部分が関戸本の本文と一致する。(3) 別筆かと思われる箇所と諸伝本の本文とが同文であつて、それに対立するのは関戸本のみであるという場合が二三か所である。

(b) 傍書、または削消かという点について、補足の場合は傍書とし、正すべきであると判断された場合は削消という行為に至つたのではなからうか。

(a)・(b)の推論が正しいとすれば、さらに次のことがいえる。

雲紙本と関戸本との本文関係については前節中<sup>(1)</sup>述べた通りであるが、削消、及び補筆・傍書等に焦点を当てた本論考においても、(1)両本の関係はより近い、(2)両本の書写者の漢詩内容の理解について不十分な点が多いことが考えられる。

## 注

(1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店 P 21〕

(2) 第一章第一・二節

(3) 前掲(注1)に同。

(4) 「益模」は益田本和漢朗詠集切の模写とされるもの。近衛家熙(一六六七—一七三六)の手になる(小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷〔平成2年 講談社〕P 360)。

(5) たとえば、③「更」(諸伝本)と「處」(関戸本)の行草体に見られる字形の類似等。

「更」更 「處」處 (兒玉幸多氏編『くずし字解読辞典 普及版』[平成5年 東京堂])

(6) 堀部氏は雲紙本と関戸本の「相互間に歌首の出入が存するのは、その書写の際の脱漏に基くものであらう。」とされた。前掲(注1)に同。P 21

(7) 書写者は、源兼行(万寿元年「二〇二四」少内記となり、承保元年「一〇七四」白河天皇大嘗会屏風を書写したことなどが知られる)が通説(小松茂美氏著『古筆学大成』第三〇卷「平成5年 講談社」P 82)。

(8) 「雲紙本類」とは、雲紙本・関戸本を指す(前掲(注1)に同。P 312)。

(9) 散書と漢朗詠集切の模写とされるもの。冷泉為恭(一八三一一八六四)の手になる(小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 374)。

(10) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』卷下「昭和48年 芸林舎」P 3

(11) 雲紙本と関戸本とが誤写とみられる佳句本文をいくつか共有している点については既述した通りである(前掲(注2))。



## 第二章

## 第一節 伊予切の書に関する一考察

一

伊予切は現在の愛媛県西条市にある伊予国西条藩主松平家に伝来した。もとは上下二冊本であったものが大正一三年（一九二四）に切断され、その際、伝来の地に因んで伊予切と命名された。

田中親美氏は『日本名跡叢刊』の解説において伊予切は三人によって書され、次の三種に分類できるとされた。また、「③下冊の六丁を除いた部分」については「後世の書きたし」であるとされた。<sup>①</sup>

①上冊の前半（巻上、秋、「秋夜の半」まで）<sup>②</sup>

②上冊の後半から下冊の前半まで<sup>③</sup>

③下冊の六丁を除いた部分<sup>④</sup>

しかし、近年、小松茂美氏は、田中氏の分類①と②との間に見られる相違について、(1)「時間の経過にともなう」ことにより生じた程度のものであり、上冊は巻頭から巻末まで同一人物の手になるものである、(2)その書写者は藤原公経（生年未詳—一〇九九）である、<sup>⑤</sup>(3)右のうちの③については伝世の途中に下冊は「六丁分を残して、大半を亡失し」、「模写本によって、佚亡部分の当該箇所をそっくり補った」<sup>⑦</sup>と述べられた。

一方、名児耶明氏は、上冊が二人の手になるという点については田中氏と同様であるが、田中氏が「後世の書きたし」とされた右のうちの③の部分については異論を示され、「これほど近似した筆跡は、後世の補写などによるものとは考え」にくく、上冊の書と「同時代と考えるのが至当」<sup>⑧</sup>とされた。如上のように先学の研究では見解が分かれている。<sup>⑨</sup>

もともと伊予切の書写年代は十一世紀中葉とされる。<sup>⑩</sup>その書の実態について細部に亘って検討を加える試みは日本の書の歴史を研究する上で重要である。

本節では田中親美氏が分類された伊予切の三種の書を、便宜上、それぞれ一種、二種、三種と呼称する。田中氏の分類①と②に見られる相違は具体的にどのような点をさすのかという問題から取り上げたく、書史的観点に立つて再検討を試みた結果について述べる。<sup>(11)</sup>

以下、掲出する図版の下の番号は詩歌番号（『新編国歌大観』による）である。

二

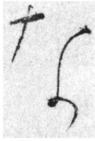
以下、伊予切一種・二種の書について述べるが、本節では、主に、線質<sup>(12)</sup>及び運筆に注目した。

仮名は「な」・「ひ」、漢字は「風」・「開」・「工」（漢字の一部位）を取り上げ、コンピュータを用いて拡大し、対象とした全ての文字の縦のサイズを揃え<sup>(13)</sup>、比較検討を行った。一種・二種のそれぞれから特徴的と思われる事例を一例ずつ掲出し、その間に見られる相違点について指摘する。また、対象とした文字を一種と二種に分け、末尾図版Aく図版Eに全て挙げる。

■な

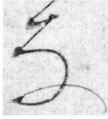
巻上・下を通して、「な」の字形上のバリエーションは次のa・b・c・dの四つの型に分類される。a・b・cの字母は「奈」であり、dのみが「那」である。ここではaの型についてのみ考察を行う。

a



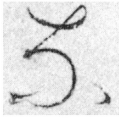
170

b



16

c



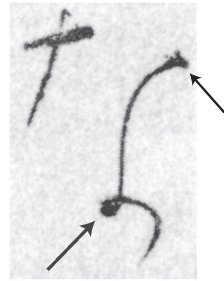
149

d



529

「二種」



170

「二種」



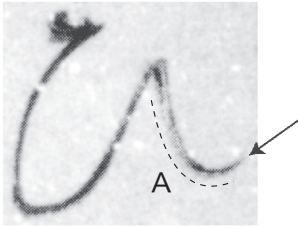
314

一種では、右上の（点を打つような）運筆（矢印部）の後、やや運筆の速度を速めている。結びの筆のかえしの箇所（矢印部）に注目すると、筆の穂先の弾力が活かされて回転していることが窺われる。

それに対して、二種には、一種のような変化はなく、一種に存する緊張感のある線質も認められない。また、結び（点線部）では、楕円を描くように回転しているケースが目立つが、一種にそのような運筆は見当たらない。

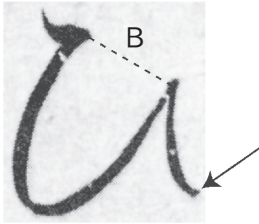
■ ひ

「二種」



73-2 (A)

「二種」



366-1 (B)

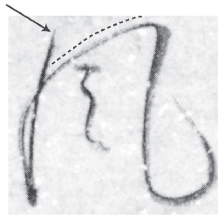
右の用例「ひ」の彎曲(点線部A)中の送筆<sup>15</sup>部分に注目すると、一種の方の線質には渋味があり、筆圧の変化が看取されるが、一方の二種の線質は単調で、一種のような流れはなく、そこからは書写者の呼吸も感じられない。

また、一種の終筆<sup>16</sup>(矢印部)は軽快であるが、二種では矢印部のように一瞬止められていることが窺われる。それが二種の書写者の手法であろうが、運筆が滞っているようにも感じられる。

また、後に掲げる全用例を通覧すると、一種の字形のバリエーションは多種多様であり、また、太細の変化、潤濁の変化などが認められ、その表現は二種に比して豊かである。しかし、二種の字形は一様で、また、右掲の二種の用例において「B」と表示した距離がほぼ一定しているなど、一種に比して変化に乏しいことが確認された。

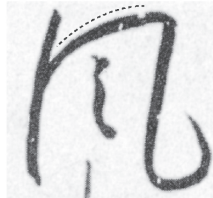
■風

「二種」



5

「二種」



323

「風」の二部位「A」には、右の用例のように、一画目から二画目まで一息で書す場合(一画目と二画目の間が虚画<sup>17</sup>である場合も含む)と、一画目の後、料紙から筆の穂先を離し、あらためて起筆<sup>18</sup>して二画目を書す場合(楷書に近い字形)とがあるが、前者の方が多いため、ここでは前者について述べる。

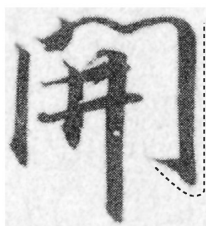
一画目の矢印部に注目すると、一種では、軽くたくように起筆している場合が多いが、二種の一画目の線質には暢達さが感じられない。また、一種の点線部では、ねじれをきかせ、筆をつり上げるように送筆しており、(空間を切るかのとき)

筆勢が感じられる。しかし、二種の点線部では、筆の動きが滞っており、一種のような筆勢はみられない。また、「八」に囲まれた「垂」の部分においても、一種の終筆では動感があるが、二種ではそのような弾力性のある線質ではなく、平板なものに感じられる。

■開

「二種」

a



137

「二種」

b



354

「二種」

c



4

「二種」

d



362

「開」には右掲 a・b のような字形と、それをくずした c・d のような字形とがある。

a の点線部（縦画・はね）に比べて、b の点線部の線質は不安定で弱々しい。また、c と d における門がまえのとき運筆も相違している。c では、複雑な線質であり、起筆から終筆まで息の長さが感じられる。しかし、d の門がまえの運筆は単調である。末尾に掲載した **図版 D** からも看取されるように当該箇所において二種には一種のような張りのある線質は見当たらなかった。

■ 尸

〔二種〕

a



68

〔二種〕

b



275

〔二種〕

c



147

〔二種〕

d



331

以下述べることは、「尸」（まだれ）が文字成分の一部である漢字を全て対象とするものである。

「」には、前掲 a・b のように、二画目(横画)と三画目(左払い)とを続けて書す場合(行書に近い字形)と、c・d のように、二画目の後、いったん筆の穂先を料紙から離し、あらためて起筆し、三画目を書す場合(楷書に近い字形)とがある。

【図版E】における一種と二種との間に見られる相違は三画目に認められる。

前掲 a の三画目(点線部)には直線的な中にも筆圧に微妙な変化が認められる。

それに対して、b の三画目には、a のような繊細な動きや直線的な強さは認められない。その相違は、筆の穂先がいかに機能しているかという点によるが、それは c・d の三画目においても同様である。c の三画目は紙面にくい込むような線質であるが、d では紙面(表面)をすべっているようである。全用例を通覧して、二種には a・c のような強さは見当たらない。

また、d の二画目(横画)も左払いの場合と同様に線に鋭さがなく、重く感じられる。そのような横画も【図版E】では一種には見当たらず、一種の横画は穂先のきいた線質である。

なお、以上の事例の他、「す」「ふ」「み」「ゆ」「手」、漢字の一部位「しん(しんによる)」「ま(さんずい)」「戈」<sup>(20)</sup> 等において、一種と二種との間に見られる相違点が顕著であった。

### 三

主に、線質、及びそれを生み出す運筆に注目し、伊予切一種と二種の書を比較検討した結果、一種では、筆の穂先の弾力を活かした線質が多く見られ、二種に比して洗練されているということが明らかとなった。また、一種の方が字形のバリエーションが豊富であり、表現も豊かであることが確認された。以上の考察結果によると両種に認められる差違は「時間の経過にともなう」変化によるという程度を超えていると思われる、別人の手になるものと考えられる。本書では先学による分類(一種・二種・三種)に従い、考察を進めたが、二種の中には、やや書き振りの異なる書が混在しているように思われ、その点については今後の課題とする。


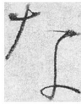
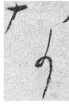


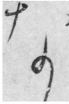



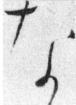




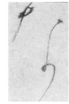


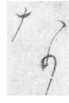
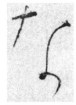
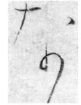



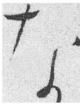
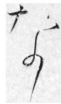
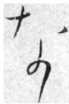


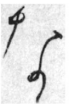
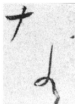
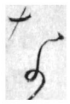
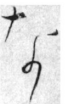
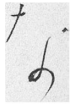

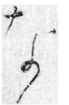

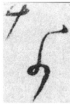
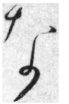

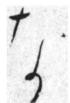
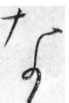
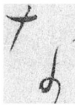
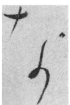

なお、伊予切三種の書写年代が「後世」であるのか、あるいは一種・二種と「同時代」かという点について、明らかにし得ない。が、伊予切三種に見られる433の次に位置する「よにふれはことのはしけきくれたけのうきふしことにくひすそなく」(巻下「竹」)は、山田孝雄氏により「後人の加筆にして、しかも尊圓親王以後のしわざなるべきなり」とされた和歌である。本歌が、伊予切と本文・書風の両面から極めて近い関係にある粘葉本にはみられないことから、その存在は異質である。従って、伊予切三種の書写年代は伊予切一種・二種より下るといえるのではなからうか。

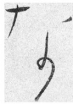


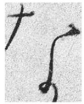
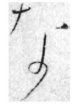

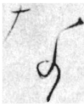
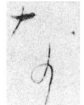
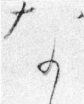


■ な

図版A

二種

な		
		
153	101-1	2
		
154	101-2	17
		
155-1	111	31
		
155-2	112	44
		
157	123	57-1
		
167	136	57-2
		
170	143	95

な		
		
326-2	285	238
		
332	294	239-1
		
333	299	239-2
		
336	300	251
		
337	314	265
		
355-1	316	280
		
355-2	326-1	283







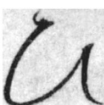
	
203	174-1
	
219	174-2
	
229-1	181
	
229-2	190
	
	191-2
	
	197
	
	198






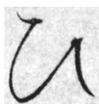









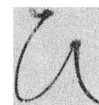
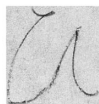
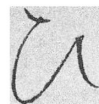
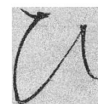


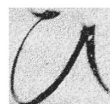
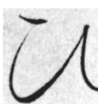
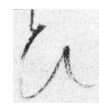

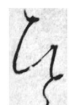
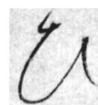
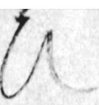
ひ		
44	25	3
49	31-1	7-1
62	31-2	7-2
72	32	15-1
73-1	33-1	15-2
73-2	33-2	16
74	33-3	17


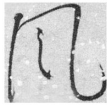




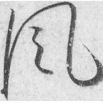
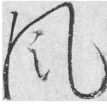






二種 図版B ひ

603	358
611-1	373
611-2	382-1
612-1	382-2
612-2	395
	396
	538

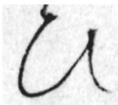


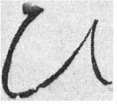
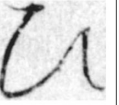

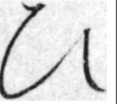





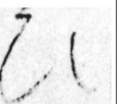


## 二種





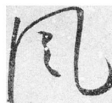

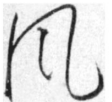







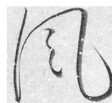



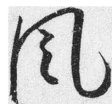

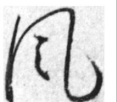


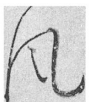
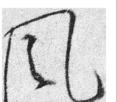
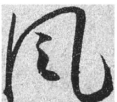

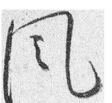
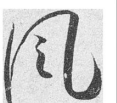


ひ

238-1

238-2

251

260

272

277

278













			
184	157-1	139	79
			
185	157-2	142	100
			
190	158	143	101
			
191	167	153-1	110
			
198	170	153-2	124
			
219	173	154	125
			
228	174	155	135

風	
	
29	2
	
39	5
	
43	10
	
50-1	13
	
50-2	18
	
55	21
	
66	24

二種  風

		
611	366-1	281
		
	366-2	294
		
	373	315
		
	386	316
		
	538	333
		
	539	351
		
	603	358




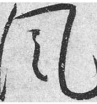
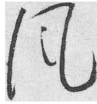
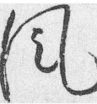


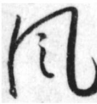
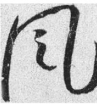
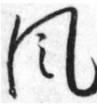
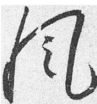
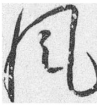
				
209	176	160	119	84
				
215	177	162	120	89
				
226	187	164	121	99
				
	192	168	129	105
				
	199	171	140	107
				
	200	172	150	109
				
	204	175	151	116

開	
 137	 1
 144	 4
 147	 11
 176	 23
 177	 83
	 92
	 106

二種

圖版D






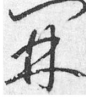


■開

風	
 349	 301
 363	 302
 377	 312
 530	 323
 535	 335
 591	 339
	 341

二種

二種 図版E 广

广	
 48 應	 (題)雁
 68 應	 2 度
 90 庾	 14 庭
 91 庾	 29 摩
 98 底	 30 摩
 102 塵	 39 序
 104 廟	 40 應

開	
 616	 261
	 267
	 295
	 354
	 362
	 394
	 607

二種



二種

广	
 309 庭	 250 唐
 316 雁	 252 庭
 325 雁	 254 磨
 329 床	 255 應
 331 底	 275 應
 333 鹿	 282 鹿
 349 底	 303 庭

 216 應	 147 底	 106 庾
 223 底	 152 度	 106 廬
 178 應	 108 廬	
 179 座	 113 磨	
 187 雁	 128 座	
 188 床	 134 底	
 214 應	 138 應	

## 注

- (1) 小松茂美氏監修・名兎耶明氏解説『日本名跡叢刊』55〔昭和56年 二玄社〕P 123
- (2) 詩歌番号、1〜235。以下同〔前掲〔注1〕〕に同。P 122。
- (3) 236〜396、529〜543の前部、589〜618〔前掲〔注1〕〕に同。P 122。
- (4) 397〜433、「433の次」、435〜528、543の後部〜588、619〜804〔前掲〔注1〕〕に同。P 122。
- (5) 小松茂美氏著『古筆学大成』第二三卷〔平成2年 講談社〕P 420・P 423〜425
- (6) 「工六丁乙」とは、529〜543の前部、589〜618。
- (7) 前掲〔注5〕に同。P 424
- (8) 前掲〔注1〕に同。P 123・124

		
591 應	391 磨	354 床
		
592 度	536 床	360 底
		
592 磨	536 底	364 應
		
613 唐	536 廬	374 庾
		
	541 應	378 應
		
	542 底	379 庭
		
	590 應	388 應

(9) 久曾神昇氏は、伊予切一種を藤原公経、二種を公経の「実子章綱」、三種を「養子盛経」の筆と推定され、「三人の寄合書」とされ  
た(久曾神昇氏「仮名占筆(二) 伊予切朗詠集」『汲古』第三十一号「平成9年 汲古書院」)。

(10) 小松茂美氏編『日本書道辞典』「昭和62年 二玄社」P 34

(11) 本調査は複製本「大正13年 倉田實氏」、及び小松茂美氏監修・名兒耶明氏解説『日本名跡叢刊』55・56「昭和56年 二玄社」による。

(12) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(藤原宏氏ほか編著『書写・書道用語辞典』「平成2年 第一法規」P 189)。

(13) いわゆる「連綿」が存する時は連綿線も含め切り抜いた。また、二文字が連綿しており、切り離せない場合は下に位置する文字もあわせて掲載した。

(14) 73には当該文字が二か所存する。先に位置する方を「73-1」とし、次を「73-2」として区別した。そのように一首中、当該文字が二か所以上存する場合は詩歌番号の次に数字を付し、その位置を示した。

(15) 一つの点画のうち、始筆と終筆の中間、つまり、筆の送りの部分をいう(前掲〔注12〕に同。P 202)。

(16) 一つ一つの点画の終りの部分、つまり、筆をぬいて収める部分のこと(前掲〔注12〕に同。P 140)。

(17) 直接には目に見えないが、画と画との間に実在すると思われる画を指す。「実画」に対する語(前掲〔注12〕に同。P 75)。

(18) 書き始めのこと(前掲〔注12〕に同。P 133)。

(19) 筆の勢い、筆の力すなわち筆力と同義で、運筆の勢いをいう(前掲〔注12〕に同。P 277)。

(20) 「我」・「惑」など、「乂」を有する漢字。

(21) 『新編国歌大観』に無く、無番号。433の次に位置することを意味する。

(22) 本歌は、伊予切の他、太田切・大内切・山城切にもあるが、その他の諸伝本には見られない。しかし、434「しくれふるおとはすれともくれたけのなとよとともいろいろかはらぬ」は諸伝本にはあるが、伊予切・太田切・大内切の三本には無い。この事象は、両歌のうちのいずれか一首が撰ばれたことによるのであろうか。なお、山城切に両歌が存するのは、「後世的な追補纂入のあと」(堀

- 部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 317 といえよう。
- (23) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫 676 倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P 15
- (24) 目録中、巻上「秋」に存する題「雁」。

## 第二節 伊予切の書 — 粘葉本との関係 — (一)

一

伊予切のもとには冊子本であったが、大正一三年(一九二四)に分断され、その際、伝来の地(伊予国(現在の愛媛県西条市))に因んで伊予切と命名された。<sup>①</sup>

粘葉本は完本であり、粘葉装という装丁方法により綴じられた冊子本である。

かつて、尾上柴舟氏は、伊予切と粘葉本とは「筆致がよく類似して」いるものの、「その時代も、書者も明らかにすることはできない。しかし、寛弘以後元永附近までの間の何人かの名手が、筆を揮つたものということは、いわれると思う」<sup>②</sup>とされた。また、春名好重氏も「同筆かと考えられるほど、字形・線・用筆・連綿などが同じようである」という見解を示された。

一方、安東聖空氏は、両本を「同手と見てよいと思う」<sup>③</sup>とされ、同一人物が「同一の和漢朗詠集を相当数多く書いたものと考えてもよいのではないか」と説かれた。<sup>④</sup>飯島春敬氏も、両本は「同筆」で、「後冷泉天皇の永承年間から堀河天皇の寛治年間(一〇四六—一〇八七)に能書として君臨した藤原公経」<sup>⑤</sup>の手になると提言され、伊予切の「書き方は、緊張している粘葉本に比して、さらに瀟洒で自由である」と評された。<sup>⑦</sup>

両本それぞれの生成過程を探る上で、殊に、安東聖空氏のご指摘(以下、安東説と呼称)は重要である。厳密には、書のみならず、本文に関する考察結果もあわせて論拠として示された上で結論付けられるべき内容かと思われるが、先学の研究では、両本の書と本文について、総合的なアプローチによる細微に亘つた事例報告は現段階では見当たらない。

両本はいかなる関係にあるのか。その点について改めて問うべく、本テーマにおいて根幹を成すとも言える用字と書の問題を取り上げ、再検討を試みた。<sup>⑨</sup>

本節における「伊予切」とはいわゆる「第一種」(1→235)を指す。<sup>⑩</sup>その旨、安東氏は触れられなかったが、その認識の下



の与件を満たすためには、用字の面(類似した字体・字形等の実態、及びそれらの使用頻度等)の精察に加え、「書」そのものへの分析的検証が不可欠である。

殊に、両本のごとく、「字体」が類似している場合は、「字形」等の吟味がより重要視されるべきであろう。

文字(漢字・仮名)を構成している点・画・線などの質、いわゆる「線質」が「字形」を生み出し、同時に余白も生み出すという観点も当然成立するはずである。各「線質」を当該文字におけるパーツのごとく捉え、その分析を試みるとともに、それらが、どのような太さ・長さであり、また、どのような位置にどのような角度で配されているのか等といった見極め、及び一行中の、各文字の位置関係による行の揺れ、行の傾き具合等に関する考察も網羅的になされるべきかと思われる。

かねてから、伊予切と粘葉本とは異なるという印象を拭えず、その識別を試みるべく、伊予切の書の実態について、粘葉本との関係を中心に考究したいという思いをもっていた。

繰り返し述べるが、両本は外形的にはたしかに似ている。そこに異論を差し挟む余地はない。しかし、線質(「字形」も含む)には異質性が内在しているのではないか。

如上のごとき仮説を立てて、今回、主に、(1)「用字」について考察を行い、また、(2)伊予切に見られる特徴的と思しき「線質」(「字形」も含む)に焦点を当てて比較検討を試みた。<sup>17)</sup> それに加え、(3)整然と配されているかのごとき文字の並び(一行中、各文字の位置関係による行の揺れ、行の傾き具合等)に関する考察も行った。<sup>18)</sup>

その結果、両本ではたしかに異質性を帯びており、さらに、伊予切の書の内容的価値は粘葉本に及ばないものと思われた。右記(3)については次節にて考察を行うこととし、本節では(1)・(2)について論じる。

### 三

以下、【事例B】・【事例C】は用字に関する調査結果である。また、【事例D】・【事例H】は用字に加え、書に関する考察

も行った結果である。両本間において、筆路がほぼ同様と判断される文字のうち、それらがそれぞれ同様な位置<sup>(19)</sup>に存しているケースを数えてみると、その文字数は次の通りである。

## 【事例B】

仮名	漢字				
	6	0	27	1060	2
			本文中の題	漢詩	和歌
					1632

右掲のうち、独特かと思しき事例を一部挙げると次の通りである。

## 【事例C】

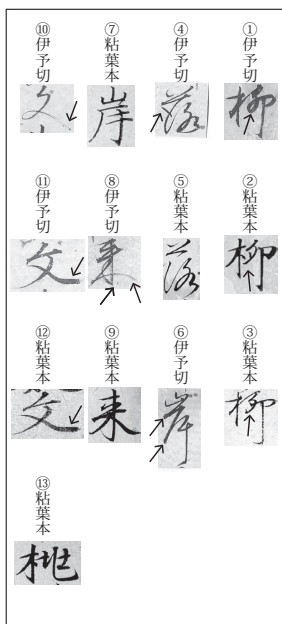
13伊予切	懐	粘葉本	懐	粘葉本	30伊予切	桶	粘葉本	桶	粘葉本
40伊予切	孝	粘葉本	孝	粘葉本	69伊予切	籠	粘葉本	籠	粘葉本
64伊予切	常	粘葉本	常	粘葉本	119伊予切	様	粘葉本	様	粘葉本
75伊予切	取	粘葉本	取	粘葉本	121伊予切	残	粘葉本	残	粘葉本
119伊予切	裁	粘葉本	裁	粘葉本	161伊予切	何	粘葉本	何	粘葉本
122伊予切	矣	粘葉本	矣	粘葉本	214伊予切	云	粘葉本	云	粘葉本



平安時代書写とされる諸伝本のうち、完本、及びある程度の分量を有するその他の七本<sup>(22)</sup>についても調査したが、右掲のごとき筆路を有する文字は全巻を通じて皆無であった。

しかし、その一方、両本間には次のごとき相違点も散見された。以下、それらうちのの一部について図版(適宜、矢印を付す。)を掲出し、当該箇所について、順次、指摘する。

【事例D】(①②③柳・④⑤落・⑥⑦岸・⑧⑨来・⑩⑪⑫文・⑬桃)



両本中、「柳」の崩し方は複数であるが、最終画が縦画であるのはそれぞれ十五例存する。木偏の右側に位置する部分(右掲①②③等の矢印部)に注目すると、伊予切では①のごとき筆路は十一例存していたが、粘葉本にそのタイプは見当たらなかった。

「落」では、右掲④に矢印で示した箇所の有無、及び草冠(「落」の上部)の次の運筆に注目すると、伊予切では④のタイプは四例存していたが、粘葉本には本考察範囲においてはそのタイプは見られず、いずれも⑤のごとくであった。

両本中、「岸」は六例存する。伊予切ではその全てにおいて右掲⑥のごとく、四画目の横画(矢印部)と五画目の左払い(矢印部)とが続けて書かれていたが、粘葉本ではそのタイプは一例のみであった。

両本中、「来」は十四例存する。最終画の右払いに注目すると、伊予切には払うタイプは見当たらなかったが（右掲⑧の矢印部等）、粘葉本には⑨のごとく払うタイプが四例存していた。また、撥ね方においても両本では相違していた。⑧の矢印部のごとく、次の画へと続けるケースが伊予切には半数程、存していた。その「撥ね」には勢いはあるものの、落ち着かなさが生じ、粘葉本の「撥ね」のごとき美しさはそこにはなかった。一方、粘葉本の「撥ね」には、内側の空間を包み込むかのごとく余韻さえ感じられた。

両本中、「文」は五例存する。右払いの終筆（前掲⑩⑪⑫等の矢印部）に注目する。伊予切ではそのうちの四例は⑩のごとく長く、残り一例は⑪であったが、いずれにおいても粘葉本に存していた冴えは伊予切からは感じられなかった。なお、粘葉本には⑩のタイプは見当たらなかった。

両本中、「桃」は七例存する。粘葉本ではそのうちの四例が⑬のタイプであったが、そのタイプの異体字は伊予切には見当たらなかった。

その他、以下のケースも見受けられた。「春」「月」にはいくつかの筆路があるが、そこで多用されたものの頻度が両本では異なっていた。

【事例E】（⑭⑮⑯春・⑰⑱⑲⑳月）



「春」の右払い（矢印部）に注目する。伊予切中、右下へ向けて払うタイプ（⑭の矢印部等）はわずか二例のみであった（その他は⑮のごとく止められているか、もしくは草書体であった）。それに対して、粘葉本では払うタイプ（⑰の矢印部等）

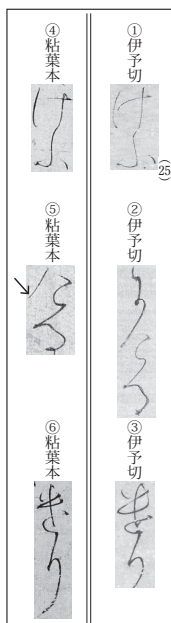
が三十例も存していた。粘葉本の当該箇所（右払い）には余韻が感じられたが、それは伊予切からは感受されず、伊予切には粘葉本のごとき筆圧の変化も見られなかった。<sup>(24)</sup>

「月」の二画目の「撥ね」に注目する。伊予切には次の画へ続けて書かれているケースと「撥ね」の後、穂先が紙面からいったん離れるケースとがある。前者のタイプ（⑬の矢印部等）は二十八例も存しており、後者のタイプ（⑭等）は七例のみであった。それに対して、粘葉本では両タイプが拮抗していた（前者のタイプが十七例、後者のタイプが十八例）。

伊予切では「撥ね」と次の画とが続けて書かれているケースが多く、それにより、流れ、勢いは生じる。しかし、粘葉本に存する切れ味のよさはそこにはなかった。

両本間における相違は仮名においても看取された。「け」「す」の音を表す仮名を取り上げ、紙幅の都合上、主に、用字の面について述べる。

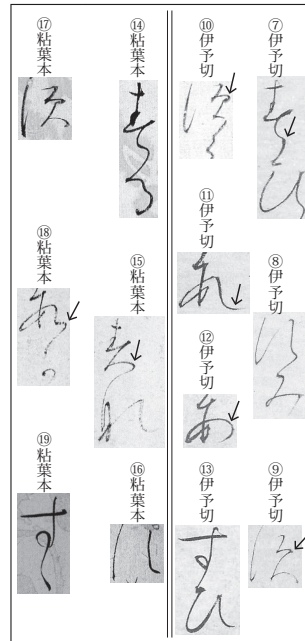
【事例F】（①④け・②⑤介・③⑥遣）



右掲のごとく、字母はそれぞれ一致していた。しかし、伊予切では「け」が多用されている（二十三例）のに対して、粘葉本では「介」が三十一例あり、優勢であった（なお、伊予切「介」十六例・「遣」五例、粘葉本「け」十二例・「遣」一例）。以下、「介」についてのみ述べる。伊予切では右掲②のごとく、上に位置する文字と「介」とが続けて書かれているケースが「介」のうち、半数以上（九例）が存していたが、粘葉本ではそのような続け字は三十一例のうち、九例しか見られなかった。また、⑤「介」の矢印部のごとく、一筆目が左下の方向へ向けて払われているかと思しき運筆が粘葉本では十七例存していたのに

対して、伊予切ではそのタイプは三例のみであった。

【事例G】(7)(14)(15)春・(8)(9)(10)(16)(17)須・(11)(12)(18)数・(13)(19)す

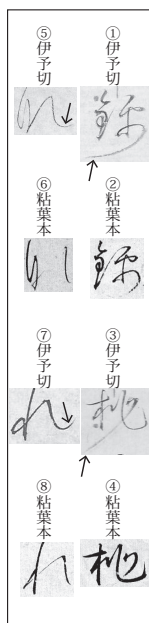


字母の一致、及びその頻度において両本間では共通性が認められた(伊予切「春」十九例・「須」十五例・「数」五例・「す」八例、粘葉本「春」二十例・「須」十四例・「数」二例・「す」十一例)。しかしながら、筆路は相違していた。「春」については伊予切では⑦のタイプのみであったが、「春」の下部(矢印部)に重きを置き、大別すると、粘葉本には⑮のタイプが三例存していた。

一方、「須」については、伊予切では⑧⑨⑩の三種が存していたが、粘葉本では二種(⑯⑰等)のタイプに限られていた。また、「数」についても、矢印部に注目すると、伊予切では二種に大別される(⑪一例・⑫四例)が、粘葉本中の「数」はわずか二例ではあるものの、⑱のタイプのみであった。

以下のごとき事例も注目される。細分すると、(前掲【事例B】において計上した事例の中にも)両本間では微妙なところに差異が生じていた。

## 【事例H】(1)②錦・③④桃・⑤⑥那・⑦⑧れ)



右掲①～⑧における最終画等の終筆に注目した。

右掲①②(「錦」)のごとく、回転後、左下の方向へ払うケースが七例存する。うち、四例が、伊予切では極端に長く、粘葉本にそのタイプは見当たらなかった。右掲③④(「桃」)のタイプは七例存するが、③の矢印部のごとき長さは粘葉本には見当たらなかった。

「那」(「な」の音を表す仮名)については、粘葉本に見られる草仮名(二例)を除くと、その他の終筆は全て右方へ向けて払われていた。伊予切では、右掲⑤の矢印部のごとき長さが散見されたが、粘葉本にそのタイプは見当たらなかった。なお、「れ」の当該箇所(矢印部)についても同様である。

如上の伊予切の当該箇所(①③⑤⑦の終筆部分)には勢いはある。しかし、徒に長く、また、線質は平板であった。一方、粘葉本では穂先が紙面に吸い込まれるのごとく、深みのある線質であった。

以上、両本間では、ほぼ同位置に同様な字体・字形を多数共有し、それらの中には特殊な事例も存しており、概ね近い関係にあるということが確認された。しかしながら、細分すると、両本中、いずれか一方にしか見られない筆路、多用される筆路が異なっていることも認められた。

また、伊予切では、長短、大小等の相対する要素を交えることにより、両両相俟って全体として動的ではあった。しかし、その反面、騒がしさの感も否めず、粘葉本と比較すると、それらは外面的に感じられた。粘葉本のごとき冴え、及びそれに伴う余韻は伊予切の線質からは感受されなかった。

伊予切と粘葉本の書における最大の相違は線質に内在する呼吸にあると考えられる。そこには運筆の際、筆圧がかけられたり、引き上げられたりする時に生じる「穂先のバネ(弾性)」の働き具合が深く関与しているが、その際、穂先が紙面に食い込んでいなければ穂先のバネを十分に活かすことはできないはずである。また、極言すれば、「書写者の伎倆はそこに端的に表れるという見方も可能」であろう。

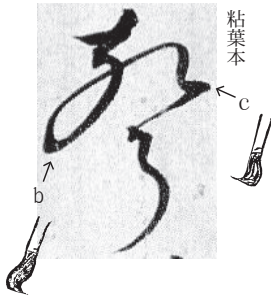
よって、以下述べる考察では、「穂先の(紙面への)食い込み」、及び「穂先のバネの働き」が求められると思しき文字に注目した。「穂先のバネ」とは筆で文字を書く際、穂先が紙面を突き、その後、元の状態に戻ろうとする、穂先のもつ弾力性を指す。運筆の際、押しついたり引いたりすることに伴う穂先の開閉は筆の毛の特性であるが、書写者の伎倆が加わることによって線に抑揚、呼吸等を与え得る。次章において頻出するため、はじめに、「穂先のバネ」に関する補足的説明を行いたく、伊予切・粘葉本から「聲」を掲出する。

【用例Ⅰ】 聲

伊予切



粘葉本



右掲の伊予切の矢印部b以降の線質には、粘葉本の当該箇所のごとく、厚みも張りも感じられない。そこには「穂先のバネの働き」、及び「穂先の食い込み」が関与しているのである。

伊予切では、矢印部bにおいて、筆圧がかけられた後、若干、穂先が引き上げられてはいるものの、穂先の食い込みが甘く、そのため、その後の線質は平板(28)なものとなった。

それに対して、粘葉本では、矢印部bにおいて、穂先が沈められ（イラストで穂先の状況を示した）、その直後、穂先は「バネ」を活かし、食い込んだ状態のまま、若干、引き上げられたことが窺われる。さらに、その後の矢印部cにおいて再度、筆圧がかげられ（穂先の状況をイラストで示した）、先程の場合同様、食い込んだ状態で、「バネ」を活かして次へ向けて送筆されている。【用例I】からも知られる通り、粘葉本の「筆圧がかげられた」状態、及び「引き上げがなされた」状態におけるその力加減の差違は微々たるものである。しかし、穂先のそこにおける働きは、その書の価値を決定づける程、重要な意味を持つと考えられる。

## 五

既述した「穂先のバネの働き」、「穂先の食い込み」が表れやすい文字を選定し、用字・書の両面に亘って具体的検討を行った。主に、漢字は「聲」、仮名は「者」・「那」を取り上げた。

両本の当該文字の全てを本節末尾【図版J】・【図版K】・【図版L】に載せる。本論ではそれらをタイプ別に分類した図版をそれぞれ【事例J】・【事例K】・【事例L】に一例ずつ掲出し、その下には当該図版をも含めた用例数を括弧内に挙げる。

ただし、手書きである以上、字形が一致することは当然のことながら皆無である。毛筆により書かれた線が交差した場合等は判別し難く、前述した「タイプ」とは、便宜的分類に拠らざるを得ない。しかし、本調査結果における事例数により、両本の書写者の文字の崩し方の傾向、当該文字使用上の現況は本調査により大方掴めるはずである。

用字に関する考察では、当該文字の筆路等の実態、及びそれらが用いられた頻度に注目した。

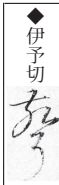
また、書については、主に、伊予切に見られる特徴的と思しき「線質」（「字形」も含む）に注目し、両本の比較検討を試み

た。伊予切の中の「要素」を抽出し、粘葉本との相違について論じるが、その際、適宜、いくつかの図版（矢印・補助線等を付す。）を選び、掲出する。

両本に存する「聲」は次の通りである。

【事例丁】聲

タイプ(1)



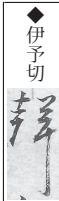
81(十一例)

◆粘葉本



67(十二例)

タイプ(2)



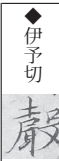
164(四例)

◆粘葉本



463(二例)<sup>30</sup>

タイプ(3)



134(一例)

◆粘葉本



620(一例)

タイプ(4)



213(二例)

◆粘葉本



213(二例)

タイプ(5)



45(二例)

◆粘葉本



45(二例)

タイプ(6)



702(二例)

◆粘葉本



702(二例)

タイプ(7)



128(二例)

◆粘葉本



128(二例)

タイプ(8)



215(二例)

◆粘葉本



215(二例)

タイプ(9)



222(二例)

◆伊予切



222(二例)



「タイプ(1)」が最多という点においては両本では一致していた。しかし、両本に共通するのは「タイプ(1)(2)(3)」の三種のみであった。

次に、書について述べる。

■タイプ(1) 点線部 a、及び矢印部 b・c・d・e・f・g について

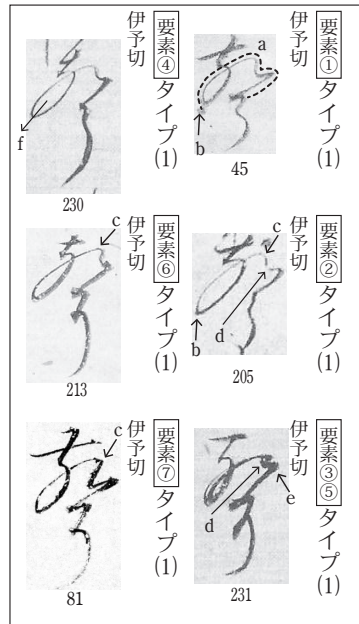
点線部 a では、左下から右上へ向かい、そこから下方へ向きが変えられた後、さらに右方へ若干移動し、その後、再度、左下の方へ向けて方向転換がなされており、穂先の進行方向は瞬時に四度にわたり変更されている。それらのポイント（方向転換がなされた箇所）を、便宜上、矢印部 b・c・d・e と称す。

伊予切点線部 a には不自然かと思しき箇所がいくつか見受けられた。殊に、矢印部 b・c・d・e において、穂先の食い込みが甘いケースが目立っていた。それは矢印部 b に関して言えば 45・81・84・128・193・213・230・231 等において顕著であった（要素①）。

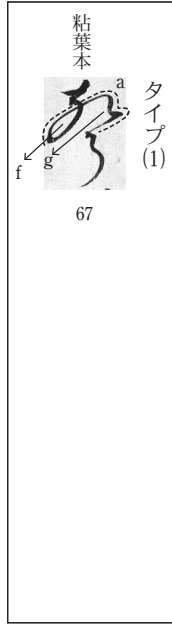
一方、伊予切 205・215・227 における矢印部 b はそれなりに自然な連筆であったが、矢印部 c 等では穂先が滑った感があり、その結果、矢印部 c と d の間の線質が平板になった（要素②）。

また、矢印部 d において穂先のバネが活かされなかったことに因ると思われるが、矢印部 d と e の間の筆致に注目すると、伊予切 215・231 等では技術的な面で精細さに欠けていた（要素③）。

さらに、矢印部 f の部分（余白）においても両本では相違していた。伊予切 230 は広く（要素④）、また、231 は狭く（要素⑤）、全体を通して安定感に欠けていた。また、それ以降の、矢印部 c の位置も、213・215 では高く（要素⑥）、81・128・231 では低く（要素⑦）、伊予切では不安定であった。



如上の要素のごとき未熟さは粘葉本には見当たらなかった。粘葉本では、点線部aはいずれの事例においても穂先のバネが活かされた弾力性のある線質であった。また、点線部aにより紙面上、びたりと支配された観を呈しており、矢印部f・gの空間的美しさも際立っていた。

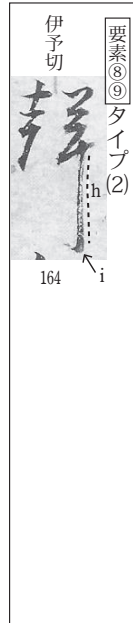


■伊予切「タイプ(2)」、及び粘葉本「タイプ(2)(4)(5)」における縦画(最終画)について

伊予切点線部hでは、筆圧をかけることに終始しているかのごとく、穂先が開いた状態のまま下方へ向けて筆が運ばれていた要素⑧。当該箇所は、伊予切ではいずれにおいても平板で、粘葉本の線質に存していた抑揚・緊張感は伊予切には殆ど見られなかった。

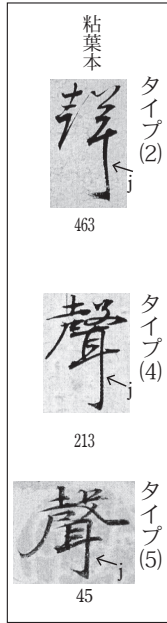
「撥ね」〔矢印部 i〕においても両本では相違していた。

伊予切ではいずれの事例においても穂先の食い込みが甘く、また、撥ねる方向も一定せず、安定性・美感を欠いている。  
 要素⑨。



如上の要素も粘葉本には見当たらない。粘葉本では、「中程」〔矢印部 j〕あたりで一瞬、僅か乍ら、穂先が引き上げられた後、徐々に圧がかけられており、また、その後、若干、引き上げられた後に撥ねる」という、微妙な筆圧の変化を伴った、しなやかで、かつ、のびやかな表現であった。

粘葉本では、撥ねの部分においても穂先のバネの働きが看取され、撥ね方・撥ねる方向においても安定的で、そこには規範とも言える美しさが認められた。






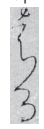

なお、他の漢字においても、如上の要素に通じると思しき事例はいくつか指摘し得る。

■「タイプ(1)」点線部 a、及び矢印部 b・c・d・e。 ■伊予切「タイプ(2)」、及び粘葉本「タイプ(2)(4)(5)」における縦画の項目において指摘した要素①②③④⑤⑥⑦、要素⑧⑨にそれぞれ通じるかと思しき要素を有する漢字には「露」・「落」・「柳」・「岸」・「来」・「中」等が挙げられる。

次に、仮名文字「者」について考察を行う。両本に存する「者」を前項同様、タイプ別に挙げると次の通りである。

タイプ(1)	◆粘葉本  124(二例)	タイプ(5)	◆伊予切  77①(五例)	◆粘葉本  229①(二例)
--------	--	--------	---	---

タイプ(2)	◆伊予切  3②(十例) <sup>31</sup>	◆粘葉本  31(五例)	タイプ(6)	◆伊予切  56①(二十四例)	◆粘葉本  8②(二例)
--------	---	---	--------	---	---

タイプ(3)	◆伊予切  149(十例)	◆粘葉本  7(二十四例)	その他 <sup>32</sup>	◆粘葉本  3①(二例)
--------	--	--	-------------------	---

タイプ(4)	◆伊予切  85(十例)	◆粘葉本  44(三十二例)
--------	---	---

右掲では、まず、連綿<sup>33</sup>に注目して分類した。いわゆる「形連」とは見做し得ない(実線による連綿が認められない)事例を「タイプ(1)~(2)」とし、そのうち、草仮名と思しきものを「タイプ(1)」とした。

「タイプ(3)~(6)」では、矢印部 a~d に注目し、四つのタイプに分類した。矢印部 a~d において、運筆の際、筆の穂先の動きが一瞬、停止された後、僅か乍ら、方向が変えられているものと、その他(当該箇所において殆ど穂先の停止がなされていない)とに、まずは二大別した(前者を「タイプ(3)」または「タイプ(4)」とし、後者を「タイプ(5)」または「タイプ(6)」

とした。)

さらに、それらを、**矢印部A**、**D**に注目し、二大別した。すなわち、当該箇所において、弧を描くかのごとく(「」のごとく)運筆されているケース(**矢印部A**・**C**)と、一瞬、停止された後、左下の方向へ向けて連綿がなされている(その連綿線は直線的ではないものの、「弧を描くかのごとき」曲線的とも言い難い)ケース(**矢印部B**・**D**)とに区別した(前者を「タイプ③」または「タイプ⑤」とし、後者を「タイプ④」または「タイプ⑥」とした。)

伊予切では「タイプ⑥」が優勢であったが、粘葉本では「タイプ⑥」は少なく、「タイプ③」と「タイプ④」とが拮抗していた。それに対して、伊予切にはこの両タイプは十例しか見られなかった。粘葉本に比して伊予切では、進行方向の変更回数が多い方(「タイプ③」・「タイプ④」)がそれぞれ劣勢であり、シンプルな方(「タイプ⑥」)が優勢であることが知られ、両本間には用字における違いが看取された。

次に、書について述べる。

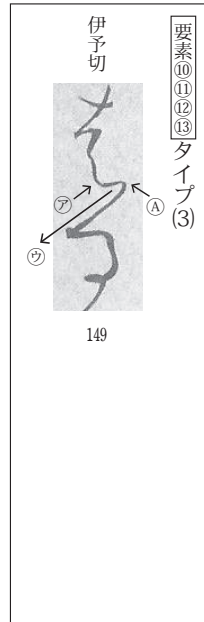
前項同様、伊予切では、以下の通り、不自然に思われる要素がいくつか見受けられた。

■「タイプ③」**矢印部⑦**・**⑧**・**⑨**・**A**について

伊予切**矢印部⑦**では穂先が滑っているかのごとく感じられた(要素⑩)。また、その後の運筆の方向が変わる辺り

(**矢印部A**の近辺)における筆遣いについても伊予切では「穂先の食い込み」が甘く、それ以降も平板な線質であった(要素⑪)。

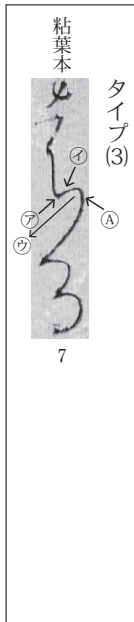
**矢印部⑨**の余白に注目すると、粘葉本のごとき広がりには伊予切にはなく、どことなく貧弱に感じられた(要素⑫)。また、伊予切3①・8・149①等では、次に位置する文字「る」のおさまりどころを決めかねているように見受けられた(要素⑬)。



一方、粘葉本[矢印部⑦]では、穂先が紙面に沈められ、そして[矢印部④]の辺りに向けてわずかながら引き上げられていた。若干、引き上げられながらも穂先は食い込んだ状態のまま、ゆったりと連筆されていた。連筆の方向が変わる辺り[矢印部⑧]の(近辺)には、きりりとした緊張感が漲っており、凛とした線質の中に、息が通った独特の律動が感受された。

粘葉本「タイプ(3)」には当該文字の下に「る」が存するケースが散見された。7・8①・28・36・73①・74・77①・79・86・111・132・143・149①・183等の、矢印部④の辺りから当該文字の下に位置する「る」へ向かう連綿線の距離について、伊予切より粘葉本の方が長く感じられた。

また、粘葉本では、[矢印部⑦]以降の墨跡により、豊かな空間[矢印部⑨]が創出され、次に位置する文字も美しく収められていた。

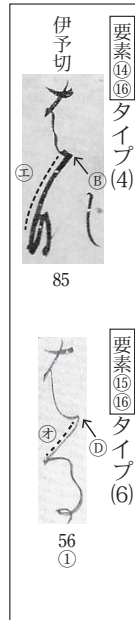


■ タイプ(4)(6) 矢印部⑧・⑩、及び点線部⑤・⑥について

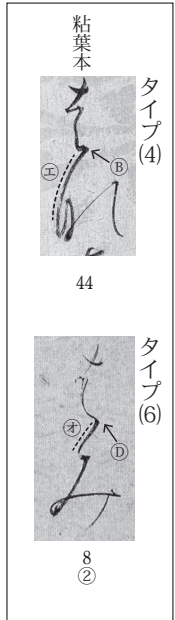
伊予切[矢印部⑧・⑩]の中には、「タイプ(4)」3③・85・232、「タイプ(6)」16②・28①・44のごとく、重くぎこちないもの(要素⑭)や、「タイプ(4)」3③・100・111・228・232、「タイプ(6)」16①・16②・28①・44・56①のごとく、穂先が浮いてしまっ

たかのごとき不安定なもの(要素15)も存していた。

また、「タイプ(4)」85・100・111・139・232、タイプ(6)16①・16②・26①・26②・28①・37・44・56①・58・62②・72・77②・124・143・183の伊予切(点線部⑤・⑥)では、書写者が筆圧をかけることに終始したかのごとき、単調で、平板な線質であった(要素16)。



一方、粘葉本(矢印部B)では、穂先が食い込んでいたが、それは、殊に、粘葉本「タイプ(4)」17・26①・26②・44・49①・56②・57①・62①・85・101・110・142①・142②・146・149②・165・173・174・203・228・232等の、(点線部⑤)のごとき反り方である場合に顕著に認められた。また、粘葉本の(点線部⑤)・⑥の線質には緊張感があり、そこには抑揚も感じられたが、それらの要素も伊予切には見当たらなかった。



■「タイプ(3)」(矢印部A・①・ウ・A) ■「タイプ(4)(6)」(矢印部B・D)及び(点線部⑤・⑥)の項目において指摘した要素(10)(11)(12)(13)に通じるかと思しき要素を有する仮名には「ち」等があり、要素(14)(15)(16)に通じるかと思しき要素を有する仮名には「ち」、「せ」、「世」等が挙げられる。

以上、用字の面については両本間に共通性が看取された。しかし、多用されたものには違いがあり、それに加え、粘葉本

のバリエーションも明らかとなった。次に、書の面においては、伊予切からはぎこちなさや弱々しさが感じられた。それは、直線的・曲線的部分のみならず、運筆上、進行方向が変更された辺り（転折箇所）において目立っていた。さらに、一文字中、ある部分を書き終えた後、次に穂先が向かう際、その次の位置が今一つ定まらず、バランスを失っていると一言ざるを得ない文字も存していた。

一方、粘葉本では、微妙な筆圧の加減により実現し得た弾力性と深みのある線により、精緻さ、沈着さともにしなやかさ、伸びやかさが表現されていた。一文字内の空間的広がり、紙面上、ぴたりと支配された定位感とが際立っていたが、そこに見られる美しさには普遍妥当性が感じられるのである。

## 六

以上の考察結果を纏めると次のように考えられる。

用字の面においては概言すると筆路がほぼ同様と判断される文字が多数存しており、それらの中には特異な事例も確認された。作品全体における文字数は膨大であり、どの位置にどのような筆路の文字が存しているのかという点につき、書写者がそれらの全てを記憶することは不可能に近い。よって、制作過程においてそれが成されるための「型」が存していた可能性が考えられる。

次に、書については、粘葉本の完成度の高さ<sup>35</sup>に比して伊予切には随所に生硬さが窺われた。老成された感がある粘葉本と間の力量の差は歴然と言わざるを得ない。

仮に、両本が同筆であるならば、伊予切は若書きの様相を呈していると推察され、両本の書写時期にはかなりの開きがあったと解することも出来なくはない。しかしながら、両本は別人の手になると解する方が蓋然性が高いように思われるのである。



また、前述したこと(1、「型」が存していた。2、両本が同筆の場合、両本の書写時期には一定の開きがあり、伊予切の方が若書きであった。)が事実であるとすれば、書写者は「型」を長年に亘って保管し、幾星霜を重ね、再度、それをもとに再現したことになる。粘葉本の書に達し得た人物が果たして若書きの再現を行うのであろうか。それが他者による要望・指示等であったとしても、また、この書風が、当代、数十年間、行われていたとしてもやはり、不可解な感は拭えない。

技術・表現力は年齢とともに磨かれていく。しかし、作品化に際しては先天的能力に因るところが大きい。それを前提とすると、粘葉本を書き上げる程のすぐれた天分の持ち主であれば、如何なる年代であったとしても伊予切において確認された未熟さは何らかの手法により回避し得たのではなからうか。

以下のことも考えられる。

書家に求められる技術・表現力と同等、もしくは、究極的にはそれ以上に重視されるべきは、作品に投影されるはずの個人の精神、美意識等であろう。また、その根本は生涯を通じて大きく変わることはないと思われる。

伊予切の、動的とも言える書き振りは「瀟洒で自由」にも映る。しかし、粘葉本と比較してみると、伊予切の多彩さは外面的とも言える。極論すれば騒がしささえ感じられる箇所も存しており、その点に限って言えば、真の動感とは似て非なると言わざるを得ない。

一方、粘葉本では、暢達さと沈着さとを併せ持ち、静寂の中にも筆力が感じられ、躍動の中にも緊張感があり、その点において伊予切との間には両極性が感じられる。

同一人物が書き振りを変えて表現することもあり得るが、両本間における相違はそれとは質的に異なり、書写者の内面性に起因すると思われるのである。

推測の域を出ないものの、両本は別人によって書かれた可能性が考えられる。また、書については伊予切は粘葉本を追従したところに位置するものと考え得る。

かねてから、機会がある度、美術館・博物館等において部分的に実見し、そこから抽出した両本中の特徴・「要素」を重点的に取り上げた。そこでの自身の記憶・感覚に由る所が大きく、その後の調査については図版に拠らざるを得なかった。今後も引き続き、実物に拠る実見を重ね、本私家・導き出した結論、並びにそこに至る過程について、繰り返し再検討を行っていく所存である。

## 注

- (1) 尾上柴舟・大石隆子氏解説『伝藤原行成筆御物倭漢朗詠集一』〔昭和43年 雄山閣〕P 2
- (2) 春名好重氏編著『古筆大辞典』〔昭和54年 淡交社〕P 814
- (3) 安東聖空氏著『かな古筆美の研究・御物粘葉本和漢朗詠篇』〔昭和60年 同朋舎〕P 14
- (4) 前掲(注3)に同。P 18
- (5) 『飯島春敬全集』第五卷〔昭和61年 書藝文化新社〕P 248
- (6) 飯島春敬氏解説・釈文『平安朝かな名蹟選集・第55卷』〔平成2年 書藝文化新社 解説の項。〕
- (7) 古谷稔・島谷弘幸両氏も、両本は「同筆」であると認定された(『日本名筆選』8〔平成23年 二玄社〕P 117・『日本名筆選』26〔平成6年 二玄社〕P 103)。
- (8) 堀部正二氏も、かつて、両本は「同一人の筆と考へられるものであって、運筆字形の上に於いて全く同一の部分も存して」おり、「本文に於いても全く同一系統であつて、他の凡ての諸本に比して著しく特色ある本文を保有してゐる善本である」と説かれた(同氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 20)。
- (9) 図版掲載の際、詩歌番号を載せることがあるが、その場合は各図版の上部、もしくは下部に示す。
- (10) 伊予切は、三者の手になるとされている(便宜上、第一種・二種・三種と呼称されている)。筆者は三者以上の存在の可能性もあ

り得ると考えているがその点については踏み込まず、従来の説に従った。

- (11) 本書(冒頭)中、述べた通り、①「目録」とは「題」(詩歌句群ごと)に部類分けされた各項目名の一覧のことであり、②「本文中の題」とは詩歌句群ごとに部類分けされた各項目名のことであるが、本節では①の題を「目録」と呼称し、③の題を「題」と呼称して区別する。

- (12) 各詩歌句の下方に小書きされた題詞・作者名、及び傍書等の書き込みは対象外とした。

- (13) 小松茂美氏監修・名児耶明氏解説『日本名跡叢刊』55・56「昭和56年二玄社」、古谷稔氏解説『日本名筆選』8「平成23年二玄社」。

- (14) 前掲(注3)に同。P 18

- (15) 現今においても、「字形」・「字体」などの用語が「錯綜―未整理のまゝで慣行せられて」(山田俊雄氏「漢文字形の史的研究の問題」とその一方「国語学」72「昭和43年3月」)いるように思われる。本節では「字形」は筆遣い等により生じる微妙な差異をも対象とされるべきであるという立場から「筆路」等とは区別して調査・考察を行った。

- (16) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(藤原宏氏ほか編『書写書道用語辞典』「平成2年第一法規」「線質」の項)。

- (17) パーソナルコンピュータを使用し、データ化した当該文字を切り取り、各文字の縦のサイズを揃えた。目視では判断がつかない場合は両本の画像を画面上で重ね、また、当該箇所(文字を構成している曲線・直線)の長さをソフト「曲線ものさし」に依って計測する等、適宜、いくつかの方法により比較検討を行った。

- (18) 根本訓央氏(茨城県警察本部刑事部科学捜査研究所)制作「文字位置計測ソフトVer.1.1」を使用。

- (19) 外形的類似の圏内にある文字。

- (20) 両本では料紙サイズも各文字の大きさも改行の箇所も異なる。「同様な位置」とは、物理的位置を指すのではなく、「当該詩歌句中、当該文字が何文字目辺りに位置するののか」という点に重きを置き、判断したものである。

- (21) たとえば、前掲【用例A】では、漢詩については「山・鳥・曙・雲・外・万・點・水・螢・秋・草」、和歌では「さ・つ・き・や・み・

お・ほ・つ・な・き・に・ほ・と・ゝ・き・く・な・る・こ・ゑ・い・と・ゝ・る・け・き」が挙げられる。前掲【事例B】では概略的關係を探ることを目的とするため、そのレベルを一つの基準としてカウントした。その際、畳字も類似性が認められる場合は文字の場合と同様にカウントの対象とし、虚画、及び連綿の有無については考慮の外とした。以下、同。

(22) 雲紙本・関戸本・久松切・卷子本・山城切・戊辰切・葦手本

(23) 一つ一つの点画の終りの部分、つまり、筆をぬいて収める部分のこと(前掲書(注15)「終筆」の項)。

(24) たとえば、「しんにょう」においても伊予切では終画の終筆を短めにおさえるケースが優勢であったが、粘葉本ではゆつたりと右方へ伸ばすケースが目立っていた。

(25) 既述した通り、当該文字と、その下に位置する文字とが続けて書かれている場合、当該文字の下に位置する文字もあわせて掲出した。以下、同。

(26) 図版⑨の矢印部では一瞬停止した後、穂先は左下の方向へ移動しているのに対して、図版⑩の矢印部では停止後、穂先はやや内側に入り、その後、左下へ向けて運筆されていると判断される。

(27) 穂先が紙から離れることなく(紙面上にありながら)、若干「引き上げられた」ケースのことであり、穂先が完全に紙面から離れた状態については当然のことながら、論外である。

(28) 「平板」とは「抑揚変化に乏しく面白くないこと。単調で趣がないこと。一本調子」(『日本国語大辞典』に拠る)。

(29) 別個の文字間に見られる特徴について、単純に同列に比較されるべきではない。しかしながら、筆が操られる際、技術的には別個の文字の中に、いくつかの共通の「要素」が存するという見方も成立し得ると考える。リスクを伴うが、あえて別個の文字間に見られる共通の「要素」にも注目した。

(30) 463・491の二例のみ。考察の対象外ではあるが、掲出する(「タイプ③」620・「タイプ⑥」702についても同)。

(31) 一首中、当該文字が二か所以上存する場合、詩歌番号の次に①②③等として表した。以下、同。

- (32) 剥落等により、当該箇所が不明瞭な場合は「その他」とせざるを得なかった。
- (33) 「連綿」とは二文字以上を続けて書すこと。「連綿」にはいわゆる「意連」(「点と線、文字と文字の間において、目に見えないが氣持のつながりが保たれていること」)「前掲書(注16)「連綿」・「意連」の項)も含まれるが、「意連」については考慮の外とした。
- (34) 「せ」・「世」とその下に位置する文字とが繋がっている事例のみが本項では該当する。
- (35) ただし、『日本名筆選』に拠ると、粘葉本 24・35・145・153・215・415・632 中、補訂されたかと思しき痕跡が確認される。その経緯・理由等について不可解に思われる。
- (36) 「若書き」とはいえ、両本程の調度品に染筆し得る年齢(書家としての活躍期)に達していた年齢のことを指す。

### 第三節 伊予切の書 — 粘葉本との関係 — (二)

一

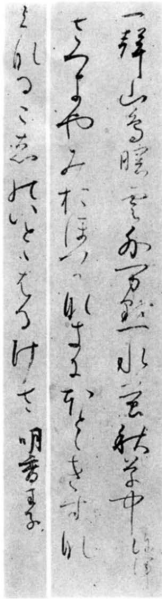
前節では伊予切と粘葉本との関係について、用字の問題に加え、各文字（漢字・仮名）を構成している点・画・線<sup>①</sup>における特徴的かと思しき線質<sup>②</sup>について考察を行った。本節では文字の位置関係、行の傾き具合、構成等に関する考察結果を示し、改めて両本の関係について論じる。

本節における伊予切とはいわゆる「第一種」(1~235)を指す。考察の対象は原則、本文に限り、題・注記、及び傍書等については対象外とした。本調査は『日本名跡叢刊』・『日本名筆選』に拠る<sup>③</sup>。

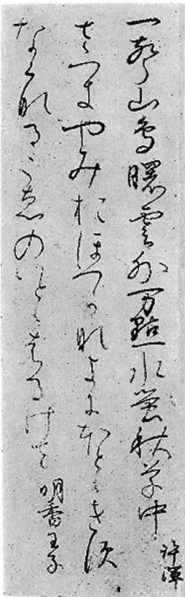
二

安東聖空氏は、次掲「1」・「2」を事例とし、伊予切について、「いかに粘葉本と近似の字体が多いかが明らかになる」と指摘された<sup>④</sup>。

#### ■伊予切「1」



#### ■粘葉本「2」



伊予切「1」の書は流麗に映る。しかし、その反面、粘葉本に比して弱々しさが感じられる節があり、各文字の形も幅が

狭く感じられる。一方、粘葉本「2」の一・二・三行目の下方においては、上下に位置する文字のうち、上に位置する文字の真下ではなく、稍々右方にその下の文字が位置しており、各行も僅かながら傾斜している。

それらが全般に亘って見受けられるのであれば、本課題の核心をなす要素を内包している可能性が考えられるが、その相違は目視では判別し難いほど微妙である。そこで、コンピュータを活用し、感覚的領域における差違について定量化を試みた。「文字位置計測ソフト Ver.1.1」（以下、ソフトと略称する）を使用し、主に、各文字の「矩形」、及び各行中、上下に位置する二文字の位置関係に注目し、その計測結果に基づき分析を試みた。

はじめに、当該ソフトの果たし得る機能について述べる。以下、著者が使用する用語も定義する。

ソフトでは、各文字の「矩形」、各行の姿（文字の並び・行の揺れ等）が視覚的に表示され、かつ、一行中、上下に位置する各二文字の「中心点」（相異なる二点）間の距離・角度の計測が可能である。

ソフト上、次掲「3」のごとく、各文字の墨の跡の上下左右における最も外側の箇所（四か所）を直線で結ぶ（その四か所の位置を見定めるのは著者の目視により行われる）ことにより当該文字は四角形で囲まれる。と同時に、そこには自動的に対角線が表れる。その四角形のことを「矩形」と呼称し、対角線により結ばれた点を「中心点」と呼称する。

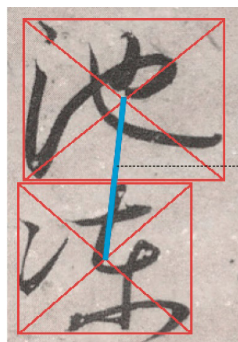
一行中、複数の文字は連なるため、たとえば、次掲「5」の三行目の行頭の一字目「池」の下には「凍」が存する。「凍」においても前述した「池」の場合と同様な作業を行う。それに伴い、「4」のごとく、中心点が結ばれる。「4」は、「5」の三行目の行頭へ一字目・二字目を抽出したものである。その作業を繰り返すことにより、各文字の矩形、及びそれぞれの中心点の軌跡が表れる。その一部を「5」に示す。なお、「6」のごとき線分表示（矩形・対角線を無表示とし、中心点の軌跡のみを実線で示す）も可能である。

「4」・「5」によると、一字目「池」の真下に「凍」はなく、また、「凍」の中心点の位置も「池」より稍々左へずれていることが確認される。

■伊予切〔3〕

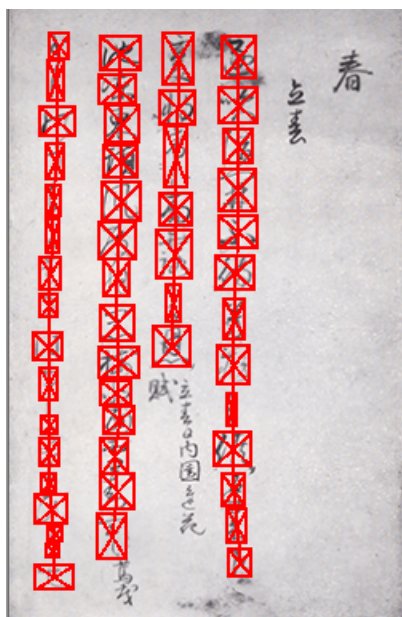


■伊予切〔4〕

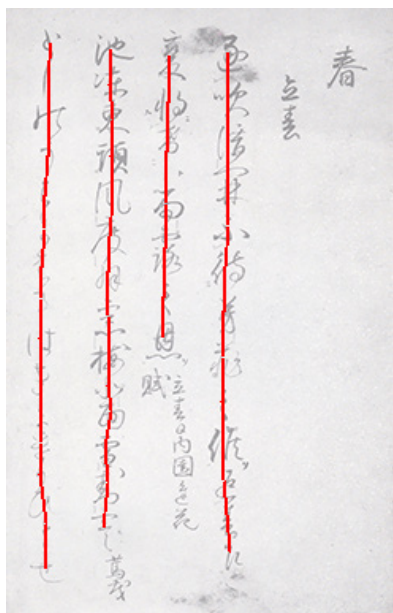


中心点を結んだ線

■伊予切〔5〕



■伊予切〔6〕





調査方法・手順等については以下の通りである。

まず、両本の図版をデータ化し、画像サイズの調整を行った。両本の縦の寸法を揃えるためであるが以下の手順により行った。

巻頭の佳句の一行目（伊予切」と粘葉本1の一行目「逐吹潜開不待芳菲之候迎春乍」の寸法（墨の跡（筆跡）が確認される最上部から最下部までの寸法）を揃えるべく、伊予切を基準とし、それに合わせて粘葉本を拡大した。さらに、それと同一比率とし、粘葉本のその他の図版の全てについてもコンピュータ上で拡大した。しかし、その寸法ではソフト上、画面に一首全体が収まらない。作業の効率化のため、画像の全てを一律に縮小し、寸法は（上下の余白も含め）縦33mmに調整した。ソフトにより出力される計測結果はそれに対する実寸で表示される。ただし、作業中、著者が目視している画像の寸法との間には差がある（著者目視の寸法はその三倍程度（縦100mm程）で表示される）。

上下に位置する各二文字間の距離・角度（上に位置する文字の中心点を基点とし、その下に位置する文字の中心点までの距離、及びその角度）を数値で表したものが次の【文字位置計測結果】（以下、【表】と略称する）である。紙幅の都合上、掲載の範囲は1〜30に限定した。

はじめに、【表】の各欄の見方、数字・数値の意味する事項等について説明する。

- ① 両本中、一首が二行に亘り書写されている場合は【表】においても二行とし、改行の位置も両本と同様に表した。
- ② 上段に示した各欄の番号は当該行の詩歌番号である。漢詩については和歌と区別するため当該欄を太枠で囲った。各詩歌番号の右の括弧内の左右の区別については、両本における見開きの面（両ページ）のうち、右・左のいずれかを意味する。
- ③ 右の列の各欄の数字は当該行における当該箇所を文字の位置によって示したものである。たとえば、最上段の「1-2」は、当該行における一字目と二字目の中心点間の距離（単位、mm）・角度（単位、度）を表す。
- ④ 各欄は二段（上・下段）に分け、「距離」を上段、「角度」を下段に示した。適宜、前者の項目を「A」、後者の項目を「B」

と称す。角度については上の文字の真下に次の文字が位置する場合は「0.00」と表示される。また、上の文字（の中心点）を基点とし、下の文字がそれより右に位置する場合は「+」、左に位置する場合は「-」で表示される。以下、前者を「プラス」、後者を「マイナス」と表記することもある。

前掲「5」の詩句三行目（行頭）の「池」・「凍」を例に取り、【表】中、数値の見方等について説明する。

【表】の上欄「2」（詩番号）、「1.2」（位置）の結ばれた欄が該当する。「池」と「凍」の中心点間の距離は「1.46」、角度は「-2.49」である。両字の中心点間の距離は1.46mmであり、角度は「池」を基点とし、左下方2.49度の位置に「凍」が存することを意味する。

矩形・線分表示による視覚化、中心点間の距離・角度の定量化により、その両面からの考察が可能となった。ただし、両本には続け字（字間を離さず、続けて書す場合）も混在する。また、剥落等については痕跡から判断するしかなく、著者の感覚に頼らざるを得ない点も実際にはある。その意味では精緻さに欠けるといふ前提の下、本データを活用する。そのような限界はあるものの、目視のみでは気付き得ない面が明らかとなり、大凡の特徴等は本データにより掴める。

【表】によると、両本間には主に六項目の相違が認められた。(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)とし、以下、その点について指摘する。

まず、【表】中、距離（「A」）の項目について述べる。

各行中、最も低い数値には●印を付し、最も高い数値には○印を付した。ただし、「未満については◆印を付した。

(1) 全四行中、両本間における同詩歌句を比較（二行に亘る場合は一行目、または二行目についても区別）し、●・○・

◆印の数を数えてみると（当該行中、同数値が複数存する場合、その数までは考慮しない）、●・◆印において伊予切の方が粘葉本より数値が高いのは一一か所である（両本、同数値…八か所）。一方、○印において伊予切の方が粘葉本より数値が低いのは一五か所である（両本、同数値…五か所）。



粘葉本

位置	16(左)		15(左)		14(左)		13(左)		12(左)		11(左)		10(左)		9(左)		8(右)		7(右)		6(右)		5(右)		4(右)		3(右)		2(右)		1(右)	
	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1		
1-2	A	152	185	0	171	121	177	0	210	0	194	165	171	0	165	153	146	0	158	0	177	158	152	127	0	165	0	172	146	146	184	177
	B	476	000	-212	0	601	000	-519	000	220	000	-220	000	-220	000	-713	000	229	205	229	239	000	000	000	-634	000	000	249	000	249	000	205
2-3	A	152	158	133	0	171	165	166	185	177	152	132	146	146	127	158	147	158	146	139	158	146	139	158	146	127	147	0	171	179	177	
	B	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	-249	-266	-229	-266	-229	-743	-229	000	-249	146	139	141	200	286	229	286	000	-813	000	
3-4	A	122	103	102	128	0	130	140	134	0	175	158	129	0	115	134	133	133	158	139	146	146	139	141	120	146	146	159	203	000	196	
	B	-897	-1062	713	893	381	-519	-813	409	175	409	1131	000	1131	000	634	-544	000	-229	280	497	273	146	153	152	146	497	713	000	-634	358	000
4-5	A	127	143	108	115	158	158	127	141	158	159	139	139	139	146	152	106	133	132	139	146	146	139	146	153	152	146	153	215	184	184	
	B	571	1250	337	-634	-229	-229	-571	777	777	000	000	000	000	-249	000	1735	273	476	000	000	000	000	000	000	000	000	-249	000	000	-249	000
5-6	A	139	138	153	139	152	141	141	138	138	137	160	159	160	159	165	123	123	165	165	177	147	147	147	147	147	147	147	147	147	147	147
	B	000	000	713	280	476	777	000	138	138	000	-609	-634	220	-1189	273	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
6-7	A	120	115	121	146	139	133	171	171	171	171	171	171	171	171	171	115	127	158	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
	B	000	-634	-601	-497	260	273	212	212	212	-395	743	249	212	212	634	571	-229	249	249	249	249	249	249	249	249	249	249	249	249	249	249
7-8	A	165	127	133	141	127	133	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
	B	220	-286	273	777	-571	273	000	000	000	000	-476	519	000	777	-246	519	440	212	519	440	212	519	440	212	519	440	212	519	440	212	519
8-9	A	165	146	127	165	159	133	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129
	B	-220	249	-286	-440	457	000	1131	000	000	000	000	000	000	000	273	000	273	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
9-10	A	158	146	159	121	139	146	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152
	B	229	249	684	601	-260	497	-239	497	-239	000	239	-273	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
10-11	A	146	166	114	158	171	146	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165
	B	-497	875	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	-239	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
11-12	A	134	143	127	114	121	152	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
	B	813	-1280	-571	318	601	476	497	497	497	249	000	-897	000	-813	000	-301	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
12-13	A	139	127	108	108	114	152	115	115	115	122	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
	B	000	571	000	671	318	-239	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634	634
13-14	A	089	127	085	102	108	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127
	B	000	286	000	713	337	000	-286	000	000	301	-286	000	-571	140	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127
14-15	A	108	114	111	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093	093
	B	671	000	1324	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209	1209
15-16	A	114	114	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101
	B	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
16-17	A	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133
	B	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
17-18	A	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18	17-18

【文字位置計測結果】



粘葉本

30(右)		29(左)		28(左)		27(左)		26(右)		24(右)		23(左)		21(左)		20(左)		19(左)		18(右)		17(右)		總字 數	
L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	L2	L1	位置 範圍	
A	179	171	171	165	134	132	158	152	146	127	115	146	158	171	184	152	146	165	146	158	146	158	178	1-2	
B	813	212	000	000	-544	000	229	-476	-249	-286	-634	249	229	212	365	-236	249	-220	-249	-229	409			1-2	
A	178	152	146	133	108	140	133	◆	141	134	152	165	165	152	◆	165	140	165	146	165	146	120	146	2-3	
B	-409	000	-497	000	337	-519	000	-381	-777	-544	239	440	220	-236	440	519	249	-440	000	-301	-249			2-3	
A	158	190	127	133	108	108	171	144	185	120	190	165	153	166	133	165	132	134	146	146				3-4	
B	229	-191	288	273	671	337	424	000	220	000	-191	-212	440	713	-638	-273	220	239	813	-497				3-4	
A	139	234	140	139	120	158	171	147	158	◆	114	146	158	139	146	171	165	152	152	133	152	160		4-5	
B	-260	155	519	-280	-301	229	212	-743	-229	000	-248	000	000	-497	212	220	000	476	476	-273	-476	909		4-5	
A	146	209	178	165	146	133	152	137	130	133	138	152	146	146	177	◆	127	127	127	127	123	123	158	5-6	
B	-249	174	409	440	000	000	000	1339	000	-273	280	000	000	497	205	286	-185	273	-497	1159	000			5-6	
A	196	209	171	139	132	152	140	134	146	121	127	127	171	159	184	140	134	146	177	123	120			6-7	
B	185	-347	-212	-280	000	000	-519	-544	497	-601	286	000	212	-457	197	519	544	000	000	-1159	-301			6-7	
A	190	210	177	147	171	185	153	158	120	152	138	171	159	171	165	152	139	159	115	115	127			7-8	
B	-191	519	205	743	424	220	713	-229	000	-239	-1078	-24	-409	457	424	220	-476	-280	-457	946	-286			7-8	
A	197	209	165	171	132	152	158	152	109	159	127	139	140	152	158	178	153	153	171	171	123	133		8-9	
B	533	000	-212	000	-239	000	476	-1001	171	134	457	260	519	000	229	409	713	000	-424	273	273			8-9	
A	178	215	165	152	108	165	146	114	000	146	140	152	127	127	127	127	127	152	152	146	146	120		9-10	
B	-409	-168	-220	000	337	000	249	000	000	-544	519	000	000	000	424	212	-476	-220	185	146	146	120		9-10	
A	165	147	152	139	139	127	127	133	132	146	120	177	152	152	152	152	152	152	135	155	159			10-11	
B	000	000	000	000	571	000	273	000	000	000	000	-239	000	-409	713	440	457	1078	457	1078	457			10-11	
A	171	134	108	159	139	139	121	102	120	111	127	154	146	146	133	◆	111	152	146	120	152			11-12	
B	-212	000	000	273	684	273	-897	286	-1030	713	-613	497	000	000	000	-634	260	-273	-286	273				11-12	
A	121	128	128	101	152	142	133	133	158	◆	074	◆	095	133	138	138	174	133	127	121	121	121			13-14
B	000	-601	-833	000	-476	-1030	713	229	1998	381	000	000	000	1049	000	000	000	000	-601	601				13-14	
A	127	101	103	000	159	127	146	096											106	101				14-15	
B	286	358	076	-1062	-684	120	101	-358											671	358				15-16	
A																									16-17
B																									17-18

【文字位置計劃結果】

なお、●印と◆印とを合わせると伊予切五二か所、粘葉本五一か所であり、○印は伊予切四九か所、粘葉本五五か所である。

(2) 粘葉本では◆印は一三か所であるが、そのうちの一か所(26(二行目))を除く全てが行末付近に存する。26(二行目)の方は踊り字であるため、その数値が低いことは自然なことである。一方、伊予切では行末付近以外にも◆印はいくつか存する。

(3) 一行中、それぞれ連なって位置する各三文字の中心点間の距離の差に注目した。<sup>(5)</sup>

その差が $0.5$ 以上であるのは伊予切では一四一か所、粘葉本では九一か所である。その差が $0.5$ 未満のものしか存しない行については伊予切の方が粘葉本より少なく(伊予切三行(三首)・粘葉本九行(七首))、それらはいずれも漢詩であることが確認された。

また、その差が $0.4$ 以上であるのは、伊予切では五八か所、粘葉本では三八か所であった。伊予切に見られるそれらの多くは●・◆・○印、及びその付近に存することも知られた。<sup>(6)</sup>

なお、その差について、数値の高い順に、伊予切 $1.07 \cdot 0.81 \cdot 0.76$ 、粘葉本 $0.70 \cdot 0.62 \cdot 0.58$ が挙げられる。

【表】中、角度(「B」)の項目については以下の通りである。

(4) 試みに、プラス、またはマイナス $10.00$ 以上の数値には■印を付し、 $5.00$ 以上( $10.00$ 未満)の数値には□印を付した。

■印は伊予切では四二か所、粘葉本では二五か所が確認された。

□印についても伊予切では一五八か所、粘葉本では一二〇か所であり、■・□印ともに伊予切の方が多いことが知られた。

(5) 【表】中、ひとつながりの複数の文字のうち、プラスとマイナスとがそれぞれ二回以上、交互に表れる箇所(数字の背景には着色を施した。伊予切では二六か所、粘葉本では一九か所)であり、伊予切の方に多く見受けられた。

(6) プラス、乃至、マイナスがそれぞれ連続する箇所にも注目した(当該箇所中、○○が含まれるものも連続する箇所と見做した)。

プラスの連続については【表】の各欄の数字の左側に、マイナスの連続については各欄の数字の右側(右側の欄との境界線上)に線を引き、その範囲を線の位置で示した。

それによると、マイナスが連続する最長は伊予切では四文字間、粘葉本では六文字間の事例であることが判った。二文字間の連続も含め、マイナスの当該箇所数を数えてみると、見開きの右面(右ページ)に見られるのは伊予切では八首(二四か所)のみであるのに対して粘葉本では二首(二五か所)が確認された。

一方、プラスについては伊予切では六文字間以上の連続が二首(二か所)であったが、粘葉本では一〇首(二一か所)であり、そのうちの九首(一〇か所)が左面(左ページ)に当たることが確認された。

以上の考察結果(1)・(2)・(3)を纏めると以下の通りである。

(1) 各行中、上下に位置する各二文字の中心点間の距離が「最長である箇所」、「最短である箇所」にそれぞれ注目した。両本間における同詩歌句(同行)中、粘葉本より伊予切の方が、最長である箇所はより長く、最短である箇所はより短い傾向にある。

(2) 粘葉本では、上下に位置する各二文字の中心点間の距離が短いものが行末付近に多く存する。

(3) 各行中、それぞれ連なって位置する各三文字の中心点間の距離の差が粘葉本より伊予切の方が大きいものが目立っている。伊予切における各三文字の中心点間の距離の差が大きいのは、各二文字の中心点間の距離が一行中、最長である箇所、最短である箇所、及びその付近に多く見られた。

ここから、同行中、粘葉本よりも伊予切の方が各二文字の中心点間の距離に差があり、また、その差の大きいものが近いところに位置していることが多いという点を指摘し得る。



また、前述した考察結果(4)・(5)・(6)については以下の通りである。

一行中、各上下に位置する文字のうち、上に位置する文字の中心点を基点とし、そこから真下へ向かう直線を引くならば、以下、続く文字の中心点が大凡その直線上に位置するのか、または、それより右下方、左下方に位置するのかという点を設定し、各二点間の角度について比較検討を行った。その結果が次の三項目である。

(4) 伊予切の方が粘葉本より角度大のケースが多い。

(5) 一行中、上下に位置するひとつながりの複数の文字が交互に右下方、左下方に複数回に亘って揺れる頻度も伊予切の方が高い。

(6) 各行における行頭の文字と行末の文字の中心点を仮に結んでみると、粘葉本ではその線は傾斜する傾向にある。粘葉本の紙面の上から下へ文字を書き進めていく上で生じる行の流れとしては、微妙な位置関係ではあるものの、見開きの右面(右ページ)の行は左下方へ向かい、左面(左ページ)の行は右下方へ向かう傾向にある。見開きの面のその姿を何かに譬えるならば扇形が連想されるが、伊予切にその特徴は見当たらない。

### 三

仮に、全てが活字であるならば、前述した事項の要因は配字の問題に止まるといえる。しかし、実際は手書きによる。既に、前節中、述べた通り、伊予切の文字の矩形は多様である。伊予切では漢字の最終画・仮名の最終部分<sup>7)</sup>が長目であることが多く、また、縦長の字形も多い。それが前述した両本間に見られる相違に深く関わるということは言うまでもない。

その姿容が美に根差し、かつ、両本が技能的に同等であるならば、両本が同筆である可能性は当然のことながらあり得る。しかし、伊予切の書はその与件を満たしていないとはいえないか。

その観点に立ち、伊予切の「最終画・最終部分が長目」である文字、「縦長の字形」を有する文字を中心に、適宜、前掲【表】

における考察結果も踏まえ、両本間に見られる相違箇所の実態について述べる。事例として「7」・「8」を挙げる。

まず、伊予切に見られる「最終画・最終部分が長目である」事例について述べる。11「岸」(四字目)・「柳」(六字目)が挙げられる。伊予切の当該箇所(縦画)は長い。11「岸」(四字目)の当該箇所(縦画)は傾き、強い調子である。それに対して、同行中、11「之」は小振りに書かれ、異質的である。11「遅」・「速」についても、それぞれが縦に伸びたことにより下に続く四文字が詰まったかのごとく感じられ、11「之」・「遅速」は「岸」・「柳」を活かし得ていないと見られる。また、11「岸」(二・四字目)・「柳」の右の行(10の上部)では文字が窮屈に並び、当該行とそぐわないのではなからうか。

一方、粘葉本の11「岸」(二・四字目)・「柳」の下に位置する「西」・「之」・「遅速」では幅広の字形が採用され、また、右の行(10の上部)とのバランスも保たれ、品よく収まり、行としての安定感もある。

粘葉本の11「岸」(二・四字目)・「柳」・「之」・「遅速」の最終画の線質には深みを感じられるが、伊予切の当該箇所においては平板であり、また、どこことなく落ち着かなさを覚える。

その他、9「低」・12「脱」・14「変」等の最終画、15「ひ」(八字目)・「那」の最終部分等が伊予切では長目に書かれている点も注目される。

【表】(「B」)に拠ると、伊予切では、いずれもその上に位置する文字の真下に当該文字はなく、右下方にずれていることが確認される(「低」7.43・「脱」9.46・「変」4.40・「ひ」12.53・「那」5.19)。

当該文字の最終画等におけるそれぞれの線質にも粘葉本のごとき緊張感はなく、また、文字の重心が右へずれたことにより、行も揺らぎ、まとまりを欠く結果となった。

当該文字のうち、粘葉本12「脱」・14「変」の最終画も長目に書かれている。しかし、それらの画は余白を活かし、効果的に働いている。

【表】(「B」)に拠ると、粘葉本においてもその上に位置する文字の真下に当該文字が存しないことが確認される。9「低」

では左下方（1・5・19）、12「脱」・14「変」・15「ひ」（八字目）・15「那」は右下方（脱）6・34・「変」4・57・「ひ」7・77・「那」13・24）に位置する。当該文字の上に位置する文字に対して、（見開き）右の面（右ページ）の9「低」は左下方に、左の面（左ページ）の文字は右下方に配されている点に関しては後述する通り、粘葉本の独自性の一端と解し得る。

次に、伊予切に見られる「縦長の字形」を有する文字に焦点を当てて考察した結果について述べる。

次掲「7」の13では一字目「氣」・二字目「霽」・三字目「風」が挙げられるが、【表】（A）に拠ると、中心点間における「氣」と「霽」の距離は伊予切では2・22、粘葉本では2・10であり、「霽」と「風」の距離は伊予切では1・53、粘葉本では1・08である。その崩し方の場合、本来、縦長の字形ではある。しかし、伊予切ではいずれもそれ以上に縦に伸びたという感は否めない。僅かな違いではあるが、少し抑えられるべきではなかったか。「霽」と「風」との間が詰まったこともあり、「氣」と「霽」との間は実際より広く感じられる。伊予切では、同行の中段に位置する「柳」・「髪」・「氷」・「消」・「浪」等のそれぞれの字間、及びそれらの各文字の縦の長さを詰めざるを得なくなったものと見られる。

当該箇所（13「氣霽風」）に隣接する左右の行の三文字（12「紫塵嬾」・14「庭増氣」）とのそれぞれの関係も伊予切ではバランスを失したかと思われる。

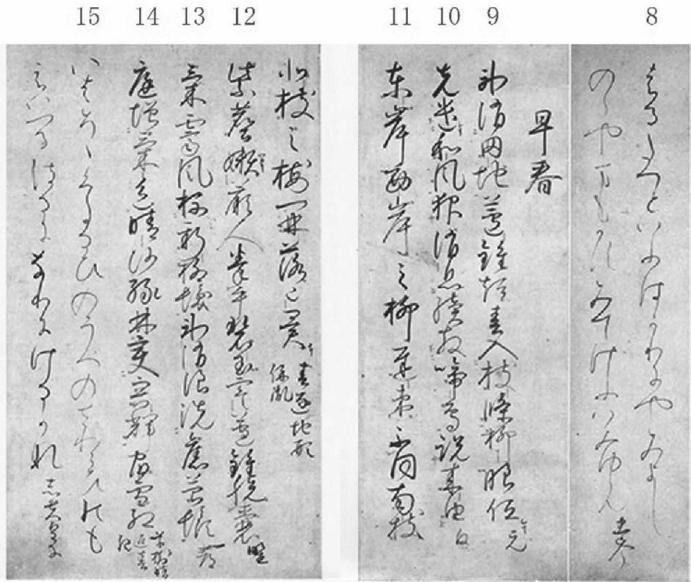
【表】（B）から、伊予切14の行の揺れが顕著であることが窺われるが、それは13の不安定感が招いた結果とも取れる。

また、伊予切では12「人」・13「柳」の右上に位置する）が13に接近しており、さらに13の中段「柳髪氷消浪」と12（右の行）との間（行間）が狭いことに比して左方の14と15との間は広い。その辺りについても統一感に欠けると言わざるを得ない。

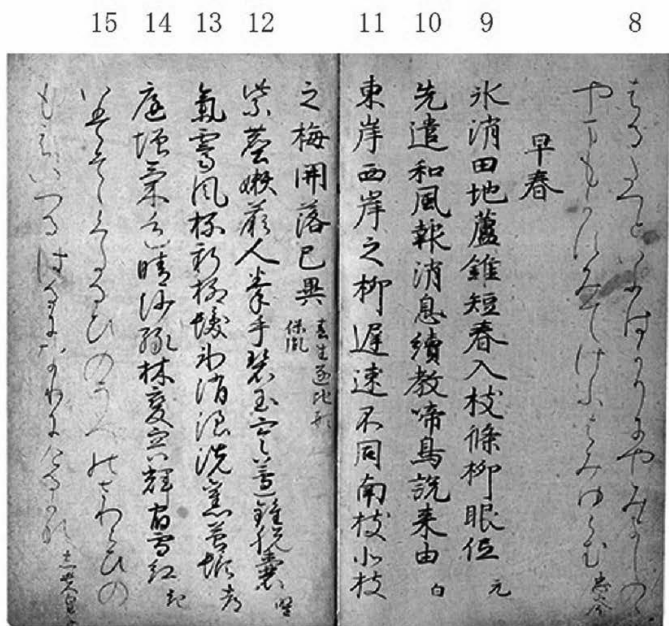
如上のような要素は全巻を通して粘葉本には見当たらなかった。

粘葉本では、当該箇所13「氣」は14「氣」と崩し方を変えながらも紙面中、安定感をもって溶け込んでおり、また、「霽」・「風」とのバランスを保ちながらそれらに隣接する12（右の行）、14（左の行）との調和も図られたのであろう。

■伊予切「7」



■粘葉本「8」



13 の中程「柳」・「髪」・「氷」・「消」・「浪」の中心点間の距離について、【表】(A)に拠ると、粘葉本では、1.33・1.33・1.33・1.46であり、伊予切の場合(1.33・1.20・1.20・1.20・1.20)と然程変わらない。しかし、粘葉本では各文字の内部の空間が広く、また、

線の太い箇所（髪）の左側の部分、「消」・「洗」の右側の部分）からも豊潤さが感受された。それにより「浪」等の細く書かれた文字が際立つのである。

また、粘葉本のその下に位置する「洗」は紙面中、右へ寄せ過ぎず、適度な位置に配されている。左下方へ向けて書かれた八画目（左払い）は強く、当該行の右方への流れを抑えた。当該文字の力強く書かれたその書き振りは同行中、一字目「氣」・二字目「霽」とも照応し、当該行・紙面における「洗」の要としての役目が果たされたかのごとく感じられる。

最後に粘葉本に見られる独特な表現かと思われる点について論じる。

既述した通り、粘葉本の行末には二文字の中心点間の距離が短い箇所がある。【表】（A）に拠ると、12～15の行末（四文字）の距離は一か所（15の末尾）のみ、伊予切の方が短く、また、うち、二か所（12・14）では両本は同数値である。その三か所の他は粘葉本の方が短いことが窺われる。

粘葉本の行末では、各文字が一纏まりとなり、独特の存在感を醸し出す。それらは表現の一つと解され、前述した伊予切の字間の狭さ等とは質的に異なるのではなからうか。以下、述べる粘葉本の構成はそのことと密接な関係にあると考えられる。

前掲「8」に拠ると、紙面の上方から下方へ文字が書き進められていく上で生じる行の流れとしては、粘葉本では9～11（二行目）の行は左下方へ向かい、一方、11（二行目）～15は右下方へ向かう傾向にある。粘葉本にはこのように見開き一面があたかも扇形のごとく構成されている箇所が存する。当該面（見開き）全体が引き締められ、微妙な行の傾き、うねりによって行と行とが響き合う。その場合、前述したごとく、各行末の文字を小振りに纏めることはその効果を高める。限られた紙面に動感を表現し得た一つの見事な手法と見てよいのではないかと考える。

漢字の最終画・仮名の最終部分において長目の文字が伊予切では多く見受けられ、また、縦長の字形も散見される。長目の縦画が傾けられることもあり、動きも大きく、一見「瀟洒で自由」<sup>8)</sup>にも映る。しかし、強調された画・部分の練質が粘

葉本に比して平板であることに加え、当該行・当該面においてそれらが活かされず、その結果、行も揺らぎ、当該行と隣接する左右の行との不調和、当該文字と上下に位置する文字との不調和が生じた感は否めない。

粘葉本の矩形は伊予切のごとく多様ではない。しかし、粘葉本では各文字の内部の空間が広く、深みのある線質による豊潤さ、線の太細等による変化が看取された。一行中、要となる文字と周辺に位置する字形との照応、その取り合わせ、兼ね合い等が相俟って、過不足無く、伸びやかに表現されている。また、粘葉本では行末付近の字間を詰め、行のうねりを作り、紙面上、その一群によって動感を表現したといえるのではなからうか。

#### 四

以上、文字の「中心点」・「矩形」について定義し、その基準に基づき調査を行った。その結果、両本間では、同行中、文字の中心点間の距離の差が伊予切の方が粘葉本より大きい傾向にあり、また、一行中、上下に位置する文字の並びにおいても相違していることが確認された。粘葉本より伊予切の方が、上下に位置する文字の中心点が左右に揺れる頻度が高く、また、その角度大の事例が散見された。

次に、伊予切の方が最終画・最終部分が長目の文字、及び縦長の字形が多いということがその要因に挙げられるという推測の下、両本間に見られる相違の実態について美的見地から考察を行った。伊予切の書は、下方への動き、右方への動きが大きく、結果的に同行中のその他の文字が小振りとなり、行間も詰められた。しかしながら、それらの要素が調和しておらず、むしろ不安定に感じられる箇所も見受けられた。

一方、粘葉本の矩形には伊予切のごとき多様性は見られなかった。しかし、その線質（字形も含む）により、変化のみならず統一感も図られ、伸びやかさが際立っていた。伊予切の行の揺らぎ、傾斜等から美的意図は感じられなかったが、粘葉本の見開きの構成には独自の美しさが看取された。本稿ではその姿（紙面の上から下へ文字を書き進めていく上で生じる行

の流れ)を扇形に譬えた。行末付近の字間を詰め、複数の文字を纏め、行頭付近を大きく見せることにより、整然とした中にも空間的広がりや躍動感を作品に与え、余白の美をも創出したのではないか。

いくつかの文字の姿・形が連なり、各行は形作られている。各行の集合体によって当該面が構成されている本作品において、各線質によって成り立つ書の一文字一文字、各文字の位置関係による行の揺れ・傾き具合、構成面は一体化しており、それらを切り放して考えることはできない。

書写者本人にとって無意識的に滲み出る類のものもあり、その境界には曖昧なところも実際にはある。しかし、書写者本来の文字造形上の美的感覚によって両本が作り上げられていることは確かである。

粘葉本においては、書写者の志向する美的な一行の姿、各行の集合体の姿、紙面構成が具現化されるための字形(線質も含む)が書写者の主体性によって選択されたと考えられる。

それに対して、伊予切では、書写者の意識・関心は各字形にのみ向けられた感が否めない。中には騒がしく感じられる箇所も存しており、粘葉本のごとき動感、統一感伊予切には見られず、粘葉本と比較すると未熟と言わざるを得ない点が確認された。

粘葉本の書の一筆一筆には気品があり、伸びやかさがある。伊予切に存する不安定さはなく、迷いはなく、確信に満ちたものが感じられた。

同一人物による表現の違いと取るには無理があり、両本は別人の手になる可能性の方が高いと考えられる。

通説では、近衛本・法輪寺切の書も「粘葉本・伊予切と同筆、もしくは同書風」という位置付けがなされており、その四本の書の関係について曖昧模糊たるものがある。四本は当代を代表する名筆とされている。書の神髄を探る上でも、また、『和漢朗詠集』の本文を研究する上でも四本間に存する違いを追求する試みは今後取り組むべき重要な課題である。以上述べた私案をもとに引き続き調査・研究を行う所存である。

## 注

- (1) 「漢字を構成する各線で、一筆で書かれるもの」(藤原宏氏ほか編『書写書道用語辞典』[平成2年 第一法規] P 34)。  
 (2) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(前掲〔注1〕に同。P 189)。  
 (3) 古谷稔氏解説『日本名筆選』8 [平成23年 二玄社]・小松茂美氏監修・名児耶明氏解説『日本名跡叢刊』55・56 [昭和56年 二玄社]  
 (4) 尾上柴舟・大石隆子氏解説『伝藤原行成筆御物倭漢朗詠集一』[昭和43年 雄山閣] P 2  
 (5) 『日本名筆選』8 (前掲〔注3〕)に掲載の図版を目視により確認した結果、本項の基準を「0.3」・「0.4」とすることが適切であると判断した。  
 (6) そこに該当しないのは伊予切では漢詩二か所・和歌六か所、粘葉本では漢詩四か所・和歌一〇か所。  
 (7) 画は漢字にのみ用いられる用語であるため、仮名のことを指す場合は「部分」と称した。  
 (8) 飯島春敬氏解説・釈文『平安朝かな名蹟選集』第55巻 [平成2年 書藝文化新社] P 64  
 (9) 小松茂美氏監修・名児耶明氏解説『日本名跡叢刊』55 [昭和56年 二玄社]の解説(P 124)等。

## 【追記】

本稿中、使用した「文字位置計測ソフト<sup>ver.1.1</sup>」は根本訓史氏(茨城県警察本部刑事部科学捜査研究所)によって制作された。著者の発案をもとに同氏に開発して頂いた。同氏、並びに同研究所には謹んで感謝申し上げます。



#### 第四節 近衛本の性格 — 粘葉本・伊予切との関係を中心に —

一

近衛本は巻下の零本二卷（現在、陽明文庫所蔵）が近衛家（五撰家の筆頭）に伝来したことからその名がある。巻上については藤田美術館所蔵の断簡一葉のみ（春部「霞」の六行分）が現存している。それにより「もとは上・下巻完存の調度手本として書写されたもの」と考えられている<sup>(1)</sup>。

近衛本の本文に関する先行研究には、堀部正二氏による論が挙げられる。同氏は、平安時代書写とされる諸伝本を、主に、本文の近似関係より三大別され、近衛本を、粘葉本・伊予切・法輪寺切と「同一人の筆と考へられるものであって」、「本文に於いても全く同一系統」であると説かれた。

また、片桐洋一氏も、「粘葉本と近衛本の本文は微細な点まで一致」、「全く相似」しており、「同筆と断定するにはばかられるものは全くないと思ふのである」と述べられた<sup>(2)</sup>。

如上のご論に扱われなかつた若干の資料を調査し得たことから、改めて平安時代書写諸伝本における近衛本の位置付けを試みた。その結果、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と同類ではあるものの、その中においてはやや異なる様相を呈しているという結論に達した。それらの伝本との関係を中心に近衛本の性格について述べる。

二

近衛本の現存状況について述べる。『古筆学大成』第一三巻には零本二卷・断簡三葉が収められている。それらに巻上の断簡一葉も合わせ、調査し得た詩歌句を番号で示す。

以下、零本（二卷）をそれぞれA・Bとし、断簡（四葉）をC・D・E・Fと仮称する。なお、左掲A・B・Eには紙継ぎ

の跡が認められる。その位置を「」で示す。

近衛本の現存状況について述べる。『古筆学大成』第一三巻には零本二巻・断簡三葉が収められている。それらに巻上の断簡一葉も合わせ、調査し得た詩歌句を番号で示すと次の通りとなる。以下、零本二巻をそれぞれA・Bとし、断簡四葉をC・D・E・Fと仮称する。なお、左掲A・B・Eには紙継ぎの跡が認められる。その位置を「」で示す。

◆零本(二巻)〔陽明文庫蔵〕

A 「鶴」(題)・443〜527・「古京」(題)／532〜612

B 「眺望」(題)・624〜648／「庚申」(題)・650〜660の前部／「親王」(題)・666〜677<sup>7)</sup>・679〜698・700〜720／「老人」(題)・723〜749  
 ／「述懐」(題)・751〜784・786〜796の次<sup>8)</sup>・803

◆断簡(四葉)

C 76〜78 「藤田美術館蔵」

D 「閑居」(題)・613 「個人蔵」

E 750／649 「春敬記念書道文庫蔵」

F 660の後部〜664 「昭和古筆名鑑」所載」

右掲A〜Fと、諸伝本の詩歌句とを照合すると、「断簡D・E・F」の原姿(切り出される前の位置)は次のようであった可能性が考えられる。

①「断簡D」は「零本A」の末尾(612の次)に位置していた。

②「断簡E」中の750・649<sup>9)</sup>はそれぞれ「零本B」中の749・648の次に位置していた。

③「断簡F」中の「660の後部」は「零本B」中の「660の前部」の直後の部分にあたる<sup>10)</sup>。従って、「断簡F」は「零本B」の当該箇所から切り出されたことが推測される。

以上、近衛本の詩歌句を集成し、詩歌番号順に排列し直すと総計三四一首となる（76〜78・443〜527・532〜613・624〜664・666  
 ↓ 677・679〜698・700〜720・723〜784・786〜796の次↓803）。

以下、76〜78・443〜804の範囲内に限定し、考察を行う。そのうち、528〜531・614〜623・665・721・722については（近衛本の散逸箇所である可能性が考えられるため）対象外とする。

三

まず、形態的な面から近衛本と諸伝本との関係について考察を行う。

本稿の考察範囲内において平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると三四八首となる。そのうち、いずれかの伝本に無い詩歌句は次の五六首である。

449・459・468・472・476・482・489・507・518・534・535・542・547・549・551・556・561・564・584・596・598・601・603・629・636・652の次・  
 657・663・677・678・684・699・701・703・712・714・729・735の次・736の次・738・739・740・741・742・743・744・745・756・757・760・784・  
 785・796の次・797・803の次・804

近衛本と諸伝本との関係をみるため、このうち、脱落または追補である可能性が考えられる、独自事象（いずれか一本のみが他本と異なる場合）を除く（有る場合も無い場合も独自事象は除く）と次のごとく一一首となる。

詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に記す。

① 449 有（近・粘・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

② 534 有（近・粘・伊・久・卷・太・下・山）

無（雲・関・戊・葦）

③ 535 有 〔近・粘・法・伊・関・久・太・下・山・戊・葦〕

無 〔雲・卷〕

④ 564 有 〔近・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑤ 603 有 〔近・粘・伊・久・大内・山〕

無 〔雲・関・卷・戊・葦〕

⑥ 652 の次有 〔安・卷・定大〕

無 〔近・粘・伊・雲・関・久・益・山・戊・葦〕

⑦ 712 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑧ 714 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑨ 729 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑩ 784 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑪ 797 有 〔近・粘・伊・久・益・山〕

無 〔雲・関・安・卷・太・戊・葦〕

右掲（二一首）において近衛本は粘葉本類と全て一致していた。一方、⑥<sup>12</sup>を除く一〇首については、近衛本・粘葉本類と雲

紙本類との一致は見られず、また、いずれも近衛本・粘葉本類の有するところであった。

次に、近衛本・粘葉本・伊予切のそれぞれに独自性が見られる事例を挙げる。<sup>(13)</sup>

## ◆近衛本の独自性

(1) 699 無 (近)

有 (粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(2) 785 無 (近)

有 (粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

(3) 804 無 (近)

有 (粘・法・伊・雲・関・久・安・卷・太・益・山・多・戊・葦)

## ◆粘葉本の独自性

(4) 796の次無 (粘)

有 (近・伊・法・雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

## ◆伊予切の独自性

(5) 601 無 (伊)

有 (近・粘・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

右掲(1)699・(2)785については、いずれも料紙の継ぎ目ではなく、一紙の中間なので、後世、さかしらに切断したものでなく、<sup>(15)</sup>「単なる誤脱<sup>(16)</sup>」かと思われる。また、(3)804・(4)「796の次」・(5)601についても同様に考えられる。

次に、排列について述べる。平安時代の書写とされる諸伝本間において、排列に異同がある場合は一八か所であった。詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示すと次の通りである。



- (15) 729 · 730 (近·粘·伊·久·安·卷·太·戊·葦)
- (14) 726 · 727 · 728 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·山·戊·葦)  
 701 無 | 702 (関)
- (13) 701 · 702 (近·粘·伊·久·安·卷·太·山·戊·葦)
- (12) 687 · 686 (久)  
 686 · 687 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·太·多·戊·葦)
- (11) 672 · 671 (久)  
 671 · 672 (近·粘·伊·雲·関·卷·山·多·戊·葦)
- (10) 656 · 655 (久)  
 655 · 656 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·山·多·戊·葦)  
 625 · 626 (安)
- (9) 625 · 626 · 627 · 628 · 629 (近·粘·伊·関·卷·山·戊·葦)  
 625 · 626 · 627 · 628 · 629 無 | (雲)
- (8) 602 · 603 (近·粘·伊·久·山)  
 603 · 602 (大内)  
 602 · 603 無 | (雲·関·卷·戊·葦)

729 無 | 730 (雲・関)

730 · 729 (山)

(16) 741 · 742 · 743 · 744 (近・粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・戊)

741 · 742 · 744 · 743 (山)

741 · 743 · 742 · 744 (多)

741 無 · 742 無 · 743 無 · 744 無 (葦)

(17) 746 · 747 (近・粘・伊・雲・関・安・卷・太・山・俊和・戊・葦)

747 · 746 (久)

(18) 754 · 755 · 756 · 757 (近・粘・伊・関・安・太・山・戊・葦)

755 · 756 · 754 · 757 (久)

754 · 755 · 756 無 | 757 (雲)

754 · 755 · 756 · 757 無 (卷)

右掲の一八項目において、多数派に対して一本のみが相違する伝本には、久松切九か所(6)(7)(9)(10)(11)(12)(14)(17)(18)、山城切四か所(1)(2)(15)(16)、卷子本三か所(3)(4)(5)等が挙げられる。また、雲紙本には六か所(2)(5)(8)(9)(15)(18)、関戸本には四か所(5)(8)(13)(15)に無いということが確認された。

既に、拙稿<sup>14)</sup>において、『和漢朗詠集』全体を通して、排列の揺れと詩歌句の有無には相関性があり、「久松切・山城切・卷子本等の排列の揺れは雲紙本類の影響下に因る」という可能性を指摘した。近衛本では如上の性質は認められず、全てが粘葉本類と一致していた。

以上、形態的な面について考察した結果、確かに近衛本は粘葉本類に属するが、詩歌句の有無という点においては、独自



事象が、近衛本では三首(699・785・804〔近衛本、無〕)、粘葉本・伊予切ではそれぞれ一首(796の次〔粘葉本、無〕・601〔伊予切、無〕)が確認され、近衛本と粘葉本類との間には若干の異同が認められた。従つて、詩歌句数に限つていえば、本考察の範圍内では近衛本の方が粘葉本類より僅か乍ら少ないといえる。

## 四

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘つて行つた。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、近衛本と諸伝本との本文関係の概略については、近い順に、和歌は法輪寺切(九六・九%)、粘葉本(九一・三%)、伊予切(八九・五%)、漢詩は粘葉本(九四・一%)、伊予切(九三・二%)、法輪寺切(九二・四%)が挙げられ、和歌・漢詩ともに粘葉本・伊予切・法輪寺切に近いということが確認される。以下、それらが同文であつて、かつ、その本文が他本との間に異なるケースを全て挙げる。

まず、近衛本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次に異同を載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 479 新豊酒色清冷於鸚鵡之盃中長衆歌聲幽咽於鳳皇之管裏〔近〕

〔同〕之盃〔粘・伊・法〕

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

〔異〕盃之(雲・葦)

盃(関・久・山)

怀之(卷)

坏之(戊)

② 498 みわたせはまつのはしろきよしの山いくよをつめるゆきに□あるらむ〔近〕<sup>20</sup>

〔同〕いくよをつめる〔粘・伊〕

〔異〕いくよつもれる(雲・関・久・卷・山・益・多・戊・葦)

③ 526 みかみもるゑしのたくひにあらねともわれもこゝろのうちこそおもへ〔近〕

〔同〕うちにこそおもへ〔粘・伊〕

〔異〕なかにこそたけ(雲・関・卷・戊・葦)

うちはもえつゝ(久)

うちにこそたけ(太・散・山・多)

④ 554 遺愛寺鐘鼓枕聴香鑪峯雪卷| 簾看〔近〕

〔同〕卷〔粘・伊〕

〔異〕撥(雲・関・久・卷・下・山・戊・葦)<sup>21</sup>

⑤ 572 明月好當| 三径夜緑楊| 宜作兩家春〔近〕

〔同〕當〔粘・伊〕

〔異〕同(雲・関・久・卷・山・戊・葦)

⑥ 634 楊岐路滑吾| 之送人多年李門波| 高人之送我何日〔近〕

〔同〕吾〔粘・伊・法〕

〔異〕我（雲・関・久・安・卷・益・山・戊・葦）

⑦ 639 としことにはるのわかれをあはれとも人におくるゝひとそしりける〔近〕

〔同〕としことに〔粘・伊〕

〔異〕としことの（雲・関・久・安・卷・益・山・戊・葦）

⑧ 657 聖皇自在長生殿不向蓬萊王母家〔近〕

〔同〕在〔粘・伊〕

〔異〕有（関・久・安・卷・下・山・定大・戊・葦）

⑨ 680 春過夏闌袁司徒之家雪應路達朝南暮北鄭大尉之溪風被人知〔近〕

〔同〕朝〔粘・伊〕

〔異〕旦（雲・関・久・安・卷・戊・葦）

⑩ 696 少日遂逃秦虎口暮年初謁漢龍顏〔近〕

〔同〕少〔粘・伊〕

〔異〕他（雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑪ 710 李延年之飭族託一妍以始飛衛子夫之待時在衆醜而永異〔近〕

〔同〕永〔粘・伊・法〕

〔異〕未（雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑫ 741 黄壤誰知我白頭猶憶君唯將老年淚一灑故人文〔近〕

〔同〕猶〔粘・伊〕

〔異〕徒（雲・閑・戊）

獨（久・安・卷・太）

獨徒（山・多）

⑬742 長夜君先去殘年我幾何秋風襟滿淚泉下故人多〔近〕

〔同〕襟滿（粘・伊）

〔異〕滿衫（雲・閑・久・安・卷・太・戊）

滿襟 衫（山）

滿襟衫（多）

⑭755 車前驥病驚駘逸架上鷹閑鳥雀飛〔近〕

〔同〕飛（粘・伊）

〔異〕高（雲・閑・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑮57 笮蠡収責棹扁舟而逃名謝安辞功伏孤雲而養志〔近〕

〔同〕伏（粘・法・伊）

〔異〕臥（雲・閑）

鞭（久・安・太・山・戊・葦）

出典未詳の、右掲①・③・⑧・⑪の近衛本・粘葉本類の本文について述べる。⑪の当該箇所は文意から「永」であると解されるが、①の当該箇所「之益」は誤写かと思われ、③の当該箇所「うちこそ」おもへも「誤り」とされている。また、⑧の当該箇所「在」について、三木雅博氏は、出典の本文とは異なり、閑戸本等の本文「有」の方が「本来の形であったと考えられる」と述べられた。それ以外の事例（右掲②・④・⑤・⑥・⑦・⑨・⑩・⑫・⑬・⑭・⑮）においては、近衛本・粘葉

本類の当該箇所と、他文献の本文との一致が認められるのは、著者の知る限りでは②・⑥・⑦の三首である。<sup>27</sup>また、『和漢朗詠集考證』・『新潮日本古典集成』では、⑤・⑨・⑩・⑬・⑭・⑮の近衛本・粘葉本類における当該箇所が他文献の本文に改められるべき等と指摘されており、その点も注目される。<sup>28</sup>

次に、近衛本・粘葉本・伊予切・法輪寺切の四本間において異同があるケースについて考察を行う。五五か所が確認されたが、それらは、

A 四本中、もしくは三本中、近衛本のみが異文であるケース…二六か所(うち、近衛本の独自本文<sup>29</sup>一六か所)

B 四本中、もしくは三本中、粘葉本のみが異文であるケース…一か所(うち、粘葉本の独自本文<sup>30</sup>九か所)

C 四本中、もしくは三本中、伊予切のみが異文であるケース…一六か所(うち、伊予切の独自本文<sup>31</sup>一か所)

D 四本中、近衛本・粘葉本と、伊予切・法輪寺切との間に異同があるケース…一か所

E 四本中、法輪寺切のみが異文であるケース…一か所(↓法輪寺切の独自本文)

の五つに分類される。この五五か所のうち、右掲「A」の、「近衛本のみが異文であるケース」(二六か所)が半数弱を占め、右掲A～Eのうち、最も多いということが知られた(独自本文も四本中、近衛本が最多)。

右掲「A」の「近衛本の独自本文」(二六か所)のうち、一五か所は近衛本の誤写によると思われる。<sup>31</sup>その他の三本(B「C」[E])に見られる「独自本文」も殆どのケースが誤写に因ると考えられる。以下、実質的事例を検討すべく、右掲から近衛本・粘葉本・伊予切・法輪寺切が「独自本文」を有するケースを除外した上で全ての事例を挙げる。前項同様、近衛本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次の行には当該箇所が近衛本と同文である諸伝本の略号を括弧内に示し、以下、異同を載せる。

A 四本中、近衛本のみが異文であるケース(近衛本が独自本文であるケース、除外)

① 461 わひしらにましらなゝきそあしひきのやまのかひあるけふにやはあらぬ(近)

〔同〕ましらなゝきそ<sup>32</sup>〔太〕

〔異〕ましこななきそ〔粘・伊・久〕<sup>33</sup>

ましはなゝきそ(雲・閑・卷・多・戊・葦)

ましこはなゝきそ(山)

② 虚洞有聲寒溜咽故山無主晚雲孤〔近〕<sup>34</sup>

〔同〕洞〔闕・雲切・久〕<sup>35</sup>

〔異〕澗〔粘・伊・卷・山・戊・葦〕

③ 586 このもとをすみかとするはおのつからはなみるひとなりぬへきかな〔近〕

〔同〕なりぬへきかな〔久・葦〕

〔異〕なりにけるかな〔粘・伊・雲・閑・卷・山・戊〕

④ 591 雖十惡兮猶引撰甚於疾風披霧雲雖一念兮必感應喻之巨海納涓露〔近〕

〔同〕必〔雲・闕・久・山・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔粘・伊・法・卷〕

⑤ 624 風翻白浪花千片鴈點青天字一行〔近〕

〔同〕青〔雲・闕・久・安・卷・山・多・戊・葦〕

〔異〕清〔粘・伊〕

⑥ 630 みわたせはやなきさくらをこきませてみやこそはるのにしきなりけれ〔近〕

〔同〕にしきなりけれ〔葦〕

〔異〕にしきなりける〔粘・伊・雲・閑・久・卷・山・多・戊〕

⑦ 634 楊岐路滑吾之送人多年李門波高人之送我何日 (近)

〈同〉波 (雲・関・仄・安・卷・益・山・戊・葦)

〈異〉浪 (粘・法・伊)

⑧ 646 蒼波路遠雲千里薄霧山深鳥一聲 (近)

〈同〉薄 (雲・関・卷・益・多・戊・葦)

〈異〉白 (粘・伊・久・山)

⑨ 668 江都之好勁捷也七尺屏風其徒高淮南之求神仙 一旦乘雲而何益 (近)<sup>36</sup>

〈同〉ナシ (雲・仄)

〈異〉也 (粘・伊・関・卷・太・山・多・戊・葦)

⑩ 720 翠帳紅闌万事之礼法雖異舟中浪上一生之歡會是同 (近)

〈同〉帳 (雲・関・雲切・仄・安・卷・太・山・多・戊・葦)

〈異〉黛 (粘・伊)

[B 四本中、粘葉本のみが異文であるケース (粘葉本が独自本文であるケース、除外)]

(1) 515 関居屬於誰人紫宸殿之本主也秋水見於何処朱雀院之新家 (近)

〈同〉ナシ (伊)

〈異〉也 (粘・雲・関・久・卷・和3・山・戊・葦)

(2) 544 奇犬吠花聲流於紅桃之浦驚風振葉香分於紫桂之林 (近)

〈同〉於 (伊・雲・関・雲切・卷・太・山・戊・葦)

〈異〉ナシ (粘・久・多)



〔C 四本中、伊予切のみが異文であるケース（伊予切が独自本文であるケース、除外）〕

(1) 586 このもとをすみかとするはおのつからはなみるひとになりぬへきかな〔近〕

〔同〕はなみるひとに〔粘・戊・葦〕

〔異〕はなみるひと、〔伊・雲・関・久・卷・山〕

(2) 571 きのふこそさなへとりしかいつのまにいなはもそよにあきかせのふく〔近〕

〔同〕あきかせのふく〔粘・法・雲・関・久・山・戊・葦〕

〔異〕あきかせそふく〔伊・卷〕

(3) 660 布政治之庭風流未必敵於崐閩兼之者此地也好文之世徳化未必光干黄炎兼之者我君也〔近〕

〔同〕者〔粘・法・雲・関・久・山・多・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔伊・安・卷〕

(4) 675 百里奚乞食於道路穆公委以政甯戚飼牛於車下恒公任以国〔近〕

〔同〕恒〔粘〕

〔異〕恒〔伊・雲・関・久・安・卷・山・戊・葦〕

(5) 789 いまこむといひしはかりになかつきのありあけのつきをまちいてつるかな〔近〕

〔同〕まちいてつるかな〔粘・法・山・戊〕

〔異〕まちいてつるかな〔伊・久・安・太・葦〕

〔D 四本中、近衛本・粘葉本と、伊予切・法輪寺切との間に異同があるケース〕

○ 778 為君薰衣裳君聞蘭麝馨香為君事容飾君見金翠無顔色〔近〕

〔同〕香〔粘・雲・関・久・卷・太・益・山・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔伊・法〕

右掲「A」の当該本文のうち、②・⑥・⑨は近衛本の誤脱とみられる。さらに、③・④・⑤・⑧・⑩の、近衛本と粘葉本類との間に見られる異同箇所からもその中における近衛本の異質性が窺われた。<sup>38)</sup>

また、右掲「A」において、近衛本との同文箇所が多い伝本には、久松切・雲紙本類・葦手本が挙げられる（久松切・葦手本（七か所）、雲紙本・関戸本（六か所）。本書（第三章第七節）中、述べる通り、久松切は、粘葉本・雲紙本兩類の要素を有しており、また、葦手本は雲紙本類の系譜上に位置している。

以上、近衛本と粘葉本・伊予切・法輪寺切とは特異な本文を共有していた。しかし、この四本間において異同がある際、近衛本のみが異文であるケースが最も多く、そこには一部、実質的な内容を伴うものも存し、また、僅か乍ら雲紙本類の本文の混在も認められた。<sup>39)</sup>

## 五

考察範囲を限定し、近衛本の位置付けをめぐって、主に粘葉本・伊予切・法輪寺切との関係を中心に形態・本文の両面から再検討を行った。その結果を纏めるならば次の三点となる。

(1) 詩歌句の有無について、独自事象を除外すると近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と一致している。しかしながら、独自事象は近衛本では三首、粘葉本・伊予切ではそれぞれ一首が確認され、近衛本と粘葉本・伊予切との間には若干の異同が認められた。

(2) 排列においては、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と全て一致している。

(3) 個々の本文の異同箇所において、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と多くの同文箇所を有し、かつ、特異な本文を共有しているが、近衛本と、粘葉本・伊予切・法輪寺切との間には異同も見られ、内容的にも近衛本は異質性を帯びて

いることが窺われた。

ここから、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と同系を成すものの、その中ではやや性格を異にするということが明らかとなった。

なお、近衛本・粘葉本・伊予切<sup>(40)</sup>・法輪寺切の四本を「同筆」とする説もある。多用される字体・字形・字母等に共通性が認められ、また、四本の書が密接な関係にあるということは事実である。しかしながら、「同筆」であるのか否かという点については、未だ定説はなく、むしろ謎に包まれたまま今日に至っていると云ってよい。伝本の成立にも関わる重要な問題であり、その実態について検証し直す必要性を感じている。

#### 注

- (1) 小松茂美氏編『二玄社版 日本書道辞典』〔昭和62年 二玄社〕P 161
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 20
- (3) 前掲書(注2)に同。P 12
- (4) 陽明文庫編『陽明叢書国書篇』第七輯(解説)〔昭和53年 思文閣出版〕P 7
- (5) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一・三・一四・一五巻〔平成2年 講談社〕
- (6) 巻上では本断簡(76く78)のみが知られている(平安書道研究会編『日本名筆全集』第六巻〔書芸文化院〕P 54、及び小池豊吉氏『ちなみ』〔昭和11年〕)。
- (7) 678は久松切の書写者の筆跡とは異なり(『古筆学大成』第一三巻P 428)、公任の原撰本には無い「後人の加筆」とされた句である(山田孝雄氏校訂『倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P 14・15)。
- (8) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは796の次)に位置することを意味する。本

表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

- (9) 「断簡E」では、75と649の行頭の高さは異なり、また、料紙も二首間において「切断の痕が見える。それぞれ一首二行分の和歌の断簡を、後世、合して一幅の掛物として表装したものであることが知られる」(『古筆学大成』第一三巻 P 415)。
- (10) 「680の前部」と「680の後部」とを合わせると「680」の句は完全な姿になる。
- (11) 803の次に近衛本では尾題「倭漢抄下巻」が書されているが、他本には804が存するため、804も考察の対象とした。
- (12) 「652の次」は「後人の加筆」とされた和歌である(山田孝雄氏校訂『倭漢朗詠集』「昭和14年 岩波書店」P 14・15)。
- (13) ③においては近衛本・粘葉本類は、関戸本とは一致するものの雲紙本とは相違していた。
- (14) 法輪寺切に独自事象は見られなかった。
- (15) 『古筆学大成』第二三巻 P 414
- (16) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』「昭和55年 ひたく書房」P 190
- (17) 拙稿「久松切の位置」(本書「第三章第七節」)・「山城切の位置」(本書「第三章第六節」)・「卷子本の位置」(本書「第三章第二節」)。  
山城切・卷子本は雲紙本類の系譜上に位置しており、久松切には雲紙本・粘葉本類の両要素が混在している点について既述した通りである。
- (18) 法輪寺切については、『和漢朗詠集』巻下の和歌三二、漢詩七七、合わせて九九首を調査し得た。本調査において知られる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首となり、『和漢朗詠集』全体からすると、約一二%を占める程度である。従って、粘葉本等と列には比較し得ない。
- (19) 法輪寺切の散逸箇所等の場合は当然のことながら近衛本・粘葉本・伊予切の「三本のみ」ということになる。
- (20) 料紙表面の損傷に因り、判読不可能。
- (21) 古筆学研究所編『過眼墨宝選集一』(昭和62年 旺文社 P 40)に拠る。

- (22) 前掲書(注3) P 209では、近衛本・粘葉本、「獨」とされている。
- (23) 藤田美術館編『藤田美術館名品図録』(昭和47年 日本経済新聞社) P 160)に拠る。
- (24) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』(昭和48年 藝林舎) 下巻 P 81
- (25) 大曾根章介・堀内秀晃氏校注『新潮日本古典集成』(平成5年 新潮社) P 200。なお、本歌は異同の多い和歌である。近衛本の初句「みかみもる」、粘葉本類「みかきもる」、雲紙本類「みかきもり」とあり、近衛本は結句では粘葉本類と一致していたものの初句には異同があった。
- (26) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』(平成7年 勉誠社) P 183
- (27) ②『兼盛集』I、「いくよをつめる」。⑥『本朝文粹』巻九、「吾」。⑦『元真集』(宮内庁書陵部蔵本)、「としこと」。
- (28) 前掲書(注24) P 155・277・331・333、前掲書(注25) P 217・262・282・283。
- (29) 「二本」とは、近衛本・粘葉本・伊予切。以下、同。
- (30) 諸伝本中、一本のみが異文であるケース。「独自本文」が一首中、複数の伝本間において存する場合もあり得る。
- (31) 近衛本の独自本文(二六か所)のうち、763「なりぬらむ」の他はいずれも誤脱とらしい。
- (32) 太田切、料紙表面の損傷に因り判読困難ではあるが、当該箇所は「ましら」とみてよいと思われる。「ましら」と「ましこ」は同義であるため、解釈上はさして問題にはならないが、「ら」と「こ」の文字の形は判別し難い。
- (33) 前掲書(注3) P 134では粘葉本、「ましら」とされている。
- (34) 前掲書(注3) P 157では近衛本、「澗」とされている。
- (35) 雲紙切の当該文字について、『古筆学大成』第二七巻(平成3年 講談社) P 276によると「澗」と判読されているが、旁には「加筆」(『古筆学大成』第一三巻 P 402)と思しき跡が認められ、当初は「洞」であったと推される。
- (36) 前掲書(注3) P 190では近衛本、「也」とされている。

- (37) 以下の三本の表記は次の通り。雲紙本・関戸本、「まち出鶴鮑」。卷子本、「待出鶴かな」。
- (38) ③④⑤⑧⑩のうち、⑧は出典未詳（三木雅博氏は⑧について、粘葉本類の本文「白」の方が「原詩の本文であったことは確かであろう」とされた（前掲書（注26）P178）。その他については粘葉本類と出典とは相違していた（③『詞花集』巻九、『麗花集』巻下、「なりぬへきかな」。④『本朝文粹』巻十二、「必」。⑤『白氏文集』巻十、「青」。⑩『本朝文粹』巻九、「帳」）。
- (39) 前掲「B・C」中にもそれぞれ雲紙本類との同文箇所は存するが僅少であった。
- (40) いわゆる、伊予切「第一種」（1〜235）を指す。

## 第五節 伊予切の性格 — 粘葉本との関係を中心に —

一

平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について、堀部正二氏は主に本文の近似関係から「(1)・(2)・(3)」に分類された。<sup>①</sup>一方、久曾神昇氏は、主に形態的な面から「甲類・乙類」に大別された。<sup>②</sup>

堀部氏「(1)・久曾神氏「乙類」には粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切、堀部氏「(2)」・久曾神氏「甲類」には雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本が挙げられ、その点において両氏の所論は一致している。

本節では、そのうちの伊予切の性格、及び諸伝本間における伊予切の位置について、主に、粘葉本との関係を中心に考察を行った結果について述べる。

その経緯、目的は次の通りである。

従来、『和漢朗詠集』諸伝本のうち、文学研究上、最善本とされているのは粘葉本である。しかし、その本文は独特であり、また、そこには誤写と思しき箇所も存する。

かつて、山田孝雄氏は、粘葉本を「最も信憑するに足るもの」とされ、「これを訂するが為に用ゐるものは所謂伊豫切と称せらるるもの」と述べられた。<sup>③</sup>しかし、その根拠については詳述されていない。また、ここでは伊予切巻下については触れられていない。

一方、『新編国歌大観』における『和漢朗詠集』の底本には粘葉本が採用されている。解題では「最善本と目されているが、誤字や脱字も存するので、他の諸本および出典によって改めた」<sup>④</sup>とされる。しかし、そこにおける基準についてそれ以上の記述はなく、「諸本」名も挙げられていない。また、その翻字内容には同書の「凡例」<sup>⑤</sup>で示された事項と齟齬するかと思しき点がある。

同書では、粘葉本における「偶然的な脱落・衍字・誤写」<sup>(6)</sup>とも断じ得ないものにも校訂・補訂が施されているため、粘葉本の原姿が掴めない。それらの個々の当該箇所について検討を加える試みは基礎研究として重要な課題といえる。その際、本文・書風等において粘葉本に「極めて相近い」<sup>(7)</sup>とされる伊予切・近衛本・法輪寺切との校合は不可欠であろう。

しかしながら、先学の研究では、それら四本の関係、及び諸伝本間における位置について不明瞭な点が残し、また、伊予切に関する調査の範囲も全容には及んでいないようである。<sup>(8)</sup>

『日本名跡叢刊』では、伊予切「第三種」については田中親美氏の「透き写し」に因るものが掲載され、「上下巻の復元」がなされた。「透き写し」とはいえ、同書により伊予切の本文の全容が明らかとなった。

本節では伊予切に関する調査は同書に拠るものとし、本文については本書（前節）中、言及し得なかつた部分を主に取り上げ、その補完を試みる。

## 二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

17	・	42	・	82	・	90	・	91	・	92	の次	99	・	107	・	109	・	115	・	120	・	178	・	194	・	215	・	225	・	237	・	246	・	249	・	257	・	268	・	271	・	313	・	321	・	322	・	323	の次	330	・
337	・	344	の次	347	・	348	・	348	・	354	・	363	・	369	・	376	の次	380	・	380	・	407	・	422	の次	434	・	434	の次	449	・	459	・	468	・	472	・	476	・	482	・	489	・	507	・	518	・	534	・		
535	・	542	・	547	・	549	・	551	・	556	・	561	・	564	・	584	・	596	・	598	・	601	・	603	・	615	・	617	・	618	・	621	・	629	・	636	・	652	の次	657	・	663	・	677	・	678	・	684	・	699	・
701	・	703	・	712	・	714	・	729	・	735	の次	736	の次	738	・	739	・	740	・	741	・	742	・	743	・	744	・	745	・	756	・	757	・	760	・	784	・	785	・	796	の次	797	・	803	の次	804	・				

右のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除く（有る場合も無い場合



も独自事象は除く」と次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」として示し、諸伝本の略号を括弧内に挙げる。

① 17 有(伊・粘・雲・関・久・唐 2・山・葦)

無(卷・戊)

② 42 有(伊・粘・卷・久・下・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

③ 215 有(伊・粘・久・山・多・戊)

無(雲・関・卷・葦)

④ 268 有(伊・粘・久・卷・山・戊)

無(雲・関・葦)

⑤ 313 有(伊・粘・雲・久・山・戊・葦)

無(関・卷・和 1)

⑥ 321 有(伊・粘・行大・久・卷・唐 2・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑦ 322 有(行大・雲・関・久・卷・和 1・山・多・戊・葦)

無(伊・粘)

⑧ 354 有(伊・粘・久・戊・山)

無(雲・関・卷・葦)

⑨ 380 有(伊・粘・久・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

⑩ 407 有(伊・粘・雲・関・法・久・益・山・戊・葦)

無(卷・太)

⑪ 422 の次 有(益・山)

無(伊・粘・雲・関・久・卷・下・戊・葦)

⑫ 433 の次 有(伊・太・大内・山)<sup>⑩</sup>

無(粘・雲・関・久・卷・戊・葦)<sup>①</sup>

⑬ 434 有(粘・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

無(伊・太・大内)

⑭ 449 有(伊・粘・近・久・卷・太・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑮ 534 有(伊・粘・近・久・卷・太・下・山)

無(雲・関・戊・葦)

⑯ 535 有(伊・粘・近・法・関・久・太・下・山・戊・葦)

無(雲・卷)

⑰ 564 有(伊・粘・近・久・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑱ 603 有(伊・粘・近・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戊・葦)

①9 617 有(伊・粘・法・雲・関・久・唐1・下・山・戊・葦)

無(安・卷)

②0 621 有(伊・粘・雲・関・久・山・戊・葦)

無(安・卷)

②1 652 の次有(安・卷・定大)

無(伊・粘・近・雲・関・久・益・山・戊・葦)

②2 712 有(伊・粘・近・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

②3 714 有(伊・粘・近・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

②4 729 有(伊・粘・近・久・安・卷・太・山・戊・葦)

無(雲・関)

②5 784 有(伊・粘・近・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

無(雲・関)

②6 797 有(伊・粘・近・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戊・葦)

伊予切・粘葉本はそれぞれ八〇二首を有し、その詩歌句数は平安時代書写とされる諸伝本のうち、最も多い。右に掲げた二六首のうち、伊予切・粘葉本の両本に無いのは⑦の通り、わずか一首(322)であり、それは両本にしか見られない。また、二本間における同事象数について、その一致率は諸伝本のうち、伊予切と粘葉本とが最も高い。

一方、両本間に見られる相違は四首であるが、そのうちの二首は前掲⑫・⑬であり、その他については、次の通り、伊予切・粘葉本それぞれの独自事象である。次に挙げる601は粘葉本が有し、「796の次」は伊予切が有する。

■ 601 こくらくはゝるけきほとゝきゝしかとつとめていたるところなりけり

有 (粘)・雲・関・近・久・卷・山・戊・葦

無 (伊)

■ 796の次よのなかはゆめかうつゝかうつゝともゆめともしらすありてなければ

有 (伊)・雲・関・近・法・久・安・卷・太・益・山・戊・葦

無 (粘)

久曾神氏は、右掲601・「796の次」、及び、322 (前掲⑦)のうち、無いのはいずれも両本それぞれの「誤脱」とされた。さらに、322 (前掲⑦)については、「八百首のうちで僅かに一首または二首の誤脱であることを思うに、両本がたまたま一致すると言うことは考えにくく」、「原本には存しながら、粘葉本、伊予切の祖本において、すでに脱していたと、しばらく推定しておく」と述べられた。<sup>12)</sup>

それに対して、野沢千佳子氏は別の見解を示された。<sup>13)</sup>

関戸本には321・797の二首が無く (前掲⑥・⑳)、粘葉本には322 (前掲⑦)・「796の次」の二首が無い。野沢氏は321と322、及び、「796の次」と797とがそれぞれ隣接している点に注目され、その二か所について、『和漢朗詠集』の編集過程におけるゆれをそのまま反映している」と推測され、『和漢朗詠集』の成立にかかわるもの」と述べられた。その「編集」の主体は明記されていないが、野沢氏が指摘されたのは書写者ではなく、撰者のことであろう。「796の次」については、粘葉本と同類とされる伊予切・近衛本には存していることから粘葉本の脱漏であるとも考えられる。しかし、野沢氏はその点については触れられなかった。

また、雲紙本・関戸本の両本に無いのは一八首（前掲②・③・④・⑥・⑧・⑨・⑪・⑫・⑭・⑮・⑰・⑱・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖）であるのに対して、伊予切・粘葉本の両本に揃って存しない詩句が322のわずか一首（前掲⑦）であることを考え合わせるると、その推論には無理があるように思われる。

その傍証となり得ると思しき事例には、以下述べる通り、321（詩句）の下方に小書きされている作者名のことも挙げられる。伊予切・粘葉本における321の下方には「菅」と注されている。321は『田氏家集』に所収されている作品であり、「菅」とあるべきは（321ではなく）その次に位置する322である。両詩句（321・322）には、同一文字（碧・「書」・「青」・「紙」）が用いられており、内容的にも同題のものが感じられる。書写者に因る目移りが関係し、321の詩句が書された後、その下方に、誤って322の作者名「菅」が注された（322の詩句は書き落とされた）可能性がある。

伊予切・粘葉本のそれぞれに無い場合は322（前掲⑦）を含めて二首のみであり、「後人の加筆」とされる詩歌句を除くと、他の諸伝本に比して両本の脱している詩歌句数は少ない。両本が有する詩歌句数の多さから、久曾神氏が述べられたごとく、322は両本にはなかったものの、「原本には存し」ていたということも十分考えられる。

次に、伊予切と粘葉本との間に見られる相違のうち、両本それぞれの独自事象を除いた二首（前掲⑫・⑬）について述べる。「433の次」（前掲⑬）は先学により「恐らく公任原撰本には存しなかったもの」<sup>15</sup>であり、「後人の加筆にして、しかも尊圓親王以後のしわざなるべきなり」とされた和歌である。山城切を除くと、434（前掲⑫）を有する伝本には「433の次」（前掲⑬）がなく、434（前掲⑫）が無い伝本は「433の次」（前掲⑬）を有する。山城切がその二首を有しているという点については山城切の「後世の特徴」<sup>17</sup>と考え得る。しかし、伊予切「第一種」は書の研究者の間で十一世紀中葉の書と推定されている。山田孝雄氏の所説を前提とすると、もとはそれと一連であったはずの伊予切「第三種」の中に「433の次」が存するという点は不可解なことと言わざるを得ない。

伊予切との関係において、一致率が高いのは近衛本も挙げられる。

前掲①～②のうち、近衛本の現存箇所(⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖)の全て(二一首)において近衛本は伊予切と(粘葉本とも)一致していた。

近衛本については零本二巻・断簡四葉、合計三四一首を調査し得たが、対照し得る五五首のうち、伊予切との相違は四首のみであった。うち、一首は伊予切の独自事象(前掲601)であり、残りの三首については本書(前節)中、既述した通り、近衛本の脱漏であると思われる。

以下、排列について述べる。

平安時代の書写とされる諸伝本間にみられる排列の異同箇所は三三か所である。前項と同様に、「他本が同排列であるのに対して一本のみが他本の排列と異なる場合」を除外すると次の通りである。その詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 110・111 (伊・粘・雲・関・久・卷・山・戊)

111・110 (唐2・葦)

② 133～143 [卷上・春部「藤」・「躑躅」・「款冬」] (伊・粘)

137～143・133～136 [卷上・春部「躑躅」・「款冬」・「藤」] (雲・関・卷・山・戊・葦)

③ 201・202 (伊・粘・久・卷・山・戊・葦)

202・201 (雲・関)

④ 272・273 (伊・粘・多)

273・272 (雲・関・久・卷・唐2・山・戊・葦)

⑤ 308・309 (伊・粘)

309・308 (雲・関・久・山・戊・葦)

308 無・309 (卷)

⑥ 312・313 (伊・粘・久・山・戊)

313・312 (雲・葦)

312・313 無 (関・卷・和<sup>1</sup>)

右に掲げた事例の全てにおいて伊予切は粘葉本と同様であるが、それらのうち、②では、卷上・春部(卷末)の三詩歌群が、諸伝本では「躑躅」・「款冬」・「藤」の順<sup>(18)</sup>であるのに対して、伊予切・粘葉本では「藤」・「躑躅」・「款冬」であり、また、⑤についても伊予切・粘葉本の二本のみに存する事象である。なお、伊予切・粘葉本と雲紙本・関戸本とが①を除く五項目において相違していることも確認された。

前項(「詩歌句の有無」)の場合と同様に排列についても伊予切と粘葉本との一致率はいずれの二本間における数値よりも高い。この両本が相違するのはわずか二か所のみであり、その排列は次の通り、伊予切・粘葉本それぞれの独自事象であった。異同箇所を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

■ 196・195 (伊)

195・196 (粘・雲・関・久・卷・下・山・多・戊・葦)

■ 367・368 (粘)

368・367 (伊・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

同類とされる近衛本・法輪寺切についても、対照箇所数は少ないものの、その全て(近衛本は一九か所、法輪寺切は一箇所)において伊予切・粘葉本と同排列であった。

以上、詩歌句の有無については、伊予切と粘葉本とが相違するのは四首のみであり、そのうちの二首は両本それぞれの独自事象であることが確認された。

排列についても両本の相違箇所（わずか二か所のみ）は両本それぞれの独自事象であった。

形態的な面について考察した結果、伊予切と粘葉本とは諸伝本中、最も近い関係にあり、近衛本についても、諸伝本の独自事象（近衛本の独自事象も含む）を除くと伊予切・粘葉本との相違箇所は見当たらず、この三本は同類であり、かつ、雲紙本・関戸本とは別の類であることが改めて確認された。

また、二本間における同事象数について、諸伝本のうち、伊予切と粘葉本とが最も高い一致率であるという点に加え、この両本のみ見られる事象が三か所もあるという事実（A・322が無いということ、排列の面において、B・巻上・春部（巻末）の三詩歌群が「藤」・「躑躅」・「款冬」の順であること、C・308・309の順であること）も注目された。

一方、伊予切には434が無く、その位置に「433の次」が存していた。前述した書写年代のことに加え、両本の関係が極めて近い（有無における両本間に見られる違いはそれぞれの独自事象を除くとその箇所のみである）という事実を照らし、伊予切が「433の次」を有している点は前述した通り、不可解に思われる。山田孝雄氏の説が確かであるならば、伊予切「第三種」の書写年代は十一世紀中葉では符号しない。それより下るといった事情（たとえば、「後世の書きたし」に因る等）があったということではなからうか。しかし、伊予切の書には既述した通り諸説あり、また、その他にも解明し得ないことが疑問点として残されている。<sup>(19)</sup>

### 三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。



その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、伊予切と諸伝本との関係は、同文率の高い順に、和歌では、粘葉本（九四・〇%）、法輪寺切（九一・七%）、近衛本（八九・五%）、漢詩では、法輪寺切（九八・〇%）、粘葉本（九六・一%）、近衛本（九三・二%）が挙げられる。

ここから概ね伊予切は粘葉本・法輪寺切・近衛本と近い関係にあることが知られる。また、対照箇所数の少ない法輪寺切を除くと、伊予切と粘葉本との一致率が最も高く、両本は諸伝本中、最も近い関係にあることが看取される。

諸伝本間において異同がある際、他本に対して伊予切・粘葉本・法輪寺切・近衛本が同文を有し、かつ、それらの間に異同がないケースは次のごとく分類される（近衛本・法輪寺切の散逸等の部分も調査の対象とした）。

1. 伊予切・粘葉本・近衛本・法輪寺切の四本のみが同文であるケース

2. 伊予切・粘葉本・近衛本の三本のみが同文であるケース

3. 伊予切・粘葉本の二本のみが同文であるケース（近衛本・法輪寺切、散逸等の部分に限る）

右掲1・2については本書（前節）中、既述した。他文献に見当たらない本文を、その一類は共有していたが、その際、調査の対象を近衛本の現存箇所に限定したため、右掲3については取り上げなかった。よって、以下、その事例を全て挙げる。

紙幅の都合上、当該箇所のみを載せるが、まず、伊予切・粘葉本の本文を載せ、次に異同を載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 36はるたゝは（伊・粘）

あすからは（雲・関・久・卷・山・戌・葦）

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71	74.8	74	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94.0	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75	66.7	60	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84	85.6	81.9	84.7	85.9	74	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

② 56 けふとのみ(伊・粘)

けふのみと(雲・関・久・卷・大内・山・多・戊・葦)

③ 58 をしくもあるかな(伊・粘)

をしきはるかな(雲・関・久・卷・山・多・戊・葦)

④ 79 ちやちちにけり(伊・粘)

たなひきにけり(雲・関・久・卷・大内・山・葦)

⑤ 80 晴(伊・粘)

暗(雲・関・久・卷・大内・山・葦)

⑥ 97 芳(伊・粘)

芬(雲・関・久・唐<sup>2</sup>・卷・山・多・戊・葦)

⑦ 98 計(伊・粘)

辨(雲・関・久・卷・山・多・戊・葦)

⑧ 121 織(伊・粘)

識(雲・関・久・卷・山・戊・葦)

⑨ 142 いまやちるらん(伊・粘)

いまやさくらむ(雲・関・卷<sup>20</sup>・益・山・戊・葦・伊和)

⑩ 166 かよふなれ(伊・粘)

かよふらし(雲・関・久・行金・卷・益・山・多・戊・葦)

⑪ 175 漠(伊・粘)

莫(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑫ 190 くさふかく(伊・粘)

くさふかき(雲・関・久・卷・大内・山・戌・葦)

⑬ 202 くもはれて(伊・粘)

きりはれて(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑭ 207 あきのはしめに(伊・粘)

あきのはしめを(雲・関・久・卷・多・山・戌・葦)

あきのはしめと(下)

⑮ 207 なりぬとおもへは(伊・粘)

けふそとおもへは(雲・関・卷・山・葦)

今日とおもへは(久・戌・多)

けふ<sup>ソト</sup>をおもへは(下)

⑯ 213 更(伊・粘)

夜(雲・関・久・卷・山・多・戌・葦)

⑰ 214 鬢(伊・粘)

鬢(雲・関・久・卷・山・多・戌・葦)

⑱ 327 中(伊・粘)

裏(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑲ 341 緩(伊・粘)

暖<sup>晩</sup>(雲)<sup>21</sup>

暖(関・久・卷・葦)

暗(山・行金)

晩(下・戊)

⑳ 381めつらしとみる(伊・粘)

めつらしくみる(雲・関・久・卷・戊・葦)

めつらしくみゆる(山)

㉑ 785任(伊・粘)

枉(雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

右のうち、⑭・⑮・⑲・⑳を除く一八か所において、伊予切・粘葉本に対する諸伝本の本文が同文であることが知られた。また、一四か所(②・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・㉑)において、他の文献に伊予切・粘葉本の本文が見当たらない。そこには誤写と思しき本文も含まれるものの、前節中、指摘した通り<sup>㉒</sup>(前掲1・2の場合同様)、特有の本文を両本は共有しているといえる<sup>㉓</sup>。

一方、近衛本・法輪寺切の散逸等の部分も含め、その一類の間に異同がある場合については、以下の「A.」～「F.」に分けられる。

- |   |
|---|
| <p>A. その一類のうち、近衛本のみが異文である。</p> <p>B. その一類のうち、粘葉本のみが異文である(近衛本の散逸等の部分は除外)。</p> <p>C. その一類のうち、伊予切のみが異文である(近衛本の散逸等の部分は除外)。</p> <p>D. 近衛本・粘葉本と伊予切・法輪寺切との間に異同がある。</p> |
|---|

E. その一類のうち、法輪寺切のみが異文である。

F. 近衛本・法輪寺切の散逸等の部分において、伊予切と粘葉本との間に異同がある(右掲「B.」・「C.」のケースは除外)。

前項同様、近衛本の現存箇所(右掲「A.」・「E.」)について、その概要は既に前節中、指摘した通りである。<sup>24</sup>よって、今回は、右掲「F.」に関する考察を行った結果について述べる。「F.」における当該箇所では、①伊予切・粘葉本のうちのいずれか一方が諸伝本中、独自の本文を有する(伊予切一〇か所、粘葉本七か所)、②両本それぞれが同一箇所において諸伝本中、独自の本文を有する(伊予切二か所、粘葉本二か所)、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)に分類される。

まず、①・②の実態を調査した結果について述べる。伊予切では当該本文の殆どが、また、粘葉本ではその半数程において、ア、「両本間において、漢字一文字中、ある一部分が共通していたり、文字が崩された結果、その字形が類似していたりする」<sup>25</sup>、イ、「衍字を有している」<sup>26</sup>、ウ、「脱字かと思しい」事例のいずれかによって占められていた。そこに該当しないのは、伊予切では三か所(111「いりにけるかな」・153「おもはさるらん」・316「にしきなりける」)、粘葉本では五か所(70「宿」・204「悴」・93「ねこしにうゑし」・111「なりにけるかな」・293「あさきりの」)が挙げられるが、それらのうち、誤写とも言い難いのは111「いりにけるかな」・「なりにけるかな」、293「あさきりの」の三か所のみかと思われる。

前掲①・②では、どちらかといえば伊予切の方に杜撰な印象を受ける。が、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)に拠るとそのようでもないことが判る。

以下、その事例を挙げる。当該本文を有する伝本が多数派である場合は「諸伝本」とし、その他の伝本名は略称で示す。

まず、漢詩については、128「關」(伊予切・諸伝本)・「闌」(粘葉本・久松切<sup>29</sup>)、159「消」(伊予切・諸伝本)・「銷」(粘葉本・諸伝本)、210「晩」(伊予切・戊辰切)・「暁」(粘葉本・諸伝本)、233「睡」(伊予切・諸伝本)・「眠」(粘葉本・久松切)、308「秋」(伊予切・諸伝本)・「愁」(粘葉本・関戸本)、310「鵠」(伊予切・諸伝本)・「胡」(粘葉本・葦手本)、417「孤」(伊予切・諸伝本)・

「胡」(粘葉本・諸伝本)、530「風」(伊予切・諸伝本)・「聲」(粘葉本・太田切・久松切)、785「娘」(伊予切・関戸本)<sup>(30)</sup>・「郎」(粘葉本・諸伝本)等が挙げられる。

それらのうち、210については句意から「晩」とあるべきで、粘葉本の誤写かと思われる。また、233の当該箇所についても柿村重松氏は粘葉本「眠」は改められるべきと指摘され、伊予切「睡」を採られた。<sup>(32)</sup> 308についても『日本古典文学大系』<sup>(33)</sup>・『新潮日本古典集成』<sup>(34)</sup>等では伊予切「秋」が採られており、310も伊予切「鵠」が通用するものである。また、417について、伊予切「孤」であるべきであり、530においても伊予切「風」が「原作通り」とみてよさそうである。<sup>(35)</sup>

また、それらの両本の事例を比較すると、その多くが前項中、指摘した「ア」、『両本間において、漢字一文字中、ある一部分が共通していたり、文字が崩された結果、その字形が類似していたりする』<sup>(36)</sup>ことも確認された。

次に、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)のうちの和歌については、三か所(25「けふはくらしつ」(伊予切・諸伝本)・「けふもくらしつ」(粘葉本・戊辰切)・今日をくらしつ(唐紙切?・葦手本)、132「このころはかり」(伊予切・諸伝本)・「このはるはかり」(粘葉本・戊辰切)・「このはるはかり」(下絵切)、143「やへやまふきの」(伊予切・益田本)・「やへ山吹は」(粘葉本・諸伝本)が挙げられる。

以上、伊予切は、粘葉本・近衛本・法輪寺切と多くの同文箇所を有しており、とりわけ、粘葉本との間には両本特有の本文も認められ、両本の関係は近いことが確認された。両本間における異同箇所のうち、両本のうちのいずれか一方が少数派か、もしくは諸伝本中、独自かという事例がその殆どであった。また、その異同箇所には(漢字の)字形の類似が目立っており、その多くは誤写に因ると推測される。

## 四

形態・本文の両面から考察を行った結果、伊予切と粘葉本・近衛本・法輪寺切とは確かに同類であり、また、諸伝本中、

伊予切と粘葉本にのみ認められる特異性も看取され、両本は極めて近い関係にあるということが改めて明らかとなった。

一方、両本間には異同も認められた。個々の本文における異同箇所の中には字形の類似が異同の要因として挙げられるものが少なからず見受けられた。

以上の考察結果を基に推し量ると、そこには書写者に因る字形の誤認の結果生じた誤写が混在していることが考えられる。

伊予切・粘葉本の書写者、もしくははいずれか一方の伝本の書写者が字形の一つ一つに対して細心の注意を払ったという事実については既に拙稿<sup>(38)</sup>において述べた通りである。両本が生成されたその書写の過程において、実際、「誤認」がそれ程なされていたのであれば、そのことと書写者が字形の一つ一つに対して細心の注意を払ったという事実とは矛盾するのではないか。また、その場合、「同一人物が同一の和漢朗詠集を数多く書いた」という安東聖空氏の所論<sup>(39)</sup>では整合しない点があると考えられる。それらの誤写の多くは、詩歌句の内容、及び正確な字形・崩し方等について、書写者の理解が不十分であったことに起因すると思われるが、既に述べた拙稿<sup>(40)</sup>における考察結果を踏まえると、両本は別人に因る書写と解する方が自然ではなからうか。本書(第二章第二・三節)における推論と矛盾のない結論に至った。

伊予切と粘葉本とが別人の手になる場合の方が、両本にのみみられる特異な事象について、一過性の誤写等ではなく、親本、もしくは祖本においても同様であったという可能性が高いと考えられる。本文研究上、ここでは両本が同筆である場合より別人の手になる場合の方が伊予切の資料としての有効性が高まるという見方も可能であろう。

以上の推論が正しければ、伊予切と粘葉本とが同文である場合はそれが両本本来の姿とみてよいのではなからうか。よって校合がより精確に行われることにより、その類推のための手掛かりが得られると推察される。『新編国歌大観』における粘葉本の翻字内容はそれに基づき検討されるべきではなからうか。

ただし、いわゆる伊予切「第三種」については「後世の書き足し」である可能性がある。また、既述した通り、伊予切の書



には複雑な事情があり、未だ解明されていない点が残されている。本文研究上、その前提に立ち、適宜、判断せざるを得ない。

注

- (1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P. 312
- (2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P. 189
- (3) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P. 13
- (4) 『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2〔平成15年 角川書店〕
- (5) 前掲(注4)に同。
- (6) 前掲(注4)に同。
- (7) 前掲(注1)に同。P. 312
- (8) 前掲(注1)に同(P. 19・20)。前掲(注2)に同(P. 190)。
- (9) 記述中「の次」とは、『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは796の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (10) 「433の次」を伊予切中の和歌で示せば「よにふれはことのはしけきくれたけのうきふしことにくひすそなく」である。本歌は山城切では「434の次」に位置する。
- (11) 久松切では行間に別人の手(片仮名)により補筆されている。
- (12) 前掲(注2)に同。P. 190
- (13) 野沢千佳子氏『和漢朗詠集』の和歌本文について(片桐洋一氏編『王朝の文学とその系譜』〔平成3年 和泉書院〕所収)
- (14) 前掲(注3)に同。P. 14・15

- (15) 前掲(注1)に同。P 316
- (16) 前掲(注3)に同。P 15
- (17) 本書(第三章第六節)中、指摘した。
- (18) ただし、両本ともに「目錄」(巻上・下の冒頭「首題」)の次にそれぞれ位置する「題」の一覧では「躑躅」・「藤」・「款冬」の順である。
- (19) 田中親美氏は543の前部は伊予切「第二種」、後部は「第三種」であると判断された。しかし、その論拠は見当たらない(田中氏の分類の通り、543の後部、及び544が「第三種」に属するならば、同一詩句(543)の前部と後部の書写者が異なるということになる)。
- (20) 卷子本、「今歟作嵐」。
- (21) 傍書「晚」は「鎌倉時代の筆と思しい」(前掲(注1)に同。P 21)。
- (22) 拙稿「近衛本の性格―粘葉本・伊予切との関係を中心に―」(本書第二章第四節)所収
- (23) 伊予切には傍書がいくつか存する。既述した通り、本文と同筆か否かという点について不明のため、傍書を有する本文は調査の対象外としたが、89「村」<sup>封</sup>・120「着」<sup>者</sup>・288「鳳」<sup>漢イ</sup>・317「秋」<sup>春イ</sup>等の伊予切の本文(傍書を除く)は諸伝本中、粘葉本とのみ同文である。
- (24) 前掲(注22)に同。
- (25) 伊予切 80「乗」・103「池」・188「銷」・282「挿」・292「後」・399「暮」、粘葉本 249「今」・399「墓」。
- (26) 伊予切 165「くさむから」、粘葉本 278「おくものは」。
- (27) 伊予切 417「師」ナシ・654「之」ナシ、粘葉本 307「園」ナシ。
- (28) 当該箇所について出典・他の文献では以下の通りである。70『菅家文章』「果」、204『白氏文集』「衰」、93『万葉集』「いこしてうゑし」、93『拾遺集』・『拾遺抄』「ねこしてうゑし」。
- (29) 久松切、「闌」<sup>闌</sup>。
- (30) 当該箇所につき、雲紙本では削消されているため不明。削消された上から別人の手により「娘」と補訂されている。

- (31) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』73「昭和40年 岩波書店」P 100
- (32) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』「昭和48年 藝林舎」巻上 P 200
- (33) 前掲〔注31〕に同。P 125
- (34) 大曾根章介・堀内秀晃両氏校注『新潮日本古典集成』61「平成5年 新潮社」P 118
- (35) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』「平成7年 勉誠社」P 179・柳瀬喜代志氏『和漢朗詠集異文考』（和漢比較文学会編『和漢比較文学叢書』第四巻「平成5年 汲古書院」所収）
- (36) 210「晚」と「暁」とは行草体が類似しており、また、417・530を除くその他（128・159・233・308・310・785等）においても当該文字（漢字）中の一部分が両本では共通する。
- (37) 本稿中、指摘した通り、諸伝本中、伊予切・粘葉本の両本にのみ確認された事象には、形態面においては、A・322が無いということ、B・巻上・春「巻末の三詩歌群が「藤」・「躑躅」・「款冬」の順であること、C・308・309の順である等の三点がある。また、個々の本文については、他の文献には見当たらない伊予切・粘葉本の本文のうち、④・⑨・⑩・⑬は解釈に深く関わる。前者の形態面に関する三か所、及び後者の個々の本文に関する四か所について、後代の『和漢朗詠集』書写本を調査したところ、伊予切・粘葉本と同要素を有するのは一本（一か所）のみであった（一本のみが「C・308・309の順」であった。なお、鈴木健一氏『和漢朗詠集』版本考）〔汲古〕第12号「昭和62年12月」）では諸版本の形態面に関する調査結果が示されている。そこでも前述した形態面「A」・「B」・「C」について、伊予切・粘葉本と同要素を有する事例は見当たらない。
- (38) 本書（第二章第二節）中、指摘した通り、両本間の書・用字には共通性が見出され、書写上の型・書写者が規範とした字形）が存していたかと推察される（仮に、両本が別人の手になる場合は、書写者自身により規範とした字形を写し取っているかの）ごく感ぜられる箇所も存していた。
- (39) 安東聖空氏著『かな古筆美の研究・御物粘葉本和漢朗詠篇』「昭和60年 同朋舎」P 14・18

(40) 拙稿「伊予切の書―粘葉本との関係―(二)」・「伊予切の書―粘葉本との関係―(二二)」(本書(第二章第二・三節)所収)

【追記】

前掲(注37)における後代の諸伝本に関する項目は、平成十年度、国文学研究資料館においてリサーチアシスタントとして調査させて頂いたデータに基づき、近年、再調査を行ったものである。当時、貴重な機会を頂きましたことに末文乍ら改めて御礼申し上げます。

## 第六節 雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との関係 ―形態面を中心に―

一

本書(第一章第一節)中、述べた通り、雲紙本・関戸本(以下、雲紙本類と略称)は源兼行の手になる。十一世紀中葉の書写と推定されている。

粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切(以下、粘葉本類と略称)については、その四本が同筆か否か、定説はないものの、それらの書が極めて近い関係にあることは確かなことであり、雲紙本・関戸本と同じ頃(十一世紀中葉)の書写と推定されている。<sup>(注1)</sup> 書写年代が古く、撰者である藤原公任の原撰本を探る上で貴重な資料といえる。<sup>(注2)</sup>

かつて、堀部正二氏は雲紙本と関戸本について、「両本よく一致してゐて全く同系のものであり、先の御物粘葉装本以下の<sup>(注3)</sup>一類と対すべき別の系統をなしてゐる」とされた。そして、同氏は「撰者公任によつて書写された朗詠集はたゞ一本とは限らなかつたらうし、従つて又其間に若干の異同を有つ数個の原本が既に当時においてもあつたらうという想像は可能である<sup>(注4)</sup>」とされた。

また、三木雅博氏は「撰者の公任自身が『粘葉本系』『関戸本系』の両系統のそれぞれの祖本となるような二種類の、あるいはそれ以上の異なつたタイプの『朗詠集』写本を書き残していた可能性さえ、あながちに否定できない」とされた。<sup>(注5)</sup> 同氏は、雲紙本・粘葉本両類の『二つ前の段階』の本文とは、時代的に考えて公任原撰本文にきわめて近い時代のものであり、あるいは公任の撰した本文そのものである可能性もかなり高いと思われる」とも述べられた。<sup>(注6)</sup>

堀部・三木両氏は雲紙本類と粘葉本類とを並列的關係ともいえる「別の系統」のものとして捉えられたが、その關係については言及されなかつた。

一方、久曾神昇氏は主に形態的な面から平安時代書写とされる諸伝本を二大別され(甲類：雲紙本・関戸本・卷子本・葦

手本、**乙類**：粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切、「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」と推測された。そして、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とされ、**甲類**の雲紙本・関戸本を「初稿本」、卷子本・葦手本を「再稿本」、**乙類**の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」と述べられた。<sup>(注7)</sup>

その三種は、①（恐らく撰者公任により）意図的につくられた、②**雲紙本**・**関戸本** ↓ **卷子本**・**葦手本** ↓ **粘葉本**・**伊予切**・**近衛本**・**法輪寺切**という順序により一元的成長を遂げた、③「次第に追補せられ」、「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」と位置付け得るという重要な提言がなされている。以上の三点①・②・③は分けて検討されるべき課題である。しかし、その論拠についてそれぞれ不明瞭な点が残されている。

堀部・三木両氏の御論の通り、公任が撰した『和漢朗詠集』が一本であったとは限らない。雲紙本・粘葉本両類の書写年代は十一世紀中葉と推定されている。本書中、事例を挙げた通り、雲紙本類と粘葉本類との間には少なからず異同が確認される。雲紙本類・粘葉本類は公任の没後まもなくの頃、既に存しており、また、公任により雲紙本類、粘葉本類それぞれの親本が意図して作られた可能性も十分考えられる。公任が撰集するに当たり、詩歌句、及び題の選定はその基本となるところであったと思われる。また、当時、注記の記載に踏み込み得た人物は限られるであろう。そのような観点に立ち、形態的な面を中心に雲紙本類と粘葉本類とを突き合わせ、前述した②③について再検討を行った。その結果、生成過程における雲紙本類↓粘葉本類という繋がりも考えられるものの、「初稿本」から「精撰本」へと一元的成長を遂げたというその捉え方に対しては首肯し難いという結論に至った。<sup>(注8)</sup>以下、その結果を報告し、私見を述べる。

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である(ここでは断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する)。

17	42	82	90	91	92	107	109	115	120	178	194	215	225	237	246	249	257	268	271	313	321	322	323	330			
337	344	の次	347	348	354	363	369	376	の次	380	407	422	の次	434	434	の次	449	459	468	472	476	482	489	507	518	534	
535	542	547	549	551	556	561	564	584	596	598	601	603	615	617	618	621	629	636	652	の次	657	663	677	678	684	699	
701	703	712	714	729	735	の次	736	の次	738	739	740	741	742	743	744	745	756	757	760	784	785	796	の次	797	803	の次	804

右の九八首のうちの二首は後人による追補であると思われる。それらを除くと粘葉本に無いのは796の次・322、伊予切に無いのは434・601・322であり、粘葉本・伊予切の両本に共に存しないのはわずか一首(322)である。その一首(322)が無いことは諸伝本中、両本にしか見られない事象である。

既に、本書(第二章第五節)中、述べた通り、粘葉本・伊予切はそれぞれ八〇二首を有し、その詩歌句数は調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本中、最も多い。

ところで、粘葉本等には存せず、伊予切が有している和歌「434の次」(に位置する)について、先学の研究では「恐らく公任原撰本には存しなかったもの」であり、「後人の加筆とみて差支えなきものにして、しかも尊圓親王以後のしわざなるべき」とされた。

本書中、既述した通り、伊予切が本歌を有し、また、434が無いという点は不可解である。434・「434の次」の有無について、伊予切本来の姿ではない可能性が考えられることから当該二首は対象外とすると、粘葉本・伊予切の両本、及びそのいずれかに無い詩歌句のうち、雲紙本・関戸本が有しているのは三首(322・601・796の次)のみとなる。

久曾神氏はその三首ともに両本それぞれの「誤脱」であるとされた。さらに、322については、「八百首のうちで僅かに一首または二首の誤脱であることを思うに、両本がたまたま一致するということは考えにくく」、「原本には存しながら、粘葉本・伊予切の祖本において、すでに脱していたと、しばらく推定しておく」と述べられた。<sup>(注15)</sup> 本書(第二章第五節)中、指摘した通り、その可能性は十分考えられる。それが事実であるならば、雲紙本・関戸本に無い詩歌句のみならず、雲紙本・関戸本が有する詩歌句の全てを粘葉本・伊予切の祖本では有していたということになる。

粘葉本・伊予切両本によって相互に補充してみると、粘葉本・伊予切は「後人による追補」と思われる一二首、及び322の他は諸伝本の詩歌句の全てを有しているということになる。調査し得た平安時代書写とされる諸伝本の数は本書(冒頭)中、挙げた通り、三〇種を超える。雲紙本・粘葉本両類の書写年代のことも含め、<sup>(注17)</sup> 以上のことを踏まえると、詩歌句数のことについては、公任原撰本に書かれていた詩歌句の殆どは粘葉本類の域を出ないとみてよからう。

### 三

以下、目録・本文中の題に関する諸伝本間に見られる異同調査結果について述べる。

各伝本における目録中と本文中との間には少なからず異同がある。また、諸伝本間には目録・本文中の各題に関する異同も確認される。

以下、そのうちの①雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切の各伝本における目録中の題と本文中の題との間に見られる異同及び②目録・本文中の各題に関する雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切の四本間に見られる異同について考察を行う。

当該事項(①・②)に該当する異同の多くには付項目の有無のことが挙げられる。<sup>(注18)</sup> よって、まずそこに注目する。付項目の有無のことが異同の主な要因とみられる事例は次の二種(事例A・事例B)に大別されるが、そのいずれにも該当しない(異同の要因が付項目の有無のこととは無関係の)事例についてはそれらを一括して事例Cとして本稿後半に挙げる。



本文中、関連する二項目の題のうちの後方の題が目録では付項目として存する場合がある。便宜上、それらを「事例A」とし、その他を「事例B」とする。

まず、「事例A」・「事例B」をもとに前述した(1)・(2)の実態について述べる。

事例は各項目における目録中の題、本文中の題の順に掲載し、括弧内には当該事項を有する四本の略号を記す。

「事例A」

1 目録：子曰<sup>付若菜</sup>（雲・関・粘・伊）

本文中：子曰 若菜（雲・関・粘）

若菜（伊）

2 目録：梅<sup>(注19)</sup>（雲・関）

梅<sup>付紅梅</sup>（粘・伊）

本文中：梅 紅梅（雲・関・粘・伊）

3 目録：花<sup>付落花</sup>（雲・粘・伊）

花（関）

本文中：花 落花（雲・関）

花<sup>付落花</sup> 落花（粘・伊）

4 目録：紅葉<sup>(注20)</sup>（雲・関）

紅葉<sup>付落葉</sup>（粘・伊）

本文中：紅葉 落葉（雲・関・粘・伊）

「事例B」

5 目錄…三月三日(雲・関・粘)

三月三日付統(伊)

本文中…三月三日付統(雲・関・粘・伊)

6 目錄…雁付歸雁(雲・関・粘・伊)

本文中…雁付歸雁(雲・粘・伊)

雁(関)

7 目錄…氷注21(雲)

氷付春氷(関・粘・伊)

本文中…氷注22(雲)

氷付春氷(関・粘・伊)

8 目錄…管弦付舞妓(雲・関・粘・伊)

本文中…管弦(雲・粘・伊)

管弦付舞妓(関)

9 目錄…文詞付遣文(雲・関・粘・伊)

本文中…文詞(雲・関)

文詞付遣文(粘・伊)

10 目錄…水(雲・関)

水付漁父(粘・伊)

本文中…水付漁父(雲・粘・伊)

水(関)

11 目録：仙家(雲・関)

仙家付道十隠倫(粘・伊)本文中：仙家(注23)(雲・関)仙家付道十隠倫(粘・伊)12 目録：帝王付法皇(雲・関・粘・伊)

本文中：帝王(雲・関・粘・伊)

13 目録：親王付王孫(雲・関・粘・伊)本文中：親王(注24)(雲・関)親王付王孫(粘・伊)

14 目録：丞相(雲・関)

丞相付執政(粘・伊)

本文中：丞相(雲・関)

丞相付執政(粘・伊)

まず、1〜14(右掲事例A・事例B)の各項目の(1)雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切の各伝本における目録中の題と本文中の題との間に見られる異同について述べる。

前掲事例A(1〜4)では四本のいずれにも異同が見られる。

本文中、前後に位置する関連する二つの題のうちの後方の題について、伊予切の1「若菜」を除くと、事例A(1〜4)の粘葉本・伊予切では目録中、付項目として表記されており、一方、雲紙本・関戸本では、目録中、存しない場合もある(雲

紙本2・4、関戸本2・3・4)。

【事例B】(5・14)については、粘葉本・伊予切8・12、雲紙本8・9・12・13、関戸本6・9・12・13では目録には有る付項目が本文中には存せず、また、粘葉本5、雲紙本5・10、関戸本5では本文中には有る付項目が目録中には存しない。

【事例A】・【事例B】ともに異同内容については当該事項の有無に止まり、雲紙本類は粘葉本類の枠内に収まっており、別種といえる事例は存しなかった。

その異同箇所数は粘葉本…七か所(1・2・3・4・5・8・12)、伊予切…六か所(1・2・3・4・8・12)、雲紙本…一〇か所(1・2・3・4・5・8・9・10・12・13)、関戸本…九か所(1・2・3・4・5・6・9・12・13)である。雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも多い。が、粘葉本・伊予切にも異同は存する。

各伝本の付項目を有する箇所数については以下、示す通り、粘葉本・伊予切よりも雲紙本・関戸本の方が少ないことも改めて確認された。なお、付項目が雲紙本に有り、粘葉本・伊予切に無いものは皆無であり、関戸本に有り、粘葉本・伊予切に無い事例は一例のみ(8)である。

【目録中】粘葉本…一三か所(5を除く全て)、伊予切…一四か所(全て)、雲紙本…七か所(1・3・6・8・9・12・13)、関戸本…七か所(1・6・7・8・9・12・13)。

【本文中】粘葉本・伊予切…九か所(3・5・6・7・9・10・11・13・14)、雲紙本…三か所(5・6・10)、関戸本…三か所(5・7・8)。

次に、②雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切(目録・本文中の各題)の四本間に見られる異同について述べる。その四本のうちの各二本間に見られる異同箇所数を次掲【目録・本文中の題に関する異同調査表】(以下、【表】と呼称する)に纏めて挙げる。

伊予切	粘葉本	関戸本	雲紙本	目録 本文
<b>【異】</b> ①「付」、伊予切に有(7)。 ②「付」、雲紙本に有(0)。	<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(6)。 ②「付」、雲紙本に有(0)。	<b>【異】</b> ①「付」、雲紙本に有(1)。 ②「付」、関戸本に有(1)。		雲紙本
<b>【同】</b> ③「付」、有(7)。 ④「付」、無(0)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(7)。 ④「付」、無(1)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(6)。 ④「付」、無(6)。		
<b>【異】</b> ①「付」、伊予切に有(7)。 ②「付」、関戸本に有(0)。	<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(6)。 ②「付」、関戸本に有(0)。		<b>【異】</b> ①「付」、雲紙本に有(2)。 ②「付」、関戸本に有(2)。	関戸本
<b>【同】</b> ③「付」、有(7)。 ④「付」、無(0)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(7)。 ④「付」、無(1)。		<b>【同】</b> ③「付」、有(1)。 ④「付」、無(9)。	
<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(0)。 ②「付」、伊予切に有(1)。		<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(7)。 ②「付」、関戸本に有(1)。	<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(6)。 ②「付」、雲紙本に有(0)。	粘葉本
<b>【同】</b> ③「付」、有(13)。 ④「付」、無(0)。		<b>【同】</b> ③「付」、有(2)。 ④「付」、無(4)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(3)。 ④「付」、無(5)。	
	<b>【異】</b> ①「付」、粘葉本に有(0)。 ②「付」、伊予切に有(0)。 ◇その他(1)	<b>【異】</b> ①「付」、伊予切に有(7)。 ②「付」、関戸本に有(1)。 ◇その他(1)	<b>【異】</b> ①「付」、伊予切に有(6)。 ②「付」、雲紙本に有(0)。 ◇その他(1)	伊予切
	<b>【同】</b> ③「付」、有(9)。 ④「付」、無(4)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(2)。 ④「付」、無(3)。	<b>【同】</b> ③「付」、有(3)。 ④「付」、無(4)。	

【目録・本文中の題に関する異同調査表】

【表】の対角線の左半分は目録中、右半分は本文中の題を表す。上欄と右欄に挙げた各伝本が結ばれた各欄はその当該伝本（二本）の関係を示す。

各二本間において異同が有る場合は当該欄のうちの①・②に付項目（以下、「付」と略称）を有する方の伝本名、及び有する付項目の箇所数を括弧内に示す。

異同が無い場合については当該欄の③に付項目が有る箇所数を、④に付項目が無い箇所数をそれぞれ括弧内に示す。

【表】に拠ると、一四か所のうち、粘葉本と伊予切とは両本間に見られる異同が目録中の一か所のみであり、また、目録中一三か所、本文中・九か所の付項目を共有していることが知られる。

それに対して、雲紙本と関戸本とが一致している箇所数は目録中・一二か所、本文中・一〇か所であり、そのうち、両本が付項目を有しているのは目録中・六か所、本文中・一か所のみである。また、雲紙本・関戸本のうちのいずれか一方にか付項目が存しないのは目録中・二か所、本文中・四か所である。

雲紙本と関戸本との関係よりも粘葉本と伊予切との関係の方が近く、また、雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも付項目共有の数が少ないことが確認された。

次に、**事例C**を載せ、考察を行った結果について述べる。

#### 事例C

15 目録・躑躅 款冬、藤（注26）（雲・関）

躑躅 藤 款冬（粘・伊）

本文中・躑躅 款冬（者山不々幾也） 藤（雲・関）

藤 躑躅 款冬（粘・伊）

16 目録・花橘（雲・関・粘・伊）

本文中：花橘（雲・関）

橘花（粘・伊）

17 目錄：扇（雲・関）

扇ナシ（粘・伊）

本文中：扇（雲・関・粘・伊）

18 目錄：十五夜（注27）（雲・関）

八月十五夜（付月）（粘・伊）

本文中：八月十五夜（付月） 月（雲・関）

十五夜（付月） 月（粘・伊）

19 目錄：九日（付菊）（雲・関）

九月（付菊）（粘・伊）

本文中：九日（付菊） 菊（雲・関・粘・伊）

20 目錄：雪 水（雲）

雪 水（付春水）（関）

水（付春水） 雪（粘・伊）

本文中：雪 水（注28）（雲）

雪 水（付春水）（関・粘・伊）

21 目錄：古京（雲・関）

故京（粘・伊）

本文中：古京（雲・関・粘・伊）

22 目録：故宮<sup>付故宅</sup>（雲・関・粘・伊）

本文中：故宮<sup>付故宅</sup>（雲・関）

故宮<sup>付殿宅</sup>（粘・伊）

23 目録：田家 山家（雲・関）

山家 田家（粘・伊）

本文中：山家 田家（雲・関・粘・伊）

15と23のうち、雲紙本と関戸本との間の異同は一か所(20)のみであり、粘葉本と伊予切との間には異同は見られなかった。しかし、各伝本における目録中の題と本文中の題との間に見られる異同については、雲紙本・関戸本では四か所(15・18・19・23)、粘葉本・伊予切では八か所(15・16・17・18・19・20・21・22)が確認された。

右掲23の目録中については「山家 田家」であるべきところ、雲紙本・関戸本では順序が逆であり、両本の誤写であると思われる。しかし、粘葉本・伊予切の方が雲紙本・関戸本よりも誤謬の数は多い。粘葉本・伊予切の誤謬かと思われる箇所を挙げるると以下の通りである。

粘葉本・伊予切15の目録中：「躑躅 藤 款冬」と本文中：「藤 躑躅 款冬」とでは相違しており、それらは雲紙本・関戸本の順序「躑躅 款冬 藤」とも異なる。

16では「花橘」とあるべきであり、粘葉本・伊予切の本文中：「橘花」は誤写であろう。20の目録中：「水<sup>付春水</sup> 雪」について「雪 水<sup>付春水</sup>」の順であるべきところである。

また、19の目録中：「九月」、21の目録中：「故京」、22の本文中の付項目「破宅」も誤写に因るものと考えられる。17の目録中、「扇」が存しないのも両本の脱漏であろう。



そのような中、18・19の雲紙本・関戸本、粘葉本・伊予切では、本文中、二項目であるうちのそれぞれ後方の題「月」・「菊」が付項目としても存しており、四本におけるそれらの事例の共通性は注目される。

以上、目録中、及び本文中の各題に見られる四本それぞれの付項目の有無について雲紙本類の方が粘葉本類よりもその数は少なく、また、雲紙本と関戸本とが共有する付項目数も粘葉本と伊予切との共有数より少ないことが改めて確認された。

雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも目録中の題と本文中の題との間に見られる異同箇所数は多い。しかし、粘葉本・伊予切の中にも付項目が無い箇所があり、また、目録中の題と本文中の題との間に異同が存することも確認された。

一方、その他の（付項目の有無に関する異同とは別の）箇所については、雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも目録中の題と本文中の題との間に見られる異同箇所数は少なく、そこには粘葉本・伊予切の誤脱等も存しており、誤脱等の数は粘葉本類の方が雲紙本類よりも多いものであった。

しかしながら、各事項の内容に関していえば、両類間に別種は存せず、原則、雲紙本類の題は粘葉本類の枠組に収まり、また、特有の共通性も看取された。

なお、いずれかの平安時代書写とされる諸伝本にあり、雲紙本・粘葉本両類に存しない題には、単なる誤写等を除くと、「帰雁」・「春水」・「仏名」<sup>(付録後)</sup>・「蘆橘」が挙げられる。それらは「後世的な要素」<sup>(注29)</sup>とされている。

#### 四

最後に、注記について述べる。以下、四本間における異同調査を行った結果報告を行う。詩歌句が雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切のうちのいずれかの伝本に無い場合は対象外とし、四本間においていずれかの伝本が相違する事例の全てを取り上げる。

雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との間に異同がある（ここでは雲紙本と関戸本とが同一であり、なおかつ粘葉本と伊予

切も同一である)場合を以下、**事例D**とし、その他を**事例E**とする。

**事例D**の数の方が**事例E**よりも多い。よって、まずそれに関する考察結果について述べる。その主要な事例は以下のよう分類される。

当該箇所<sup>(注30)</sup>に注記が存しない場合については「ナシ」と記す。**事例D**のうちの⑦「作者名」では、粘葉本・伊予切と雲紙本・関戸本との間に見られる表記の異なりについては考慮せず、同一人物を指す場合は異同のないものと見做した。

#### **事例D**

- ① 雲紙本・関戸本…作者名のみ。粘葉本・伊予切…ナシ。↓二二例
- ② 雲紙本・関戸本…ナシ。粘葉本・伊予切…作者名のみ。↓二〇例
- ③ 雲紙本・関戸本…作者名を除く事項(題詞、作品名等)のうち、いずれか一方。粘葉本・伊予切…ナシ。↓二例
- ④ 雲紙本・関戸本…ナシ。粘葉本・伊予切…作者名を除く事項(題詞、作品名等)のうち、いずれか一方。↓四例
- ⑤ 雲紙本・関戸本…作者名を除く事項(題詞、作品名等)。粘葉本・伊予切…ナシ。↓五例
- ⑥ 雲紙本・関戸本…ナシ。粘葉本・伊予切…作者名を除く事項(題詞、作品名等)。↓一例
- ⑦ 雲紙本・関戸本…**題詞等**と**作者名**。粘葉本・伊予切…作者名のみ。↓三〇例
- ⑧ 表記・用字等の<sup>(注30)</sup>違い。

⑨ その他(右の①～⑧に該当せず(雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切とが内容的に異なる))

右のうちの①～⑦に拠ると、事例数における①と②との相違、③と④との相違について、雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との間にはさほど認められないものの、⑤と⑥とではやや異なり、⑦では大きく相違する。ここから、粘葉本・伊予切よりも雲紙本・関戸本の方が詳細な傾向にあるといえる。

右掲⑨の事例数は僅か一一か所である。そのうち、誤謬を含むと思われる事例を挙げると次の**事例D**の通りである。

括弧内には当該箇所を有する伝本名を略号により示す。他の文献に当該事項に関する記述が見られる場合は各項目の末尾に\*印を付し、当該事項を挙げる。

◆事例D

(1) 38 王維 (雲・関)

王羅 (粘・伊)

\*『全唐詩』王維一。

(2) 81 李嶠 (雲・関)

李橋 (粘・伊)

\*『全唐詩』錢起四。

(3) 116 花光水上浮 菅三品 (雲・関)

花光浮水上 菅三品 (粘・伊)

\*『本朝文粹』卷十、「暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮心製 菅三品」。

(4) 142 厚見女王 (雲・関)

厚見女皇 (粘・伊)

\*『万葉集』卷八、「厚見王」。

(5) 152 紀 (雲・関)

白 (粘・伊)

\*『和漢朗詠集私注』(以下、『私注』と略称)、「夜陰帰房紀納言」。

(6) 226 田 (雲・関)

白(粘・伊)

\*『私注』、「田達音」。

(7) 源致行(雲・関)

源宗于(粘・伊)

\*『古今集』卷二、「源宗于」。

(8) 471題故元少尹集後 白(雲・関)

題故元少尹後集 白(粘・伊)

\*『白氏文集』卷二十一、「題故元少尹集後」。

右掲のうち、(2)・(4)は四本(雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切)ともに誤りである。その他について、粘葉本・伊予切では(7)を除くといずれも誤りであると思われる。

(1)・(3)については右に挙げた他文献の通りである。

(5)は粘葉本類では「白」(白居易)である。しかし、『私注』では雲紙本類の「紀」(紀長谷雄)と同一人物である「紀納言」とあり、三木雅博氏も「紀」の方を採つておられる。<sup>(注31)</sup>

(6)は粘葉本・伊予切には「白」とあるが、「白」、即ち白居易は誤りかと思われる。<sup>(注32)</sup>『私注』には「田達音」とあり、「田」(島田忠臣)を作者としている。

次に、事例Eについて述べる。事例Eに該当するのは四二か所である。

ここでは内容的に異なる箇所を中心に雲紙本類と粘葉本類との関係について検討することを目的としている。よって、前項◆事例Dの場合と同じように誤謬を含むと思われる事例のみを挙げると次の◆事例Eの通りである。事例の示し方も前項◆事例Dと同様なものとする。

◆事例E

① 61 ナシ(雲)

清瀨藤(関)

藤滋藤(粘・伊)

\* 『私注』、「同詩題 清原滋藤」。

② 183 明日香皇子(雲)

ナシ(関)

明香王子(粘・伊)

\* 『万葉集』卷十、作者未詳。

③ 210 已上白(雲・関)

紀(粘)

ナシ(伊)

\* 『私注』、「立秋後作紀納言」。

④ 211 安貴皇子(雲・関)

志貴皇子(粘)

ナシ(伊)

\* 『万葉集』卷八、「安貴王」。

⑤ 389 相如(雲)

雪中氷亦釋 相如(関)

相規(粘・伊)

\*『私注』、「雪消氷且解時 相規」。

⑥ 442 忠見(雲・関)

忠岑(粘)

ナシ(伊)

\*『忠見集』(Ⅰ・Ⅱ)・『古今六帖』・『三十六人撰』、「忠見」。『忠岑集』Ⅳ・『麗花集』、「忠岑」。『重之集』。『金玉集』、重之。

⑦ 479 送友人婦大梁賦(雲・関)

送友婦大梁賦(粘)

ナシ(伊)

\*『私注』、「送友人婦大梁賦」。

⑧ 517 江(雲・関)

朝綱(粘)

菅名明(伊)

\*『私注』、「洞庭湖江相公」。

⑨ 519 伊勢(雲)

ナシ(関)

中務(粘・伊)

\*『古今集』卷一・『伊勢集』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、「伊勢」。

⑩ 527 月宴藏人所(雲)

月宴夜藏人所(関)

月宴夜藏人所衆信臣(粘)

中務(伊)

\* 『拾遺集』卷三・『拾遺抄』卷三、「藤原経臣」。

⑪ 595 右丞相亭法花会 野(雲)

右丞相花亭法花会野(関)

都(粘・伊)

\* 『私注』、「野相公」。『和漢兼作集』卷七「左相花亭法華会」、「小野篁」。

⑫ 627 菅三品(雲)

菅三(関)

直幹(粘・伊)

\* 『私注』、「直幹」。

⑬ 716 ナシ(雲)

田(関)

白(粘・伊)

\* 『私注』、「田達音」。

⑭ 717 江(雲)

内教坊老命婦 江(関)

紀(粘・伊)

\*『私注』、「老命婦後江相公」。

⑮ 783 呉越王報書(関)

江(雲)

呉越王書 江(粘・伊)

\*『文粹』卷七、「為清慎公報呉越王書」。

⑯ 789 いせ(雲)

素性(関・粘・伊)

\*『素性集』I・II、「素性」

⑰ 791 宋之間(雲・伊)

ナシ(関)

宋之間(粘)

\*『全唐詩』宋之間一。

右のうち、誤謬であると思われるのは、雲紙本…六か所(③・④・⑤・⑫・⑯・⑰)、関戸本…五か所(①・③・④・⑤・⑫)、粘葉本…六か所(①・②・④・⑥・⑨・⑬)、伊予切…七か所(①・②・⑧・⑨・⑩・⑬・⑰)であり、粘葉本類の方が雲紙本類よりも多い。ただし、その判断がつかないものもあり(⑦・⑮)、また、⑪・⑭については以下述べる通り、不明な点がある。

⑪について、雲紙本類の作者名は「野」(小野篁)、粘葉本類では「都」(都良香)である。『和漢兼作集』卷七「左 相花亭法華会」に「小野篁」とある。<sup>注33</sup>しかしながら『大系』では『都』と注するに従っておくとされ、『集成』では小野篁も都も「時代が合わない」とされた。<sup>注34</sup>



⑭については、雲紙本・関戸本等では「江」（大江朝綱）、粘葉本・伊予切等では「紀」（紀長谷雄）と書かれているが、三木雅博氏が述べられた通り、「どちらが正しいかは不明」である。<sup>〔註35〕</sup>

また、⑥については右に挙げた通り、他文献間に異同がある。『忠見集』（I・II）では一連の屏風歌のうちにあり、『古今六帖』・『三十六人撰』にも「忠見」とある。『忠岑集』には四系統のうちのIVにのみ存し、その歌を含む161〜174は島田良二氏によると「増補」歌かとされている。<sup>〔註36〕</sup>また、『重之集』（176）にも本歌は見られる。少なくとも粘葉本の「忠岑」は誤りといえるのであろう。

なお、雲紙本と関戸本との異同、及び粘葉本と伊予切との異同も存する。それぞれ当該の二本を比較検討してみると、傾向としては関戸本の方が雲紙本よりも詳細であり、また、粘葉本の方が伊予切よりも詳細であるといえる。

以上、事例D、事例Eともにそれぞれ誤謬かと思われる箇所は存する。そこにおける実質的ともいえる異同の数は、**◆事例D**・**◆事例E**に挙げた通り、相対的に見て多いとはいえない。さらに、**◆事例D**の(4)「厚見女王」（雲紙本・関戸本）、「厚見女王」（粘葉本・伊予切）は『万葉集』には「厚見王」とあり、**◆事例E**の④「安貴皇子」（雲紙本・関戸本）、「志貴皇子」（粘葉本）は「安貴王」の誤りである等、それぞれ雲紙本・関戸本と粘葉本・伊予切との間には類似性が確認された。

その他にも次の**事例F**の通り、両類には共通的な事例が確認される。詩歌番号・事例を挙げ、括弧内には当該事項を有する伝本名を略号により示す。

#### 事例F

① 3 已上旧年（雲・関・伊）

『古今集』巻一の当該作品の詞書に「ふるとしに春たちける日よめる」とある和歌である。

『和漢朗詠集』では「立春」部（1〜8）のうちの1・2・3を「年内立春」とし、それ以降の4〜8と区別している。雲紙本・関戸本・伊予切では「已上旧年 元方」と二行に亘り注されている（粘葉本では注記の一行目は剝落により二行目の「元方」

しか確認し得ない)。

② 31 忠岑(雲・関・粘・伊)

「忠岑」は雲紙本類・粘葉本類の四本に見られ、『拾遺集』・『拾遺抄』・『忠岑集』IVにも「忠岑」と書されている。当該作者について、『拾遺集』をはじめ、『拾遺抄』も忠岑歌としていいる事実によるしかないであろう(『忠岑集全釈』<sup>(注37)</sup>)。しかし、『忠見集』(Ⅰ・Ⅱ)・『三十人撰』・『三十六人撰』・『深窓秘抄』には「忠見」と書されている。

③ 228 丹比国人(雲・関・粘・伊)

『万葉集』巻八に「故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首」とあり、その三首のうち二首目に当該歌が配されているが、二首目は左注に拠ると丹比国人の歌ではなく、沙弥尼等の歌とある。丹比国人の歌はその前(二首目)に存する。雲紙本・粘葉本両類の「丹比国人」は『万葉集』の左注の誤認によるものかと思われる。

④ 499 漢書(雲・関・粘・伊)<sup>(注38)</sup>

『史記』(李斯列伝)に所収されており、関戸本・粘葉本・伊予切の注記「漢書」は誤りである。

⑤ 704 名明(雲・粘・伊)

ナシ(関)

『私注』では「王昭君 源英明」と書されているが、作者未詳である。『大系』に拠ると、雲紙本等の「名明」について、「あるいは誤写か」とされ、柿村重松氏も同様な見解を示された。<sup>(注39)</sup>

以上、雲紙本類にも粘葉本類にも誤謬かと思われる箇所は存しており、確認し得た範囲においては粘葉本類の方が雲紙本類よりも僅かながら誤謬の数が多いことが判明した。また、雲紙本・関戸本の注記の方が粘葉本・伊予切よりも詳細であることが確認された。

しかし、雲紙本類と粘葉本類との間に見られる内容に関わる異同箇所数は相対的に見て多いとはいえない。また、四本に

は(題詞・作者名記載等の)書式、内容の両面において共通性が確認された。

## 五

雲紙本類と粘葉本類との間に存する異同について、後に享受する側(書写者、含む)が改変したのもも混在するのかもしれない。しかしながら書写年代が十一世紀中葉であると推定されていることから、その全てが享受者側によるのではなく、本書中、指摘した誤謬の中にも、また実質的異同の中にも公任の手によるものが存すると考えられる。

粘葉本・伊予切に無い詩歌句をその両本によつて相互に補充すると八〇三首となり、雲紙本類に有り、粘葉本類に無いものは僅か一首(322)である。また、そこには無く、いずれかの平安時代書写とされる諸伝本にあるのは一二首であるが、それらはいずれも後人により追補されたかと思われる。すなわち、その一首(322)、及び当該一二首を除くと、今回調査し得た三〇種を超える諸伝本の詩歌句は前述した八〇三首に収まる。その諸伝本の数(三〇首を超える)、及び粘葉本類の書写年代を考え合わせると、公任原撰本の詩歌句数はその範囲内(前述した八〇三首に当該句(322)を加えた形(八〇四首))に止まる可能性が考えられる。

久曾神氏は、粘葉本類は雲紙本類に「追補」されたものであるという見方を示された。久曾神氏の所説が事実であるならば、(「関戸本に無い五首」<sup>(注40)</sup>を関戸本に加えた雲紙本と関戸本との集成本が仮にそこで採用されていたとしても)「追補」ということは雲紙本、関戸本に無い一五首を含め、雲紙本類の詩歌句が殆ど脱漏もなく書写されたことを意味する。

八〇〇首以上について、書き足す作業と、元となる詩歌句を書写する作業とを平行して成すことは撰者(公任)にとつても容易ではないはずである。実際、題・注記等に見られる誤謬は雲紙本類よりも粘葉本類の方が多し(その誤謬の全てが粘葉本類の書写者の手によるとは思えない)。そのことと粘葉本類が雲紙本類の詩歌句の殆どを有している(書落しが殆どない)ことは相反するように思われる。

題（目録・本文中）の付項目を有する箇所数については、雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも少なく、目録中の題と本文中の題との間に見られる異同箇所数も多い。また、雲紙本と関戸本とが一致する箇所数は多いものではない。その点においては久曾神氏が指摘されたごとく、雲紙本類の方が粘葉本類よりも「前のもの」であり、雲紙本類↓粘葉本類という順序によつて成つた可能性も考えられなくはない。ただし、雲紙本類に書き足された結果、粘葉本類が生成されたということであれば付項目が雲紙本・関戸本のいずれか一方にしか存しない場合については粘葉本類にそれらが書される場合、どのような方法によつたのかという疑問は残る。あるいは、親本レベルにおいてはそれらはほぼ一致していたということであろうか。

注記については雲紙本・関戸本の方が粘葉本・伊予切よりも詳細な傾向にある。注記という性格上、粘葉本・伊予切では意図的省筆がなされた可能性もある。しかし、前述した通り、粘葉本類には少なからず誤謬が確認された。従つて、仮に、雲紙本類↓粘葉本類という追補の流れが一部あつたとしても「初稿本」、「精撰本」とまではいえないのではなからうか。

なお、本考察結果に拠ると、四本間における題（目録・本文中）の異同箇所について、書式の面でも内容的にも別種とも取れる、かけ離れた要素は確認されなかつた。また、注記の書式についても両類では共通性を有しており、元々四本が深く関わつていたことを証する事例も確認された。

以上、詳細を語めていくと、粘葉本・伊予切・雲紙本・関戸本の四本に根源的繋がりがあつたことは確かであり、また、雲紙本類↓粘葉本類という繋がりがいくつか存していた可能性は十分考えられる。が、公任により雲紙本類、粘葉本類それぞれの親本が作られた可能性もあり、その場合、撰集の基本となるはずの詩歌句、及び題の選定がなされ、雲紙本類・粘葉本類の共通の基盤（本書中、原形と仮称する）がまず作られたのではなからうか。そこから詩歌句等が削除され、本文・注記等が検討された上で雲紙本類の親本が作られたと解すればこれまで述べてきたこととの間に矛盾は感じられない。しかし、雲紙本類に「追補」された結果のものが粘葉本類であり、「初稿本」から「精撰本」へと一元的成長を遂げたという捉え

方には違和を覚える。

注

- (1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷「平成2年 講談社」P 415・420
- (2) 書写年代はそれより下る可能性もあり得るが、その場合、十一世紀後半が下限であろう。名兎耶明氏著『書の見方―日本の美と心を読む』「平成20年 角川学芸出版」P 111参照。
- (3) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』「昭和56年 大学堂書店」P 21
- (4) 前掲〔注3〕P 314
- (5) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』「平成7年 勉誠社」P 206
- (6) 前掲〔注5〕に同。P 136
- (7) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』「昭和55年 ひたたく書房」P 189・P 195、197
- (8) 堀部正二氏に拠ると、「後人の追補が漸次に行はれるやうになつたのは、ほゞ平安朝後期より以降、鎌倉期へかけての風と思はれる」とされた〔前掲〔注3〕P 314〕。
- (9) 卷子本・葦手本が「再稿本」であるという点についても首肯し難く思われる（本書〔第三章〕中、詳述する）。
- (10) 記述中、「の次」とは「新編国歌大観」に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは796の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (11) 92の次・323の次・344の次・376の次・422の次・434の次・652の次・678・735の次・736の次・796の次・803の次。
- (12) 右掲二首のうち、三首（344の次・735の次・803の次）を除く八首について、堀部氏は「公任原撰本には存しなかつたものであらうと思はれる」等と述べられた〔前掲〔注3〕に同。P 316〕が、その三首（344の次、735の次、803の次に存する句）についても「後人に

よる追補」であると思われる。下絵切、雲紙切、山城切がそれぞれ有している。その三本の書写年代について小松茂美氏は以下のよう述べられた。下絵切は「十二世紀はじめ」とされ、雲紙切は「十一世紀ないしは十二世紀はじめ」とされ、山城切は「一二二〇年代」の書写と推定された（小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷P.370・384、前掲〔注1〕に同〔P.402〕）。

(13) 前掲〔注3〕に同。P.316

(14) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』〔昭和14年岩波書店〕P.14・15

(15) 前掲〔注7〕に同。P.190

(16) 雲紙本、関戸本のうち、雲紙本のみが無いのは三八首、関戸本のみが無いのは五首、雲紙本・関戸本に無いのは一五首。

(17) 三木雅博氏が述べられた通り、雲紙本・粘葉本両類の「『一つ前の段階』の本文とは、時代的に考えて公任の原撰本文にきわめて近い時代のものであり、あるいは公任の撰した本文そのものである可能性もかなり高いと思われる」（前掲〔注5〕P.136）。

(18) 付項目とは、例えば事例△冒頭の「子曰<sup>付若菜</sup>」における「若菜」を指す。「付」の後に続く当該題関連の題のことを付項目と呼称する。

(19) 雲紙本、「梅<sup>付紅梅</sup>」。ただし、「付紅梅」、別筆。

(20) 雲紙本、「紅葉<sup>付落葉</sup>」。ただし、「付落葉」、別筆。

(21) 雲紙本、「氷<sup>付春氷</sup>」。ただし、「付春氷」別筆。

(22) 雲紙本、「氷<sup>付春氷</sup>」。ただし、「付春氷」別筆。

(23) 雲紙本、「仙家<sup>付道士隱倫</sup>」。ただし、「付道士隱倫」、別筆。

(24) 雲紙本、「親王<sup>付王孫</sup>」。ただし、「付王孫」、別筆。

(25) ここでは雲紙本と伊予切との間に異同があり、付項目を有する例は雲紙本には無いということを意味する。以下、同。

(26) 雲紙本、「躑躅」。

(27) 雲紙本、「八月十五夜<sup>付月</sup>」。ただし、「八月」、別筆。

- (28) 雲紙本、「雪 水付春水」。ただし、「付春水」、別筆。
- (29) 前掲(注3)に同。P 322
- (30) 「同」・「同上」等の表記により前の詩歌句と同一の内容を示すものもこの中に含めた。
- (31) 三木雅博氏訳注『和漢朗詠集 現代語訳付き』〔平成25年 角川学芸出版〕P 84
- (32) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』72〔昭和41年 岩波書店〕P 104
- (33) 後藤昭雄氏のご教示に拠る(島津忠夫・日比野純三両氏編著『未刊国文資料第四期』第六冊〔昭和51年 未刊国文資料刊行会〕P 45・47)。
- (34) 前掲(注32)に同(P 202)。大曾根章介・堀内秀晃両氏校注『新潮日本古典集成』61〔平成5年 新潮社〕P 369
- (35) 前掲(注31)に同。P 363
- (36) 島田良二氏著『平安前期私家集の研究』〔昭和43年 桜楓社〕P 397
- (37) 藤岡忠美・片山剛両氏校注・訳『忠岑集注釈私家集注釈叢刊9』〔平成9年 貴重本刊行会〕P 313
- (38) 雲紙本、別筆。
- (39) 前掲(注32)に同(P 231)。柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕卷下 P 283
- (40) 前掲(注16)に同。
- (41) 前掲(注16)に同。
- (42) 前掲(注7)に同。P 194





## 第三章

## 第一節 安宅切の位置

### 一

安宅切の名称は、安宅家という旧蔵者に因むものかともされているが、確証はなく、その由来は不明である。『新撰古筆名葉集』の「權大納言行成卿」の項には、「安宅切朗詠卷物金銀下画哥二行書」とあるが、古来、書写者は、藤原行成、藤原公任、源俊頼とさまざまに伝称されている。

安宅切の書写者について、小松茂美氏は、「藤原伊房の筆と推定される〈藍紙本万葉集〉「二卷、京都国立博物館蔵ほか」や〈十五番歌合〉「一卷、前田育徳会蔵ほか」などの書風に一派通じる雰囲気があり、定信が「この〈安宅切〉の筆者ではなかったか」とされた。また、春名好重氏も、「〈安宅切〉の書風は藤原伊房の書風を継承したものであり、伊房の書跡と認められている〈藍紙本万葉集〉の書風に類している」とされ、飯島春敬氏も、「伊房の書と判定される男性的な書風をやや穏やかにしたもので、これはその漢字の特徴からも、伊房系に属する名手によって書写されたものと思われる。藍紙万葉、大色紙、西本願寺三十六人集重之集などがあるが、本書もその系列に入る書風である」とされた。藤原伊房と藤原定信の書が類似しているということは通説となつているが、安宅切の書に関する先学のご論は、藤原伊房や藤原定信の書風に類しているという点において一致している。<sup>(3)</sup>

安宅切の料紙は、雲紙・染紙に素紙を交え、「全面に金・銀の砂子・切箔・野毛を撒き」<sup>(4)</sup>、「上・中・下段に、交互に金泥および銀泥で横に細長く土坡を、それに沿つて草叢を描き、中に飛び交う小鳥を金泥で加え」<sup>(5)</sup>た美術的なもので、「書写年代は、十二世紀の初頭」<sup>(6)</sup>と推定されている。

書・料紙については如上のごとく見解が示されているものの本文については堀部正二氏が「未だ系統を知り得ない」<sup>(7)</sup>とされ、不明であることから安宅切の形態・本文について検討を行った。以下、その考察結果について述べる。

はじめに、安宅切の現存状況について述べる。

小松茂美氏は『古筆学大成』<sup>8)</sup>において、断簡五葉・零本一卷を収められた。その断簡を(1)〜(5)、零本を(6)とし、詩歌番号順に纏めると次の通りである。

(1) 東京国立博物館所蔵<sup>9)</sup>

613 ・ 614 ・ 615 ・ 616 ・ 618 ・ 619 ・ 620 ・ 622 ・ 623 ・ 624 ・ 625 ・ 626

(2) 高松宮家旧蔵

631 ・ 632 ・ 633 ・ 634 ・ 635 ・ 636 ・ 637 ・ 638 ・ 639

(3) 陽明文庫所蔵

650 ・ 651 ・ 652 ・ 652の次<sup>10)</sup>

(4) 宮内庁所蔵

655の後部 ・ 656 ・ 657 ・ 658 ・ 659の前部

(5) 白鶴美術館所蔵

703 ・ 704 ・ 705 ・ 706

(6) 宮内庁所蔵

653 ・ 654 ・ 655の前部 ・ 659の後部 ・ 660 〳 663 ・ 674 〳 677 ・ 679 〳 702 ・ 707 〳 796 ・ 796の次 ・ 798 ・ 799 〳 804

右掲(6)には、「655の前部」と「659の後部」の間、及び、702と707の間に、切り継ぎ、あるいは紙継ぎの跡と思しき線が見て取れる。655・659は、一首中、切断されており、便宜上、「655の前部」・「659の後部」としたが、この「655の前部」と「659の後部」の間に位置する五首(655の後部・656・657・658・659の前部)は右掲(4)の断簡に当る。また、702と707の間の四首(703・704・705・

706) は右掲(5)の断簡に当る。従つて(4)・(5)の断簡は(6)から切り取られたと考えられる。また、663と674の間にも切断の跡と思しき線がみられるので、664から673までの部分も切り取られたものと思われる。

なお、右掲(1)の断簡の、616と618の間、及び620と622の間には、紙継ぎなどの跡は見当たらないので、617・621は、元来、安宅切には存しなかつたとみてよいのではなからうか。

以上を整理すると、安宅切では『和漢朗詠集』巻下の後半部の、和歌三三、漢詩一三四、合わせて一六六首が現存しているといえる。

平安時代の書写とされる諸伝本を通じて知られる詩歌句を集成すると、八一五首となり、『和漢朗詠集』全体からすると安宅切には二〇%弱が存していることとなる。

### 三

形態的な面から考察を行う。

安宅切の現存する範囲内において、平安時代の書写とされる諸伝本のうち、ある詩歌句がいずれかの伝本に無い場合を全て挙げる。詩歌番号を挙げ、その詩歌句が無い場合は「無」とし、ある場合は「有」として括弧内には伝本の略号を示す。

#### ① 615 無(雲)

有(安・関・粘・伊・久・唐1・卷・下・山・戊・葦)

#### ② 617 無(安・卷)

有(雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戊・葦)

#### ③ 618 無(雲)

有(安・関・粘・法・伊・久・卷・山・戊・葦)

④ 621 無(安・卷)

有(雲・関・粘・伊・久・山・戌・葦)

⑤ 636 無(雲)

有(安・関・粘・近・伊・久・卷・益・山・戌・葦)

⑥ 652 の次無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戌・葦)

有(安・卷・定大)

⑦ 657 無(雲)

有(安・関・粘・近・伊・久・卷・下・山・定大・戌・葦)

⑧ 663 無(雲)

有(安・関・雲切・粘・近・伊・久・唐1・卷・太・山・戌・葦)

⑨ 677 無(雲)

有(安・関・粘・近・伊・久・卷・山・戌・葦)

⑩ 678 無(安・雲・関・粘・近・伊・久・卷・山・戌・葦)

有(久)<sup>11</sup>

⑪ 684 無(雲)

有(安・関・粘・近・伊・久・卷・太・多・戌・葦)

⑫ 699 無(近)

有(安・雲・関・粘・伊・久・卷・太・山・戌・葦)

⑬ 701 無(関)

有(安・雲・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊・葦)

⑭ 703 無(雲)

有(安・関・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊・葦)

⑮ 712 無(雲・関)

有(安・粘・近・伊・久・卷・山・戊・葦)

⑯ 714 無(雲・関)

有(安・粘・近・伊・久・卷・山・戊・葦)

⑰ 729 無(雲・関)

有(安・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊・葦)

⑱ 735 の次無(安・雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

有(雲切)

⑲ 736 の次無(安・雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・多・戊・葦)

有(山)

⑳ 738 無(葦)

有(安・雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊)

㉑ 739 無(葦)

有(安・雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊)

㉒ 740 無(葦)

有(安・雲・関・雲切・粘・近・伊・久・卷・太・山・戊)

②3 741 無(葦)

有(安·雲·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·多·戊

②4 742 無(葦)

有(安·雲·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·多·戊

②5 743 無(葦)

有(安·雲·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·多·戊

②6 744 無(葦)

有(安·雲·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·多·戊

②7 745 無(葦)

有(安·雲·閔·粘·近·法·伊·久·卷·太·山·戊

②8 756 無(雲)

有(安·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·戊·葦)

②9 757 無(卷)

有(安·雲·閔·粘·近·法·伊·久·太·山·戊·葦)

③0 760 無(雲)

有(安·閔·粘·近·伊·久·卷·太·山·多·戊·葦)

③1 784 無(雲·閔)

有(安·粘·近·伊·久·卷·太·益·山·戊·葦)

③2 785 無(近)

有(安・雲・関・粘・伊・久・卷・太・益・山・戊・葦)

③③ 796の次無(粘)

有(安・雲・関・近・法・伊・久・卷・太・益・山・戊・葦)

③④ 797無(安・雲・関・卷・太・戊・葦)

有(粘・近・伊・久・益・山)

③⑤ 803の次無(安・雲・関・粘・近・法・伊・久・卷・太・益・多・戊・葦)

有(山)

③⑥ 804無(近)

有(安・雲・関・粘・法・伊・久・卷・太・益・山・多・戊・葦)

右の三六項目において、安宅切と諸伝本(略号で示す)との対照箇所数を上段に、安宅切との一致する箇所数を下段に各々示し一覧表にすると次の表のごとくである。

本表は、対照箇所数が比較的多いものについて述べる。



【詩歌句の有無調査結果】

唐1	久	伊	法	近	粘	雲切	関	雲	略号
2	36	36	7	31	36	3	36	36	対照箇所数
1	32	32	6	26	31	2	28	19	一致する箇所数

葦	戊	定大	多	山	下	益	太	卷	略号
36	36	1	10	35	3	7	25	36	対照箇所数
25	33	1	10	29	2	6	25	35	一致する箇所数

安宅切と卷子本とは三六項目のうち三五項目が一致していることが知られる。しかも、そのうちの二項目(②・④)は安宅切と卷子本のみ共通する事象である。また、逆に、両本が、定信筆大字切とともに、「後人の加筆」<sup>(12)</sup>とされている一首(⑥)「伊可天難遠人二裳登者むあやしきはお毛盤ぬな可能えさ類ましきは」を共有しているという点は注目すべきである。これに対して、安宅切と卷子本唯一の相違箇所(⑳)は、卷子本のみにみられない詩句であり、卷子本での欠落である可能性が高いと考えられる。

次に、排列についても前項「詩歌句の有無」で行ったことと同様に安宅切に現存する範囲内において、他の伝本の安宅切との異同を全て挙げる。

① 615・616・618・619・620・622(葦・卷)

616・617・619・620・621・622(雲)

615・616・617・618・619・620・621・622(関・粘・伊・戊・葦)

616・617・618(法)

615・618・619・620・621・622・616・617(久)

615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部(山)

615・616・617(唐1・下)

619・620(多)

② 631・632・633・634・635・636(葦・関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)

631・632・633・634・635(雲)

- ⑨ 746 · 747 (安) · 雲 · 関 · 粘 · 近 · 伊 · 卷 || 太 · 山 · 俊和 · 戊 · 葦  
 743 · 742 · 744 (多)  
 742 · 743 · 744 (山)
- ⑧ 742 · 743 · 744 (安) · 雲 · 関 · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 || 太 · 戊  
 730 · 729 (山)
- 730 (雲 · 関)
- ⑦ 729 · 730 (安) · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 || 太 · 戊 · 葦  
 728 · 726 · 727 (久)
- ⑥ 726 · 727 · 728 (安) · 雲 · 関 · 粘 · 近 · 伊 · 卷 || 山 · 戊 · 葦  
 702 (関)
- 702 (雲)
- ⑤ 701 · 702 (安) · 粘 · 近 · 伊 · 久 · 卷 || 太 · 山 · 戊 · 葦  
 687 · 686 (久)
- ④ 686 · 687 (安) · 雲 · 関 · 粘 · 近 · 伊 · 卷 || 太 · 多 · 戊 · 葦  
 656 · 655 (久)
- ③ 655 · 656 (安) · 雲 · 関 · 粘 · 近 · 伊 · 卷 || 下 · 山 · 多 · 戊 · 葦  
 633 · 634 (益) · 635 · 636 · 632 · 633 · 634 (久)

747・746 (久)

⑩ 754・755・756 (安)・関・粘・近・伊・巻<sub>レ</sub>・太・山・戊・葦

754・755 (雲)

755・756・754 (久)

以上の排列の揺れから、久松切・山城切・雲紙本等の独自性が知られるが、それはさておき、安宅切は卷子本と全て一致していることが確認される。従って、形態的には、前述した「詩歌句の有無」における考察結果と合わせみると、安宅切は卷子本と近い関係にあるとみることができる。

## 四

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

安宅切の本文を諸伝本と対照してみると、安宅切独自の本文数は、和歌…一四か所、漢詩…四三か所である。そしてその部分においては次に示すごとく杜撰な本文が目立っている。

## \* 和歌

① 脱字と思しき箇所…四か所 (693・718・732・789)

② 衍字と思しき箇所…四か所 (652・693・705・764)

## \* 漢詩

① 脱字と思しき箇所…一八か所(613・614・615・619・620・625・674・685・691・706・719・720・728・736・744・746・754・757)

② 衍字と思しき箇所…九か所(622・656・660・709・753・758・782・783・785)

③ 転倒と思しき箇所…二か所(742・744)

④ 字形の類似(偏傍冠脚などの文字成分が共通している場合も含む)に因る誤認と思しき誤写…一一か所(618・658・698・714・731・738・752・779・782・793・799)

以上のごとく、安宅切には、誤字、脱字、衍字と目される本文が甚だしく多いのである。

また、安宅切を除く諸伝本の独自本文については、たとえば、

◆620都府楼「看瓦色観音寺只聴鐘聲

における当該(傍線)箇所は、諸伝本(雲・関・粘・伊・久・安・山・多・戊・葦)では「纒」とあり、それに対して卷子本では「纒」を脱しているが、この事例のごとく諸伝本が同文であるのに対して、ある一本のみが異文である場合を検討してみると、ある一本の本文は、誤字、脱字と目されるケースが圧倒的に多いものである。

安宅切と諸伝本との本文関係の概要について調査するに当たり、安宅切の現存する本文が『和漢朗詠集』全体の約二〇%のみで、諸伝本との対照し得る箇所数が僅かであることから、安宅切、及び諸伝本の誤字、脱字と目される本文をそのまま対照し、実質的異同と同レベルで扱う方法では本質を見誤るおそれがあると考えた。漢詩は一文字、和歌は一句を単位として異同調査を行い、安宅切と諸伝本との本文の異同関係を数値で示したものが次の【本文異同調査結果】であるが、表の作成に当たってはそれらのことを考慮して以下の方針によることとした。

安宅切については安宅切のみにみられる本文は対象外とした。

安宅切を除く諸伝本については、そのうちの一本が他の諸伝本に対して異文を有し、かつ、その他の諸伝本の全てが安宅切と同文である場合については対象外とした。

【本文異同調査結果】

葦	戊	多	山	益	太	卷	久	伊	法	近	粘	関	雲	略号	
														対照箇所数	和歌
21	21	4	20	10	16	22	21	20	11	18	21	21	20	対照箇所数	和歌
19	15	3	7	9	12	17	16	17	8	12	16	7	8	同文箇所数	
69	76	19	72	20	3	75	76	76	23	71	76	75	72	対照箇所数	漢詩
45	45	8	35	13	3	67	44	40	10	37	38	29	26	同文箇所数	

同表によると、和歌においては、安宅切に現存する和歌は三三首であり、諸伝本との対照箇所数は僅かではあるが、葦手本とは、対照箇所数二二か所のうち一九か所が一致しているということが知られ、その異同箇所は次の二か所のみであった。安宅切の本文を載せ、異文箇所には傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

① 639としことの春の別をあはれともひとにおくる、人そしるらむ(安)

〈異〉ひとそしりける(雲・関・粘・近・伊・久・卷・山・戊・葦)

〈同〉人そしるらむ(益)

② 733いつくにかみをはよせましよのなかにおいをいとぬひとのなけれは(安)

〈異〉ひとしなけれは(粘・近・伊・久・山・戊・葦)

〈同〉ひとのなけれは(雲・関・卷)

右掲①は、西本願寺本『元真集』<sup>(13)</sup>・『前十五番歌合』<sup>(14)</sup>・『深窓秘抄』<sup>(15)</sup>・『金玉集』・『三十六人撰』に「としことのはるのわかれをあはれともひとにおくるひとそしりける」とあるように、歌意からしても「人そしりける」とあるべきところである。また、②も、『撰集抄』<sup>(16)</sup>第八「為頼歎老苦」では、粘葉本等の「ひとしなけれは」であり、安宅切の本文は転化したものと思われる。

葦手本に次いで同文箇所割合の多い伊予切との異文箇所は三か所で、それは右掲①②、及び、右掲①の第一句目で、安宅切が「としこと」であるのに対して、伊予切では、粘葉本・近衛本とともに助詞一字の異文をもち、「としこと」とある。

以上、安宅切と近い本文をもつ葦手本・伊予切との異文箇所には、一方の誤写によって異なっているところがあると思われる、安宅切との関係は、本質的にはさらに近いものであったとみてよいのではなからうか。

次に、漢詩においては、前掲の本文異同調査表によると、安宅切と卷子本との本文関係は、対照し得る箇所七五か所のうち六七か所もの同文箇所が認められた。さらに、安宅切と卷子本とは二本間においてのみみられる本文をも有している。その全例を挙げると次の通りである。安宅切の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、安宅切・卷子本の文字を挙げ、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。項目ことに\*印を付し、他の文献も載せる。

① 650年長每勞推甲子夜寒初無守庚申(安)

〈異〉共(雲・関・粘・近・伊・久・山・益・多・戊・葦)

〈同〉無(卷)

\*『全唐詩』許渾八「贈王山人」。当該箇所、「共」。

② 658仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰溯變作瀨之音寂、関口沙長為巖之頌洋々満耳(安)

〈異〉聲(雲・関・粘・近・法・伊・久・山・戊・葦)

〈同〉音(卷)

\*『古今和歌集』真名序。当該箇所「聲」。

③ 660布政之庭風流未必敵<sup>(1)</sup> 崑閩兼之此地也好文之<sup>(2)</sup> 德化未必光到于黄炎兼之者我君也(安)

〈異〉(1)於(雲・関・粘・近・法・伊・久・山・多・戊・葦)

〈同〉ナシ(卷)

〈異〉(2)世(雲・関・粘・近・法・伊・久・多・戊・葦)

代(山)

〔同〕 ナシ(卷)

\*『本朝文粹』<sup>18</sup>卷十「暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光水上浮底製」。当該箇所、(1)ナシ、(2)「代」。

④ 677 西京席門便是陳丞相之舊宅南山芝潤寧非袁司徒之幽栖(安)

〔異〕 乃是(関・粘・近・伊・久・葦)

豈非(山)

非乃(戊)

〔同〕 便是(卷)

\*『本朝文粹』卷五「為清慎公辞右大臣第三表」。当該箇所、「豈非」。

⑤ 727 少於樂天三年猶已衰<sup>(1)</sup> 齡也遊于勝地一日非是老<sup>(2)</sup> 幸哉(安)

〔異〕 (1)之(雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

〔同〕 ナシ(卷)

〔異〕 (2)之(雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

〔同〕 ナシ(卷)

\*『本朝文粹』卷九「暮春藤垂相山庄尚齒會詩」。当該箇所、(1)「之」、(2)「之」。

⑥ 759 齡垂顏駟過三代而猶沈恨同伯鸞歌五意而將去(安)

〔異〕 噫(雲・関・粘・近・伊・久・太・山・多・戊・葦)

〔同〕 意(卷)

\*『本朝文粹』卷十「初冬同賦紅葉高窓雨」。当該箇所、「噫」。

⑦ 770 銀魚腰底辞春浪綾鶴衣間帶曉風(安)

〔異〕舞（雲・関・雲切・近・伊・久・太・益・山・戊・葦）

曳（粘）

〔同〕帯（卷）

⑧ 799 秦皇驚歎燕丹之吉日烏頭漢帝傷嗟蘇武 来時鶴髮（安）

〔異〕之（雲・関・粘・近・法・伊・久・太・益・山・戊・葦）

〔同〕ナシ（卷）

⑨ 802 蘆洲月色随潮滿葱嶺雲膚与雲連（安）

〔異〕雪（雲・関・粘・近・法・伊・久・太・益・山・多・戊・葦）

〔同〕雲（卷）

右掲①は、「王山人と庚申を守つて夜を明かした」の意であるから、安宅切・卷子本の「無」は誤写である。諸伝本のごとく「共」とあるべきところに「無」とあるのは、次に例示することく、書体が行草体などに崩れた際、「無」と「共」の字形が類似することに因るのではなからうか。<sup>20)</sup>

「無」



「共」



また、前掲③の当該箇所②では、村上天皇の御代をさすので、安宅切・卷子本の「好文之」では意味が通らない。⑧についても、「燕丹之去日烏頭」（安宅切、「去」を「吉」とする）と「蘇武之来時鶴髮」とは対応しており、安宅切・卷子本の「蘇武来時鶴髮」では「之」が脱落している。また、⑦については、「銀魚」は「束帯の腰に帯びる」ものであるので、安宅切・卷子本の「帯」はその連想による誤写か、あるいは、「帯」と「舞」とは、次に載せることく、書体が崩れると上部の字形が類



似するため、誤って書したことによるのか、誤写に到ったその要因については想像の域を出ていない。

「帯」  
  
 「舞」  


⑨についても、「白雲が山々の白雪と相連なっている」という意であるので、当該箇所は諸伝本のごとく「雪」とあるべきで、安宅切・卷子本の「雲」は誤写による本文である。

以上のごとく、安宅切と卷子本の二本にのみみられる、いわゆる共通異文例の中には、両本の関係の近さを特徴的に示す箇所もあるが、卷子本を諸伝本の本文と対照してみると、卷子本一本のみが脱していると思われるのは四七か所である。また、前掲①のごとき字形の類似に因る誤認かと思われる誤写、及び、前掲⑨のごとき偏傍冠脚などの文字成分が共通した別字となっているのは五九か所である。また、たとえば、743「往事」とあるべきところに「往年」とあるなど、上下の文字からの連想により別の語に転化したように取れる独特な本文もみられ、卷子本では、不用意な書写による誤謬と思しき漢詩本文が諸伝本中最も多いといえる。そこには卷子本も、安宅切と同様、能筆家により、美麗な料紙を用い、美的観点に配慮して書写された作品で、安宅切・卷子本の制作上の意図には、本文内容の正確さよりむしろその点に重きがおかれていたという事情があったものとみられる。このように、安宅切は、錯誤とみられる本文を卷子本と共有しており、この卷子本の独自色に注目すると、安宅切と卷子本との本文関係は、前掲の本文異同調査表における数値上よりも実質的にはさらに近くなることが予想される。また、独自本文を多くもつ安宅切が誤謬本文の多い卷子本と近く、しかも特異な本文を共有していることは、両本が極めて近い関係にあつて、その成り立ちに深い関係があることを物語っているといえよう。

一方、卷子本に次いで近い関係にあると考えられる葦手本との同文例については、724「眠」とあるべきところに、安宅切・葦手本では誤写と思しき「眼」があり、625「西」とあるべきところに、安宅切・卷子本・葦手本の三本では「西」が脱落して

いることなどが挙げられる。

また、安宅切とのみ同文箇所を有する場合については、前掲の益田本(639「人そしるらむ」)「諸伝本「人そしりける」」、久松切(619「棹」)「諸伝本「舳」など」・652「いほやさきたつ」)「諸伝本「いをやさきたつ」」、太田切(794「臥」)「諸伝本「朽」」などがある。益田本の書写年代は、「十一世紀後半」<sup>24</sup>、また、久松切は「一二世紀はじめ」<sup>25</sup>、太田切は「一一世紀半ばすぎから後半にかけて」<sup>26</sup>の頃の書写とされており、安宅切とは同時代、あるいは安宅切よりもやや遡るものである。これらの伝本と安宅切との関係について考える上で次のごとき異同が挙げられる。安宅切の本文を載せ、その部分に傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

① 57 范蠡責棹扁舟而逃名謝安辞功鞭孤雲而養志(安)

〈異〉臥(雲・関)

伏(粘・近・法・伊)

〈同〉鞭(久・山・太・戊・葦)

② 780 行宮見月傷心色夜雨聞猿腸断聲(安)

〈異〉断腸(雲・関・粘・近・法・伊・久・卷・戊・葦)

〈同〉腸断(太・益・山)

右掲①は、十一世紀中葉の書写本では「臥」・「伏」とあるのに対して、安宅切などでは「鞭」で、『本朝文粹』巻四「為貞信公辞撰政第三表 後江相公」でも「鞭」とある。「鞭」については、堀部正二氏により、「平安朝後期より漸次変形転訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」とされた本文である。また、②の安宅切の本文についても、『白氏文集』巻十二「長恨歌傳 前進士陳鴻撰」と合致している。そこは堀部氏が山城切の本文について論じられた際、「特異のものとして本文批評上重要視すべき」<sup>28</sup>とされた箇所である。十一世紀中葉以降、十二世紀頃には校訂が行われていた可能性が考えられる。

以上、諸伝本間における安宅切の位置をめぐる考察を行った結果、安宅切は卷子本と極めて近い関係にあることが明らかとなり、また、葦手本とも和歌においては同文箇所を多く有しており、漢詩においても安宅切と葦手本の二本間においてのみみられる本文が認められた。

安宅切と比較的書写年代の近い、久松切・太田切・益田本との関係も注目される。

世尊寺家の伊房・定信風の筆とされている卷子本と伊行筆の葦手本の本文とは近い関係にあり、また、葦手本は唐紙切2とも近く、戊辰切とも類同的であるといえる<sup>(29)</sup>。先学の研究によると、唐紙切2が伊房の手になるという説もあり、また、戊辰切は巻上が定信筆、巻下が伊行筆ともされている。

安宅切は、現存する分量が少なく、詳らかにし得ないところも多々あるが、如上のごとき内容からみて、やはり、世尊寺家及びその周辺に継承された伝本の流れを汲む一本であると考えられる。

なお、定信筆大字切も現存する断簡が、横写<sup>(30)</sup>一葉を含め、七葉に限られ、その本文系統の推定は極めて難しい。しかし、世尊寺家の定信の真筆とされており、定信筆大字切も安宅切・卷子本とともに後人の加筆とされている「いかてなほ」<sup>(31)</sup>歌を共有している点など、この一系に属すと考えてよいと思われるもののあることを感じる。

## 注

- (1) 小松茂美氏解説『日本名跡叢刊』83〔昭和59年 講談社〕P 79
- (2) 古谷稔氏「藤原伊房」(東京国立博物館編『ミュージアム』一六九号〔昭和40年 美術出版社〕)。
- (3) 森田子龍氏編『墨美』第一六六号〔昭和42年 墨美社〕P 41・飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第七卷〔昭和61年 書藝文化新社〕P 216
- (4) 森田子龍氏編『墨美』第一六六号〔昭和42年 墨美社〕P 41

- (5) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 338
- (6) 前掲(注5)に同。P 339
- (7) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』「昭和56年 大学堂書店」P 37
- (8) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 339
- (9) 〔1〕東京国立博物館所蔵の断簡は、藤原定信の真筆とされる。詩書切(出典不明)と合わせて「二巻の巻物に仕立て」られており(前掲(注5)に同。P 336・337)、冷泉為恭(一八三一一一八六四)の旧蔵。堀江知彦氏「為恭の執念―行成かな消息と詩書切・安宅切にからむ―」(東京国立博物館編『ミュージアム』二一九号「昭和36年 美術出版社」)に詳しい。
- (10) 記述中、「の次」とは、『新編国歌大観』には無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは652の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (11) 久松切、別筆。久松切「書写完成の直後、これを掌中した別人が、みずから加えたもの」(『古筆学大成』第一三卷P 428)とされる。
- (12) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』「昭和14年 岩波書店」P 13〜15
- (13) 『私家集大成』による。
- (14) 『前五番歌合』・『金玉集』・『三十六人撰』は久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊「昭和2年 古典文庫」による。
- (15) 『深窓秘抄』は古谷稔氏解説『日本名筆選2 深窓秘抄 伝宗尊親王筆』「平成5年 二玄社」による。
- (16) 安田孝子氏ほか編著『撰集抄―校本篇―』「昭和54年 笠間書院」による。
- (17) 伝藤原佐理筆「筋切・通切、一敷」(『古筆学大成』第二巻)。
- (18) 柿村重松氏註『本朝文粹註釋』上・下「昭和43年 富山房」による。
- (19) 児玉幸多氏編『くずし字解読辞典 普及版』「平成5年 東京堂」による。
- (20) 79にも「共」とあるべきところに安宅切一本では「無」とある。

- (21) 前掲(注19)に同。
- (22) 285・410・422・588・670・743など。
- (23) 前掲(注5)に同。 P 347
- (24) 前掲(注1)に同。 P 362
- (25) 小松茂美氏著『古筆学大成』第三卷「平成2年 講談社」 P 427
- (26) 前掲(注5)に同。 P 358
- (27) 前掲(注7)に同。 P 323
- (28) 前掲(注7)に同。 P 331
- (29) 拙稿「葦手本の位置」(本書「第三章第三節」)・「戊辰切の位置」(本書「第三章第四節」)において述べる。
- (30) 冷泉為恭(二八三—一八六四)の手になる。前掲(注5)に同。 P 397
- (31) 安宅切・卷子本では、652の次に位置する『新編国歌大観』には無く、無番号。

〈付記〉

安宅切の複製本一帖(前掲「(6)宮内庁御物」の零本一卷に当る部分)の閲覧に際しまして、宮内庁書陵部の方々にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

## 第二節 卷子本の位置

### 一

卷子本は巻上・下、二軸の卷子本に仕立てられているためこのように称されている。藤原公任（九六六—一〇四一）筆と伝称されているが、同筆または同書風とされている作品には、本願寺本三十六人家集の清正集・重之集、及び伝藤原公任筆堺色紙・同大色紙・同小色紙があり、実際の書写年代は十二世紀はじめ頃と推定されている。<sup>(1)</sup> その書は、運筆が速く、「緩急抑揚の変化」<sup>(2)</sup>があり、「伊房や定信の書に気脈を通じて」<sup>(3)</sup>いる。巻上には万葉仮名が多用され、宣命書きも用いられており、「漢詩の書写形式に融合させるべき顧慮が払われ」<sup>(4)</sup>たものと思われる。また、巻下では巻上に比して「字母の複用が著しく減じて」<sup>(6)</sup>いる。仮名においては巻上と巻下とは用字法、書き振りが異なるが、「変化を求めて、書の美をあらわすことにつとめた」<sup>(7)</sup>ことに因るのである。

料紙は唐紙・厚様（比較的厚手の紙）・雲紙（飛び雲交用）・染紙・金銀装飾紙など、「十三種」に「分類することができる」<sup>(8)</sup>。「いずれも表裏両面に装飾技巧をほどこした、実に華麗なもの」<sup>(9)</sup>であり、料紙からも装飾性の高さが窺い知られる。<sup>(10)</sup>

かつて、堀部正二氏は平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本を、主に、本文の近似関係より、

- (1) 御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの：粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切
- (2) 關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本
- (3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

に分けられ、卷子本を「關戸家本等の一類に近いものではあるが、必ずしも善本とは稱し難いやうである」<sup>(11)</sup>とされた。一方、久曾神昇氏は、主に形態的な面から、

**甲類** 雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と卷子本・葦手本の一類に分類）

〔乙類〕 粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

のごとく、二類に分けられた。堀部・久曾神両氏は、(1)・〔乙類〕には粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切を、(2)・〔甲類〕には雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本を挙げられ、卷子本を(2)・〔甲類〕に分類され、(1)・〔乙類〕とは別類のものとして位置付けられた。また、久曾神氏は、「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」と推測された。そして、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とされ、〔甲類〕の雲紙本・関戸本を「初稿本」、卷子本・葦手本を「再稿本」、〔乙類〕の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。<sup>(13)</sup>

著者は、本書(前節)中、堀部正二氏が「未だ系統を知り得ない」とされた安宅切を取り上げ、その性格について検討を行った。その結果、安宅切は卷子本と近い関係にあることが確認された。本節では、その考察結果を踏まえ、諸伝本間における卷子本の位置、及びその性格について述べる。

## 二

まず、形態的な面から考察を行う。

詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である(ここでは断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する)。

337・17  
344の次・42  
347・82  
348・90  
354・91  
363・92の次<sup>(15)</sup>  
369・107  
376の次・109  
380・115  
407・120  
422の次・178  
434の次・194  
449・215  
459・225  
468・237  
472・246  
476・249  
482・257  
489・268  
507・271  
518・313  
534・321  
・322  
・323の次  
・330

701・535  
 703・542  
 712・547  
 714・549  
 729・551  
 735の次・556  
 736の次・561  
 738・564  
 739・584  
 740・596  
 741・598  
 742・601  
 743・603  
 744・615  
 745・617  
 756・618  
 757・621  
 760・629  
 760・636  
 760・652  
 784・の次  
 785・657  
 796の次・663  
 797・677  
 803の次・678  
 804・684  
 699・

右のうち、脱落または追補である可能性が考えられるいずれか一本のみが他本と異なる場合を除く（有る場合も無い場合も  
 独自事象は除く）と次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」として示し、諸伝本の略号を  
 括弧内に挙げる。

① 17有（雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦）

無（卷・戊）

② 42有（卷・粘・伊・久・下・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

③ 215有（粘・伊・久・山・多・戊）

無（卷・雲・関・葦）

④ 268有（卷・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（雲・関）

⑤ 313有（雲・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（卷・関・和1）

⑥ 321有（卷・行大・粘・伊・久・唐2・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

⑦ 322有（卷・行大・雲・関・久・和1・山・多・戊・葦）

無（粘・伊）



⑧ 354 有(粘・伊・久・山・戊)

無(卷・雲・閔・葦)

⑨ 380 有(卷・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(雲・閔)

⑩ 407 有(雲・閔・粘・法・伊・久・益・山・戊・葦)

無(卷・太)

⑪ 422 の次有(益・山)

無(卷・雲・閔・粘・伊・久・下・戊・葦)

⑫ 434 有(卷・雲・閔・粘・久・山・戊・葦)

無(伊・太・大内)

⑬ 434 の次有(伊・久・太・大内・山)

無(卷・雲・閔・粘・戊・葦)

⑭ 449 有(卷・粘・近・伊・久・太・山・多・戊・葦)

無(雲・閔)

⑮ 534 有(卷・粘・近・伊・久・太・下・山)

無(雲・閔・戊・葦)

⑯ 535 有(閔・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戊・葦)

無(卷・雲)

⑰ 564 有(卷・粘・近・伊・久・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑱ 603有(粘・近・伊・久・大内・山)

無(卷・雲・関・戊・葦)

⑲ 617有(雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戊・葦)

無(卷・安)

⑳ 621有(雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(卷・安)

㉑ 652の次有(卷・安・定大)

無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戊・葦)

㉒ 712有(卷・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦)

無(雲・関)

㉓ 714有(卷・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦)

無(雲・関)

㉔ 729有(卷・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦)

無(雲・関)

㉕ 784有(卷・粘・近・伊・久・安・太・益・山・戊・葦)

無(雲・関)

㉖ 797有(粘・近・伊・久・益・山)

無(卷・雲・関・安・太・戊・葦)

右のうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分かち得ない一〇首(①・⑤・⑩・⑪・⑬・⑯・⑲・⑳・㉑)を除外すると、卷子本は、粘葉本類とは一首(②・④・⑥・⑨・⑭・⑮・⑲・㉒・㉓・㉔・㉕)、雲紙本類とは四首(③・⑧・⑱・㉖)が一致しており、粘葉本類よりではある。しかし、前者の一首のうち、⑮を除いた一〇首は雲紙本・関戸本の方に無い詩歌句であり、これはむしろ雲紙本と関戸本との近い関係を示す事例といえる。

次に、無い詩歌句に注目すると、③・⑧では、卷子本・雲紙本類・葦手本に無く、また、⑱では、それらに加え、戊辰切にも無いことが知られる。また、卷子本の、雲紙本との一致(⑱)、及び関戸本との一致(⑤)もあり、卷子本と雲紙本類との近い関係が推測される。

また、⑱・㉒は卷子本と安宅切のみに存する事象であり、また、両本は、定信筆大字切とともに、「後人の加筆<sup>16)</sup>」とされている一首⑳「いかて猶人にもとらんあやしきはおもはぬなかのえさるましきを」をも共有している。安宅切の現存箇所は、巻下の後半部の一六六首(和歌三二首、漢詩一三四首)であり、『和漢朗詠集』全体からすると二〇%弱にもかかわらず、両本は全てが一致しており(⑱・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖)、そのうち、卷子本と安宅切においてのみ一致している項目二か所(⑱・㉒)が見られる点も注目される。

なお、①の17は、卷子本には無く、そこに重複歌(630)「見度者柳櫻をこきませてみよこそ春の錦成ける」があるが、戊辰切にもその位置に630があり、卷子本は戊辰切とも共通要素を有していることが知られる。

## 三

次に、排列について検討を行う。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本間に見られる排列上の異同箇所を全て詩歌番号で挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示すと次の通りである。

- ① 90・91・92 (卷・関・粘・伊・久・山・戊)  
 90・91無・92 (雲)  
 91・92・90 (多)  
90無・91・92 (葦)
- ② 110・111 (卷・雲・関・粘・伊・久・山・戊)  
 111・110 (唐2・葦)
- ③ 137・143・133 (卷上・春部「躑躅」・「款冬」・「藤」)  
 133 (卷上・春部「藤」・「躑躅」・「款冬」)  
 133 (粘・伊)
- ④ 188・189 (卷・雲・関・粘・伊・久・下・山・戊・葦)  
 189・188 (大内)
- ⑤ 195・196 (卷・雲・関・粘・久・下・山・多・戊・葦)  
 196・195 (伊)
- ⑥ 201・202 (卷・粘・伊・久・山・戊・葦)  
 202・201 (雲・関)
- ⑦ 226・227 (卷・雲・関・粘・伊・山・戊・葦)  
 227・226 (久)
- ⑧ 268・269・270・271無 (卷)  
268無・269・270・271 (雲・関)
- 268・269・270・271 (粘・伊・戊・葦)

- ⑩ 308 無 309 (卷)
- 309 308 (雲・関・久・山・戊・葦)
- 308 309 (粘・伊)
- ⑪ 312 313 無 (卷・関・和1)
- 312 313 (粘・伊・久・山・戊)
- 313 312 (雲・葦)
- ⑫ 368 367 (卷・雲・関・伊・久・山・戊・葦)
- 367 368 (粘)
- ⑬ 405 406 (卷・雲・関・粘・法・伊・久・太・山・戊・葦)
- 406 405 (益)
- ⑭ 458 459 無 460 (雲)
- 458 459 460 (卷・行大・関・粘・近・伊・久・太・大内・山・戊・葦)
- ⑮ 465 466 (卷・雲・関・粘・近・伊・久・太・戊・葦)
- 466 465 (山)
- ⑯ 472 473 (卷・関・粘・近・伊・久・太・下・戊・葦)
- 269 270 271 268 (山)
- 268 270 271 269 (久)
- ⑨ 273 272 (卷・雲・関・久・唐2・山・戊・葦)
- 272 273 (粘・伊・多)

472無・473(雲)

473・472(山)

①7 484・485・483(卷)

483・484・485(雲・関・粘・近・伊・久・太・益・山・戊・葦)

①8 512・513・511(卷)

511・512・513(雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

①9 545・550・546・547・548・549(卷)

545・546・547・548・549・550(雲)

545・546・547・548・549無・550(関)

545・546・547・548・549・550(雲切・粘・近・伊・久・山・戊・葦)

②0 557・558・559・560(卷・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦)

560・557・558・559(久)

②1 573・574・575・576(卷・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦)

573・576・574・575(久)

②2 602・603無(卷・雲・関・戊・葦)

602・603(粘・近・伊・久・山)

603・602(大内)

②3 615・616・617無・618・619・620・621無・622(卷・安)

- ③0 729・730 (卷・粘・近・伊・久・安・太・戊・葦)
- 728・726・727 (久)
- ②9 726・727・728 (卷・雲・関・粘・近・伊・安・山・戊・葦)
- 701 無  
702 (雲)  
701 (関)
- ②8 701・702 (卷・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦)
- 687・686 (久)
- ②7 686・687 (卷・雲・関・粘・近・伊・安・太・多・戊・葦)
- 672・671 (久)
- ②6 671・672 (卷・雲・関・粘・近・伊・安・山・多・戊・葦)
- 656・655 (久)
- ②5 655・656 (卷・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦)
- 625・628・629・626・627 (久)
- 625・626・627・628・629 (無) (雲)
- ②4 625・626・627・628・629 (卷・関・粘・近・伊・山・戊・葦)
- 615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部 (山)
- 615・618・619・620・621・616・617 (久)
- 615・616・617・618・619・620・621・622 (関・粘・伊・戊・葦)
- 615 無  
616  
617  
618 無  
619  
620  
621  
622 (雲)

729 無 730 (雲・関)

730 729 (山)

③1 741・742・743・744 (巻・雲・関・粘・近・伊・久・安・太・戊)

741・742・744・743 (山)

741・743・742・744 (多)

741 無 742 無 743 無 744 無 (葦)

③2 746・747 (巻・雲・関・粘・近・伊・安・太・山・俊和・戊・葦)

747・746 (久)

③3 754・755・756 757 無 (巻)

754・755 756 無 757 (雲)

754・755・756・757 (関・粘・近・伊・安・太・山・戊・葦)

755・756・754 (久)

前項「詩歌句の有無」に関する考察で行った方法と同様に他本が同排列であるのに対して、一本のみが他本の排列と異なる場合を除外すると②・③・⑥・⑨・⑩・⑪の六項目となる。その六項目のうち、卷子本は粘葉本類とも同排列である(②・⑥)が、巻上・春部巻末の三詩歌群が雲紙本類と同じく「躑躅」・「款冬」・「藤」の順(③)であり、その他にも雲紙本類と同排列である箇所がある(⑨)。

全用例を通覧すると、排列の揺れている箇所には詩歌句が無い所が二四か所も見られ(①・⑧・⑩・⑪・⑭・⑯・⑱・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟・㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻・㊼・㊽・㊾・㊿)。「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」には相関性があるように思われる。



本書(第三章)中、著者は、山城切独自の排列の揺れている箇所(雲紙本類に無い詩歌句が目立つこと)を指摘し、「転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で(欄外などにも)増補されるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずる」とき形に移していったとは考えられまいか」と推測した。そして、山城切が形態的な面においては、「雲紙本・関戸本の系譜上に位置する」という結論の一論拠とした。その際、例示した事例のうち、⑧・⑳・㉑にも卷子本に無い詩歌句があり(271・617・621・757)、また、卷子本独自の排列箇所⑲にも、雲紙本類に無い詩歌句がある(547・549)点は注目される。ここから、卷子本も、山城切と同様、雲紙本類との関係があるように思われる。それに加え、卷上・春部卷末の三詩歌群の排列も、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であることから、卷子本は雲紙本類の流れを汲む伝本であると考えてよいのではなからうか。

詩歌句の有無・排列について考察を行った結果、卷子本は、雲紙本類の系譜上に位置しており、安宅切・葦手本と近い関係にあることが窺われた。また、卷子本と戊辰切との共通要素も看取された。

#### 四

個々の本文について検討を行う。

卷子本は一七二か所もの独自本文を有し、諸伝本中、独自本文数は最多である。特に、漢詩の独自本文には誤脱が甚だし、そのような本文は実質的な異同箇所と同レベルでは扱いたい。よって他の伝本に対して一本のみが異なっている場合は全て除外した上で、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】である。斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれ

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	唐紙切2	安宅本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
158	158	159	159	24	21	157	160	20	57	160	160		雲紙本
89	83	100	106	14	6	92	75	11	23	72	147		
56.3	52.5	62.9	66.7	58.3	28.6	58.6	46.9	55.0	40.4	45.0	91.9		%
158	158	158	158	24	21	157	160	20	57	160		294	関戸本
89	80	104	104	13	5	88	72	13	22	69		269	
56.3	50.6	65.8	65.8	54.2	23.8	56.1	45.0	65.0	38.6	43.1		91.5	%
160	158	158	158	25	21	157	160	21	58		312	294	粘葉本
77	83	59	82	13	13	107	152	21	52		115	126	
48.1	52.5	37.3	51.9	52.0	61.9	68.2	95.0	100.0	89.7		36.9	42.9	%
57	57	57	58		17	55	58	19		171	168	157	近衛本
31	31	19	26		9	40	49	18		159	68	80	
54.4	54.4	33.3	44.8		52.9	72.7	84.5	94.7		93.0	40.5	51.0	%
20	20	19	20		9	20	20		53	60	60	60	法輪寺切
16	13	9	12		7	17	19		49	58	28	31	
80.0	65.0	47.4	60.0		77.8	85.0	95.0		92.5	96.7	46.7	45.0	%
159	158	159	159	25	21	157		60	170	315	312	293	伊予切
81	83	62	89	15	15	110		60	160	301	118	132	
50.9	52.5	39.0	56.0	60.0	71.4	70.1		100.0	94.1	95.6	37.8	45.1	%
155	155	155	155	23	21		311	60	172	312	309	291	久松切
98	92	82	97	18	13		210	44	125	217	141	149	
63.2	59.4	52.9	62.6	78.3	61.9		67.5	73.3	72.7	69.6	45.6	51.2	%
21	21	20	21			71	71	18	66	71	70	67	安宅本
16	12	4	14			39	36	7	35	34	27	25	
76.2	57.1	20.0	66.7			54.9	50.7	38.9	53.0	47.9	38.6	37.3	%
24	24	24	23			23	26			26	24	23	唐紙切2
21	13	11	15			15	12			10	14	12	
87.5	54.2	45.8	65.2			65.2	46.2			38.5	58.3	52.2	%
158	156	157		26	70	303	305	58	167	308	298	287	卷子本
99	97	88		15	61	184	170	30	89	165	125	129	
62.7	62.2	56.1		57.7	87.1	60.7	55.7	51.7	53.3	53.6	41.9	44.9	%
157	157		297	26	67	304	307	60	167	307	306	287	山城切
80	77		177	19	35	213	188	40	100	184	167	164	
51.0	49.0		59.6	73.1	52.2	70.1	61.2	66.7	59.9	59.9	54.6	57.1	%
156		302	299	24	71	308	311	60	171	312	308	292	戊辰切
109		201	196	16	40	216	212	36	116	209	142	152	
69.9		66.6	65.6	66.7	56.3	70.1	68.2	60.0	67.8	67.0	46.1	52.1	%
	301	291	293	25	64	296	305	58	161	306	300	282	葦手本
	231	183	201	25	38	199	183	37	106	179	144	153	
	76.7	62.9	68.6	100.0	59.4	67.2	60.0	63.8	65.8	58.5	48.0	54.3	%

た欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表によると、卷子本と諸伝本との本文関係の概略については、和歌では、雲紙本・安宅切との同文率が最も高く(六六・七%)、次いで、関戸本(六五・八%)、葦手本(六二・七%)があり、卷子本と近い伝本には安宅切・雲紙本類・葦手本が挙げられる。また、漢詩においても、安宅切と最も高く(八七・一%)、次いで葦手本(六八・六%)、戊辰切(六五・六%)がある。ここから、卷子本は、和歌においては、安宅切・葦手本・雲紙本類と、漢詩においては、安宅切・葦手本・戊辰切との関係が近いことが概略的に知られる。

次に例示することく、卷子本と雲紙本類との間には、和歌・漢詩ともに多くの同文箇所がある。卷子本の本文を載せ、異同箇所傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

① 62 櫻花春加礼る ① 今年谷人乃情尼 ② 被足也波勢ぬ (卷)

(1) (同) ことしたに (雲・関)

〈異〉 としたにも (粘・伊・久・戊・葦)

(2) (同) あかれやはせぬ (雲・関・久)

〈異〉 あかれやはする (粘・伊・戊・葦)

② 437 簞瓢 屢空草滋顔潤之甚藜藿深鎖雨濕原憲之樞 (卷)

(同) 簞瓢 (雲・関・葦)

〈異〉 瓢簞 (粘・伊・久・太・大内・山・戊)

しかし、その一方、卷子本は、次のごとく、粘葉本類の本文をも有している。

◆ 8 春立 止 云許尔也御吉野、山霞天今日 見 由良牟 (卷)

〔同〕けふはみゆらむ〔粘・伊〕

〔異〕けさはみゆらむ〔雲・関・久・山・戊〕

また、中には、

◆765 しはしたに<sup>(1)</sup>へかたくみゆるよの中にうらやましくもすめる月かな〔卷〕<sup>(2)</sup>

〔1〕〔同〕しはしたに〔雲・関・久・太・山〕

〔異〕かくはかり〔粘・近・法・伊・安・戊・葦〕

〔2〕〔同〕へかたくみゆる〔粘・近・法・伊・久・安・戊・葦〕

〔異〕へかたかりける〔雲・関・山・太〕

のごとく、卷子本には、粘葉本・雲紙本両類の本文が一首中に混在している例もある。

十一世紀中葉の書写とされる粘葉本・雲紙本両類の本文が混在している事象は、本書中述べる通り、卷子本同様、十二世紀書写とされる、久松切・山城切・戊辰切・葦手本にも共通して見られる（ただし、本文内容においては、卷子本・山城切・葦手本は雲紙本類よりであり、久松切・戊辰切はどちらかといえば粘葉本類よりであつて、粘葉本・雲紙本両類の本文混在の様相が錯綜してはいるのだが）。

また、卷子本と十二世紀書写本群との間には横の繋がりが見られる。

次に、卷子本と、葦手本・戊辰切・久松切との間に見られるいわゆる共通異文例をそれぞれ挙げる。

① 388 氷消漢臣<sup>1</sup>應疑霸王不召枚〔卷〕

〔同〕臣〔葦〕

〔異〕主〔雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊〕

② 389 胡寒<sup>2</sup>誰能全使節呼沱還恐失臣忠〔卷〕

〔同〕寒〔葦〕

〔異〕塞〔行大・雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊〕

③ 319 四五朶山粧雨色兩三行雁點雲聲〔卷〕

〔同〕聲〔戊〕

〔異〕秋〔行大・雲・関・粘・伊・久・唐2・下・散・山・葦〕

④ 371 聲々已斷華亭鶴歩々初知葛履濡〔卷〕

〔同〕知〔戊〕

〔異〕驚〔雲・関・粘・伊・久・山・葦〕

⑤ 59 今年閏在三月剩看金陵一月花〔卷〕

〔同〕看〔久〕

〔異〕見〔雲・関・粘・伊・山・戊・葦〕

⑥ 774 辰令月飲無極万歳千秋樂未央〔卷〕

〔同〕佳〔久〕

〔異〕嘉〔雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦〕

なお、卷子本と、安宅切・葦手本・戊辰切には、独特な漢字のくずし方の類似も見られ、本文のみならず書写上の共通性も注目される。<sup>21)</sup>

また、卷子本と山城切との間にも、たとえば、240「重々」〔諸本、「澄々」〕、374「庚亮」〔諸本、「庚公」〕、415「遊糸見由」〔諸本、「あそふいとゆふ」〕などの同文箇所があり、両本は十二世紀書写本特有の本文を共有しているといえる。

次に、卷子本の独自本文について述べる。卷子本の独自本文には、次の事例のごとく他文献と一致している本文もあるが、

その多くは、誤字、脱字、衍字、転倒などの結果生じた杜撰な本文であるといえる。

◆267不是花中偏愛菊此花開盡更無花(卷)

(異) 後(雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦)

『全唐詩』卷十五、元夢十六「菊花」。当該箇所、「盡」。

卷子本の独自本文には、偏旁冠脚を省略したと見られるもの「246「雨」(諸本、「霜」)など、また、字形の類似により生じたと思われる誤写「394「堂」<sup>掌</sup>(諸本、「掌」)、408「乱」<sup>亂</sup>(諸本、「龍」)など、衍字「475「只陵雲」(諸本、当該文字ナシ)など」が多数存する。また、和歌では、538の二句目が卷子本には「あれたるやとの」<sup>けふりたえにし</sup>とあるが、「けふりたえにし」とあるべきところを「あれたるやとの」と書したのは、初句「きみなくて」につられたことによる誤写と推察される。以上のようなミスデイクは、卷子本の書写者の運筆が早いことにも関係しているように思われる。

その他、卷子本には、410「緑紅」(諸本、「緑竹」)、422「樹」<sup>性</sup>(諸本、「松性」)、588「将来」(諸本、「當来」)、670「梧桐」(諸本、「梧岫」)、743「往年」(諸本、「往事」)などの傍線部(著者が付した)のごとく、前後に位置する語意の連想により別の語に転化したように取れる独自本文もある。

また、誤写を削消し、その上から訂正を加える、または傍書するなどの跡も確認され、華麗な料紙に能書家により書かれた作品に多数の補訂が加えられるというのは不審ではあるが、いずれにせよ卷子本の書写者の本文内容の理解が不十分であったということは確かである。

以上、本文について考察した結果、卷子本は雲紙本類よりも位置してはいるものの、粘葉本類の本文をも有していた。また、卷子本と十二世紀書写本群との連関性も認められたが、とりわけ、安宅切・葦手本・戊辰切との関係が近いことが明らかとなった。それに加え、卷子本と安宅切・葦手本・戊辰切との間には、本文のみならず、書写上の共通性も認められた。

卷子本は雲紙本類の系譜上に位置すると考えられるが、一方では粘葉本類の要素をも有していた。このように粘葉本・雲紙本両類の要素を有する点については既に述べたように、十二世紀書写本群に共通してみられるものである。卷子本と十二世紀書写本群には横の繋がりも確認されたが、とりわけ卷子本は、安宅切・葦手本と近い関係にあり、また、戊辰切とも連関性を有しているという事実が明らかとなった。

書風においてもこの四本には共通性がある。すなわち、卷子本の書は「伊房や定信の書に気脈を通じて」<sup>(22)</sup>おり、安宅切の書についても「伊房の筆跡に似た定信がこの〔安宅切〕の筆者ではなかったか」<sup>(23)</sup>などとされている。また、葦手本の書写者は奥書により、藤原伊行であることが知られており、戊辰切も藤原定信・伊行親子の手になるといふ説もある。<sup>(24)</sup>藤原伊房は藤原行成を祖とする世尊寺家の第三代目に当たり、藤原定信は世尊寺家第五代目、藤原伊行は世尊寺家第六代目に当たる。

形態・本文面に焦点を当てた本考察結果においても、卷子本は世尊寺家、あるいはその周辺の人々の手になる伝本と関係があると考えられる。

## 注

- (1) 小松茂美氏編『日本書道辞典』〔昭和62年 二玄社〕 P 97
- (2) 春名好重氏編著『古筆大辞典』〔昭和54年 淡交社〕 P 1242
- (3) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」 P 350
- (4) 山田俊雄氏「和歌の真名書きについての試論―朗詠和歌を中心にして―」『山梨大学学芸学部研究報告』第五号〔昭和29年〕
- (5) 前掲〔注3〕に同。 P 350
- (6) 春名好重氏「傳公任筆御物朗詠集の用字法」『書道』第二二卷第五号〔昭和18年5月〕





るように思われる。

(20) 拙稿「葦手本の位置」(本書〔第三章第三節〕・前掲〔注18〕他。

(21) たとえば、688「囁」など。なお、和歌の真名書きの一致もみられるが、その点は拙稿「葦手本の位置」(本書〔第三章第三節〕)において指摘。

(22) 前掲〔注3〕に同。P 351

(23) 小松茂美氏著『日本名跡叢刊』83〔昭和59年 講談社〕P 79

(24) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五卷〔平成2年 講談社〕P 345

### 第三節 葦手本の位置

一

葦手本は上下二巻の完本である。葦手本という名称は、上下二巻に亘り、裝飾下絵に葦手が描かれていることに因る。

下巻巻末の奥書「永暦元年四月二日右筆蹟之司農少卿伊行」により、永暦元年（一一六〇）、藤原伊行（生年未詳—一一七二以後）によって書写されたことが知られる。完本であることに加え、書写者・書写年時が明確であり、書の家である世尊寺家第六代目の伊行の手になる等、その資料的価値は極めて高い。

葦手本について、堀部正二氏は、（雲紙本・関戸本と）「かなりの異同を有してゐるが、近似の特異本文を共有する点も多いので便宜これらをもつて一類とする」とされた上で、雲紙本・関戸本類のものとされた。<sup>①</sup> また、久曾神昇氏も、雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本の四本を同類とされ、それらを雲紙本・関戸本と卷子本・葦手本とに二分された。<sup>②</sup> すなわち、堀部・久曾神両氏の御論は葦手本が卷子本とともに雲紙本・関戸本と同類であるという点において一致している。

また、久曾神氏は、「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」と推測された。そして、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とされ、**甲類**の雲紙本・関戸本を「初稿本」、卷子本・葦手本を「再稿本」、**乙類**の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。<sup>③</sup>

しかしながら、葦手本はそこには位置付け難い。それは本書（前節）中、述べた通り、卷子本についても同様に考えられる。その課題を中心に据え、以下、諸伝本間における葦手本の位置について論じる。

まず、形態的な面について述べる。

調査し得た諸伝本の詩歌句をあわせると八一五首となるが、伝本相互の間では「詩歌句の有無」がみられる場合と「排列に異同」がある場合とがあり、形態的な面における異同はあわせて一二二か所が存する。そのうち、諸伝本の関係をみるために、一本のみが異なる場合（ここでは独自事象と称する）を除外してみると次に羅列するように、「A詩歌句の有無」は二六か所、「B排列の異同」は六か所となる。

A詩歌句の有無―独自事象は除外―

▽：粘葉本類とも雲紙本類とも分かち得ない箇所。

■：葦手本と粘葉本類とが一致している箇所。

□：葦手本と雲紙本類とが一致している箇所。

▽① 17有(雲・閑・粘・伊・久・唐<sup>2</sup>・山・葦)

無(卷・戊)

■② 42有(粘・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

無(雲・閑)

□③ 215有(粘・伊・久・山・多・戊)

無(雲・閑・卷・葦)

□④ 268有(粘・伊・久・卷・山・戊)

無(雲・閑・葦)

▽⑤ 313有(雲・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(関・卷・和1)

■⑥ 321有(行大・粘・伊・久・唐2・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

□⑦ 322有(行大・雲・関・久・卷・和1・山・多・戊・葦)

無(粘・伊)

□⑧ 354有(粘・伊・久・山・戊)

無(雲・関・卷・葦)

■⑨ 380有(粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

▽⑩ 407有(雲・関・粘・法・伊・久・益・山・戊・葦)

無(卷・太)

▽⑪ 422の次<sup>4</sup>有(益・山)

無(雲・関・粘・伊・久・卷・下・戊・葦)

▽⑫ 434有(雲・関・粘・久・卷・山・戊・葦)

無(伊・太・大内)

▽⑬ 433の次有(伊・太・大内・山)

無(雲・関・粘・久・卷・戊・葦)

■⑭ 449有(粘・近・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

□ 15 534 有(粘・近・伊・久・卷・太・下・山)

無(雲・関・戊・葦)

▽ 16 535 有(関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戊・葦)

無(雲・卷)

■ 17 564 有(粘・近・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

□ 18 603 有(粘・近・伊・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戊・葦)

▽ 19 617 有(雲・関・粘・法・伊・久・下・山・戊・葦)

無(安・卷)

▽ 20 621 有(雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦)

無(安・卷)

▽ 21 652 の次 有(安・卷・定大)

無(雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戊・葦)

■ 22 712 有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

■ 23 714 有(粘・近・伊・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

■ 24 729 有(粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

無(雲・関)

■25784有(粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

無(雲・関)

□26797有(粘・近・伊・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戊・葦)

右の二六か所のうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分かち得ない▽印を付した一〇か所(①⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑)を除くと、葦手本は粘葉本類とは■印を付した九か所(②⑥⑨⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕)が一致しており、また、雲紙本類とは□印を付した七か所(③④⑦⑧⑮⑱㉒)が一致していて、数の上からはやや粘葉本類に近い。しかし、■印の九か所の全てにおいて、雲紙本と関戸本のみが無いということは■印の箇所はむしろ雲紙本と関戸本との近い関係を示すものとみられる。

次に、詩歌句が無い場合について注目すると、④(268)では雲紙本類・葦手本に無く、③(215)・⑧(354)は雲紙本類・卷子本・葦手本に無く、また、⑱(603)では、それらに加え、戊辰切にも無く、また、⑮(534)では、雲紙本類・戊辰切・葦手本に無いことが知られる。

排列についても、「A詩歌句の有無」に関する考察で行ったと同様、ある伝本の排列が他本の排列と異なる箇所(三一か所)のうち、一本のみが他本と異なる場合(独自事象)を除外すると次の六か所となる。諸伝本間において排列に異なる部分の詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

B 排列の異同―独自事象を除外―

(1) 110・111(雲・関・粘・伊・久・卷・山・戊)

111・110(唐2・葦)

(2) 137↪143・133↪136〔卷上〕〔春〕部〔躑躅〕・〔款冬〕・〔藤〕〔雲・関・卷・山・戊・葦〕

133 〔卷上〕・〔春〕部〔藤〕・〔躑躅〕・〔款冬〕〔粘〕・伊)

(3) 202・201 (雲・関)

201・202 (粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

(4) 273・272 (雲・関・久・唐<sup>2</sup>・卷・山・戊・葦)

272・273 (粘・伊・多)

(5) 309・308・310 (雲・関・久・山・戊・葦)

308・309・310 (粘・伊)

309・310・308 (卷)

(6) 313・312 (雲・葦)

313・313 無 (関・卷・和<sup>1</sup>)

312・313 (粘・伊・久・山・戊)

久曾神昇氏が葦手本を雲紙本類に分類された主な論拠の一つには、右のうちの(2)卷上・〔春〕部卷末の三詩歌群の排列の異同のことが挙げられる。すなわち、粘葉本類の「藤」・「躑躅」・「款冬」に対して、葦手本では雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順である。たしかに、この排列は諸伝本の系統を考える際、重視しなくてはならない箇所ではあるが、葦手本は右の(3)のごとく、粘葉本類とも同事象を有しており、既述した「A詩歌句の有無」と同様、「B排列の異同」からも、単に雲紙本類として扱えるものではない。

「A詩歌句の有無」・「B排列の異同」において、葦手本と諸伝本とが同事象である箇所数を挙げると以下の通りである(それぞれの下段は対照箇所数、上段は同事象数を示す)。

戊辰切<sup>(5)</sup>・27・31 久松切<sup>(5)</sup>・23・30 山城切<sup>(5)</sup>・22・31 卷子本<sup>(5)</sup>・21・31 粘葉本<sup>(5)</sup>・20・31 伊予切<sup>(5)</sup>・18・31 雲紙本<sup>(5)</sup>・18・31 関戸本<sup>(5)</sup>・17・31 唐紙切<sup>(6)</sup>・2・4・4

唐紙切2は、四か所の全てが葦手本と同様で、その他の伝本については、多い順に戊辰切・久松切・山城切・卷子本が挙げられる。

唐紙切2は、『和漢朗詠集』全詩歌句数のうち、約一三%しか現存していない（和歌四四首、漢詩六四句）のにも関わらず、葦手本とのみ排列が一致する箇所が「B排列の異同」において、(1)に確認されるのは注目値する。

以上、詩歌句の有無について検討した結果、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首を除外すると、葦手本は粘葉本類とは九首、雲紙本類とは七首が一致しており、数の上からは稍々、粘葉本類よりであった。が、その一致する箇所の全ては雲紙本と関戸本の二本にのみ無い詩歌句であった。また、粘葉本類にあつて雲紙本類に無い詩歌句についてみると、葦手本は雲紙本類と五か所が一致していた。

排列についても、葦手本は粘葉本類の要素を有していた。(2)において述べた如く、粘葉本・雲紙本両類の形態を特徴づけているともいえる、卷上・「春」部巻末の三詩歌群が、雲紙本類と同じく、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であり、加えて、唐紙切2とのみ同排列である箇所も注目される。

なお、葦手本の独自事象は以下の通りである。

◆ 90無(葦)

有(雲・関・粘・伊・久・卷・山・多・戊)

◆ 738無・739無(葦)

有(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊)

◆ 740無(葦)

有(雲・関・雲切・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊)

◆ 741無・742無・743無・744無(葦)



有(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・多・戊)

◆745無(葦)

有(雲・関・粘・近・法・伊・久・安・卷・太・山・戊)

葦手本には90が無く、また、738(下巻「交友」の後半)より745(「懐旧」)までがまとまって存せず、久曾神氏のご指摘の通り、それら九首はおそらく葦手本の脱漏であると思われる。

三

個々の本文を考察した結果について述べる。

たとえば、119「織自何糸唯暮雨裁無定様任春風」の傍線箇所「裁」は卷子本にのみ「裁」とあるが、これは詩の内容からみて明らかに誤写とみられる。葦手本と同類とされる卷子本は諸伝本文中、最も独自本文の、それも誤写と思われるものが多い伝本で、諸伝本の関係について考察する際、このような本文は実質的な異同箇所と同じレベルでは扱いたい。したがって、ここでは独自本文は対象外とした上で、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として全本文に亘って異同調査を行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	唐紙切2	安宅本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩 雲紙本
158	158	159	159	24	21	157	160	20	57	160	160		
89	83	100	106	14	6	92	75	11	23	72	147		
56.3	52.5	62.9	66.7	58.3	28.6	58.6	46.9	55.0	40.4	45.0	91.9		%
158	158	158	158	24	21	157	160	20	57	160		294	関戸本
89	80	104	104	13	5	88	72	13	22	69		269	
56.3	50.6	65.8	65.8	54.2	23.8	56.1	45.0	65.0	38.6	43.1		91.5	%
160	158	158	158	25	21	157	160	21	58		312	294	粘葉本
77	83	59	82	13	13	107	152	21	52		115	126	
48.1	52.5	37.3	51.9	52.0	61.9	68.2	95.0	100.0	89.7		36.9	42.9	%
57	57	57	58		17	55	58	19		171	168	157	近衛本
31	31	19	26		9	40	49	18		159	68	80	
54.4	54.4	33.3	44.8		52.9	72.7	84.5	94.7		93.0	40.5	51.0	%
20	20	19	20		9	20	20		53	60	60	60	法輪寺切
16	13	9	12		7	17	19		49	58	28	31	
80.0	65.0	47.4	60.0		77.8	85.0	95.0		92.5	96.7	46.7	45.0	%
159	158	159	159	25	21	157		60	170	315	312	293	伊予切
81	83	62	89	15	15	110		60	160	301	118	132	
50.9	52.5	39.0	56.0	60.0	71.4	70.1		100.0	94.1	95.6	37.8	45.1	%
155	155	155	155	23	21		311	60	172	312	309	291	久松切
98	92	82	97	18	13		210	44	125	217	141	149	
63.2	59.4	52.9	62.6	78.3	61.9		67.5	73.3	72.7	69.6	45.6	51.2	%
21	21	20	21			71	71	18	66	71	70	67	安宅本
16	12	4	14			39	36	7	35	34	27	25	
76.2	57.1	20.0	66.7			54.9	50.7	38.9	53.0	47.9	38.6	37.3	%
24	24	24	23			23	26			26	24	23	唐紙切2
21	13	11	15			15	12			10	14	12	
87.5	54.2	45.8	65.2			65.2	46.2			38.5	58.3	52.2	%
158	156	157		26	70	303	305	58	167	308	298	287	卷子本
99	97	88		15	61	184	170	30	89	165	125	129	
62.7	62.2	56.1		57.7	87.1	60.7	55.7	51.7	53.3	53.6	41.9	44.9	%
157	157		297	26	67	304	307	60	167	307	306	287	山城切
80	77		177	19	35	213	188	40	100	184	167	164	
51.0	49.0		59.6	73.1	52.2	70.1	61.2	66.7	59.9	59.9	54.6	57.1	%
156		302	299	24	71	308	311	60	171	312	308	292	戊辰切
109		201	196	16	40	216	212	36	116	209	142	152	
69.9		66.6	65.6	66.7	56.3	70.1	68.2	60.0	67.8	67.0	46.1	52.1	%
	301	291	293	25	64	296	305	58	161	306	300	282	葦手本
	231	183	201	25	38	199	183	37	106	179	144	153	
	76.7	62.9	68.6	100.0	59.4	67.2	60.0	63.8	65.8	58.5	48.0	54.3	%

葦手本と粘葉本とは、和歌は四八・一％、漢詩は五八・五％、葦手本と雲紙本とは、和歌は五六・三％、漢詩は五四・三％がそれぞれ一致しており、葦手本の、粘葉本類、雲紙本類への大きな偏りはないものである。しかし、漢詩においては、他の伝本に対して雲紙本と関戸本にのみみられる本文箇所が四七か所もある。そのことから数値上では諸伝本と雲紙本類とが遠い関係にある。その点を考慮し、漢詩における個々の異同について検討すると、葦手本は粘葉本類と雲紙本類の中間的なところでありながらもやや雲紙本類よりに位置しているといえる。

次に、葦手本との同文率については、高い順に、和歌は、唐紙切<sup>2</sup>(八七・五％)、法輪寺切(八〇・〇％)、安宅切(七六・二％)、戊辰切(六九・九％)、漢詩は、唐紙切<sup>2</sup>(二〇〇％)、戊辰切(七六・七％)、卷子本(六八・六％)が挙げられる。ここから、概略的に、葦手本は、和歌・漢詩ともに唐紙切<sup>2</sup>と近い関係にあることが知られる。以下、その具体例を挙げる。葦手本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、諸伝本間の異同を示す。

(1) 25 ももしきのおほみやひとはいとまあれやさくらかさして今日をくらしつ (葦)

〈同〉 けふをくらしつ (唐<sup>2</sup>)

〈異〉 けふもくらしつ (粘・戊)

けふはくらしつ (雲・関・伊・久・卷・益・山)

下の句は諸伝本とも『万葉集』1883「梅をかさしてここにつとへる」系の本文(『赤人集』I 176・『古今六帖』237も)ではなく、「けふくらしつ」系の本文である。『赤人集』II 57にも「けふも暮らしつ」とあり、歌の内容からも、葦手本・唐紙切<sup>2</sup>の「今日をくらしつ」は誤写とみられる。

(2) 76 鑽沙草只三分許跨樹霞光半段余 (葦)

〈同〉 光 (唐<sup>2</sup>)

〈異〉 纒 (雲・関・粘・伊・久・卷・大内・山)

『晋家文章』445、「纒」。葦手本・唐紙切2に「光」とあるのは、前詩(75)「霞光曙後殷於芳草色晴来嬾似煙」に「霞光」とあるのに引かれての誤写とみられる。

(3) 152 空夜窓閑蛩度後五更軒白月初(葦)

〈同〉五(唐2)

〈異〉深(雲・関・粘・伊・卷・山・戊)

「五更」は一夜を五分した最後の時刻のことであるので、深夜の意の「深更」とは意を異にする。

(4) 250 楊貴妃婦唐帝思李夫人別漢皇情(葦)

〈同〉別(唐2)

〈異〉去(雲・関・粘・伊・久・卷・山・多・戊)

『類聚句題抄』所収の順詩「対雨恋月」には諸伝本のごとく「去」とある。「李夫人別漢皇情」の典拠は白居易の「李夫人」であり、その詩に「漢武帝初喪李夫人」とあり、「去」は死を意味していることが知られる。<sup>7)</sup>葦手本・唐紙切2ではそこから類義語「別」に派生したのであろうか。

(5) 334 蒼苔路熟僧歸寺紅葉聲乾鹿在林(葦)

〈同〉熟(唐2)

〈異〉滑(行大・雲・関・粘・伊・久・卷・山・戊)

葦手本・唐紙切2の本文「熟」は諸伝本の「滑」と異なり、この句の作者である温庭筠の詩集『温飛卿集』・『温庭筠詩集』の本文に一致している。

葦手本と唐紙切2の「熟」が原詩通りであった可能性が考えられ、諸伝本では原詩の本文「熟」がよりなじみのある「滑」に改変されたとも推測される。他の諸伝本に対して原詩通りと思われる本文が葦手本と唐紙切2の二本にのみみられるとい

う事實は注目に値する。

以上のごとき共通の異文は葦手本と、戊辰切・卷子本・安宅切にもそれぞれ同様にみられる。葦手本と戊辰切には四か所、葦手本と卷子本には五か所、葦手本と安宅切には一か所が確認される。次に一例ずつ示す。葦手本の本文を載せ、当該箇所  
に傍線を付し、諸伝本間の異同も示す。

▼葦手本と戊辰切

○612 神川の清流に濯てし我名をさらにまたやくたさむ(葦)

〈同〉またやくたさむ(戊)

〈異〉またやけかさむ(雲・関・粘・近・伊・久・卷・太・山)

『水原抄』、「弘仁五年玄寶初任律詩辞退歌云三輪川清流洗衣袖更不穢云々」。『袋草紙』・『和歌葦蒙抄』『発心集』・『古事談』、「またやけかさむ」。他文献に「またやくたさむ」の本文は見当たらない。

▼葦手本と卷子本

○388 水消漢臣應疑霸雪盡梁王不召枚(葦)

〈同〉臣(卷)

〈異〉主(雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊)

右の句中の「霸」は「漢主」(光武皇帝)の臣「王霸」のことである。<sup>8)</sup>当該箇所について、葦手本・卷子本の「漢臣」は誤写とみられる。

▼葦手本と安宅切

○724 老眼早覚常残夜病力先衰不待年(葦)

〈同〉眼(安)

〈異〉眠(雲・関・粘・近・伊・久・卷・山・戊)

『白氏文集』卷五十八「睡覺」。当該箇所「眠」。しかし、『和漢朗詠集私注』<sup>(9)</sup>では、当該箇所は葦手本・安宅切と同様、「眼」とあり、これにより、安宅切・葦手本の本文「眼」が普及したであろうことが推測される。

なお、以下、葦手本が粘葉本類・雲紙本類とそれぞれ同文である事例を挙げる。葦手本の本文を載せ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間の異同も示す。

□葦手本が粘葉本類と同文である場合

62 さくらはなはるくははれるとしたにもひとのころにあかれやはする(葦)

〈同〉あかれやはする(粘・伊・戊)

〈異〉あかれやはせぬ(雲・関・久・卷・山)

536 向曉簾頭生白露終宵床底見青天(葦)

〈同〉曉(粘・近・法・伊・久)

〈異〉晚(雲・関・卷・太・下・山・戊)

□葦手本が雲紙本類と同文である場合

142 かはつなくかみなひかはにかけみえていまやさくらんやまふきのはな(葦)

〈同〉いまやさくらん(雲・関・卷・益・山・戊)

〈異〉いまやちるらん(粘・伊)

573 不独終身数相見子孫長作隔牆人(葦)

〈同〉不(雲・関)

〈異〉可(粘・近・伊・卷・山・戊)

## 何(久)

粘葉本・雲紙本両類の本文を有していることについて、葦手本と同様、十二世紀の書写とされている伝本群にもいえることである。粘葉本類と雲紙本類の本文が対立する箇所(和歌・六九か所、漢詩・一三六か所)において、当該伝本がこの両類と同文箇所を有する数を(括弧内は百分率で)示すと次の通りである。

	和歌の同文箇所数		漢詩の同文箇所数	
	粘葉本類	雲紙本類	粘葉本類	雲紙本類
久松切	三七(五三・六%)	二八(四〇・六%)	八五(六二・五%)	四八(三五・三%)
唐紙切 <sup>2</sup>	四	二	二	六
卷子本	二二(三一・九%)	四四(六三・八%)	七五(五五・一%)	五二(三八・二%)
山城切	一三(二八・八%)	五〇(七二・五%)	七一(五二・二%)	五七(四一・九%)
戊辰切	三一(四四・九%)	三二(四六・四%)	八四(六一・八%)	四五(三三・一%)
葦手本	二六(三七・七%)	四一(五九・四%)	七〇(五一・五%)	五八(四二・六%)

右の伝本のうち、粘葉本類に近いのは和歌・漢詩ともに久松切(和歌五三・六%・漢詩六一・五%)、戊辰切(和歌四四・九%・漢詩六一・八%)が挙げられる。

また、和歌において雲紙本類に稍々近いのは山城切(和歌七二・五%)、卷子本(和歌六三・八%)、葦手本(和歌五九・四%)である。ただし、葦手本は、漢詩においては粘葉本類との同文率が五一・五%であり、雲紙本類より粘葉本類の本文を多く有しているということが窺われる。しかし、これは漢詩においては他の諸伝本が同文であり、かつ、雲紙本と関戸本の二本のみみられる箇所が四七か所もあり、雲紙本と関戸本との密接な関係が影響していると推察される。その点を考慮すると、

葦手本はどちらかと言えば雲紙本類の本文をより多く有しているといえる。

以上、本文について検討した結果、葦手本は、稍々雲紙本類よりに位置していることが知られたが、粘葉本類の要素をも有していた。さらに、葦手本は、唐紙切<sup>2</sup>と共通の異文を有しており、この二本はきわめて近い関係にあることも知られた。また、横の繋がりにおいては、葦手本は戊辰切・卷子本・安宅切等とも連関性を有していることが確認された。粘葉本・雲紙本両類の要素を有している事象は、葦手本のみならず、十二世紀書写と推定されている諸伝本にも看取される。

#### 四

葦手本には粘葉本・雲紙本両類の要素が混在していることが認められたが、葦手本と同様、十二世紀書写とされている久松切・安宅切・卷子本・山城切・戊辰切も、粘葉本・雲紙本両類の要素を有しているという点で共通していた。ただし、その六本の中で、葦手本を除く他本では一首中、雲紙本類と粘葉本類との混有かと思しき本文がいくつか確認されるが、葦手本にはそれは稀である。

167まつかけのいはるのみつをむすひつつなつなきとしとおもひけるかな

①むすひつつ (粘・伊・葦)

むすひあけて (雲・関・久・行金・卷・益・山・多・戊)

②おもひけるかな (粘・伊・久・行金・卷・益・山・多・戊・葦)

おもひぬるかな (雲・関・卷)

765かくはかりへかたくみゆるよのなかにうらやましくもすめるつきかな

①かくはかり (粘・近・法・伊・安・戊・葦)

しはしたに (雲・関・久・卷・太・山)



②へかたくみゆるよのなかに〔粘・近・法・伊・久・卷・安・戊・葦〕

へかたかりけるよのなかを〔雲・関・山〕

へかたかりけるよのなかに〔太〕

167では、久松切・山城切・戊辰切には①が雲紙本類と同文で「むすひあけて」とあるのに対して②は粘葉本類と同文で「おもひけるかな」とある。また、765においても、久松切と卷子本には雲紙本類と同文で①「しはしたに」とあるのに対して②は粘葉本類と同文で「へかたくみゆるよのなかに」とある。このように葦手本は、久松切・卷子本・山城切・戊辰切などと同様に粘葉本・雲紙本両類の本文を有してはいるものの、その四本ほどは混淆の様相を呈しておらず、それらの中では古い本文に遡り得る性格であると想像される。この葦手本の性格は、以下述べる形態的な面においても見て取ることができる。

第一点目。『和漢朗詠集』の題には付項目を有する場合がある。次に挙げる本文中の題、①「雁」の付項目「帰雁」、及び②「水」の付項目「春氷」が題として独立している事例には山城切・戊辰切などがある（当該箇所には傍線を付す）。しかし、葦手本にはそのような題は見当たらない。

①雁<sup>付帰雁</sup>（雲・粘・伊・久・唐2・散・和1・葦）

雁（関・卷）

雁<sup>付帰雁</sup> 帰雁（山・戊）

②水（雲・卷）

水<sup>付春氷</sup>（関・粘・伊・久・多）

春氷<sup>付</sup>（下）

水<sup>付春氷</sup> 春氷（山・戊）

水<sup>付春氷</sup>（葦）

この点について、堀部氏は、撰者である藤原公任の原撰本には「帰雁」・「春水」は存せず、「帰雁」・「春水」が題として独立している事象を「後世的な要素」とされた。<sup>(1)</sup>

第二点目。卷子本と戊辰切には、630「みわたせは」歌が16「たにかせに」歌の次に重出しており、また、戊辰切には78「はるかすみ」歌が8「はるたつと」歌の次に重出しているが、葦手本においてはそのような重出歌は見当たらない。

第三点目。諸伝本の内容的変遷を通時的にみたととき、時代が下るにつれて詳細な注記を有する伝本の存在が顕著となる。三木雅博氏は、「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、唐人の作品の場合、原則として詩句には作者名が注されていても賦句のみには作者名は記されない旨、指摘された。<sup>(2)</sup>しかし、次に挙げる注記(当該箇所には傍線を付す)のごとく、戊辰切・久松切・山城切には唐人の賦の作者名にまで調査が及んでいたことが知られる。①240の戊辰切、②479の久松切・山城切には「公乗億」の名が注されているが、葦手本の注記には唐人の賦句に作者名が注されている例は見当たらない。

①240公乗億(戊)

八月十五夜賦(下)

ナシ(雲・関・粘・伊・久・山・多・葦)

②479送友人帰大梁賦 公乗億(久・山)

送友帰大梁賦(粘・法・太)

送友人帰大梁賦(雲・関・戊)

ナシ(近・伊・葦)

第四点目。安宅切・卷子本・定信筆大字切では、「追補」<sup>(3)</sup>とされている652の次に位置する和歌「伊可天難遠人」<sup>(4)</sup>裳登者むあやしきはお毛盤ぬな可能えさ類ましきは」を共有しているが、葦手本にはそれは見当たらない。

特に、伝本の性格を決定づける本文の面から葦手本と近い関係にあると思われる戊辰切には、後世的な改変のあとが確認されたが、葦手本はそのような変容した様相は呈しておらず、古い形態を止めていると推測されるのである。

## 五

葦手本には、唐紙切<sup>2</sup>、及び、戊辰切・卷子本・安宅切との連関性が認められたが、書写の面からも同様のことを指摘し得る。すなわち、既述したように、葦手本は藤原伊行の真筆であり、また、戊辰切の卷上は葦手本と同じく藤原伊行、卷下は藤原定信の筆という説もある。<sup>15)</sup>

唐紙切<sup>2</sup>については藤原伊房（二〇三〇—一〇九六）の筆という説があり、<sup>16)</sup> 卷子本の書は伊房やその孫に当たる定信の書に気脈が通じているとされている。<sup>17)</sup> また、安宅切も、藤原定信の筆という説がある。<sup>18)</sup> 伊房・定信・伊行は書の家柄である世尊寺家の第三代・五代・六代に当たる人物で、この四本の書風は世尊寺様といえる。書風に加え、これら四本には次に例示するごとく、和歌の真名書きという特異な表記を共有している点でも共通性が認められる。

① 259 葦手本「白雲尔翼打加者之飛雁乃影佐部見留秋夜月」

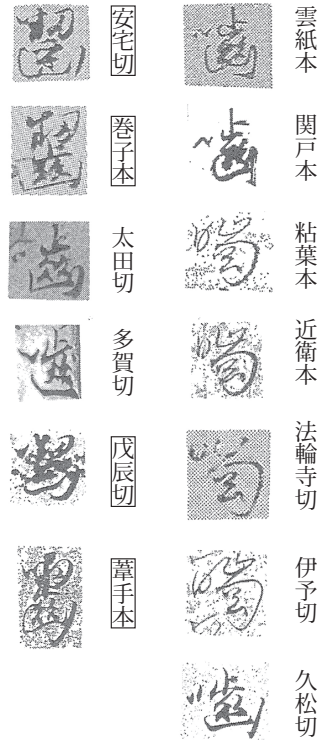
唐紙切<sup>2</sup>「白雲尔翼打加者之飛雁乃影佐部見留秋夜月」

卷子本「白雲尔翼打加波之飛雁能景左部見留秋乃夜能月」

② 673 葦手本「斑鳩之鳶雄蝦蟇之絶蟠社我王之御名遠忘海藻」

戊辰切「斑鳩之鳶雄蝦蟇之絶蟠社我王之御名遠忘海藻」

また、次に、688より諸伝本から「囀」を引用するが、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本には次の事例のごとく異体字の類似もみられる。<sup>19)</sup>



安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本のうち、卷子本のみには口偏は無いものの、隣の部分の字形は類似している。

以上、葦手本・唐紙切<sup>2</sup>・戊辰切・卷子本・安宅切の五本を世尊寺家、及びその周辺に継承された伝本の流れを汲むものとして位置付け得る。

葦手本が雲紙本類の系譜上に位置するということは確かである。しかし、葦手本は粘葉本類の要素をも有しており、その一群の中に位置しつつも雲紙本・関戸本などとは並列の関係にある。このように、粘葉本・雲紙本両類の要素を有する伝本には、その他、十二世紀の書写とされる、久松切・安宅切・卷子本・山城切・戊辰切等も挙げられる。その諸伝本における粘葉本類・雲紙本類の両要素含有の分布の実態が無秩序であることも明らかとなったが、そのことはすなわち、時代の推移に伴い生成された本文がそこに多く存することを意味すると考える。それらの多くは十一世紀中葉の書写とされる伝本群の混淆によるとみてよいのではなからうか。従って、久曾神昇氏が述べられた葦手本が「再稿本」であるという捉え方では整合しないと考えられる。

その他の本文について葦手本は戊辰切・卷子本・安宅切等と連関性を有していることが確認された。

しかしながら、それらの伝本に認められる後世の特徴は、草手本には見当たらなかった。

唐紙切2が藤原伊房の真筆、または伊房の時代の書であるということが事実であるならば、草手本は比較的純度の高い、唐紙切2の本文にまで遡り得る性格を有していると考えられる。

注

- (1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P. 312
- (2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P. 195
- (3) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の和歌作者考(一)」『愛知大学文学論叢』第六二輯〔昭和54年 愛知大学文学会〕
- (4) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは422の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (5) 313、無。
- (6) 本書(冒頭の凡例)中、記した通り、唐紙切2とは、伝藤原公任筆和漢朗詠集切を指す。
- (7) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕「卷上」P. 219
- (8) 前掲(注1)に同。P. 331
- (9) 山内潤三・木村晟・朽尾武氏編『和漢朗詠集私注』〔昭和57年 新典社〕・朽尾武氏編『国立国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫蔵和漢朗詠集私注漢字総索引』〔昭和60年 新典社〕
- (10) 断簡のため題目「氷」の有無については不明。
- (11) 前掲(注1)に同。P. 322
- (12) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P. 145

- (13) 前掲(注1)に同。P 318
- (14) 安宅切の本文に拠る。
- (15) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五卷「平成2年 講談社」P 345
- (16) 古谷稔氏「藤原伊房」(東京国立博物館編『ミュージアム』一六九号「昭和40年 美術出版社」)
- (17) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 351
- (18) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』83「昭和59年 講談社」P 79
- (19) 「囁」を検すると、『康熙字典』には、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本に酷似した字体が存する。しかし、『康熙字典』では旁の部分の上部(右)は「刀」で、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本のごとき「刃」とは異なる。安宅切等の字体は、当時、特異であったといえるのではなからうか。

#### 第四節 戊辰切の位置

一

戊辰切は一橋徳川家の旧藏品である。もとは卷子本二巻で、分断前の戊辰切は、「すでに切り取られていた一三行をのぞいて、すべて欠紙欠行なしの、完本（上下二巻本）であつた<sup>①</sup>」が、昭和三年（一九二八）に切断され、「各題」ごとの断簡となつて分散した<sup>②</sup>。昭和三年の干支が戊辰であつたことに因んで戊辰切と称されている。

料紙は「上下巻ともに、同一装飾技巧によつて統一<sup>③</sup>」されている。一面に雲母砂子と金銀の切箔が撒かれ、さらに、金銀砂子の霞引が施された美術的なもので、天地には薄墨の界が一条ずつ引かれている。

書写者は、藤原伊行（生年未詳——一二二以後）であると伝称されてきたが、巻上と巻下は明らかに別の手に成る。巻上が藤原伊行、巻下がその父にあたる藤原定信（一〇八八——一五四以後）、すなわち、定信・伊行親子によるとする説もある<sup>④</sup>。が、「下巻を親が書写し、子が上巻を書写する例は、当時の常識では、尋常ではなく、下巻は、定信の筆跡と酷似した書を書いた人物を想定する考えもある<sup>⑤</sup>」。

堀部正二氏は平安時代書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本を、主に、本文の近似関係から、

- (1) 御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの：粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切
- (2) 關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本
- (3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

に三大別され、戊辰切を、「(1)・(2)両者の特徴を混有して別系をなせる類」として、(3)に分類された<sup>⑥</sup>。

また、「知り得た百三十餘首についてみるに上巻は傳世尊寺行尹筆本に一致する所多く、下巻は關戸家本系統に近い所、粘葉装本系統と一致する所と相半ばしてゐるやうである」と述べられた。

今回、分断以前の原姿に近い状態の戊辰切の複製本<sup>(8)</sup>、及び堀部・久曾神両氏のご論に扱われなかった若干の資料を調査したことから、改めて平安時代書写とされる諸伝本における戊辰切の位置について考察を行った。本節ではその考察結果について述べる。

## 二

戊辰切の詩歌句の所収状況について分断以前の複製本(昭和三年 尚古会、及び『古筆学大成』<sup>(9)</sup>)に拠り述べる。  
はじめに複製本について記す。

卷子本。卷上・下、二軸。

複製本に収められている詩歌句を詩歌番号順に排列し直すと次の通りとなる。

1 ~ 16<sup>(10)</sup>・18 ~ 73・78・81 ~ 533・535 ~ 602・604 ~ 677・679 ~ 796・796の次・798 ~ 804

詩歌番号順としたため、「18 ~ 73」の次に「78」を挙げたが、複製本では、73の次行には81が排列されており、その位置は74 ~ 80が存在しない(78については後述する)。この部分に関して、春名好重氏は、「うぐひすのこゑなかりせばゆきゝえぬやまざといかてはるをしまし」、(霞)の秀句・和歌、(雨)の(或垂花下、潜増墨子之悲、時舞鬢間、暗動潘郎之思)までの十三行は分割する以前に既に切り取られていた<sup>(11)</sup>とされた。春名氏、御指摘の「うぐひすの」歌は74、「或垂花下」句は80に該当する。

複製本によれば、一首二行書きの73の一行目に紙継ぎ、73の二行目と次行の81の間に切断の跡かと思われる線がみられ、料紙からも73と81は別紙であることが知られる。また、74の一首二葉は断簡として『古筆学大成』に所収されており、この点からも、この部分は、昭和三年(一九二八)の分断以前に既に切り取られていたことが考えられる。

ただし、78については、8の次(9の前の位置)に移動している。8・78・「早春」(題)・9・10・11・12・13・14・15・



16の一〇首(一六行)は一紙内で、78の前後に切り継ぎの跡が見当たらないことから、8の次(9の前の位置)が78の本来の位置とみてよからう。

従って、75・76・77・79・80の五首は、昭和三年の分断以前に既に散逸していたとみられる。

555・630<sup>13</sup>は重出しており(555は81と82の間にも存し、630は16と18の間(17の位置)にも存する)、結果、今回、調査し得た詩歌句は、複製本所収の、重出詩歌句二首(555・630)を含む七九六首、及び『古筆学大成』所収の断簡一首(74)で、総計七九七首となる。

## 三

戊辰切の所在不明の五首(75・76・77・79・80)については対象外とし、詩歌句の有無、排列の面から戊辰切と諸伝本との関係について考察を行った結果について述べる。

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である(ここでは断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する)。

17	42	82	90	91	92	107	109	115	120	178	194	215	225	237	246	249	257	268	271	313	321	322	323	330
337	344	の次	347	348	354	363	369	376	380	407	422	434	434	434	449	459	468	472	476	482	489	507	518	534
535	542	547	549	551	556	561	564	584	596	598	601	603	615	617	618	621	629	636	652	657	663	677	678	699
701	703	712	714	729	735	736	738	739	740	741	742	743	744	745	756	757	760	784	785	796	797	803	の次	804

戊辰切と諸伝本との関係をみるため、右のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除くと次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に

示す。

- ① 17 有(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦) 無(戊・卷)
- ② 42 有(戊・粘・伊・久・卷・下・山・多・葦) 無(雲・関)
- ③ 215 有(戊・粘・伊・久・山・多) 無(雲・関・卷・葦)
- ④ 268 有(戊・粘・伊・久・卷・山・葦) 無(雲・関)
- ⑤ 313 有(戊・雲・粘・伊・久・山・葦) 無(関・卷・和1)
- ⑥ 321 有(戊・行大・粘・伊・久・唐2・卷・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑦ 322 有(戊・行大・雲・関・久・卷・和1・山・多・葦) 無(粘・伊)
- ⑧ 354 有(戊・粘・伊・久・山) 無(雲・関・卷・葦)
- ⑨ 380 有(戊・粘・伊・久・卷・山・葦) 無(雲・関)
- ⑩ 407 有(戊・雲・関・粘・法・伊・久・益・山・葦) 無(卷・太)
- ⑪ 422 の次有(益・山) 無(戊・雲・関・粘・伊・久・卷・下・葦)
- ⑫ 434 有(戊・雲・関・粘・久・卷・山・葦) 無(伊・太・大内)
- ⑬ 434 の次有(伊・久<sub>14</sub>・太・大内・山) 無(戊・雲・関・粘・卷・葦)
- ⑭ 449 有(戊・粘・近・伊・久・卷・太・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑮ 534 有(粘・近・伊・久<sub>15</sub>・卷・太・下・山) 無(戊・雲・関・葦)
- ⑯ 535 有(戊・関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・葦) 無(雲・卷)
- ⑰ 564 有(戊・粘・近・伊・久・卷・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑱ 603 有(粘・近・伊・久・大内・山) 無(戊・雲・関・卷・葦)

19 617有(戊・雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・葦) 無(安・卷)

20 621有(戊・雲・関・粘・伊・久・山・葦) 無(安・卷)

21 652の次有(安・卷・定大) 無(戊・雲・関・粘・近・伊・久・益・山・葦)

22 712有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・山・葦) 無(雲・関)

23 714有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・山・葦) 無(雲・関)

24 729有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・葦) 無(雲・関)

25 784有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・葦) 無(雲・関)

26 797有(粘・近・伊・久・益・山) 無(戊・雲・関・安・卷・太・葦)

このうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首(①⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑)を除外すると、戊辰切は、粘葉本類とは一二首(②③④⑥⑧⑨⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕)、雲紙本類とは四首(⑦⑮⑯⑳)が一致し、後者の四首のうち、三首(⑮⑱⑳)は戊辰切・雲紙本類に無いということが知られる。

また、右のうちの①17については、既述のように、戊辰切には無く、そこに重複歌(630)が位置するが、卷子本も、その位置に630「見度者櫻柳乎古支交天郷處春乃錦奈梨計類」が存する。

なお、他本にみられるが戊辰切にはない詩歌句は、右の二六首のうち、七首(①⑪⑬⑮⑱⑳㉑)であり、その他には八首(92の次・323の次・344の次・376の次・678・735の次・736の次・803の次)がある。この計一五首のうち、四首(17・534・603・797)を除いた一一首は、全て「後人の加筆」<sup>16)</sup>であると思われる。従って、戊辰切は諸伝本中、比較的欠落の少ない伝本であるといえる。

次に、排列についても、「詩歌句の有無」に関する考察で行ったと同様、ある伝本の排列が他本の排列と異なる箇所(三二一か所)のうち、一本のみが他本と異なる場合を除外すると次の六項目となる。諸伝本間において排列に異同がある所の詩歌

番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

①◇110・111(戊・雲・関・粘・伊・久・卷・山)◇111・110(唐2・葦)

②◇137〜143・133〜136〔卷上・春部〕[躑躅]・[款冬]・[藤]〔戊・雲・関・卷・山・葦〕◇133〜143〔卷上・春部〕[藤]・[躑躅]・

〔款冬〕(粘・伊)

③◇201・202(戊・粘・伊・久・卷・山・葦)◇202・201(雲・関)

④◇273・272(戊・雲・関・久・唐2・卷・山・葦)◇272・273(粘・伊・多)

⑤◇309・308(戊・雲・関・久・山・葦)◇308・309(粘・伊)◇308無(卷)

⑥◇312・313(戊・粘・伊・久・山)◇313・312(雲・葦)◇313無(関・卷・和1)

戊辰切は粘葉本類とも同排列である(③⑥)が、卷上・春部卷末の三詩歌群が雲紙本類と同じく「躑躅」・「款冬」・「藤」の順(②)で、この他にも戊辰切は雲紙本類と同排列である箇所が二か所みられる(④⑤)。

以上、詩歌句の有無について検討した結果、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首を除外すると、戊辰切は粘葉本類とは一二首、雲紙本類とは四首が一致していることが確認された。それにより、粘葉本・雲紙本両類の要素を包含しているが、どちらかといえば粘葉本類よりであるといえる。が、戊辰切には、534・603・797の三首が雲紙本類と同様に無く、また、排列の面では、両類の形態を特徴づけているともいえる、卷上・春部卷末の三詩歌群が雲紙本類と同じく、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であった。加えて、戊辰切は卷子本と重複歌(630)を共有する等、雲紙本類の要素が各種みられることも否定はできない。

#### 四

個々の本文を考察した結果について述べる。

戊辰切と諸伝本との本文関係をみるために、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表によると、戊辰切と諸伝本との本文関係の概略については、近い順に、漢詩は、粘葉本（八五・九%）、伊予切（八五・六%）、近衛本（八四・七%）が挙げられる。いずれも粘葉本類である。和歌は雲紙本類の葦手本（七三・七%）がある。また、久松切（七一・〇%）もある。

次に、戊辰切と、漢詩において同文率の高い粘葉本類との同文例を挙げる。戊辰切・粘葉本類の本文の下には諸伝本との異同を示し、括弧内には略号を示す。

① 63号（戊・粘・伊）

ナシ（雲・関・久・卷・益・山・葦）

② 63号（戊・粘・伊）

ナシ（雲・関・久・卷・益・山・葦）

③ 170号（戊・粘・伊）

きかすあらふる（雲・関・久・山・葦）

不聞荒振（卷）

きかすあふる（和1）

④ 351号（戊・粘・伊）

つきよよみ（雲・関・久・卷・山・葦）

⑤ 381号（戊・粘・伊）

ここにわか（雲・関・久・卷・山・葦）

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

⑥ 779 閑(戊・粘・近・法・伊)

閑(雲・閑・久・安・卷・太・益・山・葦)

戊辰切は粘葉本類の本文を有している。しかし、たとえば、右のうちの③・⑤の全文を挙げると以下の通りであり、傍線部のごとく、戊辰切には雲紙本類の本文が混じており、一首中、粘葉本・雲紙本両類の本文が混在しているといえる。

③ 170 ねきこともきかてあらふるかみたにもけふはなこしと人はいふなり

かみたにも(戊・雲・閑・葦)

かみたちも(粘・伊・久・卷・和1・山)

⑤ 381 みやこにはめつらしくみるはつゆきのよしの、山にふりやしぬらむ

めつらしくみる(戊・雲・閑・久・卷・山・葦)

めつらしとみる(粘・伊)

また、

○ 741 黄壤誰知我白頭徒憶君唯将老年淚一灑故人文

の傍線部は、戊辰切、及び雲紙本類の雲紙本・閑戸本の三本には「徒」とあり、戊辰切には雲紙本類とのみ同文である例も存する(粘葉本・伊予切・久松切・安宅切・卷子本・太田切は「獨」。近衛本は「猶」。山城切・多賀切は「獨<sup>徒</sup>」)。

次に、和歌において戊辰切と同文率の高い葦手本・久松切との関係について述べる。

さきに、著者は、本書(前節)中、葦手本の本文性格について考察を行った際、葦手本は戊辰切と近い関係にあり、両本は書写の面においても密接な関係にあると指摘した<sup>18)</sup>。また、葦手本は、粘葉本類の要素をも有するが、大きくは雲紙本類の系譜に連なると結論づけた。従って、特に漢詩においてやや粘葉本類より位置する戊辰切とはこの点において性格を異にする。

一方、久松切は戊辰切と撰者である公任の原撰本から変容した様相を呈するという点において共通性が認められる<sup>19)</sup>。たとえば、

A 259 しらくもにはねうちかはしとふかりのかすさへ見ゆるあきのよの月

の傍線部は、戊辰切・久松切・散書切の三本は「かすさへ」、雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切・卷子本・下絵切・山城切・唐紙切・葦手本の九本は「かけさへ」とあり、平安時代は「かけさへ」が優勢であった。が、後代の『和漢朗詠集』諸伝本——たとえば、専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本（日本古典文学刊行会<sup>21</sup>）・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本（伝世尊寺行能筆<sup>23</sup>）・陽明文庫蔵本（伝浄弁筆<sup>24</sup>）には「かすさへ」とあり、その他も、著者のみる限りでは、「かけさへ」より「かすさへ」の方が圧倒的に多いものであった。<sup>25</sup>

他文献『古今集』（巻四・秋上）諸伝本においても、「かけさへ」と「かすさへ」の両様あり、『和漢朗詠集』同様、平安時代は「かけさへ」の方が優勢であったと考えられる。（関戸本<sup>26</sup>・筋切・元永本<sup>28</sup>「かけさへ」）。が、やや時代が下り、了佐切『古今集』（藤原俊成筆<sup>29</sup>）では「かすさへ」でその後は「かすさへ」が擡頭する。片桐洋一氏は陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）『和漢朗詠集』の解説において陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）は「鎌倉時代書写本の典型的な本文を伝えている」と述べられ、その一例に当該箇所「かすさへ」を挙げられ、『古今集』の「本文研究の結果がそのまま『和漢朗詠集』に現れている本文だと思ふ」とされた。片桐氏のご論のように『和漢朗詠集』の『古今集』との接触は想像に難くなく、戊辰切・久松切の「かすさへ」は、後代的様相を帯びた本文である可能性が高いと考えられる。

『古今和歌六帖』（第一・秋の月）にも「数さへ」として収められており、戊辰切・久松切の「かすさへ」は平安時代における諸伝本校訂の結果であると思われる。

また、

B 375 銀河沙漲三千界梅嶺花開一万株

の傍線部について戊辰切・久松切・卷子本・下絵切の四本は「界」、雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切の四本は「里」、山城切は「里」に傍書「界」がある。典拠は『白氏文集』巻五十三「雪中即事寄微之」。当該箇所、「里」。戊辰切の本文「界」を、柿村重松氏は「誤寫<sup>31</sup>」と説かれたが、川口久雄氏は『日本古典文学大系<sup>32</sup>』の頭注において「私注以下諸本（三千界）に作る。



三千里とすると平面的。三千大千世界とすると深みがあります。わが国の人は後者に解したらしい」とされた。戊辰切の本文「界」が誤写であるのか、あるいは改訂された本文なのかという点については俄に断じがたいが、柿村氏が、「集註には三千界とある。謡曲空也にも三千界とあるから、當時は已に一般にかく變じて居たと見える」とされたことく、後世、戊辰切の本文「界」は流布したといえる。<sup>(34)</sup>

葦手本・久松切を除き、諸伝本中、一本だけが戊辰切と同文である箇所を有するのは、卷子本(319「聲」・371「知」)・下絵切(183「いとゝはるけき」・341「晚」)・山城切(169「をきまざる覧」・753「末」)・多賀切(299「さきしより」・689「あはむとおもひし」)等、戊辰切・葦手本・久松切と同様、十二世紀書写と推定されている伝本群がある。

このうち、戊辰切と卷子本とは既述のように重複歌(630)を共有しており、卷子本と葦手本との関係も近い。<sup>(35)</sup> また、戊辰切と山城切とは形態的な面において類同的な関係にあり、山城切と十二世紀書写本との間にも共通異文例が認められること<sup>(36)</sup>から、諸伝本間において接触が行われていたと推測される。

なお、諸伝本中、戊辰切にのみみられる和歌本文のうち、35「わかなつまむと」(『拾遺集』・『三十六人撰』<sup>(38)</sup>・『人麿集』<sup>(39)</sup>Ⅱ)・37「はるのゝに」(『貫之集』Ⅰ・Ⅱ)・155「夏のよは」(『古今集』・『新撰和歌』)等は、他文献参照による校訂が施されたものと思われる。

本文の下の注記においても、戊辰切では、唐人作の賦句にも作者名が注されており<sup>(40)</sup>(63「賈高」・240「公乘憶」)、67「春江白」・397「傳温山居」等からも、戊辰切には、後世、盛んに行われるようになる研究的要素の萌しが見える。

以上、戊辰切の本文は、粘葉本・雲紙本両類の中間的なところでありながら、やや粘葉本類よりに位置し、横の繋がりに、葦手本・久松切をはじめとする十二世紀書写と推定されている伝本群との連関性が認められた。また、戊辰切の本文・注記からは、他資料参照による校訂、または改訂が施されたかとも思われ、戊辰切は、広く諸伝本と共通要素を有しているということが明らかとなった。

## 五

戊辰切にみられる後代的変移の様相は題の用字からも看取される。

多くの伝本は、巻頭の内題の次に、部類名・題の一覧を有している。この一覧の、巻上・夏部の題「花橘」（はなたちばな）に着目すると、平安時代書写諸伝本においては、「花橘」が優勢であるが（雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切・山城切の諸伝本には「花橘」、戊辰切・久松切の二本には「盧橘」とある。

当題目の異同について、土井忠生氏は、「朗詠集は、上巻の範囲に就いて言へば、「花橘」と題するものと「盧橘」と題するものとの二つの系統があると、大體に於いて言へるやうで」<sup>(41)</sup>、「前者を花橘本、後者を盧橘本と呼んで、二類を立てることが出来る」とされた。分類上、重視すべき箇所である。また、同氏は、「室町時代は、その盧橘本が勢力を得た時期であった<sup>(42)</sup>」という指摘もされた。戊辰切・久松切に、既に「盧橘」とあることから、「花橘」から「盧橘」に転化したその本源は、平安時代にまで遡ることが知られる。

また、本文中の題では、戊辰切では「雁<sup>付雁</sup>」・「氷<sup>付春氷</sup>」にみられる題「雁」・「氷」の下に、付録的に小字にて記されている付項目「帰雁」・「春氷」が独立した一題目として立項されている。

平安時代書写とされる諸伝本中、「帰雁」・「春氷」は山城切にも存し、「春氷」はその他、下絵切にもみられる。

この別項目として扱われている「帰雁」<sup>(43)</sup>・「春氷」<sup>(44)</sup>も、後代の諸伝本に（『和漢朗詠集私注』<sup>(45)</sup>）にも及んでいる。それも題「盧橘」の場合と同断であり、戊辰切にみられる「後世的な要素」といえよう。

## 六

戊辰切には形態的な面においては雲紙本類の特徴が認められたが、本文はやや粘葉本類よりに位置しており、粘葉本類・雲紙本類の両要素が混在していた。横の関係においては、他本との接触、また、戊辰切同様、十二世紀書写と推定されてい

る伝本群との繋がりも認められた。とりわけ戊辰切と近い関係にあるのは葺手本である。しかし、葺手本は大きくは雲紙本類の系譜上に位置している。また、戊辰切が有する後代的要素は葺手本には見当たらなかった。<sup>(47)</sup>

一方、久松切も、本書(第三章第七節)中、既述する通り、粘葉本類よりかと思われる本文を有するが、粘葉本・雲紙本両類のいずれにも属さず、また、形態的にも後代の変移の様相を帯びており、その点において戊辰切に類すると思われる。

集成本的・研究本文的性格を有する後代の諸伝本では、(1)戊辰切が有する重複歌(630)の書き込み、または本文化がなされて、(2)巻上・夏部の題「盧橘」が「花橘」の傍らに注されている、または「花橘」の位置に「盧橘」とある、(3)元來、付項目であったはずの「帰雁」・「春氷」が本題目として独立している等、戊辰切に存する(平安時代書写本においては異質な)要素が摂取され、継承された跡が窺える。

後代の流布本の本文性格を探り、その源流を辿る上でも、平安時代という早い時点で、異本としての位置を占めていた戊辰切は諸伝本研究の上で貴重な資料といえる。

### 注

- (1) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』84「平成元年 二玄社」P 81
- (2) サンリツ服部美術館学芸部編集・制作『サンリツ服部美術館所蔵名品聚』(平成7年サンリツ服部美術館) P 75
- (3) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻「平成2年 講談社」P 348
- (4) 小松茂美氏編『日本書道辞典』(昭和62年 二玄社)「戊辰切」の項
- (5) 小松茂美氏は、上巻は「藤原伊行(子)」、下巻は「藤原定信(父)」の「筆なることは、動かしがたい事実となるであろう」とされた(前掲〔注3〕に同。P 345)。が、春名好重氏は「上巻の書風は伊行の『葺手下絵和漢朗詠抄』の書風に似ているが、同筆ではない。下巻の書風は定信の『金沢本万葉集』の書風に似ているが、同筆ではない」とされ(春名好重氏編著『古筆大辞典』(昭和54年 淡交

社」〔戊辰切〕の項、堀江知彦氏も、「上巻の筆者は藤原伊行」、「下巻のそれは父の定信と伝えられて」いるが、「にわかに断定は許されない」（堀江知彦氏著『古筆』〔平成5年 知道出版〕P.102）とされた。

（6）前掲（注2）に同。なお、巻上・秋部「女郎花」の七行（女郎花）（題）・279・280・281は、巻下と同筆とみられ、ここから「上下巻の筆者の関係の深さを物語っている」といえる（飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第七巻「昭和61年 書藝文化新社」P.232）。

（7）堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P.313

（8）宮内庁書陵部所蔵の複製本に拠った。

（9）小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻「平成2年 講談社」

（10）戊辰切には17の位置に他の和歌（630）が存する。

（11）記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは796の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

（12）春名好重氏編著『古筆大辞典』〔昭和54年 淡交社〕「戊辰切」の項

（13）17が無く17の位置に630が重複するのは、630と17の初句がともに「みわたせは」であることにより誤認されたことによるとと思われる（久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P.197）。

（14）久松切、後人による補筆。

（15）久松切、後人による補筆（片仮名）。

（16）山田孝雄氏校訂『岩波文庫 676 倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P.13～15

（17）山城切、「いふなり」を見せ消ちにして傍書。

（18）葦手本は奥書から藤原伊行（生年未詳―一二七二以後）の筆であることが知られる。戊辰切の書については、前掲（注5）に同。

（19）本書（第三章第七節）中、指摘した。

- (20) 中田武司氏解題『専修大学図書館蔵「古典籍影印叢刊和漢朗詠集二帖」』〔昭和56年 専修大学出版局〕
- (21) 日本古典文学会監修・編集『複製日本古典文学館和漢朗詠集』〔昭和50年 日本古典文学刊行会〕
- (22) 朽尾武氏著『貞和本和漢朗詠集』〔平成5年 臨川書店〕
- (23) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』14〔平成2年 二玄社〕
- (24) 片桐洋一氏解説『陽明叢書 国書篇』第七輯〔昭和53年 思文閣出版〕
- (25) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。調査し得た四六種のうち、「かすさへ」四一種。「かけさへ」一種。
- (26) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一卷〔平成元年 講談社〕
- (27) 久曾神昇氏著『古今集古筆資料集』〔平成2年 風間書房〕
- (28) 小松茂美氏監修『国宝元永本古今和歌集上』第一卷〔昭和55年 講談社〕
- (29) 小松茂美氏著『古筆学大成』第三卷〔平成元年 講談社〕
- (30) 前掲〔注24〕に同。
- (31) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕巻上 P.322
- (32) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系 73』〔昭和44年 岩波書店〕 P.143
- (33) 柿村重松氏註『倭漢新撰朗詠集要解』〔昭和6年 目黒書店〕 P.57
- (34) 専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本（日本古典文学刊行会）・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本（伝世尊寺行能筆）・陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）〔前掲〔注20〕〕〔注24〕に同〕は、当該箇所「界」また、調査し得た、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム、四六種のうち、「界」四二種。「里」四種。
- (35) 本書〔第三章第六節〕中、指摘した。
- (36) 前掲〔注19〕に同。

- (37) 片桐洋一氏著『拾遺和歌集の研究(伝本・校本篇)』〔昭和55年 大学堂書店〕に拠った。
- (38) 久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊〔昭和26年 古典文庫〕に拠った。
- (39) 特に断りのない限り、私家集は『私家集大成』に、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』に拠った。
- (40) 三木雅博氏は、「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、「原則として」『唐人の賦句のみには作者名が記されないとされた(同氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P.145)。
- (41) 土井忠生氏著『吉利支丹文獻考』〔昭和38年 三省堂〕P.23、24
- (42) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『慶長五年耶穌會板倭漢朗詠集』〔昭和39年 京都大学国文学会〕P.5
- (43) 山城切も「帰雁」、本題目。
- (44) 山城切・下絵切も「春水」、本題目。久松切、墨色の異なる筆で、「帰雁」・「春水」、本題目として補筆。
- (45) 山内潤三・木村晟・朽尾武氏編『和漢朗詠集私注』〔平成元年 新典社〕他。
- (46) 前掲(注7)に同。
- (47) 本書(第三章第三節)中、指摘した。

〈付記〉

戊辰切の複製本の閲覧に際し、宮内庁書陵部の方々にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

## 第五節 葦手本と戊辰切巻上の書

一

世尊寺家第六代目、藤原伊行（生年未詳——一七二以後没）は、能書家と目される一方、『夜鶴庭訓抄』・『源氏釈』の著者としても名高い。伊行の真筆とされる作品には葦手本がある。また、先学の研究に拠ると、戊辰切巻上も伊行の手になるという指摘がある。が、その点をめぐって諸説見られる。

飯島春敬氏は、戊辰切巻上と葦手本とは「直ちに同筆といえない差異を有しているが、上巻の筆は短鋒であり、葦手朗詠集の方はやや長鋒であったり、その上前者と後者の間に十年、十五年の間があれば書風の変化も考えなければなるまい」と述べられた。また、春名好重氏は戊辰切「上巻の筆者は伊行、下巻の筆者は定信といわれている。伊行・定信の真跡ではないが、書風は伊行風と定信風とである」とされた。それに対して、小松茂美氏は、戊辰切「上巻は藤原伊行、下巻は藤原定信の筆なることは動かしがたい事実となるであろう」とされる等、戊辰切の書に関しては諸説あることが知られている。しかしながら、それらの説の裏付けとなる個別具体的・網羅的な事例については未見である。よって精察の必要性を感じ、葦手本との比較検討を試みた。<sup>(5)</sup> その結果、異質的要素の存在が明らかとなった。考察結果の一端は、既に、拙稿<sup>(6)</sup>において述べたが、紙幅の都合上、十分に論じ得なかつたため、改めてこの課題に焦点を当てる。

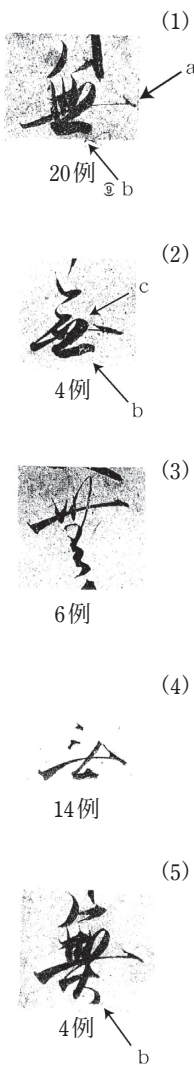
以下、葦手本・戊辰切から載せた書（文字）の一覧は、便宜上、漢字は「崩し方」によって分類し、仮名は字母ごとに分類し、それぞれのカテゴリーの中から一種ずつ挙げたものである。分類の仕方としては大きく分けた文字と必要に応じてさらに細かく分けた文字とが混在しているが、それらをもとに、両本間に見られる異質的と思しき点について指摘する。

まず、漢字について述べる。

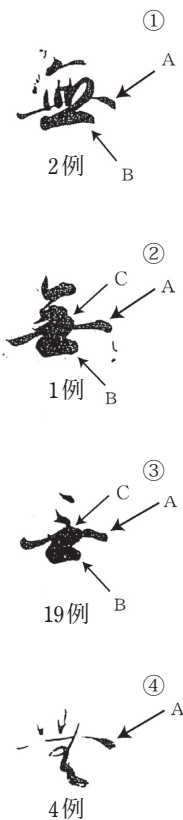
■無<sup>(8)</sup>

両本における崩し方は、次のタイプに大別される。

葦手本

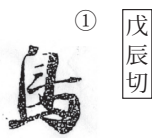


戊辰切



葦手本では、(1)が最も多く、二〇例であった。それに近い崩し方は、戊辰切の中では①であるが、二例のみであった。葦手本(1)では、最も長い横画(矢印a)が、鋭く右上の方向へ「張り」出し、下部(矢印b)で短く「締め」る結体となっている<sup>(10)</sup>。また、この横画(矢印a)の「終筆では筆をつり上げるような運筆も認められ、それによる撥ねが生じている」<sup>(11)</sup>。その特徴(横画の、右上への「張り」出し、及び、終筆における撥ね)は、(2)(3)(4)(5)からも看取され、また、他の漢字にも散見され





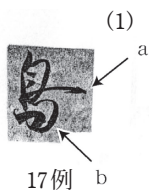
2例



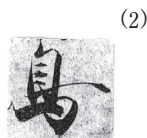
11例



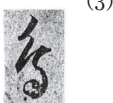
1例



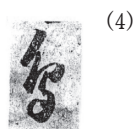
17例



2例



4例



1例

■鳥

両本における崩し方は、次のタイプに大別される。

た<sup>②</sup>、それに比して、戊辰切①②③④の終筆（矢印A）には筆圧がかけられており、そこには葦手本のごとき鋭さも「撥ね」も見られなかった。さらに、重心のとり方に注目すると、葦手本(1)(2)(5)では、「最も長い横画」に対して下部（矢印b）が「やや左に寄っている」<sup>③</sup>が、戊辰切①②③の当該箇所（矢印B）は、ほぼ中央に位置しており、結体・線質ともに、両本は趣きを異にするものであった。

また、葦手本(2)と、戊辰切②とは、崩し方としては一見似通ってはいるものの、類似の戊辰切③も加え、全用例を精査してみると、両本間には、それぞれが有する特徴的な部分（矢印c・cに見られる筆路）において違いが認められた。

なお、葦手本(4)(5)のタイプは戊辰切には見当たらなかった。

葦手本(1)では、六画目の横画(矢印a)が鋭く右方へ「張り」出しており、下部(矢印b)で「締め」る結体である。それに対して、戊辰切には重厚感があり、葦手本のごとき独特な均衡の保ち方とは異なっていた。なお、二画目と三画目に囲まれている短い横画の画数に注目すると、葦手本(1)では二画のみが多い(二七例)のに対して、戊辰切においてはその事例(二画が存する)は①の一例のみであった。

■春

両本における崩し方は、次のタイプに大別される。

葦手本

(1)



52例

(2)



1例

(3)



2例

(4)



12例

(5)



10例

(6)



2例

戊辰切

①  
  
41例②  
  
7例③  
  
1例④  
  
11例⑤  
  
1例⑥  
  
3例

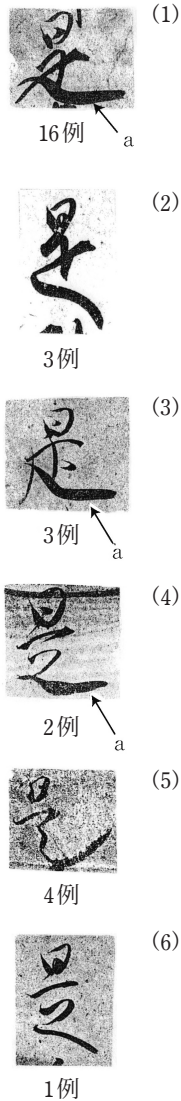
葦手本では(1)(五二例)、戊辰切では①(四一例)が最も多い。両本のそれらは、書体が行書であるという点においては共通しているが、書としては異なる。戊辰切①の右払い・左払いが、丸みを帯びた線質による、右下・左下へ向けての穏やかな運筆であるのに対して、葦手本(1)の右払い(矢印a)の線質は、既に指摘した事例「無」・「鳥」における横画の場合と同様、鋭く右方へ「張り」出しており、また、左払いの終筆(矢印b)では、上方へ向けての撥ねが認められた。葦手本には、その他の漢字においても、このような右払いと左払いとを一字の中に併せ持つケースが見受けられたが、<sup>14</sup>そのような特徴は戊辰切には見当たらないものであった。

その他、類似性のある崩し方には葦手本(5)と戊辰切⑥とが挙げられる。しかし、それらの書は性格を異にするものである。葦手本(5)では、全て(一〇例)において、下部(矢印c)が小さく「締め」られているのに対して、戊辰切⑥には(僅か三例ではあるものの)そのような特徴は見られなかった。

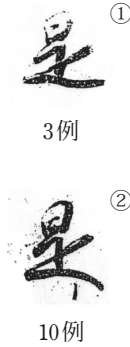
## ■是

「是」の下部「疋」に注目し、両本における崩し方を分類すると、次のタイプに大別される。

## 葦手本



## 戊辰切



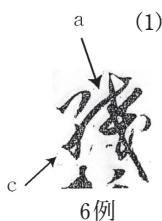
右掲の中では、崩し方としては、葦手本(2)と戊辰切②とが近いものと思われる。が、全用例を通覧すると、葦手本(2)の結体の方が縦長の傾向にあり、また、右払いの線質等では、葦手本に比して、戊辰切では、精彩を欠くと言わざるを得ない。

また、葦手本(1)(3)(4)の右払い(矢印a)は、藍紙本万葉集を想起させる抑揚のきいた生命感のある線質である。独特な運筆のリズム(独特なカーブ、長さ、太細の変化等)により強調されており、絵画的な要素が濃厚である。<sup>15</sup>葦手本では、他の漢字においてもそれと同質の右払いを有するものがいくつか見られたが、<sup>16</sup>戊辰切にはそのような特徴は見当たらなかった。

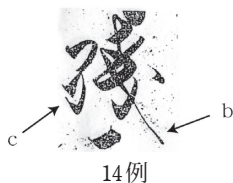
## ■ 残

両本における崩し方は、葦手本では、二種に大別され、戊辰切では次の一種のみである。

葦手本



(2)



戊辰切

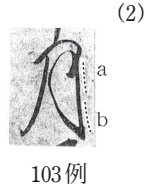
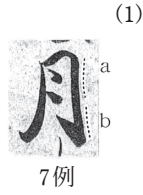


葦手本(1)と(2)とを区別した基準は、偏と旁の間に存する実画(矢印a)の有無のみにある。葦手本(1)に存する当該箇所(矢印a)の線質には、美しい流れがあり、書写者の呼吸までも感じられるものであった。一方、戊辰切には、そのケースは見当たらず、それに加え、偏の部分の崩し方(矢印c・C)も両本では相違していた。また、全用例を通覧すると、葦手本には同じような崩し方の中にも、その書には疎密の変化が看取されたが、一方の戊辰切では一様で、一五例の殆どにおいて一つの類型を出るものはなかった。さらに、その他の特徴的なところを見ていくと、葦手本(2)の「そり」(矢印b)の線質は、繊細で艶やかでありながらも、強靱さをも有していた。<sup>(18)</sup> それに対して、戊辰切の当該箇所はいずれも単調であった。

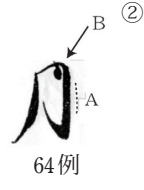
■月<sup>19</sup>

両本における崩し方は、次のタイプに大別される。

葦手本



戊辰切



三画目と四画目とが実画で繋がっていない崩し方を葦手本(1)に分類し、その他を(2)(3)(4)とした。一方、戊辰切では、当該箇所(三画目と四画目)が実画で繋がっていないのは①の一例のみであった。

葦手本(2)の、二画目の転折以降は、上方から下方へ、下方から上方へと、「緊張感があり、かつ、流麗な筆致で」書されていた。「穂先の弾力をいかし、鋭く、強く撥ねる」葦手本に対して、戊辰切の撥ねは、相対的に短く感じられるものであり、そこには葦手本のごとき鋭さはなかった。

また、二画目の転折以降、葦手本(1)(2)では、いったん内側に向けて運筆し(点線a)、その後は、外側へ向けて反っている(点線b)ケースが多いのに対して、戊辰切①②(点線A)では、どちらかといえば垂直に近い状態か、もしくは、少々ふ

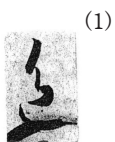
くらんでいるようである。また、三・四画目(矢印B)の位置においても、戊辰切②では三画目が二画目の横画に接しているケースも見られ、全体的に上方に打たれる傾向にあるのに対して(上掲、当該箇所(矢印B)は二画目から突き出ているようである)、葦手本では、それより若干、下方に位置していた。<sup>25)</sup>

なお、便宜上、前掲のごとく分類したが、葦手本の場合は、同類としてカテゴリー化したものであってもその中におけるそれぞれの字形は多様であった。<sup>26)</sup>

■色

両本における崩し方は、次のタイプに大別される。

葦手本



1例



39例



10例

戊辰切



22例



2例



1例

これらの中では、葦手本(1)と戊辰切①とが近いが、葦手本(1)は一例のみで、その他には両本間に類似した崩し方は認められなかった。

なお、葦手本(3)に見られる、回転、及び、曲線を伴った連筆(矢印a)は、葦手本では、他の漢字においても散見される  
ところである。以下、少し用例を載せるが、このような曲線と、既に指摘してきた直線による調和が葦手本の書の特徴の一  
つに挙げられるものと思われる。

葦手本



以上の考察結果から、両本において多用される崩し方の傾向の違いが認められ、また、書風の相違も明らかとなった。

葦手本では、一字中に、長目な横画、及び、右払い等が存する場合、鋭く右方へ「張り」出す画と、「締め」る画による独特な均衡の保ち方が目立っていた。それに加え、一字中の、ある一部を強調する手法(回転・曲線を伴う連筆、及び、縦画・「曲がり」を伸ばす連筆等)も看取された。また、同様な崩し方の中にも微妙な変化が感取され、結体・線質は絵画的であり、視覚に訴えるものがあつた。一方、戊辰切の書は比較的単調で、一字中の下方に重心が置かれる傾向にあると考えられる。また、葦手本の特徴の一つに挙げられる、終筆における「撥ね」は戊辰切には見られず、丸みを帯びた線質により書され、重厚感とともに穏やかさも見受けられた。

### 三

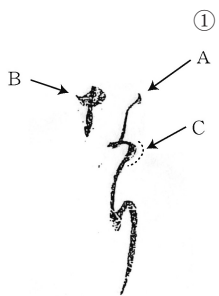
次に、仮名について述べる。

■「な」の音を表す「仮名」

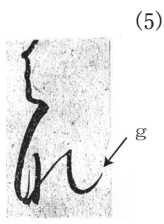
「な」の音を表す仮名は、字母の異なりに加え、崩し方も考慮すると、次のタイプに大別される。



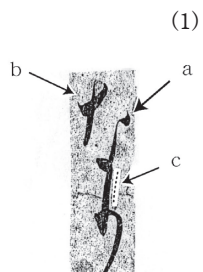
戊辰切



44例



61例

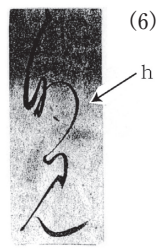


121例

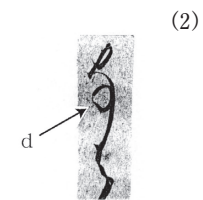
葦手本



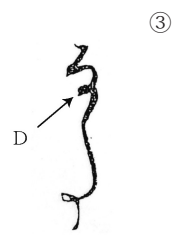
5例



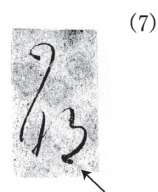
12例



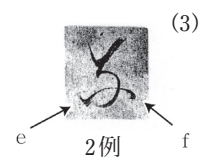
20例



36例



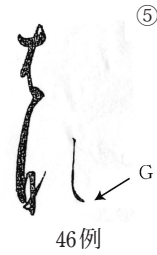
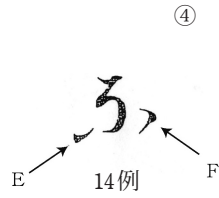
14例



2例



3例



まず、字母について述べる。

これらのうち、頻度が高く、かつ、両本間において顕著な相違が認められるものには、「な」・「那」が挙げられる。葦手本では(1)「な」が優勢である。(5)(6)(7)「那」は、合計すると八七例であり、葦手本全体の中で占める割合は大きいものの、(1)「な」より三〇例以上少ない。それに対して、戊辰切①「な」は、⑤「那」と拮抗しているといえる(仮に、戊辰切①に②を加えた場合でも、四九例で、⑤の四六例より三例多い程度である)。

書について述べる。

葦手本(1)と戊辰切①の、矢印 a・A<sup>(28)</sup>で示した位置に注目すると、葦手本では、(1)のごとく、矢印 b の、筆の穂先が最初に紙に触れたところより、矢印 a の方が下方に位置しているケースが一〇八例程見られたが、戊辰切では、矢印 B より矢印 A の方が上方に位置するケースも一九例程見受けられ、また、両本では、連綿<sup>(29)</sup>の仕方も異なっていた。結びの直後、葦手本では、連綿線(点線 C)が下方へ向けて直線的であるケースが目立っているのに対して、戊辰切では、結びの直後(点線 C)は、筆圧をかけながら曲線を描くのごとく、左下の方向へ向かうケースも見られた。

葦手本(2)と戊辰切③については、結び(矢印 d・D)の形状・大きさに注目し、全用例を通覧すると、葦手本ではそれぞれに微妙な差異が認められた。それに対して、戊辰切では、③のごとく結びに余白が無いケースが二〇例程見られ、また、

余白が明白なのは四例で、その他は殆どが余白僅少であった。

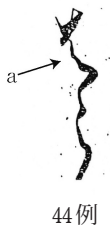
葦手本(3)と戊辰切(4)について述べる。葦手本の二例に対して戊辰切の方は一四例であり、葦手本では、矢印 e と矢印 f とが実線<sup>(30)</sup>により繋がっているのに対して、戊辰切では、複製本を見る限りにおいては、実線による繋がりは見て取れなかった。また、矢印 E と矢印 F の間隔は、いずれも、葦手本より広く、下方に重心が置かれていた。

葦手本(5)(6)(7)と戊辰切(5)について述べる。葦手本を三種に区別した基準は、「那」の傍の部分「𠄎」の崩し方のみにある。「𠄎」に注目すると、(5)では、終筆(矢印 g)が右上の方向へ向かっており、(6)の矢印 h では、円を描くかのごとく連筆されており、(7)の矢印 i では止められているが、戊辰切には、葦手本(6)(7)の崩し方は見られなかった。それに加え、葦手本(5)と戊辰切(5)の終筆(矢印 g・G)に注目し、全用例を通覧すると、葦手本からは筆勢が感受されたが、戊辰切では静的であることが確認された。

■「は」の音を表す仮名

「は」の音を表す仮名は、字母の異なりに加え、崩し方も考慮すると、次のタイプに大別される。

葦手本



まず、字母について述べる。  
 これらのうち、頻度が高く、かつ、両本間において顕著な相違が認められるものには、「者」・「は」が挙げられる。

⑤



39例

①



92例

戊辰切

(9)



13例

(5)



28例

⑥



2例

②



8例

(10)



1例

(6)



13例

⑦



2例

③



55例

(7)



1例

④



1例

(8)



5例

葦手本(1)(2)(3)(7)「者」では、合計一三〇例で、最多ではあるものの、(4)「は」より若干多い程度である。それに対して、戊辰切①②⑦「者」は、合計一〇二例である。③「は」の二倍近くであり、ここから、戊辰切では「者」の割合が大きいことが分かる。

なお、葦手本(8)「波」・(9)「平」・(10)「磨」、戊辰切⑥「葉」はそれぞれ一方にしか見られないものであった。

次に、書について述べる。

葦手本(1)と(2)とを区別した基準は、(2)に示した矢印aの揺れの有無(①には無く、②には少し揺れが認められる点のみ)にある。(2)では、四四例が見られるのに対して、戊辰切にはそのタイプは見当たらなかった。また、葦手本(1)(2)(3)・戊辰切①の全てを通覧すると、葦手本についてはそれぞれの位置に応じて自在に崩される傾向にあり、同じカテゴリーの中でも多様性を帯びていた。それに対して、戊辰切では葦手本に比べると変化に乏しく、いずれも一つの類型を出ているものはないものと見られる。また、①のタイプでは、点線Aの部分が高く、また、矢印Bの部分も重く、戊辰切では、葦手本の流麗な筆致とは異なり、堅さが見受けられた。

葦手本(4)と戊辰切③のタイプについては、全用例を通覧すると、葦手本では、一筆目の縦の線において、運筆の方向・太細、強弱等の変化があり、心の赴くままに筆が運ばれているかのごとくであった。ここでも流動的な様相を呈しているのに対して、一方の戊辰切では単調であった。また、矢印cの部分の撥ねの直前には筆圧がかけられていたが、それは葦手本には見当たらない運筆であった。

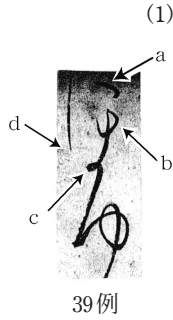
次に、葦手本(5)と戊辰切④の「磬」について述べる。「磬」は戊辰切では一例のみであり、それと同様な崩し方は葦手本には見当たらなかった。葦手本の、起筆から終筆まで、緊張感のある運筆からは清雅な印象を受けるものである。

葦手本(6)と戊辰切⑤についても、全用例を通覧すると、葦手本の方が軽妙な筆致である。また、葦手本の一筆目(矢印b)は、戊辰切より長く、のびやかに感じられる。

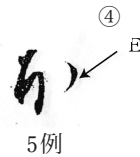
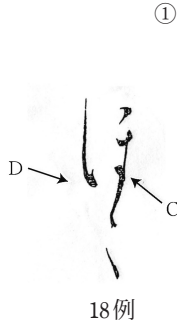
■「ほ」の音を表す仮名

「ほ」の音を表す仮名は、字母の異なりに加え、崩し方も考慮すると、次のタイプに大別される。

葦手本



戊辰切



両本間における字母の一致は確認し得たが、書については、特徴的な部分において違いが認められた。

葦手本(1)では、矢印aと矢印bの間隔が広く、また、結び(矢印c)が一筆目の終筆(矢印d)より下方に位置しているケースが三九例中、二九例が見られた。それに対して、戊辰切①の結び(矢印C)は、いずれも一筆目の終筆(矢印D)よりも上方に位置していた。また、前項「は」の場合と同様、戊辰切では、矢印Dの部分が重い(筆圧がかげられる)傾向にあった。<sup>(註)</sup>

また、葦手本(3)と戊辰切③④についても、数は少ないものの、両本の特徴を示していると思われる。葦手本(3)には、戊辰

切④の矢印Eのようにしっかりと打たれた点は見当たらず、矢印eでは、穂先のきいた繊細な筆致による曲線的な運筆であった。

なお、以上の事例の他、両本間に見られる字母の相違のうち、顕著なものを挙げると次の通りである。

① 葦手本に無く戊辰切に有るケース：「流」（戊辰切一三例）・「累」（戊辰切七例）・「連」（戊辰切二七例）

② 戊辰切に無く葦手本に有るケース：「希」（葦手本一六例）・「留」（葦手本八例）・「礼」（葦手本三二例）

③ 両本に存するものの、一方では一例しか見られないケース：「気」（葦手本三例、戊辰切一例）・「遣」（葦手本一例、戊辰切七例）・「遊」（葦手本一例、戊辰切一五例）・「類」（葦手本二九例、戊辰切一例）・「衛」（葦手本九例、戊辰切一例）

以上、字母と書の両面において、両本間には違いが認められ、かつ、葦手本の方が変化に富んでいることも知られた。それぞれの位置に応じてのびやかに流れ、自在に崩されている葦手本の書は、自然の景物を髣髴させる妙を醸し出し、その中に溶け込んでいるかのようにさえ感じられた。一方、戊辰切は、一字一字、丁寧に書かれてはいるものの、堅さがあり、全体的に単調であった。

#### 四

用字<sup>32</sup>と書の両面から考察した結果、両本間に存する異質的要素が明らかとなった。葦手本の書からは、書写者の感情の進りとも取れる視覚的变化の追求が窺われた。一方、戊辰切の書は、どちらかといえば整齊たる美を志向しているかのごとく感じられ、葦手本とは一線を画する。見方によっては、自由奔放で、奇異にも映る葦手本の書き振りは、下絵の中に解き放たれ、昇華された観を呈しているかのごとくである。一方、戊辰切の書は温雅で、鋭い印象を与える葦手本とは性格を異にしている。

如上のごとき両本間に見られる相違は、同一人物が、ほぼ同時期に意図的に書き分け得る、表現上のものでして受け取れ

なくもない。しかし、用字の選択については（殊に、両本のごとき「テキスト」では文字数も多く）、書写者の（ある時期における）書記上の根幹を成す、個人的・習慣的なものが多分に含まれる可能性が考えられ、それらの全てを「意図的な書き分け」とは取り難い。小松茂美氏が述べられたように、葦手本が戊辰切巻上と同筆であるならば、考え得るあらゆる状況<sup>(33)</sup>を想定してみても書写された時期が近いとは考えにくく、また、葦手本の方が戊辰切巻上より後に書写されたといえるのではなからうか。

推定されている藤原定信の生没年（一〇八八—一一五四以後）と照らしても矛盾はない。しかし、「戊辰切巻上が藤原伊行、巻下が藤原定信の筆になる」という所論について、定説はない。改めて戊辰切巻下の書も検証していく必要性を感じている。

#### 注

(1) 飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第七卷「昭和61年 書藝文化新社」P.232。なお、同氏は、それ以前には、戊辰切「上巻の伊行は葦手朗詠より前書の真筆と見て差支なきものの如く、下巻の定信については単にその流風を追った人の手になると解されてゐるが、この解釋に聊か私は疑問を有してゐる」とされていた（同氏「平安時代書写の和漢朗詠集について」『御物倭漢朗詠集』「昭和29年 便利堂」P.32）。

(2) 春名好重氏著『書の古代史』「昭和62年 新人物往来社」P.246。堀江知彦氏も「上巻の筆者は藤原伊行」、「下巻のそれは父の定信と伝えられて」いるが、「にわかには断定は許されないとされた（同氏著『古筆』「平成5年 知道出版」P.102）。

(3) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻「平成2年 講談社」P.345

(4) 古谷稔氏も、「戊辰切本和漢朗詠集」は上巻が藤原伊行、下巻が藤原定信の筆で、定信・伊行父子によって分担執筆している」とされ（『書道史学』編『日本・中国・朝鮮／書道史年表事典』「平成17年 萱原書房」P.340）、また、島谷弘幸氏も戊辰切巻上は藤原伊行、巻下は藤原定信が「分担書写したものである」とされた。また、同氏は、戊辰切巻上は葦手本に比べて「より父定信の書



に近似していることを思えば、父子間の書法伝授が色濃く残っている時期と考えられるのである」と述べられた(同氏著『古筆学拾穂抄』〔平成9年 木耳社〕P.64)。一方、名児耶明氏は「上巻を藤原伊行とし、下巻を、その父の定信とするのが有力。しかし、下巻を親が書写し子が上巻を書写する例は、当時の常識とは異なり、下巻は、定信の筆跡と酷似した書を書いた人物を想定する考えもある」とされた(名児耶明氏監修『第六〇回毎日書道展特別展示「春敬の眼」—珠玉の飯島春敬コレクション—』〔平成20年「飯島春敬コレクション」特別展』実行委員会〕P.316)。

(5) 葦手本は巻上・巻下、戊辰切は巻上のみを調査の対象とした。ただし、戊辰切巻上「女郎花」の七行(「女郎花」〈題〉・279・280・281)は、巻下の書写者の手になるとされている(前掲〔注1〕に同。P.232)ため、対象外とした。本文・題・作者名等(戊辰切では目録〈題の一覧〉も取り上げた)、調査範囲内の全ての文字を対象としたが、和歌の、いわゆる真名書きについては、仮名として使用されている文字は「仮名」のカテゴリー内に入れてカウントした。

(6) 拙稿『和漢朗詠集』葦手本と戊辰切巻上について『書学書道史学会会報』第12号〔平成18年12月〕

(7) 以下、例示する文字のうち、当該文字の上下で他の文字と続けて書いている場合はそれらの文字もあわせて載せた。ただし、当該文字が上下の文字と近接している場合については当該文字のみ掲出した。引用した図版は、葦手本は『日本名跡叢刊』47・48〔平成元年 二玄社〕、戊辰切は複製本〔昭和3年 尚古堂〕に拠った。

(8) 葦手本の「無」の特徴については、一部、拙稿「葦手本和漢朗詠集の書—平家納経願文との関係において—」(『相川鐵崖古稀記念書学論文集』〔平成19年 木耳社〕)において既述した通りであるが、あらためて戊辰切との比較において考察を行った。

(9) 図版の下には、それぞれにカテゴリー化した文字の数を示した。また、図版中の、矢印・点線等は著者が付した。以下、同。

(10) 「張り」・「締め」の用語・定義については、故松村北僊先生のご教示による。「張り」とは一文字中、横画、及び、右払い・左払い等により左右へ張る力のこと。当該文字中、その「張り」を抑える作用が働く。それを「締め」と便宜上、称する。それらは当然のことながら、運筆の速度・筆圧の変化等により加減される。

- (11) 拙稿「葦手本和漢朗詠集の書―平家納経願文との関係において―」(『相川鐵崖古稀記念書学論文集』[平成19年 木耳社]所収)
- (12) 当該箇所を有する漢字を葦手本より挙げると以下の通り(無、除外)。2「解」[梅]「封」[11][梅]「異」[18][醉]「着」[30][梅]・45「楼」[舌]・47「莫」[51][醉]・53「車」[55][鳥]・61「梅」[63][鳴]「鶯」[75][曙]・80「舞」[82][葉]・83「鳥」[88][梅]・91「梅」・96「鷄」[帶]・104「翠」[106][梅]・118「女」[128][鶯]・130「舞」[158][妻]・161「禪」[177][翠]・178「鳥」[180][汝]「善」[182][曙]・194「蕉」・208「暑」[老]・213「緒」[聲]・221「葉」[223][苦]・230「蟬」[231][轉]・233「聲」[234][曙]・236「蔓」[241][聲]・247「融」[254][醉]・258「者」・259「翼」[者]・263「轉」[264][者]・266「黃」[274][爽]・275「禪」[276][海]・279「老」[286][老]・287「桑」[288][女]・304「聲」[313][弄]「雁」(題)・327「嘍」・328「苦」[365][醉]・371「履」[378][棹]・393「爐」[423][姿]・424「暑」[437][屢]「鶴」(題)・444「異」[467][梅]・473「母」・477「世」[478][世]・479「鸚」[482][葉]・488「接」[491][海]・499「海」[512][梅]・516「者」[533][老]・550「耳」[558][翠]・559「者」[581][世]・583「世」[586][樓]・591「海」[609][老]・625「挿」[翠]・628「斜」[653][諸]「傳」[658][耳]・660「者」[697][婁]・700「翠」[701][緒]・719「女」・725「汝」[726][老]・729「年」[731][醉]・793「者」

なお、葦手本では、「心」の終筆においても上へ向けての撥ねが随所に見られるが、それも葦手本の特徴といえる。

(13) 前掲(注11)に同。

- (14) 葦手本において当該箇所を有する(右方へ張り出す右払いと上方へ向けて撥ねる左払いとを併せ持つ)漢字は以下の通りである(春、除外)。1「露」[12][拳]・13「髮」[18][美]・23「落」[52][藤]・55「落」[113][路]・122「秦」[藤] (題)・134「藤」[214][露]・224「容」[243][洛]・244「各」[257][客]・275「客」[282][露]・295「養」[301][暮]「落」(題)〔紅葉付落葉〕・308「落」[318][添]・329「葦」[露] (題)・353「落」[369][添]・372「零」[吞]「吞」[403][秦]・406「秦」[432][客]・457「客」[462][秦]・480「客」[499][泰]・510「路」[511][鶯]・525「拔」[532][泰]・555「菴」[595][奏]・596「養」[604][霽]・613「秦」[634][路]・696「秦」[723][客]・784「養」[794][路]・799「秦」

(15) 葦手本中の「是」において顯著であるのは、178・179・214・291・297・481・486・635・667等。

(16) 葦手本において当該箇所を有する(右払いにおいて独特な運筆のリズムを有する)漢字は以下の通り(是、除外)。4「文」[19

「天」・22「天」・23「天」・文「文」・41「後」・70「後」・75「後」・96「文」・109「交」・118「文」・119「定」・129「後」・140「天」・150「天」・152「後」・177「泛」・189「疑」・222「楚」・227「楚」・233「天」・255「天」・258「天」・262「文」・267「愛」・276「文」・289「楚」・309「杖」・311「反」・327「天」・352「天」・「火」(題「爐火」)・377「綴」・380「楚」・412「天」・「皴」・418「巖」・433「文」・438「暖」・444「楚」・454「天」・467「聲」・「文」  
 「文」(題「文詞付遺文」)・471「文」・472「文」・475「文」・477「文」・485「天」・491「聲」・499「故」・501「天」・「父」(題「水付遺父」)・554「敲」  
 「撥」・556「父」・560「交」・589「提」・599「文」・606「天」・624「天」・626「天」・627「天」・642「聲」・660「文」・662「文」・667「文」・674「文」・684「瘦」・686「文」・694「楚」・「聲」・723「聲」・728「文」・735「交」・752「文」・761「足」・766「雙」・768「父」・800「文」・803「愛」

(17) 紙上に筆の運動が描いた点画のこと(藤原宏氏ほか編『書写・書道用語辞典』平成2年第一法規 P129)。

(18) 葦手本ではその他の漢字の「そり」においても独特な線質を有していた。以下、事例を挙げる(「残」、除外)。22「織」・39「機」・41「成」・54「我」・55「城」・87「城」・105「誠」・115「賤」・119「織」・「裁」・120「幾」・「織」・121「識」・「機」・「織」・122「裁」・「城」・189「賦」・196「歳」・216「曳」・225「感」・231「感」・241「織」・「機」・287「哉」・「賦」・「裁」(題「前裁」)・295「裁」・321「機」・330「織」・353「減」・「歳」(題「歳暮」)・369「感」・400「裁」・417「城」・419「減」・432「茂」・448「威」・「儀」・455「成」・456「載」・465「裁」・476「賦」・478「成」・480「威」・483「淺」・499「成」・504「戲」・506「成」・508「成」・510「城」・516「感」・532「減」・「或」・542「裁」・543「城」・546「成」・586「成」・591「感」・592「減」・606「儀」・613「歳」・617「淺」・619「穢」・626「城」・628「減」・634「我」・649「越」・660「我」・667「哉」・686「職」・「武」・695「歳」・707「識」・708「蛾」・713「織」・727「哉」・734「我」・736「我」・751「感」・「義」・752「踐」・756「成」・767「錢」・769「職」・774「歳」

(19) 葦手本の「月」の特徴については、一部、拙稿(前掲〔注11〕)に同において既述した通りであるが、あらためて戊辰切との比較において考察を行った。

(20) 前掲〔注11〕に同。

(21) 前掲〔注11〕に同。

(22) 楷書でいうところのいわゆる「背勢」を指す。

- (23) 楷書でいうところのいわゆる「直勢」を指す。
- (24) 楷書でいうところのいわゆる「向勢」を指す。
- (25) 草手本にも二画目に三画目が接していると思しきケースは見られたが、三例のみ(236・253・345)であった。
- (26) 現今においても「字形」・「字体」などの用語が「錯綜——未整理のまゝで慣行せられて」(山田俊雄氏「漢字字形の史的研究の問題とその一方向」『国語学』72「昭和43年3月」)いるように思われる。本書における「字形」では、筆遣い等により生じる微妙な差異をも対象とされるものであり、「崩し方」とは区別されるものとして捉えた。したがって、手書きによる文字である以上、同一の「字形」は存在し得ないということになる。
- (27) 草手本では、最終画が強調されるケースが目立っていた。たとえば、「岸」・「柳」・「年」・「序」・「拂」・「劉」・「車」・「別」・「斜」・「開」・「聲」等の縦画、「地」・「也」等の「まがり」の画、「縦」・「人」等の右払い、「戸」の左払い等。
- (28) 仮名には画が存しない。当該箇所を指す際、適切な用語が見当たらない場合は「矢印」・「点線」等として呼称せざるを得なかった。以下、同。
- (29) 「形連」に加え、「意連」も対象とする。
- (30) 「紙面に筆の軌跡として残された点画をさしている」(藤原宏氏ほか編『書写・書道用語辞典』『平成2年第一法規』P129)。
- (31) 「は」・「ほ」の他、「け」・「に」等にも当該箇所と同様な特徴が見られた。
- (32) 「用字」とは「その人(文献)における文字の使用上の特徴。また、そこに使われている文字の現況」(『新明解国語辞典』第六版「三省堂」)。
- (33) 両本において使用された筆・墨・料紙等の相違やその他、想定し得る全ての外的要因を指すが、たとえば次のようなことが考えられる。①草手本中にあしらわれている下絵は、書に生命を吹き込み、万物との融合を図る媒体として機能しているかのよう感じられる。このような下絵を有する草手本と戊辰切とでは、当然のこと乍ら書写上の前提条件が異なるわけだが、それを考慮

に入れても両本の書写された時期が近いとは考えにくい。②殊に、葦手本のような美術品としての性格を有する伝本では、書写者への依頼主の存在も考えられる。その場合、依頼主の趣向が書写者へ求められること（このような書き振りで書してほしい等といった具体的要求）は無かったのかとも憶測される。仮に、そのような事実があり得るのであれば、本稿における考察内容では不十分であり、容易に結論づけることは出来まい。しかし、伊行ほどの人物であれば書に関することは伊行に一任されていたものと考えられる（浅田徹先生のご教示に拠る）。

〈付記〉

本稿は第二十回書学書道史学会大会における口頭発表をもとに纏めたものである。

## 第六節 山城切の位置

## 一

山城切は大和綴の冊子本として伝来したが、昭和十四年に京都で分割され、その際、裁断の地である山城国に因み、山城切と名付けられた。伝称筆者は藤原定頼（九九五—一〇四五）であるが、実際の書写年代は定頼の時代よりやや下り、「一二二〇年代、崇徳天皇のころ」とされている。<sup>①</sup>

かつて堀部正二氏は、山城切は雲紙本・関戸本と「同類の親本より発して相別れて成長したもの」<sup>②</sup>であり、その本文内容については「古本系統の面目を保有」している一方、「平安朝後期より漸次変形転訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」と説かれた。<sup>③</sup>

平安時代、調度品として制作されたと思しき伝本が多い中、豊富な傍書・注記を有する点において山城切は他本と異なる。本節では主に、堀部氏の御論について改めて検討を行った結果について述べるとともに平安時代の書写とされる諸伝本における山城切の位置について論じる。

## 二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本間にはその全八一五首間に詩歌句の有無の異同、九八か所が存する（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

17・42・82・90・91・92の次<sup>④</sup>・107・109・115・120・178・194・215・225・237・246・249・257・268・271・313・321・322・323の次・330・337・344の次・347・348・354・363・369・376の次・380・407・422の次・434・434の次・449・459・468・472・476・482・489・507・518・534・

535・542・547・549・551・556・561・564・584・596・598・601・603・615・617・618・621・629・636・652の次・657・663・677・678・684・699・701・703・712・714・729・735の次・736の次・738・739・740・741・742・743・744・745・756・757・760・764・784・785・796の次・797・803の次・804  
 山城切は脱落の三葉（二二首（388〜395・680〜693）を除き、詩歌句の多くを有している。<sup>5</sup>右のうち、山城切に無いのは四首（344の次・652の次・678・735の次）であり、さらに、「後人の追補」ともされている次の七首をも山城切は有する。当該箇所を挙げ、詩歌句の有無を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

## ① 92の次有（山）

無（雲・関・粘・伊・久・唐2・卷・多・戊・葦）

## ② 323の次有（山）

無（行大・雲・関・粘・伊・久・卷・和1・多・戊・葦）

## ③ 376の次有（山）

無（雲・関・粘・伊・久・卷・戊・葦）

## ④ 422の次有（山・益）

無（雲・関・粘・伊・久・卷・下・戊・葦）

## ⑤ 434の次有（山・伊・太・大内）

無（雲・関・粘・久・卷・戊・葦）

## ⑥ 736の次有（山）

無（雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・多・戊・葦）

## ⑦ 803の次有（山）

無（雲・関・粘・近・法・伊・久・安・卷・太・益・多・戊）

右のうちの五首①・②・③・⑥・⑦は平安時代書写本においては山城切独自のものである。

山城切の形態について、堀部氏は、「或いは公任撰原著の面影を山城切のみが脱漏なく完全に保存してきた為かも知れないが、恐らくはそれ以外の理由」、つまり「諸系統との混合接触に因由してゐるものではなからうか」と述べられた<sup>6</sup>。他本では例えば右のうちの⑤「434の次」が無い伝本（雲紙本・関戸本・粘葉本・久松切・卷子本・戊辰切・葦手本）は434を有しており、「434の次」を有する伝本（伊予切・太田切・大内切）には434が無い。しかし、平安時代書写本において山城切に限っては、その両方の和歌を有しており、その事実からもそのことは首肯される。

一方、排列においては、諸伝本間にみられる異同のうち、一本のみが異なる場合を除外してみると以下の通りである。当該箇所を挙げ、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

- (1) 110・111 (山・雲・関・粘・伊・久・卷・戊)  
 111・110 (唐2・葦)
- (2) 137↘143・133↘136 (躑躅・款冬・藤) (山・雲・関・卷・戊・葦)  
 133↘143 (藤・躑躅・款冬) (粘・伊)
- (3) 201・202 (山・粘・伊・久・卷・戊・葦)  
 202・201 (雲・関)
- (4) 273・272 (山・雲・関・久・唐2・卷・戊・葦)  
 272・273 (粘・伊・多)
- (5) 309・308 (山・雲・関・久・戊・葦)  
 308・309 (粘・伊)
- 308無(卷)



(6) 312・313 (山・粘・伊・久・戊)

313・312 (雲・葦)

313無 (関・巻・和上)

久曾神氏が「粘葉本系統と雲紙本系統の最も著しい相違」<sup>⑦</sup>箇所とされた巻上・春部巻末の三詩歌群「躑躅・款冬・藤」の排列(右のうちの②)については山城切は雲紙本類と同じである。当該箇所を含め、山城切の雲紙本類との一致箇所数は四か所(①・②・④・⑤)であるが、山城切は粘葉本類とも一致しており(三か所(①・③・⑥)が確認される)、粘葉本類の要素をも有していることが確認される。

また、山城切一本のみが他本の排列と相違するのは以下の通りである。当該箇所を挙げ、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

① 269・270・271・268 (山)

268無・269・270・271 (雲・関)

268・269・270・271 (粘・伊・戊・葦)

268・270・271・269 (久)

268・269・270・271無 (巻)

② 466・465 (山)

465・466 (雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・戊・葦)

③ 473・472 (山)

472無 (雲)

472・473 (関・粘・近・伊・久・巻・太・下・戊・葦)

④ 615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部(山)

615無・616・617・618無・619・620・621・622(雲)

615・616・617・618・619・620・621・622(関・粘・伊・戊・葦)

615・618・619・620・621・622・616・617(久)

615・616・617無・618・619・620・621無・622(安・卷)

616・617・618(法)

615・616・617(唐1・下)

619・620(多)

⑤ 730・729(山)

729無(雲・関)

729・730(粘・近・伊・久・安・卷・太・戊・葦)

⑥ 741・742・744(山)

741・742・743・744(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・戊・葦)

741・743・742・744(多)

741・742・743無・744無(葦)

山城切独自の排列の揺れについて、堀部氏は「多くは遺憾ながら山城切の錯誤と考へざるを得ない」と述べられた。<sup>(8)</sup>しかし、右の六項目のうち、雲紙本五か所〔①・③・④・⑤〕・関戸本二か所〔①・⑤〕・卷子本三か所〔①・④〕等、雲紙本類に無い詩いことが知られる。

卷子本、及び久松切にも同様な事象が確認される。いずれも当該伝本の独自の排列の揺れている箇所に雲紙本類に無い詩

歌句が目立つ。このことは偶然とは思えない。

想像の域を出ていないものの、転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で（欄外などにも）書き込まれるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずるとき形に変移していったとは考えられまいか。

以上、山城切は脱落の三葉を除くと「追補」ともされている七首を含め、多くの詩歌句を有し、集成的といえる。また、排列について、巻上・春部巻末の三詩歌群「躑躅・款冬・藤」をはじめ、山城切は雲紙本類との一致も確認された。しかし、粘葉本類との同要素をも有していた。

### 三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表によると、和歌は山城切と関戸本との関係は七一・〇%と最も高く、次いで、雲紙本六九・一%が挙げられる。最も低いものには雲紙本類と対立した関係にある粘葉本類の粘葉本五三・四%、伊予切五五・六%である。しかし、漢詩においては、山城切と雲紙本・関戸本は七六・六%、七四・八%であり、粘葉本八〇・一%、伊予切七九・七%よりも低い。そこには他本と対立して雲紙本と関戸本の二本のみが同文であるいわゆる共通異文例が三九か所も存するということに加え、山

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

城切の独自性の強さ（山城切の独自本文数・和歌四四か所、漢詩五四か所）が起因していると考えられる。

そのことを踏まえた上で、改めて異同箇所について検討してみると、山城切は以下のごとく雲紙本類の本文を多く有しているといえる。山城切の本文を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該本文を有する諸伝本の略号を載せる。

□36 あすからは（山・雲・関・久・唐2・卷・戊・葦）

はるたは（粘・伊）

『万葉集』巻八。当該箇所、「明日従者」（『夫木抄』巻一も）。『新古今集』巻一・『三十六人撰』には「あすからは」とあり、山城切・雲紙本類と同文である。それに対して粘葉本類の「はるたは」は、『赤人集』I・『古今六帖』第一にみられる本文である。

試みに本文において他の伝本が同文であるのに対して、雲紙本・関戸本と、ある一本の計三本のみが一致している場合について調査してみると、その一本には、和歌は、山城切（九か所）、卷子本（二か所）、漢詩は、山城切（九か所）、久松切・戊辰切・下絵切（二か所）、卷子本・葦手本（一か所）が挙げられ、山城切が多いことが知られる。その事例をいくつか挙げると以下の通りである。

① 33ねのひして（山・雲・関）

ねのひしに（粘・伊・久・唐2・卷・多・定大・戊・葦）

② 125さくらはな（山・雲・関）

やまさくらは（粘・伊・久・卷・戊・葦）

③ 196年（山・雲・関）

歳（粘・伊・久・卷・下・多・戊・葦）

④ 264餌（山・雲・関）

澆(粘・伊・久・卷・大内・戊・葦)

⑤ 366 をりそかなしき(山・雲・関)

をりそわひしき(粘・伊・久・卷・下・戊・葦)

⑥ 370 聲(山・雲・関)

音(粘・伊・久・卷・戊・葦)

⑦ 500 ナシ(山・雲・関)

之(粘・近・伊・久・卷・太・戊・葦)

⑧ 658 砂(山・雲・関)

沙(粘・近・伊・法・久・安・卷・戊・葦)

⑨ 718 ふきとちきよ(山)

ふきとちき(雲・関)

ふきとちよ(粘・近・伊・久・安・戊・葦)

ふきとめよ(巻)

その一方、山城切は次のごとく粘葉本類の本文をも多く有していることが知られる。

□15 たるひのうへの(山・粘・伊・戊・葦)

たるみのうへの(雲・関・久・唐?・巻)

『万葉集』巻八には、滝の意の「垂見」とあり(『新古今集』巻一も)、雲紙本類と同文であるが、『古今六帖』第一・『夫木抄』巻三には山城切・粘葉本類の本文「たるひ」(つららの意)とある。

山城切が粘葉本類の本文を有している点に関して、堀部氏は、「関戸家本と相異する箇所にして御物粘葉装本の種類と合

致する所も多いのであるが、それと山城切との関係は、未だ稀薄と考へざるを得ない底のものであるにすぎない」と述べられた。しかし、山城切と粘葉本類との混淆に因ると考えられる本文が少なからず見受けられるのである。以下、それを示す事例を挙げる。

## ◇292 壠隴(山)

壠(粘・伊・久・大内・多・戊・葦)

隴(雲・閑・下)

壠(卷)

粘葉本類では「壠」、雲紙本類では「隴」であるが、山城切には両類の二字混合の本文が存する。なお、『本朝文粹』卷十三「供養自筆法華経願文 前中書王」の当該箇所では粘葉本類の本文「壠」である。

## ◇296 閑寞(山)

閑寂(粘・伊・久・卷・多・戊・葦)

寂寞(雲・閑)

山城切の本文は粘葉本類の一字目「閑」と雲紙本類の二字目「寞」が合成されたともとれる本文「閑寞」である。

◇741(a) 独<sup>徒</sup>(山・多)

独(粘・伊・卷・安・久・太)

徒(雲・閑・戊)

猶(近)

(b) 将(雲・粘・近・伊・卷・安・久・多・太・戊)

以<sup>將</sup>(山)

以(関)

『白氏文集』卷三「格詩謂行雜体 題故元少尹集後二首」。当該箇所、(a)「徒」・(b)「将」。山城切の(a)では、粘葉本類の本文に傍書として雲紙本類の本文が注された形である。山城切の(b)では関戸本の本文に傍書として雲紙本・粘葉本類の本文が注された形である。

◇742襟満(粘・近・伊)

満襟 衫(山)

満衫(雲・関・久・安・卷・太・戊)

満襟衫(多)

『白氏文集』卷六十四「微之 敦詩 晦叔相次長逝歸然自傷因成二絶」。当該箇所には「満衫」とある。山城切では当該句(一行目)の行末に「衫」が書き込まれている。

以上のごとく他本との照合等により書き込まれる中で竄入し、その結果、本文化されたものが山城切には存すると思われる。それは山城切の本文中、随所にみられる小字による書込みの存在からも窺われる。ここでは、

□364日夜(山)

日(雲・関・久・下・葦)

夜(粘・伊・卷・戊)

のごとく雲紙本類の本文に粘葉本類の本文を注す事例、及び、

□416魏宮京賜(山)

魏宮(粘・伊・久・太・益・戊)

景陽(雲・関・卷・葦)



のごとく粘葉本類の本文に雲紙本類の本文を注す事例も見受けられる。また、

□ 375里界(山)

里(雲・関・粘・伊)

界(久・卷・下・戊)

眼(葦)

のごとく粘葉本・雲紙本両類とは別の本文が注される場合もある。

なお、山城切には単純な書き誤りであると思われる独自本文が散見されるが、山城切の傍書を検討してみると、誤写の訂正のことよりもむしろ異文を注すことの方に書写者の関心は向けられていたと思われる。

その一方、本章中、述べたごとく、山城切と十二世紀の書写とされる諸伝本間には横の繋がりが確認される。当該伝本と山城切とが同文である事例を以下、示す。因みに次の①・③・⑤・⑦・⑧・⑩の山城切の本文は堀部正二氏により「後世的要素」とされたものである。

① 169をきまさるらん(山・戊)

おかむとすらん(雲・関・粘・伊・久・卷・和1・葦)

② 345止(山・下)

了(雲・関・粘・伊・久・卷・戊・葦)

③ 511鋪(山・久)

敷(雲・関・粘・近・法・伊・卷・戊・葦)

④ 558鷺(山・下)

鷺(雲・関・粘・近・伊・久・卷・多・戊・葦)

⑤ 559 暮(山・久)

落(雲・関・粘・近・伊・卷・多・戊・葦)

⑥ 619 舳(山・多)

舷(雲・関・粘・伊・戊・葦)

棹(久・安)

船(卷)

⑦ 640 かなしかるへき(山・葦)

かなしからまし(雲・関・粘・近・伊・久・卷・多・戊)

くるしかるへき(益)

⑧ 673 いかるかや(山・久)

いかるかの(雲・関・粘・近・伊・卷・多・戊・葦)

⑨ 749 かけしとおもふを(山・多)

かけしとおもへと(雲・関・粘・近・法・伊・久・安・卷・戊・葦)

かけてとおもへと(太)

かけしとおもふ(俊和)

⑩ 753 躑(山・久)

宿(雲・関・粘・近・伊・安・卷・太・多・戊・葦)

⑪ 753 末(山・戊)

曷(雲・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・多・葦)

以上、山城切は雲紙本類の系譜上に位置することが改めて確認されたが、その一方、粘葉本類の本文をも有していた。また、山城切と同様、十二世紀の書写とされている諸伝本との間に横の繋がりがあることも確認された。山城切が広く諸伝本の本文と共通性を有しているのは堀部氏御指摘<sup>11</sup>の通り、他本との接触がなされたことに因ると思われる。

## 四

注記<sup>12</sup>について述べる。山城切と雲紙本・関戸本の三本のみが同一である注記の事例が目立つ。以下、それらの中のいくつかを挙げ、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。

■ 1 立春日内宴進花賦(山・雲・関)

立春日内園進花賦(粘・伊・久・葦)

■ 471 題故元少尹集後白(山・雲・関)

題故元少尹後集白(粘・近・伊・久)

白(戊・葦)

■ 600 弘徽殿御八講五卷日 邑上御製(山・雲・関)

邑上御製(粘・戊・葦)

弘徽殿御八講五卷村上御製(久)

ナシ(伊・太)

■ 602 採佛材木詠 傳教大師(山・雲・関)

傳教大師(粘・大内・戊・葦)

採仏材詠 傳教大師(近・伊・太)

採佛材 伝教大師(久)

■640 遊女白目(山・雲・関)

ナシ(粘・近・伊)

饞□實赴□西遊女白女(久)

遊女白女(益・多・戊・葦)

次に、山城切と雲紙本類とが相違するところについて述べる。雲紙本と関戸本の注記内容が同一であり、かつ、山城切と雲紙本類との間に異同がある場合は次のように分類される。それぞれの事例数を示し、項目ごとに当該事例を一例ずつ示す。

(a)山城切：題詞等・作者名有、雲紙本類：題詞等無・作者名有↓三一例

◆71 宮鶯囀曉光 菅三品(山・久・唐2・多)

菅三品(雲・関・粘・伊・大内・戊・葦)

(b)山城切：題詞等無・作者名有、雲紙本類：ナシ↓二七例

◆127 白(山・粘・伊・久・行金・戊)

ナシ(雲・関)

同(葦)

(c)山城切：ナシ、雲紙本類：題詞等無・作者名有↓一一例

◆19 ナシ(山・俊大1・戊)

劉(雲・関)

劉禹錫(粘・伊・久・葦)

劉禹(唐2)

(d)実質的異同↓五例

◆508 白(山)

江(雲・関・粘・近・伊・戊・葦)

江相公春日山庄(久)

同前 江(多)

(e)非実質的異同(表記上の異なり、及び誤写とみられるものも含む)↓三七例

◆161 恒寂師房白(山・久・葦)

恒寂師房已上白(雲・関)

白(粘・戊)

ナシ(伊)

右のうちの(d)「実質的異同」とは、内容的に異なるものを指す。その事例の全て(五例)を挙げると以下の通りである。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。

(1)122 花少鳥亦稀保胤(山)

相規(雲・関・粘・伊・戊・葦)

花少鳥亦稀相規(久)

(2)427 源敏行(山)

源致行(雲・関・戊・葦)

源宗于(粘・法・伊・久・益)

源宗行(太)

(3) 508 白(山)

江(雲・関・粘・近・伊・戊・葦)

江相公 春日山庄(久)

同前 江(多)

(4) 563 敏行(山)

致行(雲・関)

ナシ(粘・近・伊・久・大内・下・多・戊・葦)

(5) 627 直幹菅三品(山)

直幹(粘・近・伊・多)

菅三品(雲・久)

菅三(関・戊)

菅(葦)

右のうちの(2)は『古今集』春上、源宗于の和歌であり、山城切の「敏行」は誤謬である。雲紙本類では「源致行」であるが、(4)にも山城切「敏行」、雲紙本類「源致行」とある。(4)は『古今集』雑下、よみ人しらすの和歌である。『和漢朗詠集』中、その次の位置に存する564が源宗于の和歌であることから山城切では目移りにより「敏行」という誤写がなされたかとも想像される。また、右のうちの(2)に照らし、山城切と雲紙本類とは何らかの関係があるように思える。

右のうちの(1)について、『和漢朗詠集私注』<sup>(13)</sup>(以下、『私注』と略称)には源相規の記載があり、(3)では『屏風土代』に大江朝綱の作品として載る。(3)については、『和漢朗詠集』における当該句が存する位置から白すなわち白居易とは考えにくく、本注記は山城切の誤謬であると思われる。

また、(5)については、山城切には「直幹」に「菅三品」が併記されている。『私注』には「遊崇福寺 直幹」とあるが出典不明である。

前掲(a)・(b)の事例数の多さから山城切の注記の詳細さが見て取れるが、次に挙げる山城切独自の注記からもそのことが窺われる。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。各項目の末尾には他文献も載せる。

① 130 落花還繞樹 菅三品(山)

文時(雲・関)

菅三品(粘・伊・戊・葦)

\*『私注』、「落花還繞樹詩菅三品」。

② 313 秋光變山水順(山)

順(雲・粘・伊・久・戊・葦)

\*『天徳三年殿上詩合』、「秋光變山水 源順」。

③ 552 遠念賢士風 菅三品(山)

菅三(雲・関・戊)

ナシ(雲切・伊・葦)

菅三品(粘・近・久)

\*『類聚句題抄』、「遠思賢士風 菅三品」。

④ 321 白或本田(山)

田(行大・唐?)

菅(粘・伊)

田達音(久・戊)

秋暮傍山行 田達音(多)

ナシ(葦)

\*『田氏家集』巻中、「秋暮傍山行」。

右の①・②・③について、山城切と他文献における記載とは一致している。④については山城切では「白」に「或本田」とあり、「田」が注されている。粘葉本類の「菅」は誤りである。なお、雲紙本・関戸本には当該句そのものが存在しない。

また、以下の通り、注記においても本文の場合と同様、山城切と十二世紀書写本群とは共通性を有している。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。各項目の末尾には他文献も載せる。

(1) 155貫之(山・戊)

ナシ(雲・関・粘・伊・葦)

\*『寛平御時后宮歌合』、「貫之」。

(2) 468琴惟喬親王(山・葦)

琴(関・粘・法・伊)

ナシ(近)

聴琴彈 惟喬親王(久)

惟喬親王(戊)

\*『私注』、「惟喬親王」。

(3) 479送友人帰大梁賦 公乘億(山・久)



送友人歸大梁賦(雲・関・戊)

送友歸大梁賦(粘・法)

ナシ(近・伊・葦)

\*『私注』、「送友人賦公乘億」。

(4) 704 英明(山・戊)

名明(雲・粘・近・伊・太・葦)

ナシ(関・安)

菅名明(久)

\*『私注』、「王昭君源英明」。

(5) 720 遊女序以言(山・多)

以言(雲・関・粘・近・伊・安・太・戊・葦)

ナシ(雲切)

見遊女以言(久)

\*『本朝文粹』卷九、「見遊女詩序」。

山城切と戊辰切(①・④)、葦手本(②)、久松切(③)、多賀切(⑤)との一致が確認された。それらのうちの(3)では山城切・

久松切に「公乘億」が注されているが、殊に、山城切と久松切・多賀切とは詳細な注記を有するという点において共通している。

以上、注記においても山城切と雲紙本・関戸本の三本のみが同様である事例が確認され、山城切は雲紙本類の系譜上に位置するものであるといえる。ただし、山城切の方が雲紙本類よりも詳細であり、山城切からは異本との校合による書込みも

みられ、異本の内容を反映させる姿勢が窺われた。また、注記においても山城切と十二世紀書写本との共通性が確認された。

## 五

山城切と雲紙本・関戸本とは本文内容の面から近い関係にあり、山城切の本文は雲紙本類の系譜上に位置しているということが改めて確認されたが、山城切は粘葉本類の本文をも有しており、また、注記について、詳細であることが確認された。他本に従い、書き込みがなされ、それらが本文化し、混淆したことによるかと思しき様相も看取された。

山城切と十二世紀書写とされる諸伝本とはいわゆる共通異文をも有しており、横の繋がりも認められた。殊に、山城切と久松切とは詳細な注記を有しており、また、本章中、既述した通り、山城切・戊辰切の本文中の題には付項目「帰雁・「春氷」が独立した題として存し、撰者である公任の原撰本から変容した形態であるという点において、それら三本は類同的な関係にあると考えられる。その中でも山城切には、後人による追補とみられる詩歌句が七首も存し、そのうちの五首は平安時代書写とされる諸伝本においては山城切独自であつて、後世の特徴が顕著である。その性格は豊富な注記や書込み等からも指摘され、当時の研究成果を意欲的に汲み上げた伝本であるといえる。『和漢朗詠集』はその後、細分化されて研究が進められていくこととなるが、そのような中で山城切は平安時代という比較的早い時点における『和漢朗詠集』の研究書として資料的価値の高い伝本であると考えられる。

## 注

(1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 348

また、堀部正二氏は「上は天治頃より、下は永暦頃に至る間の書写と考へて大過あるまいと思はれる」とされた(同氏編著『校異和漢朗詠集』「昭和56年 大学堂書店」P 283)。

- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 334
- (3) 前掲(注2)に同。P 323
- (4) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号のものを指す。当該番号の詩歌句の次(ここでは92の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (5) 前掲(注2)に同。P 314
- (6) 前掲(注2)に同。P 329
- (7) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひとく書房〕P 189
- (8) 前掲(注2)に同。P 330
- (9) 前掲(注2)に同。P 329
- (10) 前掲(注2)に同。P 322
- (11) 前掲(注2)に同。P 328
- (12) 卷子本には注記が一切省略されている。
- (13) 山内潤三・木村晟・朽尾武諸氏編『和漢朗詠集私注』新典社叢書10〔平成元年 新典社〕に拠る。
- (14) 三木雅博氏は「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、唐人の詩句には作者名が記されていない「原則として」「唐人の賦句のみには作者名が記されない」と述べられた(『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P 144・145)。
- (15) 拙稿「戊辰切の位置」(本書第三章 第四節▽所収)
- (16) 堀部氏はこの事象を「後世的要素」とされた。前掲(注2)に同。P 322

## 第七節 久松切の位置

一

久松切は伊予国（現在の愛媛県）松山の藩主久松家に伝来したことによりその名がある。もとは巻上・下、二軸の卷子本であった。しかし、巻上は裁断され、諸家に分蔵されており、巻下は完本の状態で出光美術館に所蔵されている。<sup>(1)</sup>

巻下の巻末には室町時代の添状が貼付されており、藤原行成（九七二—一〇二七）筆と極められているが、実際の書写年代は、やや下り、「十二世紀はじめの書写」と推定されている。「字形は大體整齊にして平明であり、線は温和」な書で、縦二六・三cmほどの料紙には藍・紫色の飛雲文様の紙、斐紙、藍色の雲形を漉き込んだ雲紙、雲紙に飛雲文様を併用した紙などが用いられている。いずれにも金銀の砂子が撒かれており、料紙の裝飾性の高さから久松切が美術品として珍重されたことが窺える。

堀部正二氏<sup>(5)</sup>は、平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本を、主に本文の近似関係より、次のごとく三大別された。

(1) 御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの：粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切

(2) 關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本

(3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

しかし、久松切に関する記述は見当たらない。

一方、久曾神昇氏は、主に形態的な面から、右のうちの(2)雲紙本・関戸本を「初稿本」、(2)卷子本・葦手本、及び本稿で取り上げる久松切を「再稿本」、(1)粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。<sup>(6)</sup>

この度、久松切巻下については出光美術館所蔵の原本を調査させて頂いた。それに加え、原姿に近い状態（巻上・下、二軸）の複製本、及び『古筆学大成』第一三巻に拠り調査を行ったデータに基づき、改めて諸伝本間における久松切の位置付けを<sup>(7)</sup>

試みたく思う。

## 二

久松切に収められている詩歌句を『新編国歌大観』に拠り、排列し直すと次の通りとなる。

397 515	1 128	133 135	137 139	157 193	195 396	【上巻】
517 677	679 796	797 804	804			【下巻】

まず、右に存しない詩歌句などについて述べる。

複製本では、128の次行には157が排列されているが、128と157の間には紙継ぎの跡が認められる。この128と157の間に位置する129と156のうち、133と135の三首（二葉）<sup>⑨</sup>、及び、137と139の三首（二葉）は、断簡として『古筆学大成』に所収されている。従って、129と156の部分は、複製本の製作時点では既に切断されていたということが知られる。また、129と132・136・140と156の二三首については散逸しており、現在では所在不明である。また、516については、書写者が書き落としたとも考えられるが、515と517の間に紙継ぎの跡が認められるので、516の一首も切り取られ、断簡として散逸した可能性もあり、その点については判断し得ない。

また、194については、193と195の間には紙継ぎの跡は見られず、欠落かと思われる。その194の位置（193と195の間（行間））には、194の詩句が、別筆にて、一行書きで補筆されている。その他、この194と同様な補筆が、433と434の間・677と679の間（678の位置）にも認められる。その193と195の間（194の位置）に存する補筆を①とし、433と434の間に存する補筆を②とし、677と679の間（678の位置）に存する補筆を③として示すと次の通りである。②・③は、『和漢朗詠集』の撰者である公任の原撰本には無い「後人の加筆」とされている詩歌句である。

① 鳥下緑蕪秦諧寂蟬鳴黄葉漢宮秋 許渾

②ヨニフレハコトノハシケクレタケノウキフシコトニウクヒスソナク

③周公旦者文王之子武王之弟也自知其貴忠仁公者皇帝之祖皇后之父也世推其仁

右の三首(①・②・③)を除くと、今回調査し得た久松切の詩歌句は、都合七八〇首となる。

以下、久松切の所在不明の二二首(129く132・136・140く156)、及び散逸の可能性も考えられる516については考察の対象外とする。また、諸伝本における散逸と思われる箇所についても対象外とする。

### 三

本考察の対象とする範囲内において、平安時代書写とされる諸伝本全々の詩歌句を合わせると七九一首であり、そのうち、詩歌句の有無の異同には九八か所が挙げられる(断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する)。

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

久松切に無い詩歌句は一一首(「92の次」・194・「344の次」・「376の次」・「422の次」・「434の次」・「652の次」・「735の次」・「736の次」・「803の次」)である。「434の次」は、他本では434の次に位置するが、久松切では、既述のごとく、433と434との間に存する、「後人の加筆」とされた和歌である。

また、「92の次」・「344の次」・「376の次」・「422の次」・「652の次」・「735の次」・「736の次」・「803の次」も、「434の次」と同様「後人の加筆」であると思われる。「後人の加筆」とされた詩歌句を除くと、久松切に無いのは194のみである。

よって、久松切では、十一世紀中葉の書写と推定されている粘葉本類に無い詩句(322)、及び雲紙本類に無い詩歌句(42・215・268・321・354・380・449・534・564・603・712・714・729・784・797)を全て有しており、詩歌句数については集成的であるといえる。

## 四

排列について検討を行う。

諸伝本間において、ある伝本の排列が他本と異なる箇所を全て挙げると三六か所である。そのうちの<sup>(13)</sup>一四か所において久松切一本が他の諸伝本と異なっている。そこから久松切は極めて独自性の強い形態を有していることが知られるのである。

また、久松切独自の排列の揺れている箇所、及びその前後の箇所においては、雲紙本に無い詩句が四か所（五首〈268・615・618・629・756〉）もみられる。その点は注目される。

次に、その箇所を詩歌番号で挙げ、以下、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を示す。

① 268・270・271・269（久）

268無・269・270・271雲・関

268・269・270・271（粘・伊・戊・葦）

268・269・270・271無卷

269・270・271・268（山）

269・270・271（多）

② 615・618・619・620・622・616・617（久）

615無・616・617・618無・619・620・621・622雲

615・616・617・618・619・620・621・622（関・粘・伊・戊・葦）

616・617・618（法）

615・616・617無617無・618・619・620・621無・622（安・卷）

615・616・617・618・619後部・620・621・622・619前部（山）

615・616・617(唐1・下)

619・620(多)

③ 628・629・626・627(久)

626・627・628・629無(雲)

626・627・628・629(関・粘・近・伊・卷・山・戊・葦)

626 / 627(14) 628・629(多)

④ 755・756・754(久)

754・755・756無(雲)

754・755・756(関・粘・近・伊・安・卷・太・山・戊・葦)

右の事例に抛ると、久松切独自の排列の揺れている箇所には、雲紙本類に無い詩歌句(雲紙本①・②・③・④、関戸本①、卷子本①・②)が存することが確認される。

本書(第三章)中、著者は、山城切独自の排列の揺れている箇所に雲紙本類に無い詩歌句が目立つことを指摘し、「転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で(欄外などにも)書き込まれるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずることとき形に変移していったのではなからうか」と推測した。また、本書中、卷子本のところでも同様なことを述べた。

山城切・卷子本における事例を踏まえると久松切においても「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」には相関性があり、久松切の親本は雲紙本類と何らかの関係性があった可能性が想像されるのである。

また、粘葉本類・雲紙本類の形態を特徴づけているともいえる、卷上・春部卷末の三詩歌群「躑躅」・「款冬」・「藤」の順序について、久松切では断簡となっており、「款冬」の部分は散逸のため不明であるが、巻頭の内題の次に存する部類名<sup>15</sup>・<sup>16</sup>



題の一覧によると、雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順である。

久松切は排列の面において独自性が強いことが確認された。大きくは雲紙本類の系譜上に位置すると考えられるが、雲紙本類に無い詩歌句も多く有している。以上の考察結果を考え合わせてみると、久松切の形態上の原形は雲紙本類に類するものであり、それが粘葉本類などによって補われた結果、当該の形態となったとみてよいのではなからうか。

## 五

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、取り分け久松切と近い関係にあると思われる伝本は見当たらない。特に和歌は、いずれの伝本とも殆ど偏りがなく、他の諸伝本間における数値に比して久松切ではいずれの伝本ともさほど遠くはない関係にあるということが看取される。それは、久松切の和歌の独自本文が僅か六か所のみであるということからも首肯される。

そのような中、久松切と諸伝本との本文関係の概要については、久松切と同文率の高い伝本は、和歌では、近衛本（八一・九%）、伊予切（八一・七%）、法輪寺切（八〇・六%）、粘葉本（七九・七%）、漢詩は、戊辰切（八四・〇%）、粘葉本（八三・七%）、法輪寺切（八二・八%）、近衛本（八二・六%）、伊予切（八二・二%）が挙げられる。それらに比べると、雲紙本・

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

関戸本・卷子本・葦手本などはやや低い同文率であることが知られる。すなわち、久松切の本文が雲紙本類とよりも粘葉本類と近いということを示している。そこで、まず、久松切と粘葉本類との関係をみることによって久松切の本文についての考察を行いたい。

久松切が粘葉本類とのみ一致する事例を挙げると次のごとくである。久松切の本文を載せ、当該箇所には傍線を付し、異同も載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。また、各項目の末尾には他文献も載せる。

① 451 わかのうらにしほみちくらしかたをなみあしへをさしてたつなきわたる(久)

〈同〉 しほみちくらし(粘・近・伊)

〈異〉 しほみちくれは(雲・関・卷・大内・山・多・戊・葦)

\* 『万葉集』451・『赤人集』(I 115・I 352・II 233)・『古今六帖』<sup>17)</sup>第六 810・『金玉集』48、「しほみちくれは」。

② 461 わひしらにましこなゝきそあしひきのやまのかひある今日にやはあらぬ(久)

〈同〉 ましこなゝきそ(粘・伊)

〈異〉 ましはなゝきそ(雲・関・卷・多・戊・葦)

ましらなゝきそ(近)

ましこはなゝきそ(山)

\* 『古今集』1067・『躬恒集』(I 44・III 205・V 65)・『古今六帖』第二 101、「ましらななきそ」。

③ 538 きみなくてけふりたえにしゝほかまのうらさひしくもなりにけるかな(久)

〈同〉 なりにけるかな(粘・近・法・伊)

〈異〉 みえわたるかな(雲・関・卷・太・下・山・多・戊・葦)

\* 『古今集』852・『貫之集』I 747・『古今六帖』第四 527・『三十六人撰』<sup>18)</sup>、「見え渡るかな」。

このうち、①は、他文献では全て「しほみちくれば」とあり、久松切・粘葉本類の「しほみちくらし」は一般的ではなく、改変あるいは改訂された本文であると思われる。また、②は、他文献では近衛本と同様、「ましらなくこそ」とある。近衛本の「ましら」と、久松切・粘葉本類の「ましこ」は、「猿」をいう雅語で、『古今集』では、「ましら」が大勢を占めている。<sup>19)</sup>また、③においても、②の場合と同様、他文献では、久松切・粘葉本類の「なりにけるかな」に対していずれも「みえわたるかな」とあり、久松切・粘葉本類は改変された本文であると思われる。以上の用例においては、久松切では、粘葉本類の本文を継承したと看做するのが穏当であろうと思われる。このように、久松切は、粘葉本類に近い本文を共有しているが、次の用例のごとく、雲紙本類の本文をも有している。

久松切の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、異同も載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

◆381 <sup>(1)</sup>こゝにわか <sup>(2)</sup>めつらしくみるはつゆきをよしのゝやまにふりやしぬらん(久)

(1)〈同〉こゝにわか(雲・関・卷・山・葦)

〈異〉みやこには(粘・伊・戊)

(2)〈同〉めつらしくみる(雲・関・卷・戊・葦)

〈異〉めつらしくみる(粘・伊)

めつらしくみゆる(山)

『拾遺抄』147・『拾遺集』243に見られる。『拾遺抄』<sup>20)</sup>では、「流布本系統」の、島根大学図書館本などは、粘葉本と同じく「みやこには」「めつらしくみる」とし、「異本A系統」の宮内庁書陵部本、「異本B系統」の静嘉堂文库所蔵貞和三年奥書本は「みやこにて」「めつらしくみる」とする。また、『拾遺集』諸伝本<sup>21)</sup>では「みやこにて」「めつらしく見る」とあり、久松切・雲紙本類のように初句を「こゝにわか」とする本文は見当たらない。当該箇所において久松切は雲紙本類の本文を受継いだものと思われる。

以上のごとく、久松切では、十二世紀中葉の書写とされる粘葉本・雲紙本兩類の本文を有しているが、久松切と同時代の十二世紀書写本との関係も注目される。以下、十二世紀書写とされる諸伝本と久松切との同文例を挙げる。久松切の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、諸伝本との異同を載せる。各項目の末尾には他文献の本文も載せる。

① 44 三千とせになるといふものことしよりはなさくはるにあひにけるかな(久)

〈同〉 あひにけるかな(卷・山)

〈異〉 あひそめにけり(雲・関・粘・伊・葦)

あひそしにける(多)

あふそうれしき(戊)

\* 『拾遺集』 288、「なりそしにける」。『古今了六帖』 第一 58、「なり<sup>あふ</sup>そしにける」。『忠岑集』 150、「あひそしにける」。『是則集』

6、「あひにけるかな」。

② 50 留春と不駐<sup>レ</sup>春歸人寂寞厭風不定風起花蕭索(久)

〈同〉 駐(戊・葦)

〈異〉 住(雲・関・粘・伊・卷・山)

\* 『白氏文集』<sup>(22)</sup> 卷五十一「落花」、「住」。

③ 59 今年閏在春三月剩看<sup>レ</sup>金陵一月花(久)

〈同〉 看(卷)

〈異〉 見(雲・関・粘・伊・戊・葦)

<sup>=見</sup> 見(山)

④ 219 ひととせにひとよとおもへとたなはたのあひみるあきのかきりなきかな(久)

〈同〉 あひみる秋の(戌・葦)

あひみるあきの(下)

〈異〉 あひみむあきの(雲・閑・粘・伊・卷・山・多)

\* 『拾遺集』150・『貫之集』I 395、「あひ見む秋の」。『古今六帖』第一154、「あひ見る秋の」。

⑤ 379 立於庭上頭為鶴居<sub>レ</sub>在爐邊手不龜(久)

〈同〉 居(下)<sup>(23)</sup>

〈異〉 座(雲・閑・粘・伊・山・戌・葦)

生(卷)

\* 『菅家文章』<sup>(24)</sup>卷四「客居對雪」、「居」。

⑥ 463 第一第二絃と索秋風拂松踈韻落第三第四絃冷夜鶴憶子籠中鳴第五絃聲最掩抑瀧水凍咽流不得(久)

〈同〉 最(卷)

〈異〉 尤(雲・閑・粘・近・法・伊・太・山・戌・葦)

\* 『白氏文集』卷三「五絃彈」、「最」。

⑦ 510 邊城之牧馬頻嘶平沙眇と江路之征帆盡去遠岸蒼(久)

〈同〉 頻(戌)

〈異〉 連(雲・閑・粘・近・法・伊・卷・山・葦)

⑧ 511 洲芳杜若抽心長沙暖鴛鴦鋪翅眠(久)

〈同〉 鋪(山)

〈異〉 敷(雲・閑・粘・近・法・伊・卷・戌・葦)

\*『白氏文集』卷三「昆明春水滿」、〔鋪〕。

⑨ 559 山路日暮滿耳者樵鰕得哥牧笛之聲澗戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色(久)

〔同〕 暮(下・山)<sup>25</sup>

〔異〕 落(雲・閑・粘・近・伊・卷・多・戊・葦)

\*『本朝文粹』<sup>(26)</sup>卷十「暮春遊覽同賦遂処花皆好 紀齊名」、〔暮〕。

⑩ 619 蕙帶蘿衣抽簪於北山之北蘭橈桂鼓棹於東海之東(久)

〔同〕 棹(安)

〔異〕 舷(雲・閑・粘・伊・戊・葦)

舳(山・多)

船(卷)

\*『本朝文粹』卷十「暮春同賦落花乱舞衣各分一字応太上皇製」、〔舳〕。

⑪ 673 いかるかやとみのをかはのたえはこそわかおほきみのみなはわすれめ(久)

〔同〕 いかるかや(山)

〔異〕 いかるか(雲・閑・粘・近・伊・卷・太・多・戊・葦)

\*『拾遺集』1351、「いかるかや」。

⑫ 685 隴山雲暗李將軍之在家潁水波閑蔡征虜之未仕(久)

〔同〕 波(多)

〔異〕 浪(雲・閑・粘・近・伊・安・卷・太・戊・葦)

\*『本朝文粹』卷五「為清慎公請罷左近衛大將状」、〔波〕。

⑬ 75 翫其磧礫不窺玉潤者曷知驪龍之蟠習其弊邑不視上邦者未知英雄之所踴(久)

〈同〉 踴(山)

〈異〉 宿(雲・関・粘・近・伊・安・卷・太・多・戊・葦)

\* 『文選』卷五、「踴」。

⑭ 774 佳辰令月歛無極万歳千秋葉未央(久)

〈同〉 佳(卷)

〈異〉 嘉(雲・関・粘・近・伊・安・太・益・山・戊・葦)

\* 『江談抄』第四、「佳」。

ここから、久松切は、安宅切・卷子本・下絵切・山城切・多賀切・戊辰切・葦手本など、十二世紀の書写とされている諸伝本と広く連関していることが知られる。また、その中には校訂が行われていた跡が窺われる本文・注記が存する。本書(第三章)中、指摘したごとく、十二世紀には既に典拠を探索の動向が行われていたものとみられる。

なお、堀部正二氏は、山城切の本文について論じられた際、右掲の用例のうち、⑧⑨⑩⑬について、「平安朝後期より漸次變形轉訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」と指摘されたが、右掲の久松切の本文を後代の『和漢朗詠集』七本(尊経閣文庫蔵本<sup>⑪</sup>・専修大学附属図書館蔵本<sup>⑫</sup>・某氏蔵本(日本古典文学刊行会<sup>⑬</sup>・天理大学附属天理図書館蔵本<sup>⑭</sup>・墨流本<sup>⑮</sup>・陽明文庫蔵本<sup>⑯</sup>・国立国会図書館蔵本)の本文と対校してみると、一致する部分が数々認められ、久松切に存する本文の流れが後代に及んでいくことが知られる。諸伝本間における久松切の位置、及び後代の伝本の性格について検討する上でその点も重視されるべきであろう。

以上、久松切では、粘葉本類との同文率が高く、久松切と粘葉本類とは特異な本文をも共有していたが、雲紙本類の本文をも有していることが確認された。また、久松切と同時代の書写とされている十二世紀書写本との連関性も認められた。そ



のうちの安宅切・卷子本・葦手本・山城切は、本書中、述べたごとく、雲紙本類よりの本文を包含している。どちらかといえば粘葉本類よりに位置する久松切とはこの点において一線を画するものであり、久松切は、異なる類の諸伝本とも広く連関していることが明らかとなった。また、久松切と十二世紀書写本との同文例からは他文献との接触が推され、また、それらの本文が後代へ及んでいる事実も注目される。

## 六

注記においても久松切と十二世紀書写本群との間には同一例が認められ、また、他文献との照合の跡が窺い知られる。それは、和歌よりも漢詩（題詞などの付加）に顕著に見られる。豊富な注記を有する伝本には久松切・山城切・多賀切が挙げられるが、とりわけ久松切では次に例示するごとく、研究的要素が濃厚である。

以下、久松切独自の注記を挙げ、次いで、諸伝本の注記を載せ、その注記を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 539 見故敦忠卿小野山庄花一条撰政（久）

故権中納言小の庄山一条攝政（雲）

故権中納言小野山庄一条撰政（関）

ナシ（粘・近・法・伊）

故権中納言小野山庄花一条□（山）<sup>42</sup>

故中納言小野山庄花一条撰政（多）

『拾遺集』1279。雲紙本などの「故権中納言」は久松切に注されるごとく藤原敦忠のことを指す。

② 619 落花乱舞衣 江相公（久）

江相公（雲・関・粘・伊・安・山・葦）

落花乱帯衣 江相公(多)

江(戊)

『本朝文粹』卷十、「暮春同賦落花乱帯衣各分一字応 太上皇製」。久松切の注記が正確であり、多賀切の「落花乱帯衣」は誤写かと思われる。

③ 640 餞源實赴鎮西遊女白女(久)

遊女白目(雲・閑・山)

ナシ(粘・近・伊)

遊女白女(益・多・戊・葦)

『古今集』387。「源のさねかつくしへゆあみむとてまかりけるに、山ざきにてわかれをしみける所にてよめる しろめ」とあり、久松切ではこの詞書を簡潔に注している。

④ 720 見遊女以言(久)

遊女序言(山)

遊女序以言(多)

以言(雲・閑・粘・近・伊・安・太・戊・葦)

ナシ(雲切)

『本朝文粹』卷九、「見遊女」。

平安時代書写本では唐人の賦句への言及はあまりみられない。<sup>(43)</sup>しかし、久松切独自の注記にはそれも確認される(4「白西府池」・403「愁賦 張讀」・416「暁賦」・472「元 贈薛濤」・510「暁賦 謝賦」・604「閑賦 張讀」・614「閑賦 張讀」・615「皇女賦 康條」・657「上春詞 揚衡」・706「張文成 遊仙窟」など)。

なお、久松切の注記では次のごとく粘葉本・伊予切と一致する箇所中にはある。

(1) 210 紀〔久〕粘〔粘〕・戊・葦

已上白〔雲〕関

已上白異本口〔山〕

立秋後作紀田忠臣〔多〕

(2) 427 源宗于〔久〕粘〔粘〕・伊〔伊〕・法〔法〕・益

源致行〔雲〕関〔関〕・戊〔戊〕・葦

源敏行〔山〕

源宗行〔太〕

しかし、全体を通してみると雲紙本・関戸本との一致の方が多いものである。事例をいくつか挙げる。

(3) 211 安貴皇子〔久〕雲〔雲〕・関〔関〕・山〔山〕・葦

志貴皇子〔粘〕

ナシ〔伊〕

志貴王子〔多〕

安藝大君〔戊〕

(4) 226 田達音〔久〕

田〔雲〕関〔関〕・山〔山〕・葦

白〔粘〕伊〔伊〕

ナシ〔戊〕伊和

(5) 442 忠見 (久・雲・関・葦・戊)

忠岑 (粘・法)

ナシ (伊)

重之 (山)

(6) 595 野 (久・戊・葦)

右丞相亭法花会 野 (雲)

右丞相花亭法花会 野 (関)

都 (粘・伊・近)

右丞相口亭法花 野 (山)

(7) 717 内教坊老命婦 江相公 (久)

江 (雲・戊)

内教坊老命婦 江 (関・安)

内教口命婦 (山)

紀 (粘・伊・近)

右の事例のごとく、注記において雲紙本類と粘葉本類との間に異同がある場合、久松切は雲紙本類に近い傾向にある。ただし、久松切には、次の用例のごとく、雲紙本類に無い詩歌句の注記も見られる。

① 321 田達音 (久・戊)

田 (行大・唐?)

菅 (粘・伊)

白 或本□(山)

秋暮傍山行 田達音(多)

② 603 講師贈菩提子念殊 左相府(久)

左相府(粘・近・伊・大内)

讀法文了贈□子念殊 左□(山)

右の①②は粘葉本類に存しているが雲紙本類には詩歌句そのものが存しない。

①の粘葉本・伊予切では「菅」とあるが、本作品は『田氏家集』にも所収されている。久松切・戊辰切・多賀切では「田達音」(云行成筆大字切・唐紙切<sup>2</sup>)では「田」などと注する。また、②についても、作者名「左相府」のみが注されている粘葉本類に久松切ではさらに題詞が付されている。

以上、久松切・十二世紀書写本では、注記においても同一例が認められ、注記からも他文献との照合のあとが看取された。殊に久松切では、邦人の作品に止まらず、他本では見られない唐人の賦句への言及もあり、且つ詳細であった。

通時的流れにおいては、久松切の注記は雲紙本類よりではあるが、雲紙本類に無い詩歌句の注記をも有しており、その追補された形態のうちに当時の研究的視点を窺うことができる。

## 七

以上の考察結果を纏めるならば次の四点となる。

- (1) 久松切は、十一世紀中葉の書写と推定されている粘葉本類・雲紙本類には無い詩歌句を全て有している。
- (2) 久松切独自の排列の揺れ、及び、巻上・春部巻末の三詩歌群の排列(巻頭の内題の次に存する題の一覧による)からは久松切は、雲紙本類の系譜上に位置すると思われる。

(3) 久松切は、粘葉本類との同文率が高く、特異な本文を共有しているものの、雲紙本系の本文をも有している。また、久松切と同時代の十二世紀書写と推定されている、雲紙本類の系譜上に位置すると思われる諸伝本とも広く連関性を有し、かつ、その同文例からは他文献との接触が行われていたことが推される。

(4) 注記においても、久松切と十二世紀書写本群との一致、及び他文献との接触が認められる。平安時代後期書写本における注記の内容的深化が看取されたが、ことに久松切では研究的要素が濃厚である。

久松切の注記は、雲紙本類の流れを汲むものと思われるが、雲紙本類に無い詩歌句の注記をも有しており、追補された形態であるといえる。

右の(2)・(4)から、久松切は、形態的な面においては、基本は雲紙本類の系譜上にあることが推測され、また、(1)・(3)・(4)からは、粘葉本類、及びその他、異なる性格の『和漢朗詠集』諸伝本、他文献からも様々な要素を摂取したものと思われる。従って、久松切は、久曾神氏の分類の「再稿本」<sup>(4)</sup>には位置付けがたく思われる。むしろ、基盤を成す部分は雲紙本類であり、そこに粘葉本類、及びその他の要素が混じた集成本的性格を有すると考えられる。著者の見る限りでは、後代の『和漢朗詠集』諸伝本では(『和漢朗詠集私注』も)いずれも、粘葉本類・雲紙本類の形態を特徴づけているといえる。巻上・春部巻末の三詩歌群の排列は、雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であり、粘葉本・雲紙本両類の本文を併存している。また、平安時代書写本においては異質な後代的要素が久松切には及んでおり、集成的である。久松切は、『和漢朗詠集』流布本の源流をなす一伝本として位置付け得るものと考えられる。その点は、本書(第三章第五節)中、述べたごとく、戊辰切と共通しているといえる。

ただし、久松切は平安時代書写本の中では後代的色彩が強く見られる一方、十一世紀中葉の書写とされる伝藤原行成筆大字切との共通要素も有している。その点は次節(第八節)において論じる。

注

- (1) 春名好重氏編著『古筆大辞典』〔昭和54年 淡交社〕 P 916
- (2) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷〔平成2年 講談社〕 P 427
- (3) 前掲(注1)に同。 P 917
- (4) 前掲(注2)に同。 P 426
- (5) 堀部正二氏著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕 P 312
- (6) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕 P 214
- (7) 『秋原安之助が分断に際して、原本の形態を後世に残すべく、私家版として限定印刷をしたもの』(前掲〔注2〕に同。 P 425)。
- (8) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは796の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (9) 前掲(注2)に同。 P 302・303
- (10) 515を含む一紙の横の長さは四七・三 cm、その近辺の一紙の横の長さは五一・五 cm前後で、515を含む一紙の横の長さは他の料紙に較べて短い。515と517の間には紙継ぎの跡が見られることから、原姿では516は515の次行に位置していたが切り取られた可能性も考えられる。
- (11) 久松切と「あまり距たらない時代の老齢の人の手によって加えられたことを想わせる」とされている。前掲(注2)に同。 P 428
- (12) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫 倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕 P 13〜15
- (13) 226・227、268〜271、557〜560、574〜576、607〜609、615〜622、626〜629、632〜636、655・656、671・672、686・687、726〜728、746・747、754〜756。
- (14) 626を含む断簡一葉と627・628・629の一葉、計二葉。
- (15) 粘葉本類では「藤」・「躑躅」・「款冬」の順。

- (16) 133～135の三首〔躑躅〕の部分 一葉と137～139の三首〔藤〕の部分 一葉、計二葉。
- (17) 宮内廳書陵部編『圖書寮叢刊』〔昭和42年 養徳社〕に拠る。
- (18) 久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊〔昭和26年 古典文庫〕に拠る。
- (19) 西下経一氏編『古今集校本』〔昭和52年 笠間書院〕に拠る。
- (20) 片桐洋一氏編『拾遺抄―校本と研究―』〔昭和52年 大学堂書店〕に拠る。
- (21) 片桐洋一氏著『拾遺和歌集の研究(伝本・校本篇)』〔昭和55年 大学堂書店〕に拠る。
- (22) 平岡武夫・今井清氏編『白氏文集歌詩索引下冊(全三冊)』〔昭和64年 同朋社〕に拠る。
- (23) 古谷稔氏監修『古筆手鑑披香殿』〔平成11年 淡交社〕に拠る。
- (24) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』72〔昭和41年 岩波書店〕に拠る。
- (25) 古筆学研究所編『過眼墨宝撰集』1〔昭和62年 旺文社〕に拠る。
- (26) 大曾根章介氏ほか校注『新日本古典文学大系』27〔平成4年 岩波書店〕に拠る。
- (27) 甲田利雄氏著『校本江談抄とその研究』上巻〔昭和62年 続群書類従完成会〕に拠る。
- (28) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻〔平成2年 講談社〕 P 339・351・370・384
- (29) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻〔平成2年 講談社〕 P 348
- (30) 前掲(注5)に同。 P 49
- (31) 伝二條為氏筆。巻上・下、二軸。原本に拠り調査を行った。
- (32) 中田武司氏解題『専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊和漢朗詠集二帖』〔昭和56年 専修大学出版局〕に拠る。
- (33) 日本古典文学会監修・編集『復刻日本古典文学館 第一期和漢朗詠集上巻』〔昭和50年 日本古典文学刊行会〕に拠る。
- (34) 朽尾武氏著『貞和本和漢朗詠集』〔平成5年 臨川書店〕に拠る。



- (35) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』14〔平成2年 二玄社〕に拠る。
- (36) 片桐洋一氏解説『陽明叢書 国書篇』第七輯〔昭和53年 思文閣出版〕に拠る。
- (37) 朽尾武氏編『国立国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫蔵和漢朗詠集私注漢字総索引』〔昭和60年 新典社〕に拠る。
- (38) ① 専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本〔日本古典文学刊行会〕・天理大学附属天理図書館蔵本・陽明文庫蔵本、「あひにけるかな」。  
国立国会図書館蔵本、「あふ、そうれしき」の二字目以下「ふ、そうれしき」に傍書「ヒニケルカナ」。
- ② 尊経閣文庫蔵本・某氏蔵本〔日本古典文学刊行会〕・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「駐」。専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本、「住」に傍書「駐」。
- ③ 陽明文庫蔵本、「看」。
- ④ 尊経閣文庫蔵本・某氏蔵本〔日本古典文学刊行会〕、「あひみるあきの」。国立国会図書館蔵本、「あひ見る秋は」の「る」以下に、傍書「イる秋の」。
- ⑤ 某氏蔵本〔日本古典文学刊行会〕、「居」。
- ⑥ 陽明文庫蔵本、「最」。国立国会図書館蔵本、「最」に傍書「白尤」。
- ⑦ 陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「頻」。尊経閣文庫蔵本、「連」に傍書「頻」。
- ⑧ 尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「鋪」。
- ⑨ 尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「暮」。
- ⑩ 天理大学附属天理図書館蔵本、「棹」。国立国会図書館蔵本、「舷」に傍書「棹」。
- ⑪ 尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本・国立国会図書館蔵本、「いかるかや」。
- ⑫ 尊経閣文庫蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本、「波」。

⑬ 尊経閣文庫蔵本・専修大学附属図書館蔵本・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本・陽明文庫蔵本、「理」。国立国会図書館蔵本、「宿」に傍書「理」。

⑭ 天理大学附属天理図書館蔵本、「嘉」に傍書「佳」。

(39) 第三章(第一節・第二節・第三節・第六節)所収

(40) 31・41・89・108・109・119・122・138・200・232・300・363・371・397・431・433・457・479・494・539・628・648・661など。

(41) 山城切、41・89・108・109・119・200・232・300・397・433・457など。多賀切、89・108・457・494・539・628など。

(42) 山城切には裁断に因る不明箇所がある。当該箇所については□で示す。以下、同。

(43) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』[平成7年 勉誠社] P.144・145

(44) 前掲(注6)に同。

(45) 本書(第三章第四節)中、指摘した。

〈付記〉

資料の調査にあたって、笠嶋忠幸氏(出光美術館)、長華子氏(尊経閣文庫)にそれぞれ高配賜りました。厚く御礼申し上げます。

## 第八節 伝藤原行成筆大字切の位置

一

伝藤原行成筆大字切（略称…伝行成筆大字切、略号…行大）は書されている各文字の大きさが他本に比して大きいことからそのように呼称されている。『古筆学大成』第一三巻に一三葉の断簡が収められているが、その現存状況から、書された当時は恐らく巻上下ともに揃っていたものと思われる。<sup>①</sup>

かつて、堀部正二氏は「その筆蹟は高野切第一種と同筆と思しきもので、恐らくは行成の流風を汲む者の筆、後一條・後朱雀帝の頃のものであらう」とされた。「朗詠集を書写したものであるの中ではその最も古きものの一つと考へられる点、頗る貴重すべきものがある」とされ、さらに、本文は「粘葉装本や関戸家本などの系統とは又別種のものやうである」と述べられた。<sup>②</sup>

小松茂美氏は伝行成筆大字切について、その書写年代を「天喜元年（一〇五三）前後」とされたものの、同氏の本文に関する御論は見当たらない。<sup>③</sup>

一方、久曾神昇氏は、平安時代書写とされる諸伝本を「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」に分類され、伝行成筆大字切は久松切とともに「再稿本であったと推定できよう」とされた。同氏は卷子本・草手本についても「再稿本」とされた。<sup>④</sup>

伝行成筆大字切は現存する分量が僅かである。調査の範囲が限られ、そこで得た考察結果をもとに結論づけることは困難である。しかし、前述した通り書写年代が古く、名筆であることから研究上、欠かせない資料である。

二

伝行成筆大字切の現存状況について『古筆学大成』第一三巻に収められている断簡（一三葉、計四九首）の詩歌句を『新編

国歌大観』の番号で示すと次の通りとなる。

- ① 304・305・306    ② 317く321    ③ 322く326    ④ 334く337    ⑤ 382く387    ⑥ 389く391    ⑦ 396  
 ⑧ 458く460    ⑨ 475く478    ⑩ 480    ⑪ 481・482・483  
 ⑫ 578く585    ⑬ 608・609・610

諸伝本間に見られる排列について異同調査を行ったところ、右のうちの⑪では卷子本に、また、⑬では久松切にそれぞれ独自の揺れが確認されたが、伝行成筆大字切の排列はいずれもその他の伝本と同一であった。しかし、詩歌句の有無については以下の通り異同がある。

右の①く⑬のうち、他本に有り、伝行成筆大字切に無い詩歌句は見当たらない。その一方、他本には無い詩歌句を伝行成筆大字切が有している箇所がある。それは321・322であり、右のうちの②・③に含まれている。

既に、本書(第二章第五節)中、述べた通り、粘葉本・伊予切には321が有り、322が無い。また、雲紙本・関戸本には321が無い、322が有る。

粘葉本類に322が無いことについて、久曾神昇氏は「原本には存しながら、粘葉本、伊予切の祖本において、すでに脱していたと、しばらく推定しておく」と述べられた。<sup>5)</sup> 著者も「322が原本に存していた」可能性があると考える。その事由については、既に本書(第二章第五節)中、指摘した通りであるが、次に挙げる当該二首(321・322)に存する伝行成筆大字切の注記の内容からもそれは首肯される。

まず、伝行成筆大字切の注記を挙げ、次に異同を載せ、当該注記を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

◆321田(行大・唐2)

菅(粘・伊)

田達音(久・戊)

白 或本田(山)

秋暮傍山行 田達音(多)

ナシ(葦)

◆322天浄識資鴻 菅(行大・久・山・多)

菅(雲・関・戊・葦)

右に挙げた321について、伝行成筆大字切では(唐紙切2にも)「田」とある。その他、久松切・戊辰切では「田達音」と注されており、山城切では「或本田」と注されているようである。いずれも島田忠臣を指す。粘葉本・伊予切では、「菅」とするが、本作品は『田氏家集』に所収されている。

また、322の伝行成筆大字切では(久松切・山城切・多賀切にも)「天浄識資鴻 菅」と注され、出典『菅家文章』巻五の記載(重陽節侍宴同賦 天浄識資鴻応製)と一部、一致している。

以上、伝行成筆大字切は排列においては他本と一致していた。次に、諸伝本と伝行成筆大字切との間に見られる詩歌句の有無について異同を調査したところ、伝行成筆大字切に脱漏は見られなかった。伝行成筆大字切は321・322を有しており、かつ、その注記が他文献のものと一致する内容であることが確認された。

前述した通り、伝行成筆大字切の書写年代は古く、雲紙本・粘葉本等と同じ頃の書写(十一世紀中葉)と推定されている。それを前提とすると、伝行成筆大字切が当該二首(321・322)を有し、しかも、そこに書かれている注記の内容が他文献のものとは一致するという事実から、当該二首(321・322)が公任原撰本に併存していた可能性があると考えられる。

なお、現存する十二世紀書写と推定されている諸伝本(断簡等も含む)のうち、現存範囲内のものについてはいずれの伝本も当該二首(321・322)を有する(久松切・卷子本・山城切・多賀切・戊辰切・葦手本ではいずれも321・322を有する)。それに加え、久松切・山城切・多賀切・戊辰切の注記内容が伝行成筆大字切と共通していることは注目される。

次に、個々の本文を考察した結果について述べる。和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

【諸伝本間の本文異同調査表】に拠ると、考察範囲が限られており、対照箇所数は少ないものの、伝行成筆大字切と近い関係にあるのは、和歌では雲紙本・関戸本、漢詩では久松切・粘葉本・伊予切が挙げられる。

伝行成筆大字切がそれらの伝本と同文であり、かつ、その本文と他本との間に異同がある事例を以下、挙げる。その際、まず伝行成筆大字切の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次にその異同を載せ、その本文を有する諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 386 □□□らのつきのひかりしさむければかけみしみつそまつこほりける (行大)

〈同〉 つきのひかりし (雲・関・山・戊・葦)

〈異〉 つきのひかりの (粘・伊・久)

月乃光之 (巻)

② 396 かそふればわか身にとまるとしつきをおくりむかふとなにいそくらむ (行大)

〈同〉 わかみにとまる (雲・関)

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	行大	歌 詩	
17	17	15	15	17	17			17	17	17		行大	
10	10	4	9	9	9			9	12	12			
58.8	58.8	26.7	60	52.9	52.9			52.9	70.6	70.6		%	
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		36	雲紙本	
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		21		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		58.3	%	
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	40	関戸本	
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	26		
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	65	%	
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	41	粘葉本	
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	29		
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	70.7	%	
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	18	近衛本	
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	12		
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	66.7	%	
36	36	35	36	36	36			131	152	149	146	5	法輪寺切
27	24	21	24	29	33			121	146	109	112	4	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7			92.4	96.1	73.2	76.7	80	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	41	伊予切	
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	29		
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	70.7	%	
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	41	久松切	
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	30		
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	73.2	%	
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	41	卷子本	
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	23		
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	56.1	%	
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	38	山城切	
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	25		
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	65.8	%	
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	41	戊辰切	
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	28		
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	68.3	%	
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	38	葦手本	
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	21		
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	55.3	%	

【諸伝本間の本文異同調査表】

## 我身に留る(卷)

〔異〕わかみにつもる(粘・伊・久・山・多・戊・葦)

③ おほてらのいりあひのかねのおとことにけふもくれぬときくそかなしき〔行大〕

〔同〕おほてらの〔雲・関・卷・戊・葦〕

〔異〕やまてらの(粘・近・伊・久)

おほ  
やまてらの(山)

④ 318 尋陽江色湖添滿彭蠡秋声雁引来〔行大〕

〔同〕湖(久・関・卷・唐2・山)

〔異〕潮〔雲・粘・伊・下・散・戊・葦〕

⑤ 475 王朗八葉之孫撫徐詹事之旧草〔行大〕

〔同〕事(久・雲・関・卷・山・戊・葦)

〔異〕子(粘・近・伊・太)

⑥ 608 観空浄侶心懸月送老高僧首剃霜〔行大〕

〔同〕浄(久・粘・近・伊・卷・山・太・戊・葦)

〔異〕僧〔雲・関〕

右のうちの①・②・③は伝行成筆大字切と雲紙本・関戸本との同文例である。うち、②・③は伝行成筆大字切・雲紙本・関戸本の誤写であると思われる。④は伝行成筆大字切と久松切、⑤は伝行成筆大字切と久松切・雲紙本・関戸本、⑥は伝行成筆大字切と久松切・粘葉本・伊予切等との同文例である。うち、⑤は粘葉本・伊予切等の誤写であり、⑥は雲紙本・関戸本の誤写である。



ここから、伝行成筆大字切と久松切・雲紙本・関戸本との関係がそれぞれ近いことが推測される。しかしながら、雲紙本・関戸本と同文箇所を有している①・②・③では伝行成筆大字切と久松切との間の異同が確認される。ただし、久松切と伝行成筆大字切とは注記において一致する箇所がある。事例を挙げると以下の通りである。

⑦ 323 賓鴻是故人 後中書王(行大)

(同) 賓鴻是故人 後中書王(久)

(異) 秋雁似故人 後中書王(雲・関・山・多)

後中書王(粘・伊・戊・葦)

⑧ 389 雪尽水亦积 相規(行大)

(同) 雪尽水亦积 相規(久)

(異) 相如(雲)

雪中水亦积 相如(関)

相規(粘・伊・大内・下・戊・葦)

一方、伝行成筆大字切と十二世紀書写とされる諸伝本との同文例も確認される。伝行成筆大字切がそれらの伝本と同文であり、かつ、その本文と他本との間に異同がある事例を以下、挙げる。

(1) 305 しらつゆもしくれもいたくもるやまはしたはのこらすもみちしにけり(行大)

(同) もみちしにけり(下・戊)

(異) いろつきにけり(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・卷・戊・葦)

(2) 385 霜嫌鶴唳寒無露水結狐疑薄有水(行大)

(同) 嫌(山)

〔異〕妨（雲・関・粘・伊・久・多・卷・戊・葦）

(3) 47贈爵新恩文 剋石獲 麟後集世知丘〔行大〕

①〔同〕文（山・葦）

〔異〕銘（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊）

②〔同〕剋（山）

〔異〕刻（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊・葦）

③〔同〕麟（山）

〔異〕麟（雲・関・粘・近・伊・久・太・卷・戊・葦）

堀部正三氏は右記(2)・(3)の当該箇所（四か所）を取り上げられ、次の通り、極めて重要な指摘をされた。

辛うじて僅か数葉の断簡を遺存したにすぎない大字朗詠集切にのみ見られる所であるが、この事実はこの際特に重要な意味を有つものと考へられる。即ち、以上の如き山城切特有と考へられる箇所も、現存他諸本に見えないからといふ如き理由のみから、これを後世的な変訛誤謬であると断じてしまうことが極めて危険である事を感じるのである。とまれ大字朗詠集切と山城切との間に見る奇しき符号より考へてみても、今我々が山城切特有と考へる本文も実は更に古い時代のある系統本の特徴を受け継いだものが多く存するのであるのかも知れない。<sup>(8)</sup>

右の事例のうちの(1)「もみちしにけり」についても同様なことがいえるのではなからうか。「もみちしにけり」は、後代、『和漢朗詠集』諸伝本において普及した本文であり、それによると後世的なものかと思われるのだが、伝行成筆大字切が当該本文を有していることから、堀部氏が述べられた通り、実は古い時代からの本文であることが知られるのである。

なお、調査し得た諸伝本における伝行成筆大字切の独自本文について、和歌は四か所、漢詩は七か所が確認された。

以上、伝行成筆大字切と諸伝本との関係について、個々の本文を検討した結果、伝行成筆大字切と、久松切・雲紙本・関

戸本との関係がそれぞれ近いことが窺われた。しかし、伝行成筆大字切と粘葉本・伊予切との同文例も確認された。また、伝行成筆大字切と久松切とは注記においても同一の事例を共有していた。

しかしながら、伝行成筆大字切と久松切との間には異同も存するものであった。

一方、伝行成筆大字切と下絵切・山城切・戊辰切・葦手本との同文箇所もそれぞれ確認された。

#### 四

伝行成筆大字切は、雲紙本・粘葉本両類の本文を有しており、雲紙本類とは誤写と思しき本文を共有していることが確認された。

一方、伝行成筆大字切が321（雲紙本・関戸本に無）、322（粘葉本・伊予切に無）を有し、かつ、個々の本文、及び注記において雲紙本・粘葉本両類とは異なるものを有していることも明らかとなった。その中には伝行成筆大字切と、久松切・下絵切・山城切・戊辰切・葦手本との同文箇所もいくつか確認された。とりわけ、伝行成筆大字切は、久松切と近い関係にあると考えられる。久松切を含む十二世紀の書写とされる諸伝本も321・322を有し、その注記の内容についても伝行成筆大字切と共通していた。

かつて久曾神昇氏は、諸伝本の関係、及びその生成過程について①（恐らく撰者公任により）三種が意図的につくられた、②雲紙本・関戸本 ↓ 伝行成筆大字切・久松切・卷子本・葦手本 ↓ 粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切という順序により一元的成長を遂げた、③その三種は「次第に追補せられた結果」のものであり、「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」と位置付けられると述べられた。<sup>9</sup> そのうちの「再稿本」とは具体的にはどのようなものを指すのか、その定義不明ながら、本考察結果によると、「初稿本」から「精撰本」へと成長を遂げたその間に伝行成筆大字切が位置するという捉え方ではなく、「初稿本」の前の段階の「原形」に以上述べた伝行成筆大字切の要素が既に含まれていたと解する方が整合的ではなからうか。

伝行成筆大字切の書写年代が十二世紀中葉ということが事実であるならば、その頃、既に、雲紙本・粘葉本兩類の混在が見られ、なおかつ、その兩類には無い要素を有する伝本が存していたということになる。

伝行成筆大字切はあまりにも分量が少なく、想像の域を出ていないが、本書（第三章）中、事例を挙げた通り、伝行成筆大字切も含め、十二世紀の書写とされる諸伝本における雲紙本・粘葉本兩類混淆の様相は無秩序であり、それらを一括して「再稿本」と捉えることは出来ないのではなからうか。

本書（第三章）中、指摘した通り、時代が下り、雲紙本・粘葉本兩類の混淆、注記の詳細化が進む傾向が看取される伝本も実際にはある。しかし、その全てが後代的特徴であるとはいえない。前項「三」に引用した堀部正二氏の御指摘の通り、諸伝本中、十二世紀書写本にしか見られない要素について、それらを「後世的な変訛誤謬」であると断じ得ない。その遡源を求めると伝行成筆大字切の散逸部分に既にそれらが存していた可能性もあり得ることが本考察結果から推測されるのである。

#### 注

- (1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一三卷〔平成2年 講談社〕P 385
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 36
- (3) 前掲〔注1〕に同。
- (4) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評・「大字和漢朗詠集の内容」〔『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕所収〕
- (5) 久曾神昇氏「和漢朗詠集の本文批評〔『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕所収〕
- (6) 久松切、「鴻」字、不明瞭。或いは「雁」か。
- (7) 雲紙本には別筆にて「天浄識資鴻」と書されている。

- (8) 前掲(注2)に同。P 332・333
- (9) 本書(第二章第六節)中、既述した。

## 結びにかえて

かつて、堀部正二氏は主に本文の關係から平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本を次のごとく分類された。

(1) 御物伝行成筆粘葉装本の系統に近きもの：粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

(2) 関戸家藏伝行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本

(3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの

一方、久曾神昇氏は、主に形態的な面から次のごとく大別された。

〔甲類〕：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と卷子本・葦手本の一類に分類）

〔乙類〕：粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

久曾神氏は「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」とされ、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」と述べられた。そして、〔甲類〕の雲紙本・関戸本を「初稿本」、卷子本・葦手本を「再稿本」、〔乙類〕の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。しかし、その所説を決定づける事例は挙げられていないのではなからうか。撰者である公任原撰本の実相を探る上でもその課題の追究は必要である。そこを中心据えて形態・本文、及び書面から先学の研究について再検討を行った。また、堀部氏が(3)に分類された諸伝本の実態についても調査を行い、改めて諸伝本の系統立てを試みた。その結果、「初稿本」・「再稿本」・「精撰本」という捉え方は再考されるべきであると考えられ、また、(1)・(2)（堀部氏の分類）、及び〔甲類〕・〔乙類〕（久曾神氏の分類）のいずれにも分類し得ない諸伝本の存在が明らかとなった。

十一世紀中葉の書写とされる伝本のうち、雲紙本と関戸本は形態・本文において極めて近い関係にある。両本ともに源兼

行の真筆とされている。先学の御論を踏まえ、第一章では両本の関係について踏み込んで考察を行った。

書写された時期については両本間に年代的な隔たりはさほどないものと推測され、また、両本間における詩句数の相違は出典等も考慮の上、意図的削除があるいは付加もなされた可能性がある。

雲紙本よりも関戸本の方が詩歌句数が多い。しかし、関戸本に無い句（五首）を雲紙本は有している。その「関戸本に無い五首」を関戸本に加えた形が両本の親本であると推測される。

粘葉本・伊予切・近衛本の三本も極めて近い関係にある。しかし、近衛本は三本の中では、やや異質的であり、粘葉本と伊予切との関係の方が近衛本と粘葉本、伊予切とのそれぞれの関係よりも近いものといえる。ただし、伊予切の書には解明し得ない点が残されており、本文研究上、留意する必要がある。雲紙本類と粘葉本類との関係については、前述した通り、久曾神氏は、雲紙本類を「初稿本」、粘葉本類を「精撰本」とされ、雲紙本類に「追補」された結果のものが粘葉本類であると述べられた。しかしながら、書写上、そのようなことが果たして可能であろうか。疑問を抱かざるを得ない。雲紙本類↓粘葉本類という繋がりがいくつか存していたという可能性はあり得るものの、その関係性について、「初稿本」から「精撰本」へと一元的成長を遂げたとは捉え難く、むしろ、雲紙本類・粘葉本類の原形の大枠は形態的な面に限定するならば一種に集約されると解する方が自然であると考えられる。

また、本書（第三章）中、指摘した通り、卷子本・葦手本、及び伝行成筆大字切・久松切が「再稿本」であるという点についても首肯し難い。それらの伝本は形態面においては堀部・久曾神両氏の分類の通り、確かに雲紙本・関戸本の系譜上に位置する。しかしながら、雲紙本・関戸本と同類とは看做し難く、久曾神氏が「初稿本」とされた二本と、「精撰本」とされた四本とが混淆したものである。そして、それは十二世紀の書写と推定されている諸伝本についても指摘し得る特徴である。

調査し得た十二世紀書写本群ではいずれも本文中、卷上「春」卷末の三詩歌群の排列について雲紙本類と同様、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順である。しかし、その他、形態・本文の面において粘葉本類の要素をも有する。また、同時代書写の諸伝本

に特有かと思しき形態・本文等を共有し、それらは広く連関性を有している。

諸伝本の系統立てを試みる際、卷子本・葦手本等を雲紙本・関戸本の類から切り放し、さらに、卷子本・葦手本と同じく十二世紀の書写とされている諸伝本とともに同じカテゴリー内に収めて論を進める方が整合するのではなからうか。

本文・注記において、雲紙本類・粘葉本類と、十二世紀の書写とされている諸伝本との間に異同があり、なおかつ、その事例の中には十二世紀書写本の方が正しく、粘葉本・雲紙本両類の方が誤謬である場合もある。十二世紀書写本の主たるものには当時、書の家である世尊寺家、あるいは、その周辺の人々の手になると思しき伝本群——安宅切・卷子本・定信筆大字切・唐紙切<sup>2</sup>・葦手本・戊辰切等——が挙げられる。

諸伝本の位置について概要を図示すると次の【諸伝本の系統図】(以下、【系統図】と略称)の通りである。

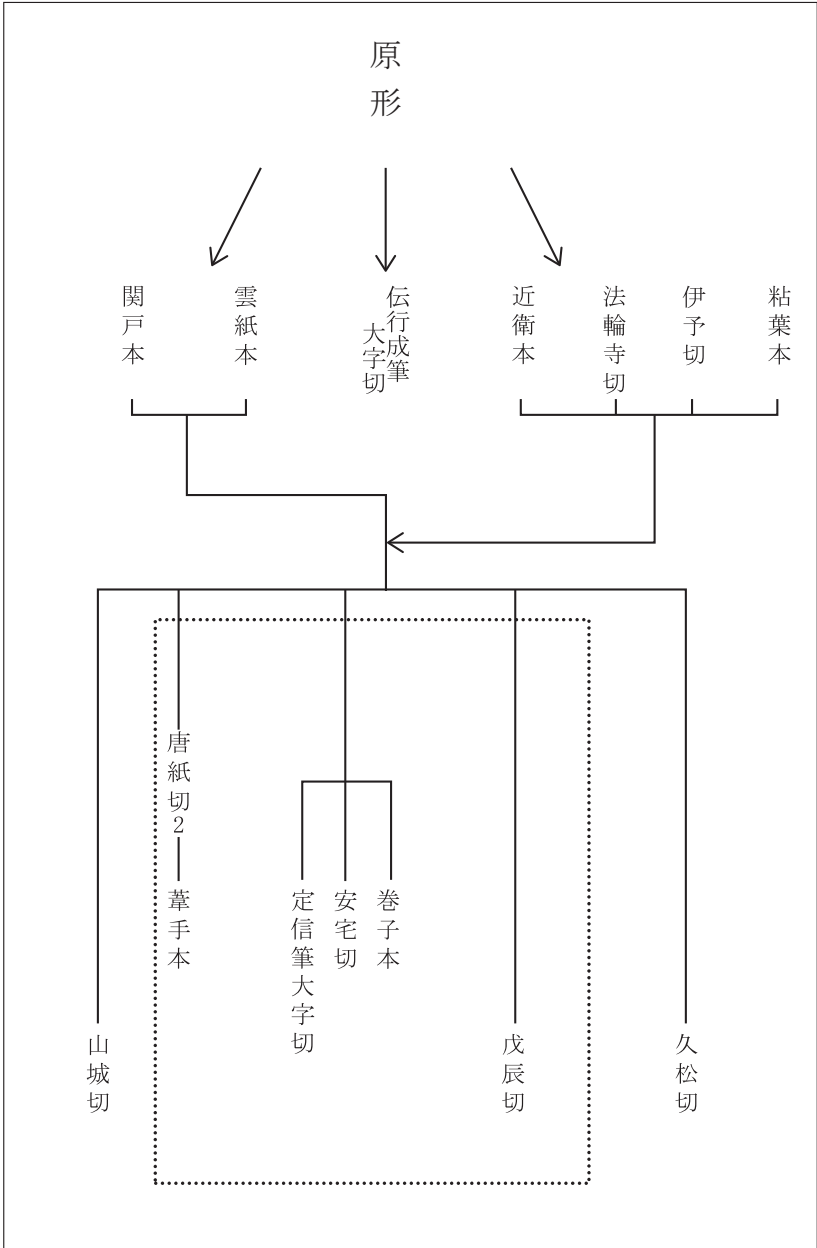
上部には雲紙本類・粘葉本類、及び伝行成筆大字切、下部には十二世紀の書写とされる伝本群が位置する。

前述した通り、形態的には雲紙本類・粘葉本類の原形の大枠は一種に集約されると考え得る。また、【系統図】のごとく、縦の流れにおいては、十二世紀書写本群では、「形態的な面は雲紙本類の流れを汲む」といえるが、そこに粘葉本類の要素が混じている。久松切・戊辰切がどちらかといえば粘葉本類よりであるのに対して、卷子本・安宅切・定信筆大字切・葦手本・山城切等は雲紙本類の系譜上に位置すると考えられる。

卷子本と安宅切とは近い関係にあり、かつ、その二本は葦手本とも近く、また、戊辰切とも連関するものである。しかし、卷子本・戊辰切に存する後代的特徴は葦手本には見当たらない。唐紙切<sup>2</sup>が藤原伊房の真筆であるという先学によるご指摘が事実であるならば葦手本は同作品に遡り得る要素を有するという見方も可能である。

一方、戊辰切の本文・形態は後代的変移の様相を帯びており、それに類する伝本には久松切・山城切が挙げられる。その点においてその三本は類同的である。ただし、山城切は雲紙本・関戸本とのみ一致する本文・注記を多く有しており、前述した通り雲紙本・関戸本の流れを汲む伝本であるといえる。と同時に、山城切には粘葉本類の要素、及び他本の本文が混入





した跡も存する。

定信筆大字切については現存する断簡の数が限られており、本文系統の推定は困難である。しかし、卷子本・安宅切とともに後人の加筆とされている和歌(62の次に位置する)を共有する等、定信筆大字切もその一系に属すると思われる。

【系統図】において点線で囲った伝本群は書写史的にも共通性を有している。書の家である世尊寺家、あるいはその周辺の人々の手になると思われる。

如上のように書写年代が十二世紀と推定されている諸伝本はいずれも粘葉本・雲紙本兩類の要素を有する。また、既述した通り、十二世紀の書写とされる諸伝本特有と思しき要素をも共有しており、それらを一群として捉えた場合、卷子本・葦手本等は「再稿本」ではなく、同時代の諸伝本が相互に接触、混合した結果、生成された伝本の中の一本であると考ええる。

時代の流れとともに雲紙本・粘葉本兩類の本文が混じたことは確かであると思われる。しかし、その事象は十一世紀中葉の書写とされる伝行成筆大字切に既に確認される。また、後代のかと思われた要素が同作品に存しており、それらが古い時代に遡り得る可能性について、堀部正二氏のご指摘の通り、注目されるところである。ただし、同作品は僅かな分量しか現存しておらず、全体像は掴み得ない。

本書(第二章)中、指摘した通り、後代、粘葉本・伊予切の類は普及しなかった。後代の諸伝本の形態・本文は多岐に亘る様相を呈する。十二世紀の書写とされる諸伝本のうち、とりわけ久松切・戊辰切等が後代へ与えた影響は大きいと推測され、両本は流布本の根源を辿る上でとりわけ貴重な資料であると考えられる。その実態の調査については今後の課題である。

本書中、図版の多くは二玄社刊『日本名跡叢刊』・『日本名筆選』から引用させて頂いたものである。末文乍ら、同出版社には掲載のお許しを頂き、御礼申し上げます。

## 既発表論文一覧

本書中、収めた既発表の論文は以下の通りである。収めるにあたり筆削を加えた。本書における所在は各項目末尾の括弧内に示す。

- 「文字分析による『和漢朗詠集』雲紙本と関戸本との関係」（『語文』第113輯 平成14年6月 日大国文学会）【第一章第一節】
- 「『和漢朗詠集』雲紙本と関戸本の関係」（『日本語と辞書』第2輯 平成9年5月 古辞書研究会）【第一章第二節】
- 「雲紙本和漢朗詠集にみられる別筆」（『語文』第107輯 平成12年6月 日大国文学会）【第一章第三節】
- 「伊予切和漢朗詠集の書に関する一考察」（『語文』第121輯 平成17年3月 日大国文学会）【第二章第一節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切〈第一種〉の書―粘葉本との関係―」（『語文』第149輯 平成26年6月 日大国文学会）【第二章第二節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切〈第一種〉と粘葉本の書に関する一考察」（『お茶の水女子大学人文科学研究』第12巻 平成28年3月）【第二章第三節】
- 「近衛本『和漢朗詠集』の性格―粘葉本系統との関係を中心に―」（『書学書道史研究』第24号 平成26年10月 書学書道史学会）【第二章第四節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切の性格―粘葉本との関係を中心に―」（『語文』第153輯 平成27年12月 日大国文学会）【第二章第五節】
- 「安宅切『和漢朗詠集』の位置」（『語文』第117輯 平成15年12月 日大国文学会）【第三章第一節】
- 「卷子本『和漢朗詠集』の位置」（『語文』第122輯 平成17年6月 日大国文学会）【第三章第二節】
- 「葦手本『和漢朗詠集』の位置」（『中古文学』第61号 平成10年5月 中古文学会）【第三章第三節】
- 「十二世紀書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について―葦手本を中心として―」（『書学書道史研究』第16号 平成18年9月 書学書道史学会）【第三章第三節】

- 「戊辰切『和漢朗詠集』の位置」〔『語文』第114輯 平成14年12月 日大国文学会〕【第三章 第四節】
- 「『和漢朗詠集』葦手本と戊辰切巻上の書に関する考察」〔『語文』第138輯 平成22年12月 日大国文学会〕【第三章 第五節】
- 「山城切『和漢朗詠集』の本文」〔『語文』第102輯 平成10年12月 日大国文学会〕【第三章 第六節】
- 「久松切『和漢朗詠集』の位置」〔『語文』第119輯 平成16年6月 日大国文学会〕【第三章 第七節】

## あとがき

本研究に着手してから二十年以上が経過した。遅遅たる歩みの中、今もなお未完であり、不十分なところも多い。次なる課題へ向けて本研究を進めるためにも御批評を頂きたく思い、この度、既発表の拙稿を補訂し、新たに書き起こしたものを加えて公表させて頂くこととした。これまで多くの先生方に御教示頂いたが、浅田徹先生、阿部好臣先生、石原太流先生、梶川信行先生、杉谷寿郎先生のお名前は（誠に勝手ながら五十音順とさせて頂き）ここに記させて頂きたいと思う。心から敬意と感謝の意を表します。

本書を成すにあたり、御尽力頂きました森いづみ・餌取直子両氏（お茶の水女子大学附属図書館）にも末文乍ら厚く御礼申し上げます。

本研究の一部はJSPS学術研究助成基金助成金「PJ15K02214」の援助を受けたものである（『和漢朗詠集』諸本の集成と研究・基盤研究（C））。

平成二十九年（二〇一七）八月

山本まり子

